

国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書

毛井遺跡 B 地区

2002

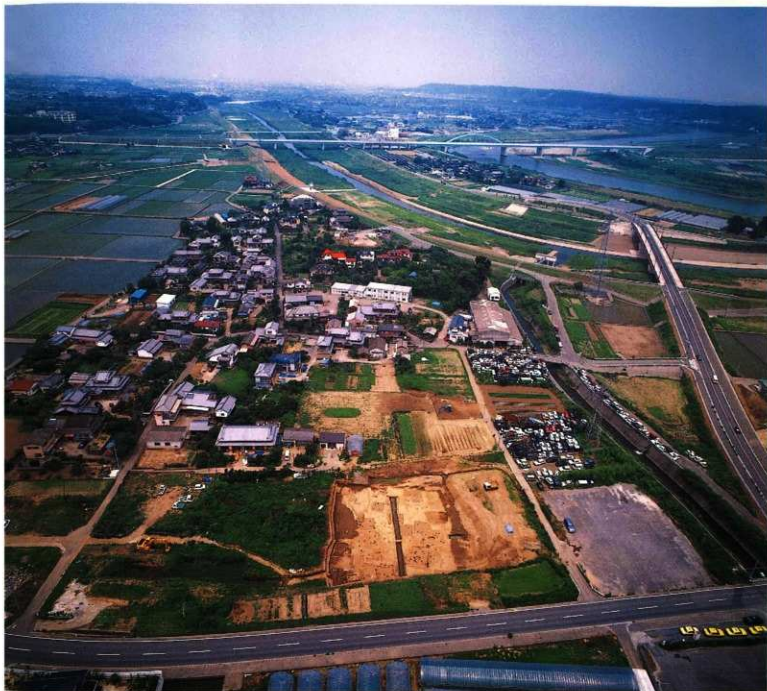
大分県教育委員会

国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書

毛井遺跡 B 地区

2002

大分県教育委員会



1. 毛井遺跡B地区空中写真（上が北）

手前右側が前半期調査区画で、そのとなりの西側（緑の濃い部分）が後半期調査区画

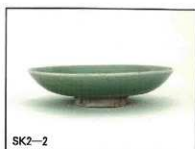
巻頭写真図版 2

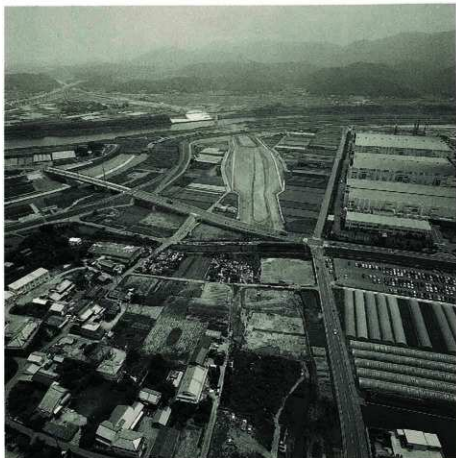
2. 空中写真（上が東）
前半期調査区画



3. 空中写真（上が北）
後半期調査区画







空中写真（上が東）
中央右が調査区



空中写真（上が東）



空中写真（上が北）



空中写真（上が東）

序 文

大分市大字毛井字仲原に所在する毛井遺跡は大野川下流域の左岸にあり、この地区に国道197号線大分南バイパス道路改良工事が計画されました。大分県教育委員会では開発事業と文化財保護との円滑な調整を図るために工事の実施に先立ち、平成11年度にA地区、12年度にB地区の埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、弥生時代末から古墳時代にかけての住居跡群が数多く見つかりました。

これらの遺構からは須恵器や土師器などの器の他、鉄製鋤先・紡錘車・竈が見つかるなど往時を偲ばせる貴重な遺物を得ることができ、このたび報告書として刊行することになりました。本書が先人の残した歴史遺産を将来守り伝えていく契機となれば幸いです。

最後に発掘調査・報告書作成に御協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会教育長

石川 公一

例 言

1. 本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部からの依頼をうけて調査を行った国道197号大分南バイパス予定地内の毛井遺跡B地区の発掘調査報告書である。
2. 遺物の水洗・復元・実測・トレースなどの整理作業は大分県教育庁文化課資料室で行った。
3. 遺跡・遺物写真は各調査担当が撮影した。
4. 遺物・写真・実測図等は大分県教育庁文化課資料室で保管している。
5. 本書の編集は綿貫俊一・五十川雄也が行った。執筆分担は綿貫が第1、2、4章2・3、6章、五十川が第3、4章—1、第5章、遠部 慎（文化課嘱託）が第4章—4である。
6. 本書に用いた方位は真北である。

目 次

序 文

例 言

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の概要	9
第3章 古墳時代の遺構と遺物	11
第4章 中世・近世・その他の時期.....	153
第5章 考察.....	167
第6章 まとめ.....	173

挿 図 目 次

第1図	毛井遺跡B地区と周辺の遺跡	2	第42図	SC12の遺物実測図	37
第2図	毛井遺跡B地区と周辺の地形 振込み 3~4		第43図	SC12の遺物実測図	37
第3図	毛井遺跡B地区遺跡配置図 振込み 5~6		第44図	SC13実測図	38
第4図	毛井遺跡B地区基本層実測図	10	第45図	SC13の遺物実測図	38
第5図	SC1実測図	11	第46図	SC13の遺物実測図	39
第6図	SC1の遺物実測図	12	第47図	SC14実測図	39
第7図	SC2実測図	13	第48図	SC14の遺物実測図	40
第8図	SC2カマド実測図	13	第49図	SC14の遺物実測図	41
第9図	SC2の遺物実測図	13	第50図	SC15実測図	41
第10図	SC2の遺物実測図	14	第51図	SC15の遺物実測図	42
第11図	SC2の遺物実測図	15	第52図	SC16実測図	43
第12図	SC3実測図	16	第53図	SC16カマド実測図	43
第13図	SC3カマド実測図	17	第54図	SC16の遺物実測図	43
第14図	SC3の遺物実測図	17	第55図	SC17実測図	44
第15図	SC3の遺物実測図	18	第56図	SC17カマド実測図	44
第16図	SC3の遺物実測図	19	第57図	SC17の遺物実測図	44
第17図	SC4実測図	20	第58図	SC17の遺物実測図	45
第18図	SC4カマド実測図	20	第59図	SC18・SC19実測図	46
第19図	SC4の遺物実測図	21	第60図	SC18・SC19の遺物実測図	46
第20図	SC4の遺物実測図	22	第61図	SC20実測図	47
第21図	SC5実測図	23	第62図	SC20カマド実測図	48
第22図	SC5カマド実測図	23	第63図	SC20の遺物実測図	49
第23図	SC5の遺物実測図	24	第64図	SC20の遺物実測図	50
第24図	SC6・SC8実測図	24	第65図	SC21実測図	51
第25図	SC6カマド実測図	25	第66図	SC21の遺物実測図	52
第26図	SC6の遺物実測図	25	第67図	SC22実測図	53
第27図	SC6の遺物実測図	26	第68図	SC22土壇実測図	53
第28図	SC7実測図	27	第69図	SC22の遺物実測図	54
第29図	SC7の遺物実測図	27	第70図	SC23実測図	54
第30図	SC9実測図	28	第71図	SC23の遺物実測図	55
第31図	SC9カマド実測図	29	第72図	SC24実測図	55
第32図	SC9の遺物実測図	30	第73図	SC24の遺物実測図	55
第33図	SC9の遺物実測図	31	第74図	SC25実測図	56
第34図	SC9の遺物実測図	32	第75図	SC25の遺物実測図	56
第35図	SC10実測図	32	第76図	SC26実測図	57
第36図	SC10の遺物実測図	32	第77図	SC26の遺物実測図	57
第37図	SC11実測図	33	第78図	SC27実測図	58
第38図	SC11の遺物実測図	33	第79図	SC28実測図	58
第39図	SC11の遺物実測図	34	第80図	SC28遺物実測図	58
第40図	SC12実測図	35	第81図	SC29実測図	59
第41図	SC12カマド実測図	35	第82図	SC29遺物実測図	59

第83図	SC30実測図	60	第126図	SC42の遺物実測図	91
第84図	SC30カマド実測図	61	第127図	SC43実測図	92
第85図	SC30の遺物実測図	61	第128図	SC43カマド実測図	93
第86図	SC30の遺物実測図	62	第129図	SC43の遺物実測図	94
第87図	SC30の遺物実測図	63	第130図	SC43の遺物実測図	95
第88図	SC31実測図	64	第131図	SC43の遺物実測図	96
第89図	SC31の遺物実測図	64	第132図	SC43の遺物実測図	97
第90図	SC32実測図	65	第133図	SC43の遺物実測図	98
第91図	SC32カマド実測図	65	第134図	SC43の遺物実測図	99
第92図	SC32の遺物実測図	66	第135図	SC44実測図	100
第93図	SC32の遺物実測図	67	第136図	SC45実測図	100
第94図	SC33実測図	68	第137図	SC46実測図	101
第95図	SC33カマド実測図	69	第138図	SC44・SC45・SC46の遺物実測図	101
第96図	SC33の遺物実測図	70	第139図	SC47実測図	102
第97図	SC33の遺物実測図	71	第140図	SC47カマド実測図	102
第98図	SC34実測図	72	第141図	SC47の遺物実測図	103
第99図	SC34カマド痕跡実測図	72	第142図	SC48実測図	104
第100図	SC34の遺物実測図	73	第143図	SC48カマド実測図	104
第101図	SC34の遺物実測図	74	第144図	SC48の遺物実測図	105
第102図	SC35実測図	75	第145図	SC50実測図	106
第103図	SC35カマド実測図	75	第146図	SC50の遺物実測図	106
第104図	SC35の遺物実測図	76	第147図	SC51実測図	107
第105図	SC35の遺物実測図	77	第148図	SC51の遺物実測図	108
第106図	SC36実測図	78	第149図	SC52実測図	109
第107図	SC36カマド実測図	79	第150図	SC52の遺物実測図	109
第108図	SC36の遺物実測図	79	第151図	SC53実測図	110
第109図	SC37実測図	80	第152図	SC53カマド実測図	111
第110図	SC37の遺物実測図	80	第153図	SC53内土壇実測図	112
第111図	SC38実測図	81	第154図	SC53の遺物実測図	112
第112図	SC38の遺物実測図	81	第155図	SC53の遺物実測図	113
第113図	SC39実測図	82	第156図	SC53の遺物実測図	114
第114図	SC39カマド実測図	82	第157図	SC54実測図	115
第115図	SC39の遺物実測図	82	第158図	SC54カマド実測図	115
第116図	SC40実測図	83	第159図	SC54の遺物実測図	116
第117図	SC40の遺物実測図	83	第160図	SC55実測図	117
第118図	SC41実測図	84	第161図	SC55カマド実測図	117
第119図	SC41カマド実測図	84	第162図	SC55の遺物実測図	117
第120図	SC41の遺物実測図	85	第163図	SC56実測図	118
第121図	SC42実測図	86	第164図	SC56カマド実測図	118
第122図	SC42カマド実測図	87	第165図	SC56の遺物実測図	119
第123図	SC42の遺物実測図	88	第166図	SC57実測図	119
第124図	SC42の遺物実測図	89	第167図	SC58実測図	120
第125図	SC42の遺物実測図	90	第168図	SC58の遺物実測図	121

第169図	SC59実測図	122	第189図	包含層一括の遺物実測図	136
第170図	SC59カマド断面実測図	122	第190図	包含層一括の遺物実測図	137
第171図	SC59の遺物実測図	123	第191図	SK12実測図	153
第172図	SC60実測図	124	第192図	SK12の遺物実測図	153
第173図	SC60の遺物実測図	125	第193図	SK15の遺物実測図	153
第174図	SC61実測図	126	第194図	SK15の位置とSK15の実測図	154
第175図	SC61カマド実測図	126	第195図	SD1実測図	155
第176図	SC62実測図	127	第196図	SD1の遺物実測図	156
第177図	SC62の遺物実測図	127	第197図	中世包含層の遺物実測図	157
第178図	SC62の遺物実測図	128	第198図	近世墓及び周辺の遺物実測図	158
第179図	SC63実測図	129	第199図	近世墓の分布と近世墓実測図	159
第180図	SC63の遺物実測図	130	第200図	近世墓	160
第181図	SC64実測図	131	第201図	近世墓(平林家墓)分布図と近世墓実測図	161
第182図	SC64の遺物実測図	131	第202図	近世墓(平林家墓)	162
第183図	SC65実測図	132	第203図	SK17実測図	163
第184図	SC65カマド実測図	132	第204図	SE1実測図	163
第185図	SC65の遺物実測図	132	第205図	SK17の遺物実測図	164
第186図	SD3実測図	133	第206図	その他の遺物実測図	165
第187図	SK25実測図	134	第207図	時期別遺構配置図	168
第188図	SK25の遺物実測図	135	第208図	ヘラ記号出土図	169

表 目 次

第1表	遺物観察表	138	第12表	遺物観察表	149
第2表	遺物観察表	139	第13表	遺物観察表	150
第3表	遺物観察表	140	第14表	遺物観察表	151
第4表	遺物観察表	141	第15表	土製品計測表	152
第5表	遺物観察表	142	第16表	石製品計測表	152
第6表	遺物観察表	143	第17表	鉄製品計測表	152
第7表	遺物観察表	144	第18表	遺物観察表	166
第8表	遺物観察表	145	第19表	近世墓及びSK17の遺物観察表	166
第9表	遺物観察表	146	第20表	毛井遺跡B地区におけるカマド祭祀分類表	171
第10表	遺物観察表	147	第21表	大分県内におけるカマド祭祀分類表	171
第11表	遺物観察表	148			

写真図版目次

1	1. SC1の全景(西から)		9.	SC3のカマド出土状況(北方向へ)	
	2. SC1の遺物出土状況		図版4	10. SC3の遺物出土状況	
	3. SC1のカマド? 出土状況(西から)			11. SC4の検出状況	
図版2	4. SC2の全景(北から)			12. SC4のカマド検出状況	
	5. SC2の遺物出土状況		図版5	13. SC4のカマド付近の検出状況	
	6. SC2のカマド付近と遺物出土状況			(北方向へ)	
図版3	7. SC2のスキサキ出土状況(東方向へ)			14. SC4のカマド断面	
	8. SC3の全景(東方向へ)			15. SC5の全景(西方向へ)	

- | | | | |
|------|-----------------------|------|-------------------------|
| 図版 6 | 16. SC5のカマド検出状況 | 図版20 | 58. SC31の遺物出土状況 |
| | 17. SC6の全景（西方向へ） | | 59. SC32の全景遺物出土状況 |
| | 18. SC6の遺物出土状況（西方向へ） | | 60. SC32の全景（北方向へ） |
| 図版 7 | 19. SC7の全景（東方向へ） | 図版21 | 61. SC32のカマド付近の遺物出土状況 |
| | 20. SC7の遺物出土状況 | | 62. SC33の全景遺物出土状況（西方向へ） |
| | 21. SC9の全景（西方向へ） | | 63. SC33の全景（西方向へ） |
| 図版 8 | 22. SC9のカマド検出状況 | 図版22 | 64. SC33のカマド |
| | 23. SC9のカマド検出状況 | | 65. SC33の遺物出土状況 |
| | 24. SC10の検出状況 | | 66. SC33の全景完備 |
| 図版 9 | 25. SC11の全景（北方向へ） | 図版23 | 67. SC33のカマド付近（西方向へ） |
| | 26. SC11の全景検出状況（南方向へ） | | 68. SC33の遺物出土状況（西方向へ） |
| | 27. SC12の全景検出状況（南方向へ） | | 69. SC33の遺物出土状況 |
| 図版10 | 28. SC12の遺物出土状況 | 図版24 | 70. SC34の遺物出土状況（北方向へ） |
| | 29. SC13の全景（北方向へ） | | 71. SC34の全景完備 |
| | 30. SC13の遺物出土状況（北方向へ） | | 72. SC34のカマド付近 |
| 図版11 | 31. SC14の全景（西方向へ） | 図版25 | 73. SC34の遺物出土状況 |
| | 32. SC14の遺物出土状況 | | 74. SC34の遺物出土状況 |
| | 33. SC15の全景（北方向へ） | | 75. SC35の全景（西方向へ） |
| 図版12 | 34. SC15の遺物出土状況 | 図版26 | 76. SC35のカマド |
| | 35. SC16の全景検出状況 | | 77. SC35のカマド断面 |
| | 36. SC16のカマド全景（南方向から） | | 78. SC36の全景 |
| 図版13 | 37. SC17の残存状況 | 図版27 | 79. SC36のカマド全景（北方向へ） |
| | 38. SC17の遺物出土状況 | | 80. SC37の全景（西北方向へ） |
| | 39. SC17の遺物出土状況（西方向へ） | | 81. SC38の全景（西方向へ） |
| 図版14 | 40. SC17のカマド検出状況 | 図版28 | 82. SC38のカマド |
| | 41. SC18・19の全景（南方向へ） | | 83. SC39の全景（北方向へ） |
| | 42. SC20の全景（東方向へ） | | 84. SC39のカマド |
| 図版15 | 43. SC20bの全景（南方向へ） | 図版29 | 85. SC39のカマド断面 |
| | 44. SC20bの遺物出土状況 | | 86. SC40の全景（北方向へ） |
| | 45. SC21の全景（東方向へ） | | 87. SC40のカマド（北方向へ） |
| 図版16 | 46. SC22の遺物出土状況（西方向へ） | 図版30 | 88. SC41の全景 |
| | 47. SC25の全景（南方向へ） | | 89. SC41のカマド |
| | 48. SC25の十師寨の出土状況 | | 90. SC42の全景遺物出土状況（北方向へ） |
| 図版17 | 49. SC25の遺物出土状況 | 図版31 | 91. SC42の全景（北方向へ） |
| | 50. SC25の遺物出土状況 製塩土器 | | 92. SC42のカマド |
| | 51. SC27の全景（西方向へ） | | 93. SC42の遺物出土状況 |
| 図版18 | 52. SC29の全景（南から） | 図版32 | 94. SC42の遺物出土状況 |
| | 53. SC30の全景（北方向へ） | | 95. SC42の遺物出土状況 |
| | 54. SC30のカマド全景（北方向へ） | | 96. SC42の遺物出土状況 |
| | 54. SC30の遺物出土状況 | 図版33 | 97. SC42の遺物出土状況 |
| 図版19 | 55. SC31の全景（西方向へ） | | 98. SC43の全景（北方向へ） |
| | 56. SC31の遺物出土状況（西方向へ） | | 99. SC43の全景遺物出土状況（北方向へ） |
| | 57. SC31の遺物出土状況（北方向へ） | 図版34 | 100. SC43の遺物出土状況 |

101. SC43の遺物出土状況
102. SC43の遺物出土状況
- 図版35 103. SC44の全景（西方向へ）
104. SC45の全景（北方向へ）
105. SC46の全景（北方向へ）
- 図版36 106. SC47の全景（西方向へ）
107. SC47の遺物出土状況
108. SC47のカマド断面
- 図版37 109. SC47のカマド
110. SC47のカマド断面
111. SC48の全景
- 図版38 112. SC48の遺物出土状況（西方向へ）
113. SC48のカマド付近補石出土状況
114. SC50の全景（西方向へ）
- 図版39 115. SC52の全景（西北方向へ）
116. SC53の全景
117. SC53の全景遺物出土状況（西方向へ）
- 図版40 118. SC53のカマド検出状況（西方向へ）
119. SC53のカマド遺物出土状況（西方向へ）
120. SC53の遺物出土状況
- 図版41 121. SC54の全景（南方向へ）
122. SC54のカマド（南方向へ）
123. SC55の全景（北方向へ）
- 図版42 124. SC56の全景（北方向へ）
125. SC58の全景（西方向へ）
126. SC58の全景遺物出土状況（西方向へ）
- 図版43 127. SC58の遺物出土状況
128. SC59の全景（北方向へ）
129. SC60の全景（西方向へ）
- 図版44 130. SC60の遺物出土状況（西方向へ）
131. SC60の遺物出土状況
132. SC61の全景
- 図版45 133. SC62の全景（西方向へ）
134. SC62の遺物出土状況（北方向へ）
135. SC63の全景（西方向へ）
- 図版46 136. SC63の遺物出土状況
137. SC63の遺物出土状況
138. SC63の遺物出土状況
- 図版47 139. SC63の遺物出土状況
140. SC64の全景
141. SC64の遺物出土状況
- 図版48 142. SC65の全景
143. SD1断面
- 図版49 144. SK15の全景
145. SK15の遺物出土状況
146. SK15の遺物出土状況
- 図版50 147. SK7の全景
148. SK8の全景
149. SK9の全景
- 図版51 150. SK17の全景（北方向へ）
151. SK17の遺物出土状況
152. SK18の井戸
- 図版52 SC1・SC2の遺物写真
図版53 SC2・SC3の遺物写真
図版54 SC3・SC4の遺物写真
図版55 SC4・SC5・SC6の遺物写真
図版56 SC6・SC7・SC9の遺物写真
図版57 SC9・SC10・SC11の遺物写真
図版58 SC12・SC13の遺物写真
図版59 SC14・SC15の遺物写真
図版60 SC16・SC17・SC18・SC20の遺物写真
図版61 SC20・SC21の遺物写真
図版62 SC21・SC22・SC25の遺物写真
図版63 SC26・SC28・SC29・SC30の遺物写真
図版64 SC30・SC31・SC32の遺物写真
図版65 SC32・SC33の遺物写真
図版66 SC33・SC34の遺物写真
図版67 SC34の遺物写真
図版68 SC35・SC36の遺物写真
図版69 SC38・SC41・SC42の遺物写真
図版70 SC42の遺物写真
図版71 SC42の遺物写真
図版72 SC43の遺物写真
図版73 SC43の遺物写真
図版74 SC43・SC44・SC47の遺物写真
図版75 SC47・SC48・SC50の遺物写真
図版76 SC51・SC52・SC53の遺物写真
図版77 SC53・SC54・SC56・SC58の遺物写真
図版78 SC59・SC60の遺物写真
図版79 SC62・SC63・SC64の遺物写真
図版80 SK12・SK16の遺物写真
図版81 SK17・SD1の遺物写真

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

大分県の政治・経済の中心地である大分市は人口44万人を数え、中核都市として大きく変貌しつつある。そうした背景の中で、スポーツ公園の建設が計画され、2001年に完成した。それとともにスポーツ公園周辺の交通網の整備にも着手した。平成13年供用予定地の国道197号大分南バイパスもその一貫である。建設予定のバイパスは、国道10号線大分南バイパス（通称米良バイパス）に連結することにより東九州自動車道とスポーツ公園とのアクセスが可能になる。

工事に先立ち、大分県教育委員会では遺跡の分布調査とその遺存状態を知るために平成12年12月に試掘を行った。この結果、大分市毛井地区付近で中世・古墳時代段階のものと考えられる遺構が部分的に削られているものの、広い範囲で遺存していることがわかった。試掘結果を受けて、大分県教育委員会と大分県土木事務所とで協議を重ねた結果、この地点が道路建設工事によって大きく削りとられることが明らかになった。したがってこの試掘地点は毛井遺跡B地区として本調査が必要と大分県教育委員会は判断した。こうした経緯で大分県土木事務所の委託を受け、平成12年4月5日から平成12年10月31日まで発掘調査を実施した。

調査組織

調査主体 大分県教育委員会

田中 恒治（教育長）

山本 芳直（文化課長）

調査員 後藤 一重（大分県教育委員会文化課理数文化財第2係主査）

綿貫 俊一（同 主査）

井川 泰成（同 主任）

佐藤 勇次（同 嘱託）

衛藤 麻衣（同 嘱託）

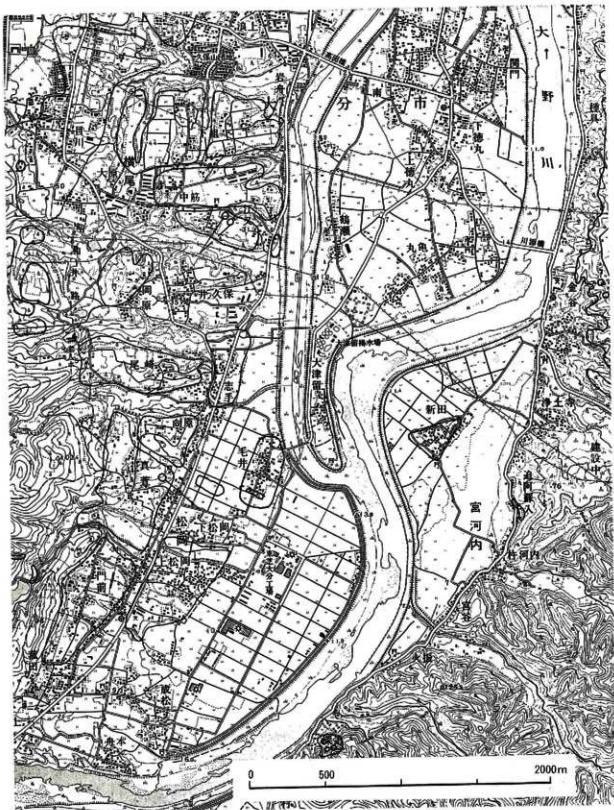
東保 春奈（同 嘱託）

五十川雄也（同 嘱託）

2. 地理上の環境

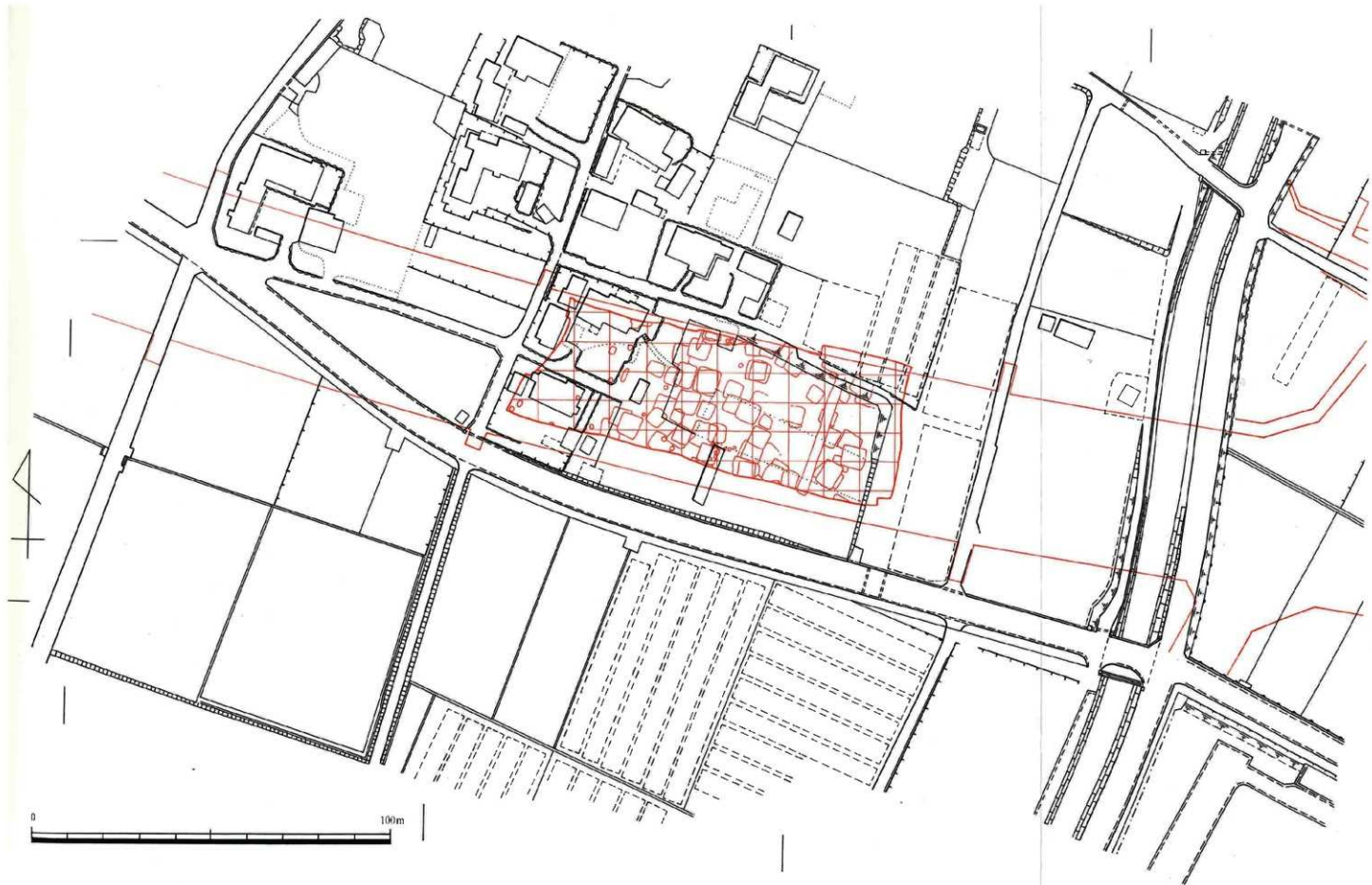
毛井遺跡B地区は、大分県人分市大字毛井字仲原にある（第1図）。位置は北緯33°12′、東経131°40′である。大分県の東北端に近く、数km北へ進めば、瀬戸内海沿岸に連する大野川沿いの低地上にある。地図を広げて眺める大分平野はそれほど広くなく東西約25km、南北約10kmの広がりを持つ変形の小平野である。この平野の中央部は、南西にある雲山方向から延びる古城山（165m）、高尾山（127.6m）などの山系によって二分されている。最も北にある高尾山の北麓から明野・高城方面へは段丘地形となって延びる。こうした山系・段丘によって二分された大分平野は、東が大野川、西は大分川が流れる下流域となっている。大野川の東側は、川沿いの僅かな低地となり、更にその東の南は九六位山系、北は丹生の地帯段丘となっている。丹生の地帯段丘の東は、小規模な低地と段丘が連続している。

毛井遺跡B地区が位置するのは、東と西を丘陵・山系・段丘によって画された大野川の両岸に広がる低地帯上である。この低地帯のなかでも大野川左岸の古い自然堤防上に立地する。この自然堤防は、その微地形から推定して南北400m、東西150mの細長い形をしている。この自然堤防上には現在毛井地区の集落が広がっている。こうした自然堤防は毛井地区の北側の乙津川を越えた大津留地区・丸龜地区、南側の松岡地区・成松地区にもときわめて延びている。毛井地区の自然堤防の西側から、真登・向原地区の段丘間は後背湿地であるため水田地帯となっている。この辺りは大野川との比高差が数メートルで、台風シーズン、梅雨時の大野川の増水によってしばしば水没してきたところでもある。



第1図 毛井遺跡B地区と周辺の遺跡

- | | | | | | |
|------------|-----------|------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 毛井遺跡B地区 | 6. 奥中尾遺跡 | 11. 一方平Ⅱ遺跡 | 16. 松岡遺跡 | 21. 宮野石橋 | 26. 大内古墳群 |
| 2. 分市内野Ⅱ地 | 7. 石田遺跡 | 12. 九池遺跡 | 17. 清水遺跡 | 22. 一の谷帯穴遺群 | 27. 新田遺跡 |
| 3. 月川遺跡 | 8. 梶田古墳 | 13. 津山遺跡 | 18. 阿原遺跡 | 23. 一の谷南橋穴遺群 | 28. 追分森入橋穴遺群 |
| 4. 橋尾下組遺跡 | 9. 城尾古塚 | 14. 牧ノ内遺跡 | 19. 宮寺遺跡 | 24. 門石遺跡 | 29. 野間古墳群 |
| 5. 多武尾遺跡 | 10. 方平Ⅰ遺跡 | 15. 岡原遺跡 | 20. 毛井遺跡A地区 | 25. 上松岡遺跡 | 30. 月生遺跡群 |



第2図 毛井遺跡B地区周辺の地形



第3圖 毛井遺跡B地区遺構配置圖

3. 毛井遺跡B地区周辺の歴史的背景

大分県南東部に位置する大分市は古来より現在の大分県の東部方面から日田方面、豊前方面、佐賀県方面からの交通の要衝にあっている。またなだらかな丘陵地帯・段丘地帯・沖積平野も広がっている。こうした地勢上の特徴を示すように古くより政治・経済の中心地であったようで、市内には国府推定地・城・郡衙・国分寺などの多くの特徴的な遺跡や史跡が多い。以下、こうした遺跡について概説したい。

毛井遺跡B地区辺りで最も古い遺跡として知られるのは、東に大野川を挟んで東北へ2500m地点にある南北に長い丹生台地の遺跡群である(第1図30)。更に北東2000mに位置する一方平I遺跡がある(第1図10)。これらの遺跡からは旧石器時代後期に属するナイフ形石器・角錐状石器など多量の遺物が、更に周辺に多武尾遺跡(第1図5)・一方平II遺跡(第1図11)・九池遺跡(第1図12)・論出遺跡(第1図13)・牧ノ内遺跡(第1図14)などでも遺物が見つかっている。このうち丹生台地の遺跡群と一方平I遺跡では旧石器時代後期末の細石刃・細石刃も併せて見つかっている。

縄文時代の遺跡としては前述の一方平I遺跡、それに横尾貝塚遺跡(第1図9)がある。一方平I遺跡からは、縄文時代早期の押型紋土器・粟ノ神(せのかん)式土器や、多量の黒島黒曜石を用いた石器、更に礫器などがある。礫器必要とする習俗があったのであろう。遺構としては、数十基の集石も見つかっており、調理に関わる施設であろう。横尾貝塚遺跡では、縄文時代前期と縄文時代後期を中心とした貝塚が形成されている。この貝塚では最近、縄文時代早期末～前期初頭の建築部材、また縄文時代後期初頭のドングリピットが見つかっている。

弥生時代に入ると、この辺りもいち早く新文化を受容したようで、一方平IV遺跡から早期初頭から前期の数時期にわたる集落が形成されている。弥生時代前期末から中期になると大分平野では多くの遺跡が形成されたようで二日川遺跡(第1図3)の北方の段丘地帯に尾崎遺跡、地蔵原遺跡があり、貯蔵穴が掘られている。毛井遺跡の北西に位置する段丘地帯においても弥生時代中期から後期末までの遺跡は多い(第1図2～7、15～18、24、25)。なかでも水分神社遺跡では弥生時代後期初頭の中広銅斧、多武尾遺跡の後期末のV字溝から廃棄された小銅鐸が見つかるなど青銅器存在が注意される。その後調査でも後期末の2条の環濠が確認されている。ともかく弥生時代の集落が毛井・松岡・徳丸などの低地を臨む段丘地帯に立地したのは、水田耕作との関係が深いのだろう。

古墳時代になっても毛井遺跡B地区の周辺には多くの遺跡が形成される。前期初頭の遺跡は弥生時代後期遺跡と重なるように段丘地帯に立地している。ところが、5世紀以降、集落形成の中心は段丘より下位で人野川をとりまく低地上に立地する。毛井遺跡B地区の北方約500mに位置する清水(そうず)遺跡(第1図17)、また毛井からみて人野川を渡った対面の低地上に新田遺跡がある(第1図27)。いずれの遺跡も自然堤防上などの微高地に選地している。こうした古墳時代の墳墓として古墳と横穴墓がある。このうち古墳は周辺の河岸段丘などの高地に立地し、横穴墓は段丘面などの低地と接する崖・斜面に立地する。毛井遺跡の南西約2800mの山嶺上には、前方後円墳を含む小牧山古墳群が位置する。また毛井遺跡B地区の西、約650mの段丘上に真宮石棺、更に北方約1700mに打出古墳群(第1図8)、大野川を渡った南約1700mの山嶺上に大内古墳群(第1図26)、やはり北東に人野川を渡った約3000mの丹生の高位段丘上に野間古墳群の一面が位置する(第1図29)。こうした古墳はほとんど発掘が行われていないので所属時期は明確でなく、横穴石室の専ら以前のものであろう。毛井遺跡B地区と深い関わりがあるのは横穴墓群であろう。南西約1600mに位置するノ谷横穴墓群・ノ谷南横穴墓群(第1図22・23)、東へ大野川を渡った約1700mにある阿蘇入横穴墓群がある(第1図28)。毛井遺跡B地区に最も関連のある横穴群は、地理的・時間的にノ谷横穴墓群・ノ谷南横穴墓群と考えられよう。

上述した毛井遺跡と清水遺跡及び横穴墓群から見つかった遺物を観察すると、6世紀末から7世紀にかけてのもの含まれている。こうした点からこれらの遺跡は飛鳥時代になっても引き続き、集落が営まれ、墓として利用されたことを物語っている。また奈良時代になると毛井遺跡B地区周辺では西へ約1700mの丘陵地帯の斜面で須恵器を焼いた松岡窯跡群が見つかっている。この窯跡はその規模から同郡関連の施設と考えられている。毛井遺跡B地区の北方に位置する清水遺跡では古墳時代後期末から飛鳥時代・奈良時代にかけての集落が、小規模な

が継続している。このあたりは西暦694年頃成立の四一評一里制を基礎とした国・郡・郷制が西暦740年（天平12）頃に成立し、豊後国海部郡丹生郷に組み入れられた。毛井遺跡B地区の東北2800mにある段丘而上に二行川遺跡が位置する（第1図3）。ここからは須恵器・土師器などが大量にでたほか、鉄砕、籾の羽口、円形硯、製塩土器、緑釉陶器などが見つかった。

平安時代の遺跡としては東中尾遺跡では大規模な粘土採掘坑があり（第1図6）、これに関わる遺構として毛井遺跡B地区の北方約1300mに位置する井の久保遺跡で土師器焼成坑が見つかった（第1図）。したがって東中尾遺跡の粘土が土師器の製作用に供給された可能性は高い。

中世鎌倉時代に入ってまもなく、毛井周辺は承久の乱の恩賞として西暦1236年（嘉禎2年）信濃国御家人平林頼宗が地頭職を得た。以後平林氏は、中世を通じて地頭職保持し、その子孫は現在でもこの地に居住している。また毛井社地頭に平林氏になったと1236年の古文書にでているので、毛井遺跡B地区を含む周辺が本拠地だったようである。近年まで「堀」の跡と見られる部分や、毛井遺跡B地区の発掘で大溝が見つかったこともこの間の事情を示している。

江戸時代に入ると毛井周辺は臼杵藩領となる。度々、大野川の氾濫があった為か、石造物が各所に建立される。



発掘作業風景

第2章 遺跡の概要

1. 発掘調査概要

遺跡は本来自然堤防上に乗る為、南北に長いが、この度の発掘調査が道路工事との関係で東西に長い調査区となった。遺構の分布を知る為にまず試掘調査を行った。その際、既に調査予定地の東半分は土取りの為に1mほど下げられていた。土取りの及んでいなかった西半分に試掘トレンチを設け、約0.50m下げた段階で古墳時代・中世の須恵器・甕などの土師器などのほか、土坑・溝などの遺構が検出された。この面はやや黄色く、中世の遺構面と考えられた。東半分にもトレンチを入れたところ、深さ数10cmで住居跡と思われる遺構が検出された。この結果を受けて本格的な発掘調査が実施されることになった。

調査予定地は東西約110m、南北約50mの広がりをもつ場所であるが、長期に渡る調査期間と表土剥ぎ・発掘による塵上置場との関係から二段階に分けて発掘をすることにした。最初に上述の東半分の発掘を行い、次に西半分の発掘をすることにした。重機による表土の除去と、作業員の平縁による遺構検出作業の進展によって、試掘段階に予想していた遺構密度と違って広範囲に密集することがわかった。更に、遺構どうしの重複も多く、その関係を詳らかにするのが困難な状況であった。これは試掘段階の遺構検出レベルと違って、はるかに上位から完形に近い須恵器・土師器が見つかったことなどから、上位においても遺構掘り込みがされていたことは確実である。東端部付近は古い水田面、あるいは旧河道の痕跡であったのか、遺構検出面からさらに一段さがっており、遺構検出にはいたらなかった。この為、西半部の発掘が開始されると、その塵上置場とした。

西半分の調査は、東半分の発掘が終了段階近くから開始した。当初、試掘段階の知見から、中世の遺構面とされていたレベルまでを除去し、遺構検出作業をしたが、全く見つからなかった。また、試掘段階の知見から大溝が発掘区の西端部に存在するものと思われていたが、まったくその痕跡はなかった。この為、東端部の遺構検出面より若干高い部分まで重機を用いて土の除去作業を行った。この作業中にも遺構検出作業予定面より上でも完形に近いものが多量に見つかった。こういった遺物もなるべく残しながら土を除去した。西端部には古墳時代・飛鳥時代の遺構は観察できなかったが、西端部付近には近世の建物の構造痕跡と考えられる柱穴が観察された。さらにこの付近の北側断面側は比高差が5m近くもあって、住居地を造る為の造作であろうか、何回かのかさ上げ面がみられる。またこの付近の南部部分C・D 11・12区の比高差は約2mであるが、遺構検出面の直上にまでビニール屑、プラスチック屑が混入していた。

遺構の所属時期は古墳時代前期初頭、古墳時代中期・後期、飛鳥時代、中世に渉るが、その主体となるのは古墳時代中期～飛鳥時代である。発掘区画でいうところの南北軸の第3列、そして西半部がB9区とD7区を結ぶ線に囲まれた部分に古墳時代中期～飛鳥時代の住居跡のほとんどが収まる。この間には既に述べたように空き空間がないほどに密集する。この領域は、その外側よりやや高い微高地であり、巻頭の空中写真を見ると現代の毛井の集落はこの微高地を踏襲した自然堤防上にある形で北に延びるのがよくわかる。古墳時代前期の遺構は古墳時代中期～飛鳥時代の遺構が分布する範囲に重なるようにまばらに分布している。中世の遺構は重機で土を除去する際にとばした可能性もある。しかし、重機で削る際には注意深く遺物を回収したのであって、それからすれば本来中世の遺構・遺物は少なかったと思われる。

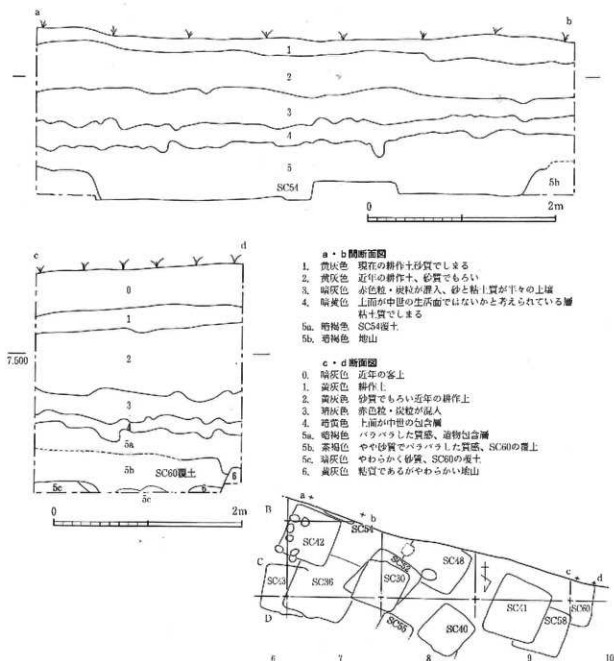
2. 地 層

毛井遺跡B地区の発掘調査区で地層断面を記録したのは、B7区、C10区の南側断面である。この辺りは住居跡が多い部分に接する場所でもある。

まずB7区のa～b断面図を見てみよう(第3図)。1層・2層は近・現代の耕作土である。3層は砂と粘土からなる上層である。4層は粘土質の土層で、しまりがある。この層は見た目が黄色を感じさせる層で、当初は上面が中世の遺構面と推定した。5a層は確実に古墳時代・飛鳥時代の遺物が含まれる。この層内をよく観察すると、厚い部分で2cm、薄い部分で数mmの酸化鉄が沈着した部分が帯状に広がっている部分がある。この部分は

他よりもしまりがあるので住居跡の床面といえる。実は地層断面図a～bの下半は住居跡SC54の覆土掘り込み層である5b層からなる。この5b層上面から延びる部分と覆土が接するレベル付近にも酸化鉄が帯状にみとめられるのである。つまり掘り込み線は明確ではないものの、住居跡の床面が残っている。次に断面c～dをみて見よう。基本的にはa～b断面と同じである。a～b断面の4層と、c～d断面の4層は同じである。5a層はバラバラした質感であり、下面に上述した酸化鉄が帯状に延びており、住居跡の床面であろう。5b層はSC60の覆土である。6層は地山である。ただし古墳時代前期の住居跡も6層に掘り込まれているが、覆土したいが6層の土色・土質に近い。全体的に堆積土の土質は細かい砂質で、大野川の沖積地帯の特性をよく物語る。a～b断面、c～d断面にみられた何回かの住居の構築と、上位に見られる住居跡掘り込みの際の遺構ラインが明確でないのは、近現代においてもしばしば起きた川の氾濫と関係しているのであろう。

なおSD1の側面削り出し中に、住居跡検出面から50cmの深さで厚さ30cmの暗褐色層が現れた。遺物は確認できなかったが、炭化物粒を多く含んでいる。住居跡に混入した尖帯紋土器段階の包含層であろうか。



第4図 毛井遺跡B地区基本層実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は竪穴住居跡65基と溝、土坑からなる。この遺跡の立地は大野川の沖積平野位置しているため遺構の理上は地山の上と区別しにくく、また遺構の切り合いも多くあったため、竪穴住居跡1つを確認するのは容易ではなかった。またほとんどの竪穴住居跡がカマドを備え付けていたが、カマドの依存状態があまり良好ではなかったためカマド構造よりもカマド祭祀に留意しながら調査を行った。遺物は竪穴住居跡から多くの土師器・須恵器また石製器、土製品、鉄製品が出土した。

(1) 竪穴住居遺構

1号竪穴住居跡 (SC1) (第5図)

1号竪穴住居跡は調査区の中央より東よりに位置している。遺構は単独で存在しているが住居の西側を表土剥ぎの時に少し壊してしまった。カマドは住居の西側中央に位置している。平面形は西側が不明であるが、東西4.5m、南北4.4+ α mの少し東西軸が南北軸よりも長い長方形を呈する。床面ははっきりとした硬化面が検出できなかったが、掘り方としては深さ約0.1mである。上柱穴は4本確認できた。住居内に土坑などは確認できなかった。

カマド

カマドは住居内の西側に確認できたが、残存状況は悪く、住居廃絶時に壊されたと推定される。確認できる焼土の範囲は西壁に向かって0.4m、幅0.7mである。

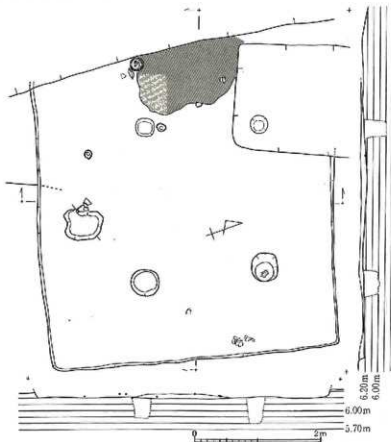
出土遺物 (第6図)

須恵器 (1~4) は、1は坯蓋である。2~4は坯身である。

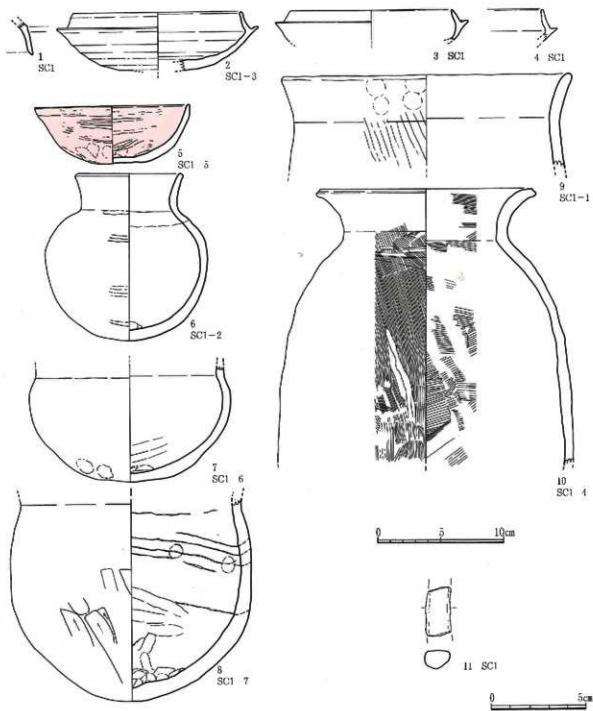
土師器 (5~10) は、5は椀で、内外面に横方向のミガキを施す。6は小型壺で、7は鉢、8~10は甕である。

10は胴部が長胴で、内外面に丁寧な刷毛目で調整する。

土製品 (11) は、用途は不明である。



第5図 SC1実測図



第6図 SC1の遺物実測図

2号竪穴住居跡 (SC2) (第7図)

この竪穴住居は、1号竪穴住居の北側に位置する。切り合い関係はなく単独で存在する。カマドは住居内の北側壁中央に位置する。半面形は東西3.9m、南北3.7mのほぼ方形である。床面は硬化面などは確認できなかった。掘り方は0.2mである。主柱穴は4本確認できた。土坑などは確認できなかった。また遺物はカマドもしくは住居内にまともに出土した。また鉄製U字状銚先は住居の東側壁に立てかけられるように出土した。

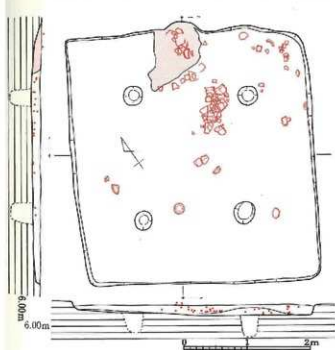
カマド (第8図)

カマドは住居内の北側に検出した。カマドは住居北側壁を若干突出させている。規模はカマド基盤床で長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.1mである。燃焼部には支脚の跡が直立したまま確認できた。西側の軸石の抜きと痕を検出し、その軸石がカマドの上部に横たわっていた。緑泥片岩である。またカマド内の出土遺物として須恵器や須恵器環身や上製丸玉などが確認できた。これらはカマド祭祀に利用されたものであろう。カマド自体はカマド封じのために破壊され、須恵器自体はその直上にあった。またカマド内部の燃焼部の少し上には煙片が散っており、これも祭祀行為としてみてよいだろう。またカマドの周辺からは上製勾玉も出土している。

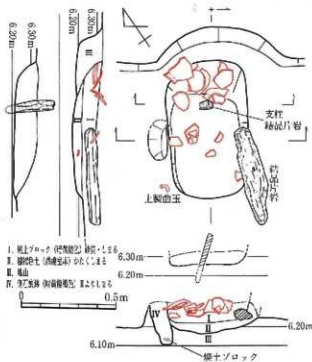
出土遺物 (第9・10・11図)

須恵器 (1~8) で、1~3は坯蓋で、1は大井にツمام付きのものである。4~7は環身である。8は高環脚の底部であろう。

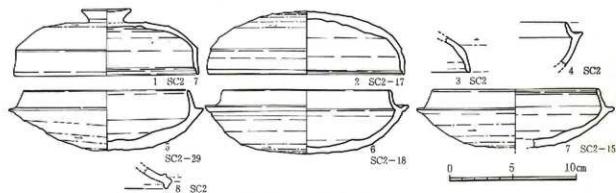
土師器 (9~21) で、9~17は甕である。18は小型の甗で、胴部に穿孔を1つ有する。19は板瓦蓋の頸部、20



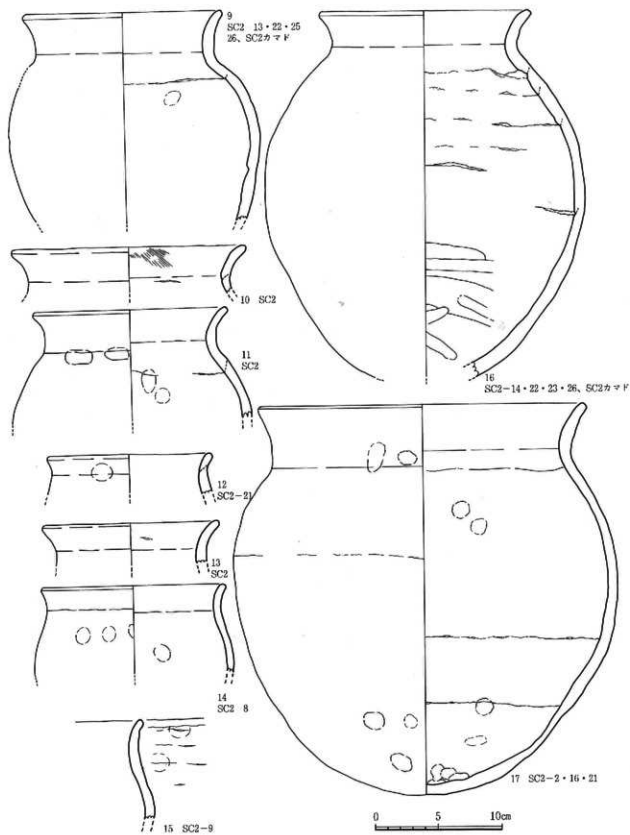
第7図 SC2実測図



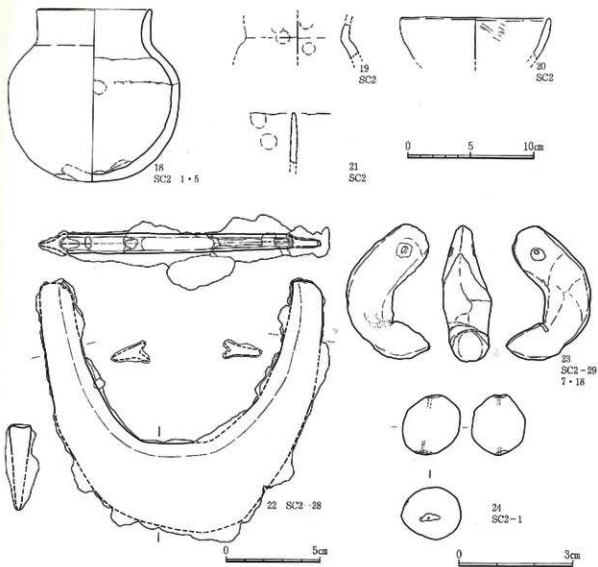
第8図 SC2カマド実測図



第9図 SC2の遺物実測図



第10図 SC2の遺物実測図



第11図 SC2の遺物実測図

は甕である。21は甕に似た容器か。

鉄製品 (22) で、U字状鋸先である。刃部には、使用痕が残り、変形している。

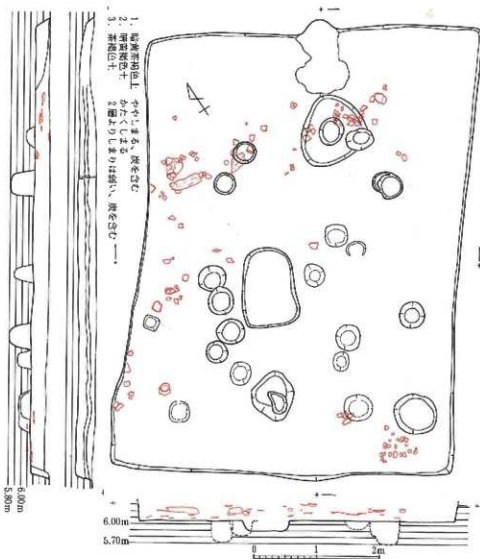
土製品 (23・24) は、23は勾玉で、穿孔を1つ有する。24は丸玉で、1つ穿孔を有する。

3号竪穴住居跡 (SC3) (第12図)

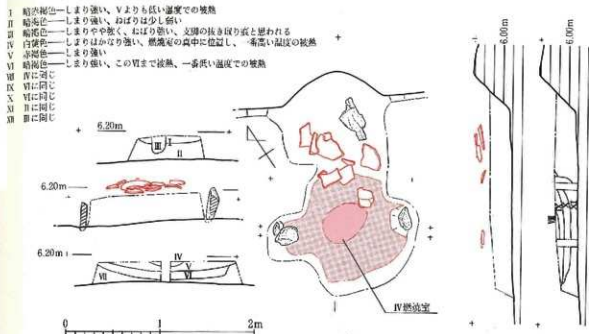
3号竪穴住居跡は調査区の東に位置している。11・23・24号竪穴住居跡を切る関係となる。カマドは住居北側に付設している。竪穴プランは、東西6.7～7.1m、南北5.3～5.4mで、平面形は南北に長いやや不整形な長方形である。住居の面積としてはこの遺跡の中で最大である。また竪穴中央の南北に設置したベルトの十層観察により、3層に分層できた。1層は住居廃絶後に堆積したものである。2層は暗黄褐色土でかたくしまり住居の張床であろう。3層は張床をする前の竪穴掘り方である。この住居の土柱穴は4本である。上炕は住居の中央部に1基ある。遺物はこの遺跡の住居の中でも1番の出土量である。住居内からは全体的に多くの須恵器・土師器が出土した。移動式のカマドの破片も出土している。また造り付けカマドで使用したであろう緑泥片岩の石も出土した。

カマド (第13図)

この住居のカマドは北側設置で、住居の壁を突出させている。袖部は緑泥片岩の袖石が2つ残存していた。カマド規模は焚口から北壁に0.7m、焚口幅0.6mである。燃焼室には赤く硬化した面が残っていた。支脚やその痕跡は十層観察でも確認できなかった。カマド築礼は、まずカマドの基礎となるであろう緑泥片岩の石を抜き取り住居内に置くという行為。また燃焼室の硬化した面の直上に破砕した甕をおくという行為。この2点が認められどれもカマド廃棄の築礼であろう。



第12図 SC3実測図



第13図 SC3カマド実測図

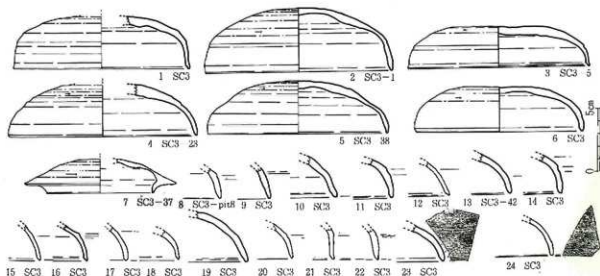
出土遺物 (第14・15・16図)

須恵器 (1~46) は、1~24は坯蓋である。良好な残存は1~7である。25~45は坯身である。残存は25~28が良好である。46は脚付き壺か。

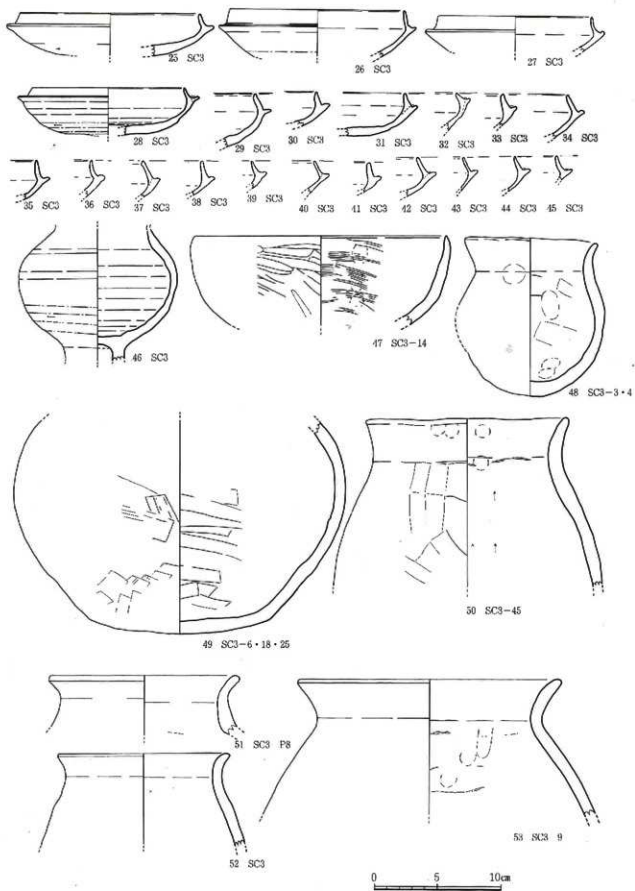
土師器 (47~58) は、47は甗である。48は小型壺。49~56は甕である。57は甗の把手である。58は高坏脚である。

土製品 (59・60、62~64) は、59は支脚。60はヒレ付きの移動式カマド破片である。62~64は不明土製品である。

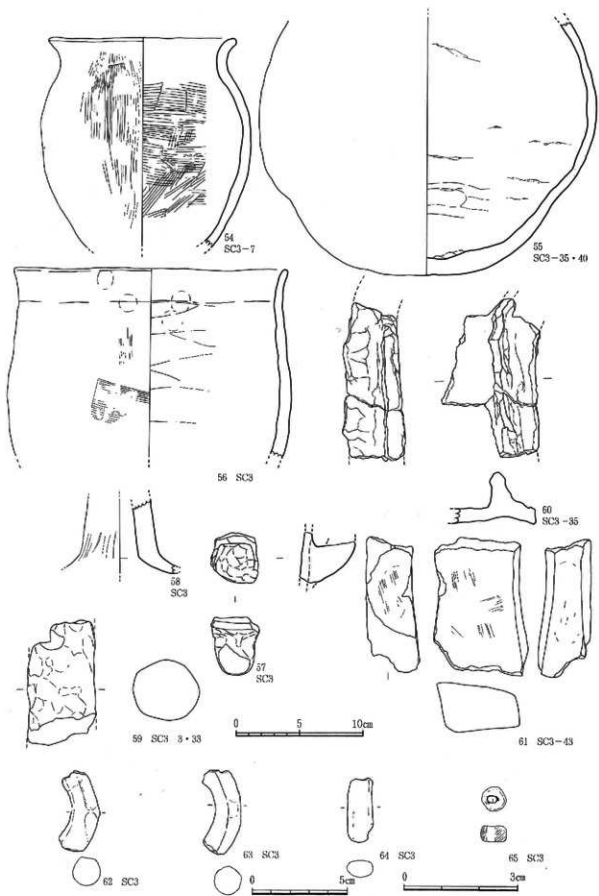
石製品 (61) は、砥石である。玉類は65で、滑石製の小玉である。



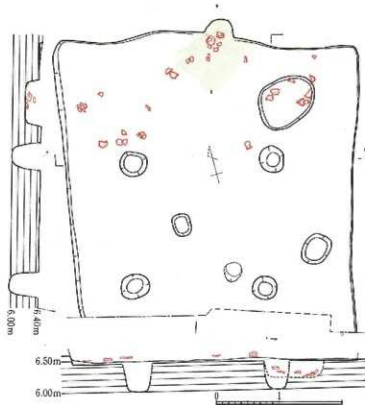
第14図 SC3の遺物実測図



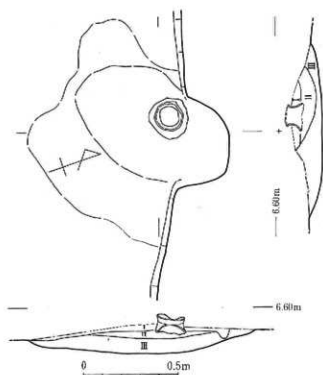
第15図 SC3の遺物実測図



第16図 SC3の遺物実測図



第17図 SC4実測図



- I. 黄褐色土（地山土、焼土ブロック含む）かたくしまる
 II. 橙褐色土、カマド灰面、かたくしまる
 III. 暗黄灰褐色土（砂粒を含む粘性土）地山

第18図 SC4カマド実測図

4号竪穴住居跡（SC4）（第17図）

この竪穴住居は調査区の東、3号住居の
 に位置する。重複関係は6・22号住を切
 る。カマドは住居の北側に位置する。竪穴
 ブランは住居の南側が調査区外というこ
 とで全体は明らかでないが、東西4.5m、南
 北4.6±αmで、やや南北に長い長方形を
 とり磁北に対し南北軸は若干東に振ると思
 われる。硬化した床面は確認できなかった。
 掘り方としては深さ0.14mである。主柱穴
 は4本である。土坑はカマドの東側に1基
 ある。遺物は比較的少ない。

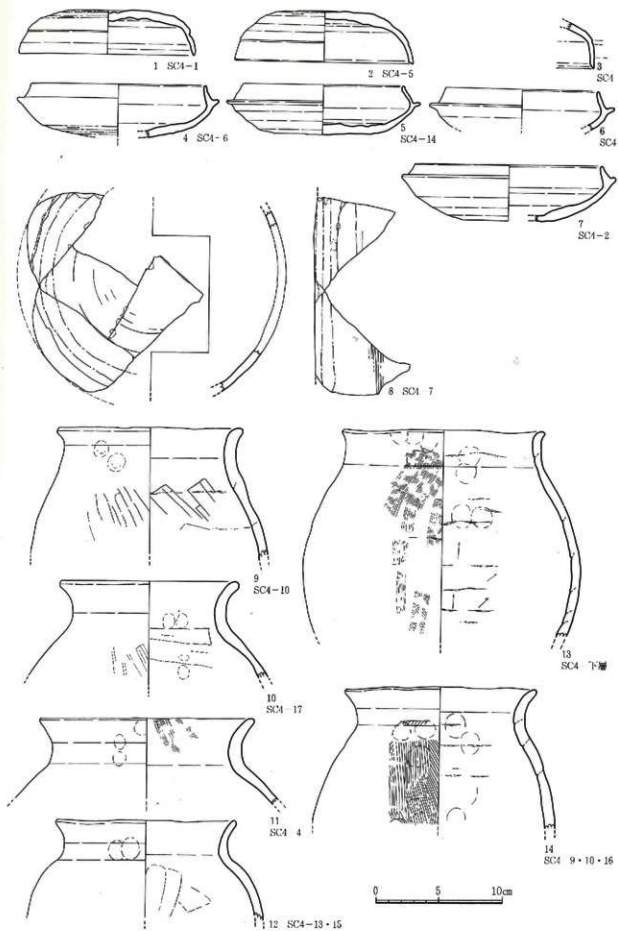
カマド（第18図）

この住居のカマドは北側壁中央に付設す
 る。カマドの残存状態はあまり良くないが、
 支脚として使用したであろう鋸の17線部が燃
 焼室に残っていた。袖部の状態や痕跡は確
 認できなかった。また燃烧室内には赤く
 硬化した面を検出した。カマド祭祀は確認
 できなかった。規模は北壁への軸で約0.9
 m、幅約0.6mである。

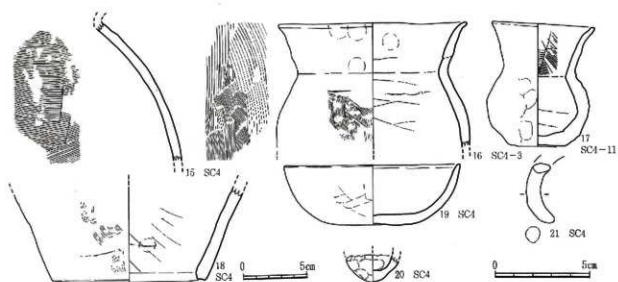
出土遺物（第19・20図）

須恵器（1～8）は、1～3は环蓋であ
 る。4～7は坏身である。8は提瓶である。
 土師器（9～19）は、9～15は壺である。
 16・17は小型の壺である。18は甌である。
 19は碗である。

ミニチュア土器（20）で、碗型である。
 土製品（21）は、用途不明である。



第19図 SC4の遺物実測図



第20図 SC4の遺物実測図



発掘風景

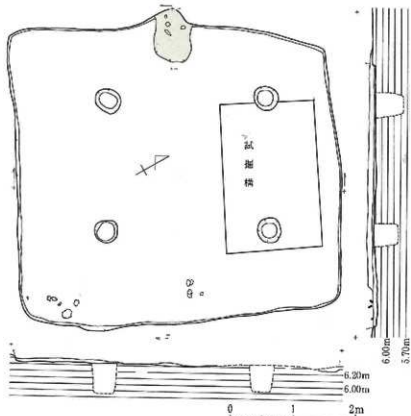
5号壑穴住居跡 (SC5) (第21図)

この住居跡は調査区のやや東に位置している。重複関係は11・26号住を切る。

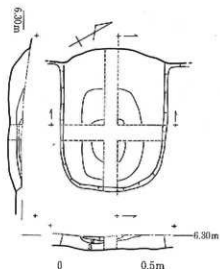
カマドは住居西壁に付設している。竈穴プランは東西4.9～5.0m、南北4.0～4.4mで、やや不整形な方形である。床面は確認できなかったが、掘り方の深さは0.2mである。支柱穴は4本であり、北側の2本は試掘トレンチにかかっており、残存状態は良好ではない。上坑などは確認できなかった。また遺物は比較的少なかった。

カマド (第22図)

カマドは住居北側壁中央に位置している。カマドの残存状態はあまり良くないが、燃焼室の赤く焼けた硬化面を検出した。カマド残存規模は焚口から西壁に向かって約0.7m、幅約0.4mである。袖部はその痕跡や袖石などは確認できなかった。カマド祭祀は確認できなかった。

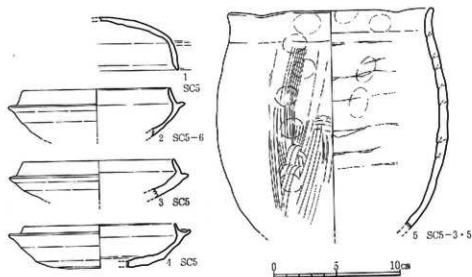


第21図 SC5実測図



1. 赤褐色 最も被熱を受けた部分、しまり強い、燃焼部
 2. 褐色色 下部はほとんど被熱を受けない、上面は焼けるしまりは強い
 3. 暗褐色 カマド構築時のものと思われる、被熱は受けてないしまりは強く、粘性も強い
- ※ 袖石の痕跡は見つからず

第22図 SC5カマド実測図



第23図 SC5の遺物実測図

出土遺物 (第23図)

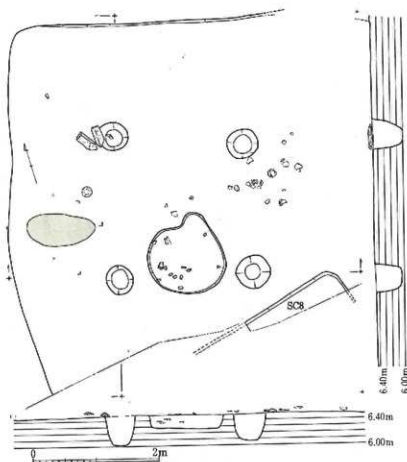
須恵器 (1~4) は、1が坏蓋。2~4は坏身である。

土師器 (5) は甕である。外面刷毛目調整のちナデ、内面には輪積みの痕跡が残る。

6号竪穴住居跡 (SC6) (第24図)

この住居は調査区の南東に位置している。重複関係は8号住に切られる。

カマドは住居の西側に付設している。竪穴プランは住居の南側が調査区外であるということと竪穴住居自体が削

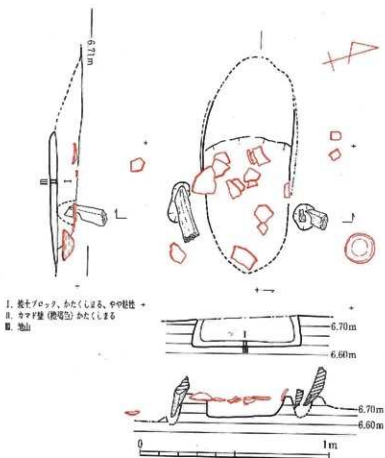


第24図 SC6実測図

平をだいぶ受けており残存状況が悪いことから全体が明らかではないが、東西5.7+αm、南北5.7+αmである。南北に少し長い長方形プランか。床面ははっきりと確認できず、掘り方は深さ0.04mで竪穴部の遺存状態は悪い。支柱穴は4本である。上坑は住居の中央部より少しやや南側に検出した。遺物は須恵器・土師器および製塩土器が出土した。

カマド (第25図)

カマドは住居の西側壁に付設している。カマドの規模は焚口から西壁で0.6m、焚口幅0.4mである。カマドの中央部は赤い硬化面が残っており、燃烧室である。そこから支脚などの痕跡は確認できなかった。その両側には袖部である緑泥片岩の袖石が残存していた。カマド内には土師器の壘片が残り、またカマド北側の袖石の外に須恵器



第25図 SC6カマド実測図

坏身が伏せた状態で検出した。このことからカマド祭祀はカマド内に破砕した甕を置き、カマドの外では須恵器を伏せるという行為が行われている。カマド廃棄時の行為であろう。その他に住居内から緑泥片岩の石が出土しており、カマドの一部に使用されたものと思われる。これもカマド廃棄時に住居内においたものであろう。

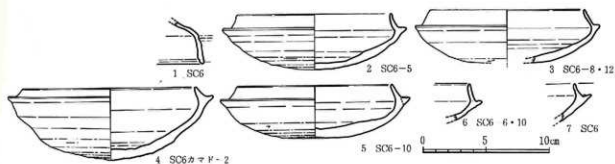
出土遺物 (第26・27図)

須恵器 (1~7) は、1が坏蓋で、2~7は坏身である。

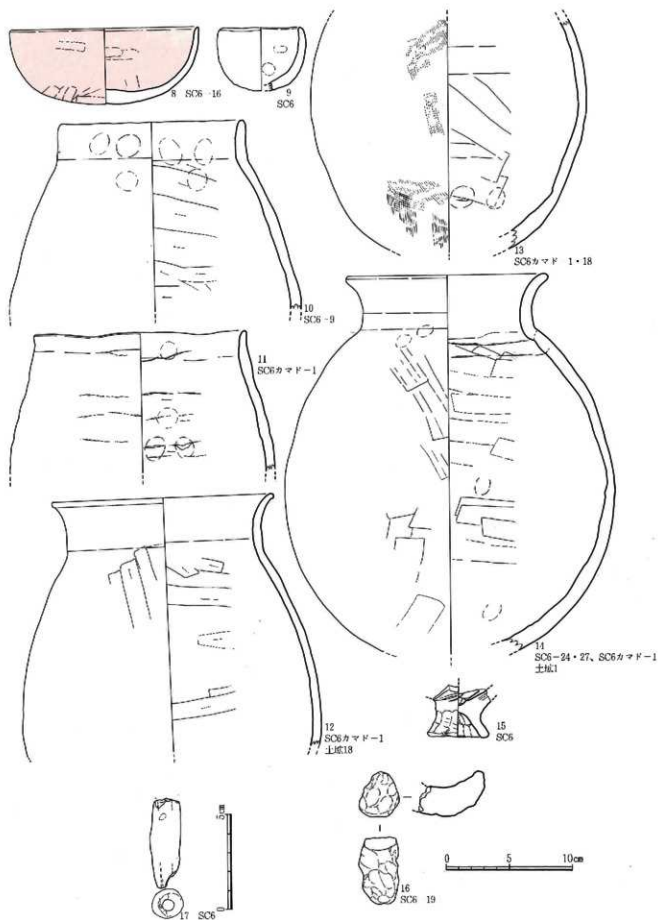
土師器 (8~16) は、8が碗、9が小梨碗、10~14は甕である。16は甕の把手である。

製塩土器 (15) は、底部である。

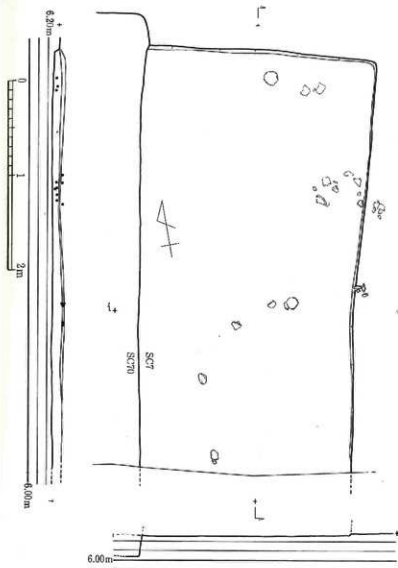
土製品 (17) は土鐘である。



第26図 SC6の遺物実測図



第27図 SC6の遺物実測図



第28図 SC7実測図

7号整穴住居跡 (SC7) (第28図)

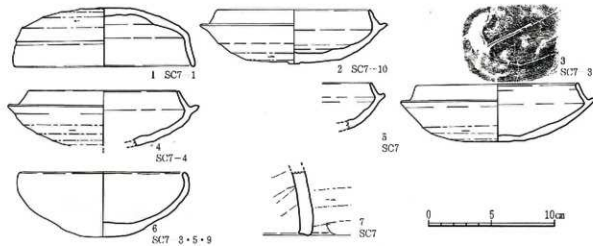
この住居跡は調査区の南に位置している。29号住を切り、20号住に切られる。

カマドは確認していない。また住居自体の残存状態も良好ではなかったためにこの住居に伴う土柱穴も確認することができなかった。出土した遺物は比較的少なかった。

出土遺物 (第29図)

須恵器 (1~5) は、1が坏蓋である。2~5は坏身である。3は内面底部にヘラ記号がある。

土師器 (6・7) は、6が甕で内外面土塗りである。7は瓶の底部である。



第29図 SC7の遺物実測図

8号竪穴住居跡 (SC8) (第24図)

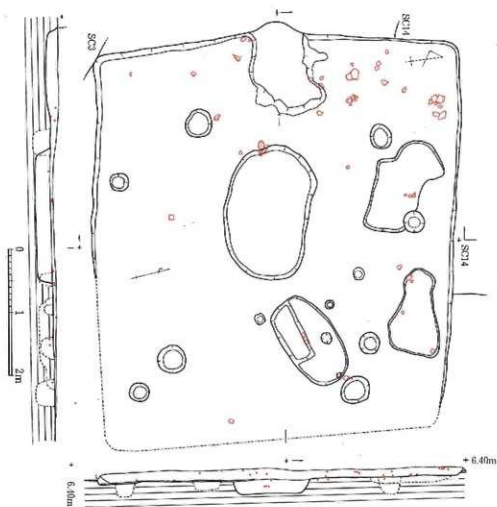
この住居は6号住居の南側を切っているが、そのほとんどが調査区外にかかるため、全貌はほとんどわからない。北東部のコーナーが確認できるだけである。東西0.4-αm、南北1.6-αmである。カマドの有無も確認できない。遺物も土師器小片が出土しただけである。

9号竪穴住居跡 (SC9) (第30図)

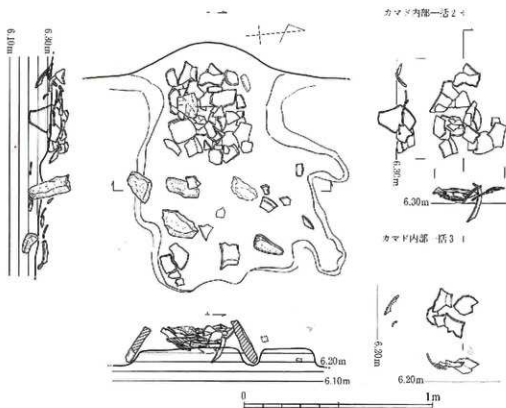
この住居は調査区の東側に位置し、14号住居跡を切っている。カマドは住居西に付設している。竪穴プランは、住居の東側の残存状態が良くないためはっきりとしないが、東西5.7+αm、南北5.7-αmである。やや東西に長い長方形を呈すると思われる。床面は住居の残存状態が良くないためわからなかった。掘り方は良好に残っている所で0.2mである。主柱穴は4本を確認した。土坑は中央部に1基、その北・東側に3基ある。遺物は比較的多く出土しており、移動式カマド片も含んでいる。

カマド (第31図)

カマドは住居の西壁中央に位置する。カマドの規模は焚口から西壁で0.8m、焚口幅0.5mである。カマドはほとんどが破壊されていたが、袖部の袖石である緑泥片岩が両袖に残っていた。燃焼室内に支脚を確認することができなかったが、破砕された甕片がぎっしりと置かれていた。この甕片であるがレベルの低いところに白緑部が、またそれよりも上のレベルに同一団体の藍胴部があった。これは意図的に破砕した甕をカマド内部に置いた良好な資料であろう。それによりカマド築記としてカマド内部に破砕した甕を置くというカマド封じのための廃棄行為と考えられる。



第30図 SC9実測図



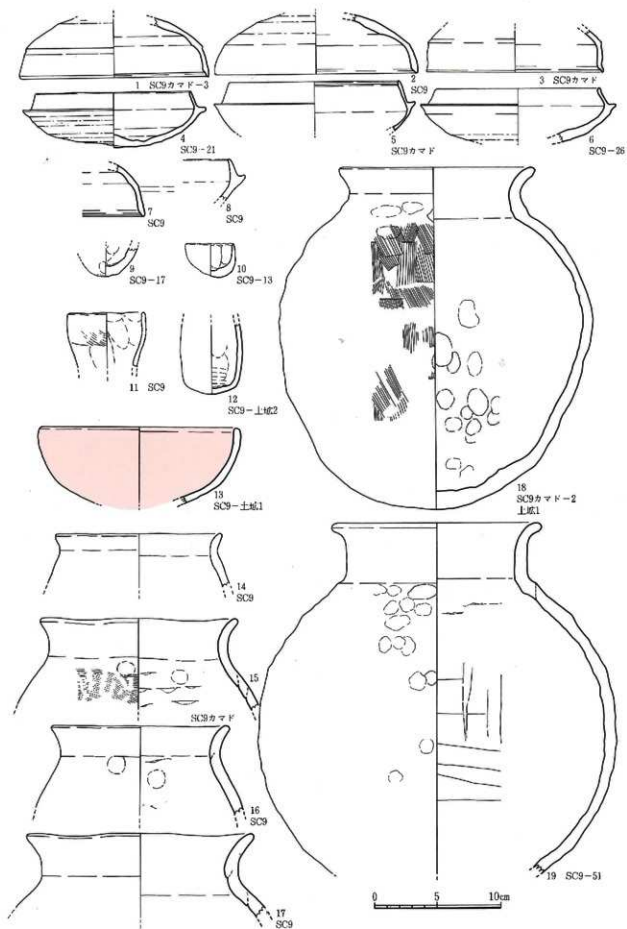
第31図 SC9カマド実測図

出土遺物 (第32・33・34図)

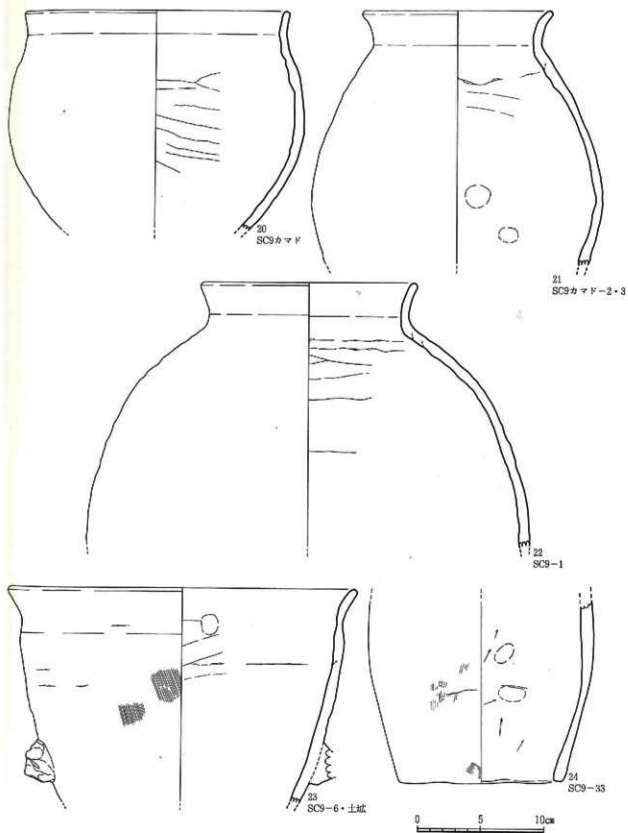
須恵器 (1~8) は、1~3・7が坏蓋で、4~6・8は坏身である。

土師器 (9~25) は、9~12はミニチュア土器である。13は碗である。14~22は壺である。23・24・25は瓶で、23・25は内而横方向ケズリ、また外面中央やや下に把手が残る。

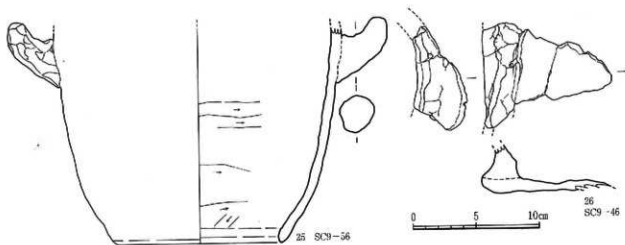
土製品 (26) はヒレ付き移動式カマド破片である。



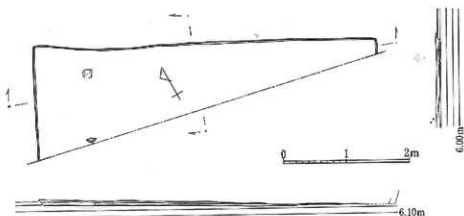
第32図 SC9の遺物実測図



第33図 SC9の遺物実測図



第34図 SC9の遺物実測図



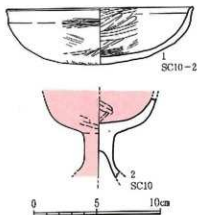
第35図 SC10実測図

10号竪穴住居跡 (SC10) (第35図)

この住居跡は調査区の東側に位置している。住居の南側大半は調査区外であり住居の全体を明らかにすることはできない。切り合い関係はないが、カマドの有無は確認できない。竪穴プランは遺存している状況で東西 $1.8 + \alpha$ m、南北 $4 + \alpha$ mである。残存する深さは 0.06 mである。また土坑及び柱穴は確認できない。遺物は土師器が出上した。

出土遺物 (第36図)

土師器(1・2)は、1が碗である。内面ヘラミガキ、外面ヘラミガキおよび刷毛目調整である。2は高坏である。内外面ヘラミガキを確認した。



第36図 SC10の遺物実測図

11号竪穴住居跡 (SC11) (第37図)

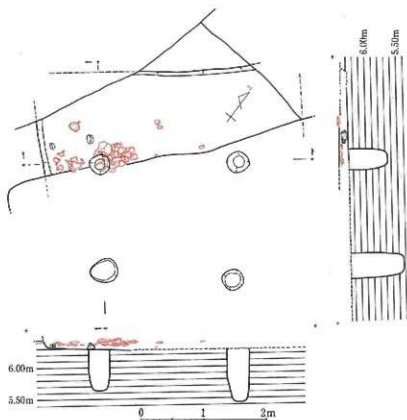
11号竪穴住居は調査区の東側に位置する。この住居は3号住と1号溝(中世溝)に切られている。カマドの有無は住居の遺存状態が悪いので確認できない。竪穴プランも全体が不十分なため正確にはわからないが、現状で東西 $1.8 + \alpha$ m、南北 $1.2 + \alpha$ mを確認した。主柱穴の配置から南北軸が長い長方形を呈したことが推測される。床面は確認できなかった。掘り方の深さは0.11mである。主柱穴は4本である。遺物は遺存面積が小さい住居ではあるが、多く出土した。またカマドは移動式カマド片が出土し、造り付けのカマドの有無は確認できていない。

出土遺物 (第38・39図)

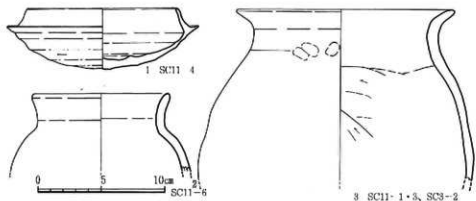
須恵器 (1) は坏身である。

土師器 (2~4) である。2・3は甕である。4は大型の甕である。内面に縦方向ケズリの調整。

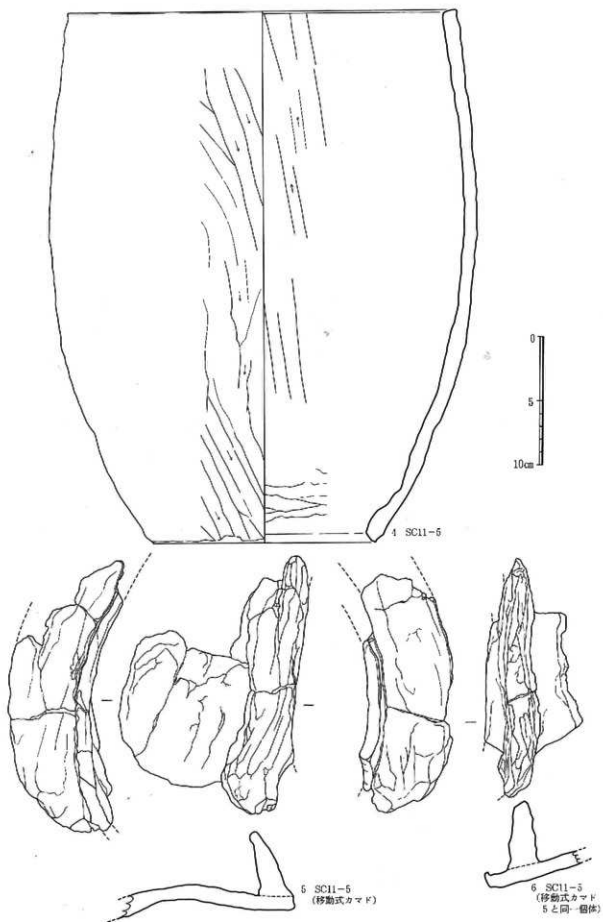
移動式カマド (5・6) は箆れ付きのもので、5の箆れは最下部のところまで残っている。5・6とも同じ粘土、焼成であるため、同一団体と考えられ互いに対となるものと考えられる。



第37図 SC11実測図



第38図 SC11の遺物実測図



第39図 SC11の遺物実測図

12号竪穴住居跡 (SC12) (第40図)

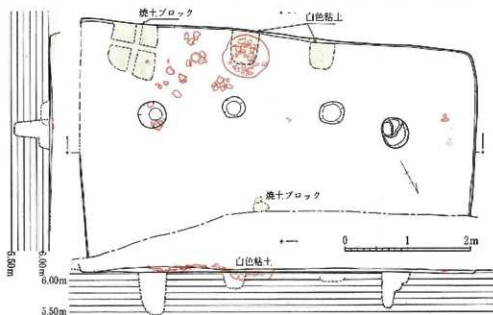
住居跡は調査区の北東に位置している。16号住居を切る。遺存状態は悪く、南側と東側を削平されている。カマドは南側に付設されている。このカマドは白色粘土が左右に検出できた。平面プランは不明である。規模は東西3.8+αm、南北6.2m、壁高0.1mである。貼り床面は確認できなかった。支柱穴は2本確認したがその配置からして4本柱であったと推定される。遺物は多く出土した。

カマド (第41図)

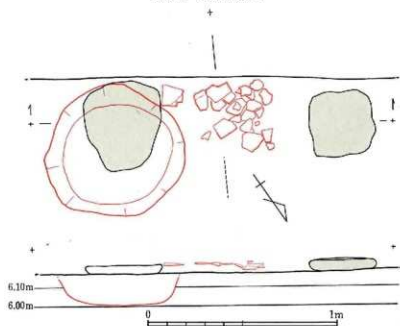
カマドは住居南に付設される。遺存状態はあまり良好ではない。遺存している規模は南壁への軸で約0.4m、幅約0.7mである。構造は左右に袖部と思われる白色粘土が検出されたのみで他の詳細はわからない。

出土遺物 (第42・43図)

須恵器 (1~8) は、1~4は坏蓋である。5~8は坏身である。5は外面底部にヘラ記号。

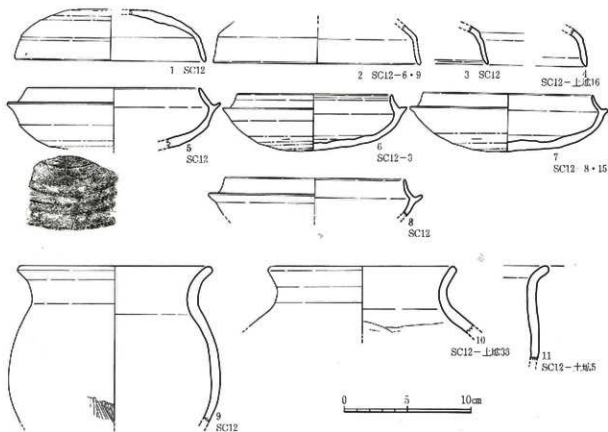


第40図 SC12実測図



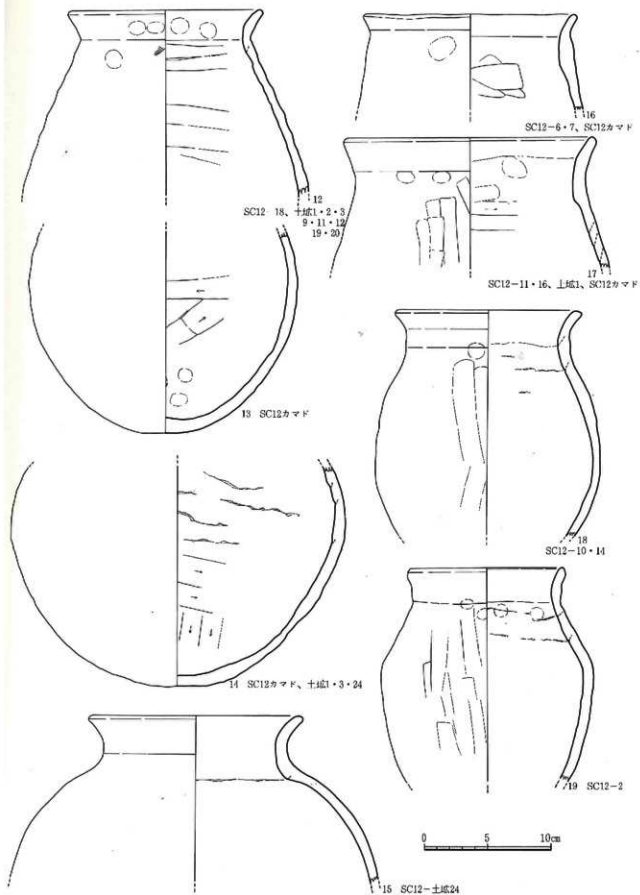
第41図 SC12カマド実測図 網かけ部は白色粘土

土師器（9～19）は、9は帯である。頸部から口縁にかけて緩やかに外反する。10～19は甕である。11は胴部が直線的に延び口縁部を外反する。13・14は底部である。14は特に胴部が張る。16・17は口縁部を緩やかに外に開く。17の外面はヘラ状工具痕で調整する。内面は横方向ケズリである。18は胴部がやや長胴である。19は胴部がやや長胴で胴部上方で径が大きく張る。外面はヘラ状工具で調整している。

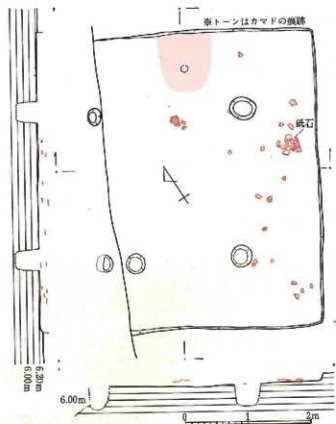


第42図 SC12の遺物実測図





第43図 SC12の遺物実測図



第44図 SC13実測図

13号竪穴住居跡 (SC13) (第44図)

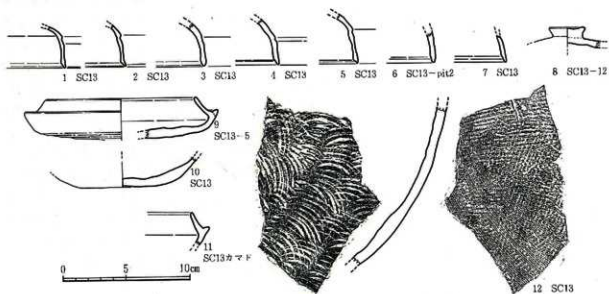
この住居は調査区の東中央に位置している。住居の西側を1号溝に切られる。カマドは北壁に付設していたと想定される。しかし焼土が集中しているだけで、トレンチをいれたがその構造などは追えなかった。その焼土範囲は長軸約0.9m、短軸0.7mである。竪穴平面プランはほぼ方形を呈していると推定される。規模は東西4.63m、南北3.5+αmである。壁高0.11mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本検出し配置は安定している。4本のうち西側の2本は溝の内部に遺存していた。遺物は覆土から出土した。

出土遺物 (第45・46図)

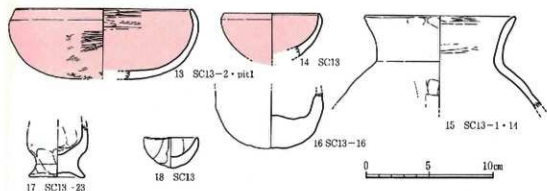
須恵器 (1~12) は、1~8は环蓋である。8はつまみが天井部につく。9~11は环身である。12は甕の胴部片である。

土師器 (13~15) は、13・14は碗である。13は口縁先端を内湾させる。15は甕である。

ミニチュア土器 (16~18) は16・18は碗型で手捏ねである。17は脚付きの碗型で手捏ねである。



第45図 SC13の遺物実測図



第46図 SC13の遺物実測図

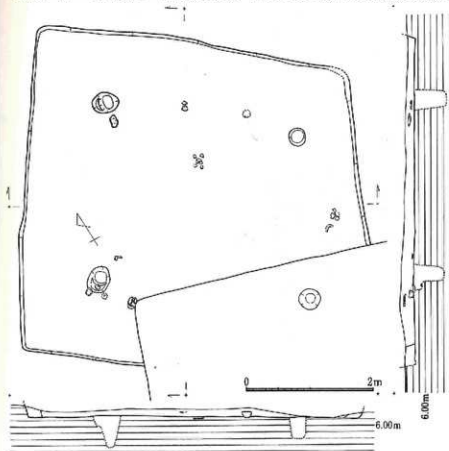
14号竪穴住居跡 (SC14) (第47図)

この住居は調査区の東に位置する。9号住居に切られる。カマドの痕跡は見当たらなかった。平面プランはやや不整形な方形を呈すると推定される。規模は東西5.1m、南北5.2m、壁高0.2mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本検出し、配置はやや不安定である。南東部の柱穴は9号住居で検出した。遺物は住居全体的に出土した。

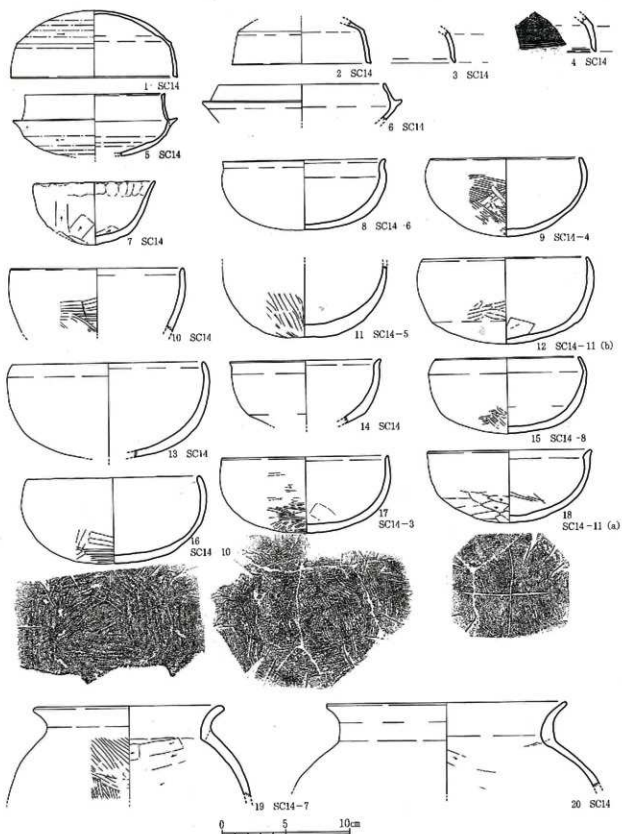
出土遺物 (第48・49図)

須恵器 (1~6) は、1~4が坏蓋である。5・6は坏身である。1と5はセット関係にある。またこの遺跡の中で出土した須恵器の中でもっとも古いものである。

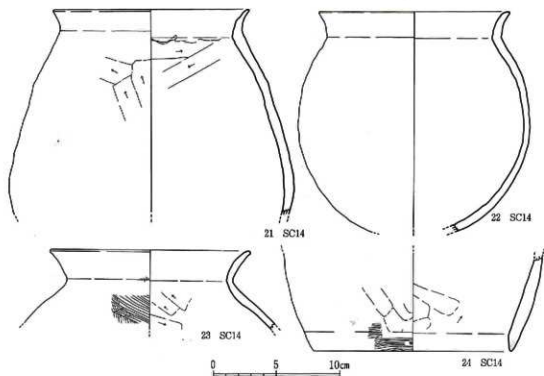
土師器 (7~24) は、7~18は椀である。7は小型で口縁内面に指圧痕を巡らす。9は口縁先端を少し内湾させる。外面は刷毛目のち部分的ミガキである。14は口縁先端を短く外反する。16は外面底部に不定方向に刷毛目調整をする。17は外面底部に不定方向に刷毛目調整を施す。18は外面底部付近を手持ちヘラケズリで調整し、底部に十字のヘラ記号を施す。19・23は壺である。内面の頸部の屈曲部は明瞭な稜をもつ。23は口縁部が「く」の字状に外反する。24は瓶の底部で、底は筒抜けである。



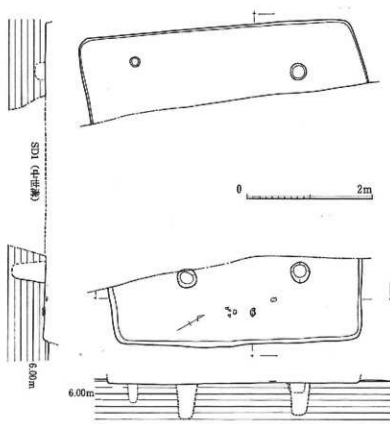
第47図 SC14実測図



第48図 SC14の遺物実測図



第49図 SC14の遺物実測図



第50図 SC15実測図

15号整穴住居跡 (SC15) (第50図)

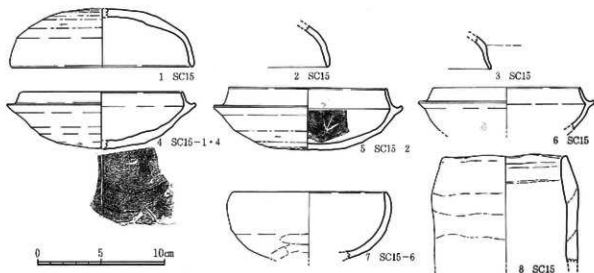
この住居は調査区の東に位置する。住居の中心を1号溝により切られる。遺存状態は良好ではない。カマドの有無も不明である。半面プランはやや不整形な東西に長い長方形を呈する。規模は東西3.8～4.3m、南北4.9～5.0m、壁高0.11mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は3本確認した。その配置から4本柱であったことが想定されるが、1つは溝に切られたのであろうか。遺物は少量出土した。

出土遺物 (第51図)

須恵器 (1～6) は、1～3は坏蓋である。4～6は坏身である。5は内面底部にへう記号を施す。

土師器 (7) は7は碗である。

製塩土器 (8) は、11線部で、器面は2次焼成により荒れている。



第51図 SC15の遺物実測図

16号竪穴住居跡 (SC16) (第52図)

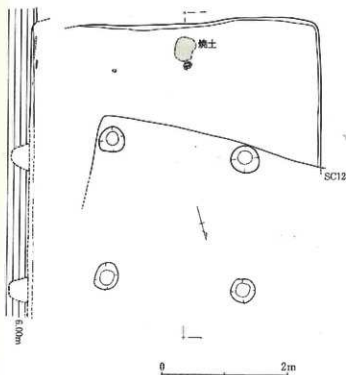
この住居は調査区の北東に位置する。12号住居に切られる。カマドは南壁に付設されている。住居の遺存状態は不良で、壁は南と西側の一部しか残っていない。平面プランは不明であるが、その残存状況から南北軸に長い長方形を呈するか。規模は東西3.71m、南北2.22+m、壁高0.1mである。貼り床面は確認できなかった。土柱穴は4本ですべて12号住居内で検出した。その柱穴の配置と住居のプランの軸は若干ずれている。遺物はほとんど出土していない。

カマド (第53図)

カマドは住居南側に付設する。遺存状態はあまり良くない。その規模は両壁への軸が0.4m、幅0.5mである。構造はカマド構築時の掘り込み、焚口部は不明で、燃焼部は硬化した焼土面が検出された。煙道は削平され不明である。

出土遺物 (第54図)

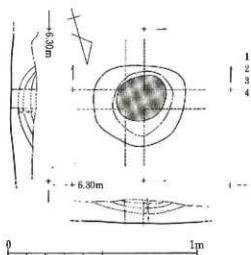
土師器 (1) は、碗である。



第52図 SC16実測図



第54図 SC16の遺物実測図



1. 白褐色 非常に硬く焼けしまる
2. 暗赤褐色 とても硬く焼けしまる
3. 褐赤色 芯干焼ける
4. 暗褐色 カマド構築時の土、しまり悪い、粘りはほとんどない

第53図 SC16カマド実測図

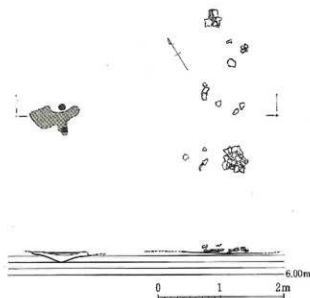
17号竪穴住居跡 (SC17) (第55図)

この住居は調査区の東よりの北端に位置する。28号住居と切り合うが、新旧関係は不明である。この住居はカマドや出土した遺物は全体の遺構検出面よりも30cmほど高いレベルで確認したため、壁は四方とも削平された。よって平面プランはまったくわからない。またカマドと出土した土器の関係からこの住居のカマドは西壁に付設していたことが伺われる。主柱穴は確認できなかった。遺物はカマド内部から多く出土した。

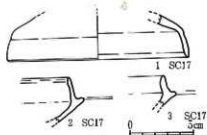
カマド (第56図)

カマドは住居の西壁に付設していたと推定される。規模は焚口から西へ約0.7、幅0.4mである。構造は焚口部に左右袖石の抜き取り痕、燃焼部には硬化した焼上面を検出した。袖石は燃焼部内より緑泥片岩の石材が出土し

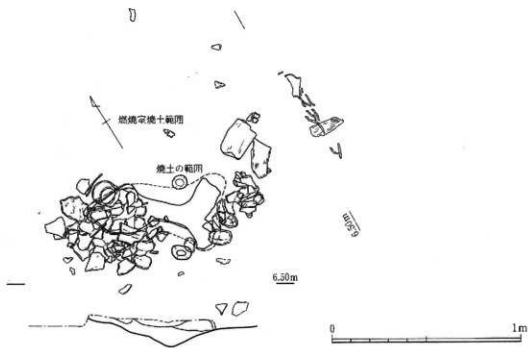
ていることから緑泥片岩製であった可能性が高い。また袖石を設置しているところよりも住居内に焼土が流出しているが、カマドの上を掻き出した跡であろう。遺物は燃焼部内よりも多く出土した。4・5・6・9・10・12などである。5は柄であり朱塗りであることからカマド廃棄時の祭祀行為を示すものか。



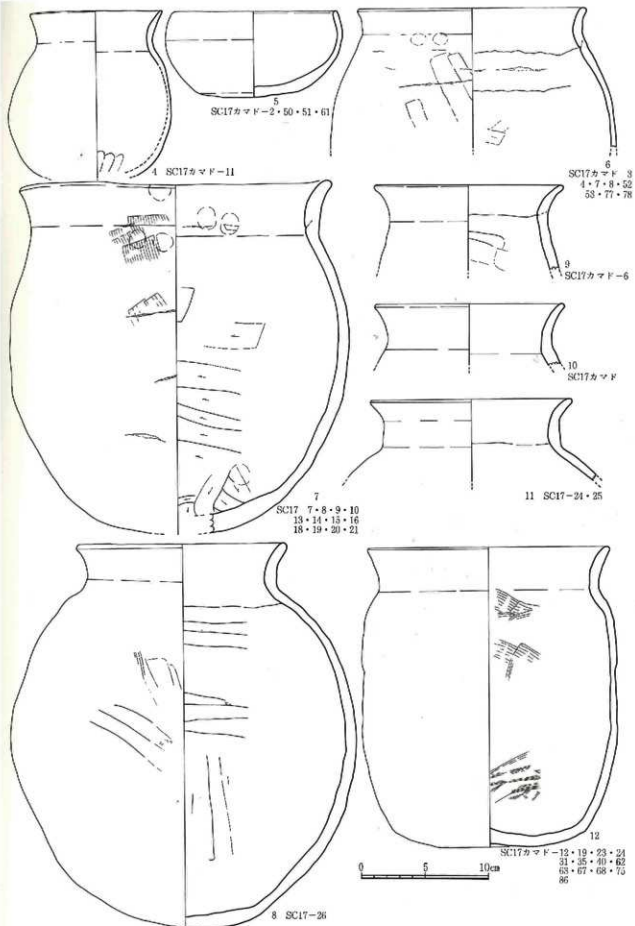
第55図 SC17実測図



第57図 SC17の遺物実測図



第56図 SC17カマド実測図



第58図 SC17の遺物実測図

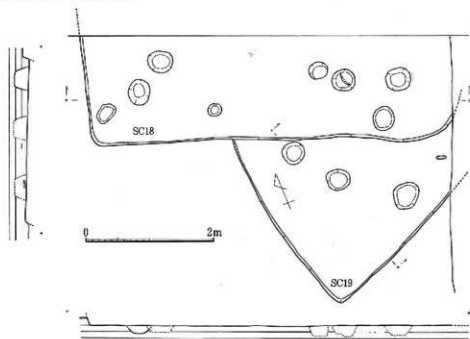
出土遺物（第57・58図）

須恵器（1～3）は、1は坏蓋である。2・3は坏身である。

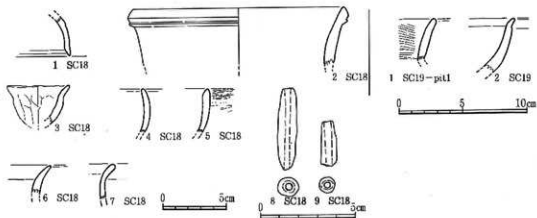
土師器（4～12）は、4は壺である。5は碗で、6～12は甕である。7は口縁部が緩やかに外反し、外面は縦方向刷毛目のちナデ調整、内面は横方向ケズリである。8は胴部中央が大きく張り出し、内而胴部上方は横方向ケズリ、胴部下方は縦方向ケズリである。11は口縁部が頸部から直線状に延び、途中で外に外反する。12は胴部はやや丸みを帯びながら直線的で、頸部を若干内湾し、口縁部を緩やかに外反する。外而底部は平底に近く、底部中央はやや上げ底である。

18号竪穴住居跡（SC18）（第59図）

この住居は調査区の北東に位置する。1号溝から切られ、19号住居を切る。遺存状態は東側を1号溝に切られ、北側大半は削平されているため不良である。カマドの有無は確認できなかった。平面プランは不明である。規模は東西1.7+αm、南北5.6m、掘り方は0.12mである。主柱穴は想定できるものもあるがどのピットが帰属するか不明である。遺物は少量出土した。



第59図 SC18・SC19実測図



第60図 SC18・19の遺物実測図

出土遺物 (第60図)

須恵器 (1・2) は、1は坏蓋である。2は甕の口縁である。

土師器 (4～7) は、4・5は碗の口縁で、6・7は甕の口縁である。

ミニチュア土器 (3) は、碗形である。

土製品 (8・9) は土錘である。

19号竪穴住居跡 (SC19) (第59図)

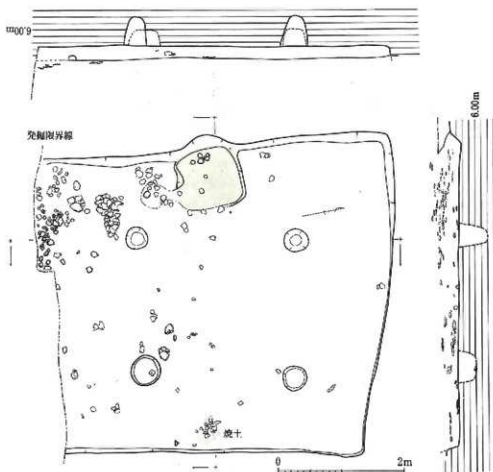
この住居は調査区の北東に位置する。1号溝、18号住居に切られる。そのため遺存状態は不良である。カマドの有無は確認できなかった。平而プランは不明である。規模は東西3.1+αm、南北2.4+αm、掘り方は0.07mである。主柱穴に掃屑するようなピットはわからなかった。遺物は小破片のみ少量出土した。

出土遺物 (第60図)

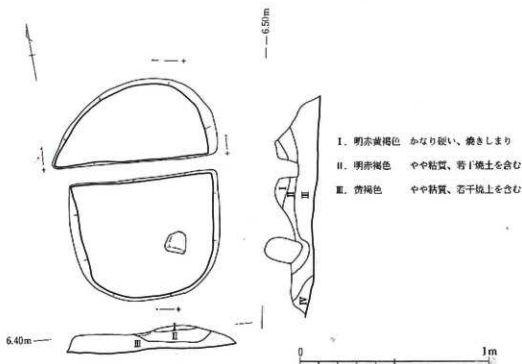
土師器 (1・2) は、1は甕の口縁部片、2は碗である。

20号竪穴住居跡 (SC20) (第61図)

この住居は調査区の中央やや南東部に位置している。7号住居跡と21号住居跡を切っている。カマドは住居の西側に付設している。竪穴プランは住居の南側が調査区外のため全体を確認できないが、南北に長い長方形と推



第61図 SC20実測図



第62図 SC20カマド実測図

定され、東西 $4.3+\alpha$ m、南北 $6.8+\alpha$ mである。床面ははっきり確認できなかった。掘り方は 0.12 mである。主柱穴配置は4本である。住居に伴う土坑などは確認できなかった。遺物は住居の北西部から多量に出土した。

カマド (第62図)

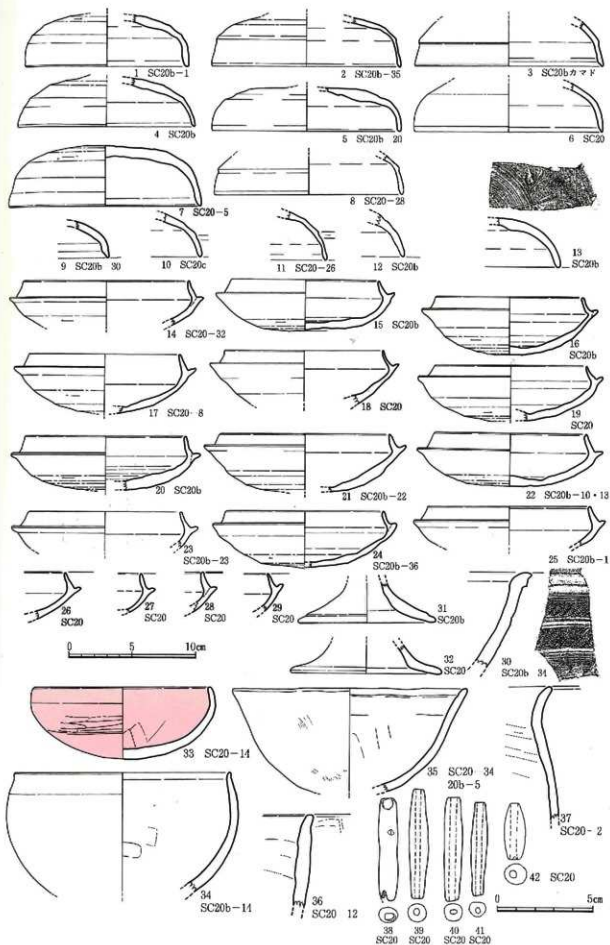
カマドは住居の西側に位置している。規模は焚口から西壁まで約 0.6 m、幅約 0.4 mで、遺存状態はあまりよくなかった。支脚は確認できなかった。また袖部は片方に明黄色の粘土が残存しており袖の一部であろう。このことからこのカマドには緑泥片岩の石は使用されなかったと思われる。カマド内部から遺物の出土はなかった。

出土遺物 (第63・64図)

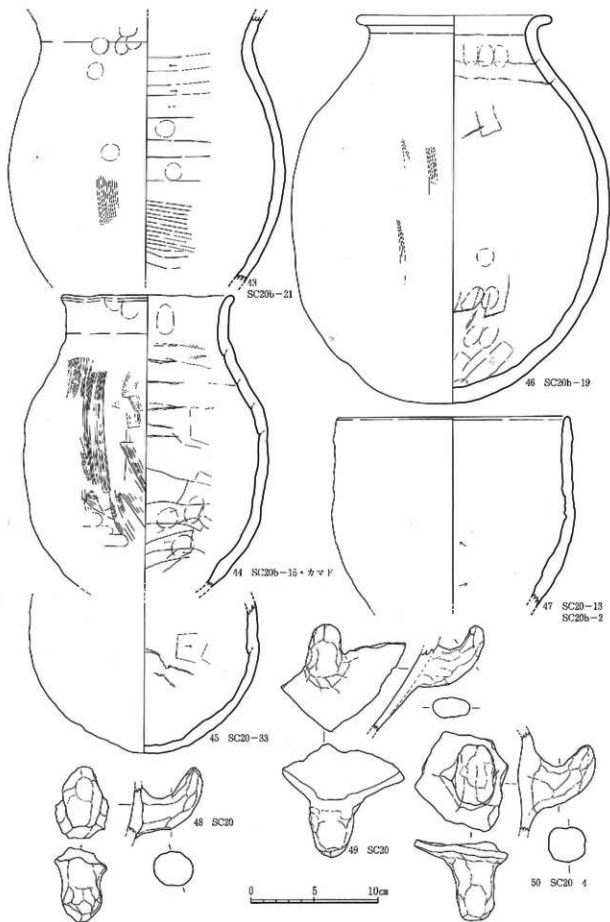
須恵器 (1~30) は1~13は坏蓋である。3はカマドからの出土である。13は外面上部にヘラ記号。14~29は坏身である。30は壺の口縁部である。口縁外面に2条の櫛描波状紋を描く。

土師器 (31~37、43~50) は、33、34は碗である。33は外面ミガキ、内面ヘラ工具痕で内外面朱塗りである。34は口径、器高ともに大型である。35は鉢である。36・37、43~46は甕である。46を除き、内面は横方向のヘラケズリ、46は縦方向ヘラケズリである。43・44・46は外面刷毛目のちナデる。45は隣接住居 (21号住) の出土遺物と復元できたもので、混入品の可能性がある。47は甌か。48~50は甌の把手である。

土製品 (38~42) は土錘である。



第63図 SC20の遺物実測図



第64図 SC20の遺物実測図

21号竪穴住居跡 (SC21) (第65図)

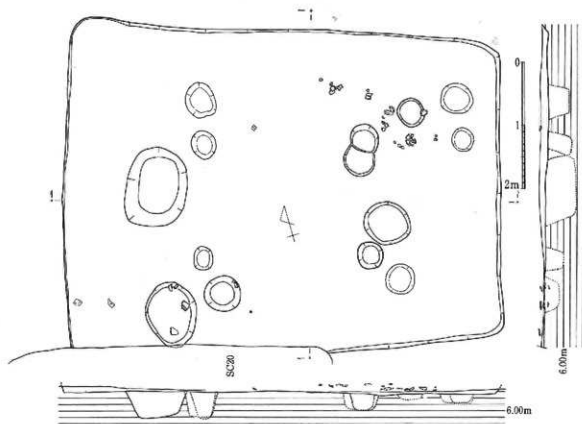
この住居跡は調査区の中央やや南東部、20号竪穴住居の北側で検出した。重複関係は20号住居と5号住居に切られる。カマドは確認できなかった。竪穴プランは東西4.3m、南北6.8+αmであろう。床面は確認できなかったが、掘り方は0.12mである。主穴配置は4本である。土坑は竪穴部の西側と北西部で検出した。2号土坑からは土器とともに焼土がかなり多く含まれていた。出土遺物は須恵器・土師器が少量出土した。

出土遺物 (第66図)

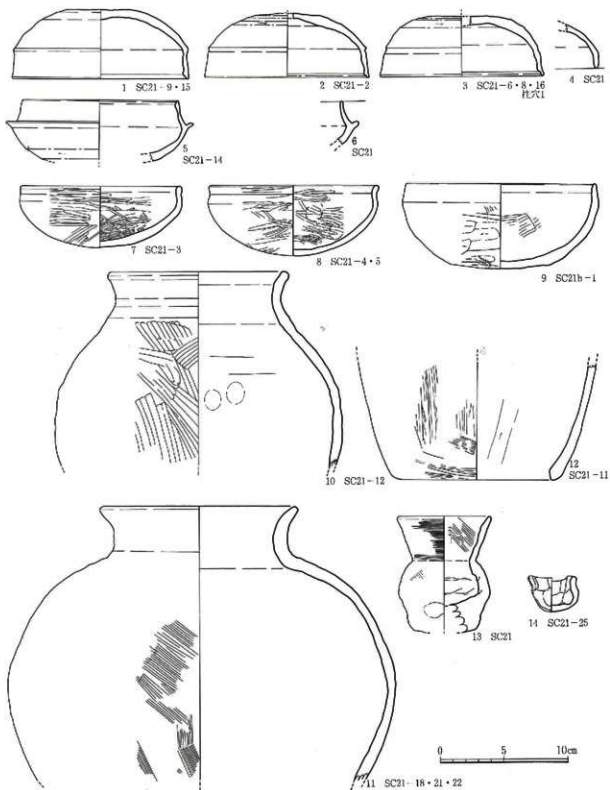
須恵器 (1~6) は、1~4は坏蓋である。5・6は坏身である。蓋・身ともに口縁端部破が明瞭に残り、身の受け部はやや内傾し高くのびる。

土師器 (7~13) は、7~9は碗である。7・8は内外面ともミガキ仕上げである。10は甕である。外面に単位の大きい刷毛目で調整される。11は甕である。底部を欠いている。外面は刷毛目のちナデ調整である。13は小型の甕である。口縁外面ヨコナデ、口縁内面斜め方向の刷毛目である。

ミニチュア土器 (14) は1つ出土し手捏ねである。



第65図 SC21実測図



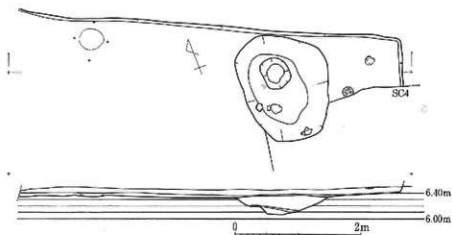
第66図 SC21の遺物実測図

22号竪穴住居跡 (SC22) (第67図)

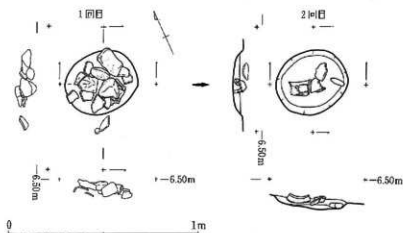
この住居は調査区の中央から南東方向に位置する。切り合いは4・6号住居に切られ、25号住居を切る。カマドは確認できなかった。遺構は他の住居の切り合いより北側の一部しか残存していないため、明確なプランはわからない。残存している竪穴プランは東西 $0.8 + \alpha$ m、南北 $6.1 + \alpha$ mである。床面は確認できなかったが、掘り方は0.1mである。主柱穴は確認できなかった。土坑は住居の北側壁に近いところで2基確認できた。特に2号土坑(第68図)(長軸0.4m、短軸0.35m、深さ0.05m)は土師器甕を破碎し、その上から拳大の礫を置いている。出土遺物(第69図)

須恵器(1・2)は1が坏蓋で、2は坏身である。内面底部にヘラ記号を施す。

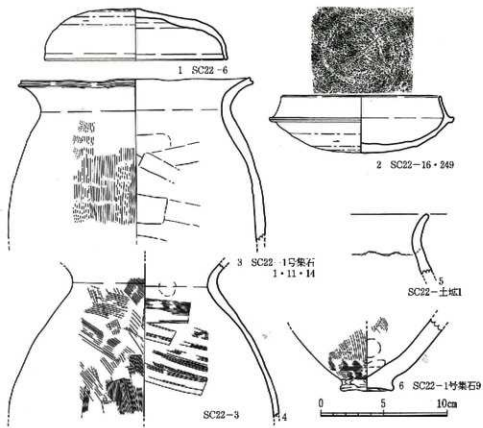
土師器(3~6)はすべて甕である。3は2号土坑からの出土遺物である。外面は丁寧な刷毛目調整、外面横方向ケズリである。4は外面丁寧な斜めから縦方向の刷毛目調整で、内面も刷毛状工具痕が残る。6は底部であり、外面縦方向とその直下に横方向の刷毛目調整が確認できる。



第67図 SC22実測図



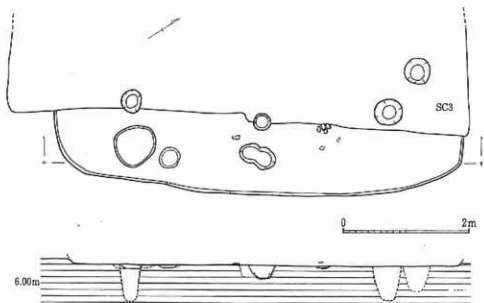
第68図 S22内土坑実測図



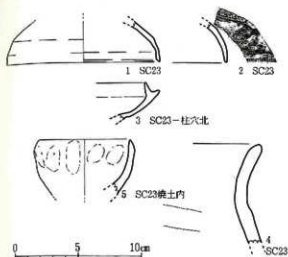
第69図 SC22の遺物実測図

23号竪穴住居跡 (SC23) (第70図)

この住居は調査区の東に位置し、3号住居に切られている。遺存状態は悪く、住居の東壁が残存するのみである。そのためカマドは確認できない。竪穴の規模は、東西 $1.5 + \alpha$ m、南北 6.3 mである。床面は確認できなかった。掘り方は 0.1 mである。主柱穴は3号住居内で推定される4本を確認した。出土遺物は少量である。



第70図 SC23実測図



第71図 SC23の遺物実測図

出土遺物 (第71図)

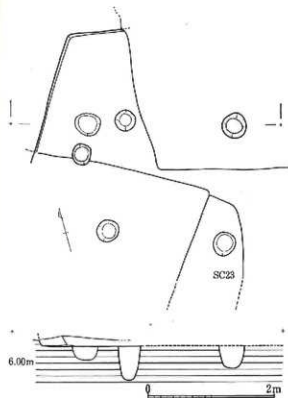
須恵器 (1~3) は1・2は坏蓋である。2は外面に口縁部に細い刻み目を施す。3は坏身である。

土師器 (4) は甕口縁である。

ミニチュア土器 (5) は手捏ねの碗である。

24号整穴住居跡 (SC24) (第72図)

この住居は調査区の東に位置する。重複関係は北側を3号住居に、南側を9号住居に切られ、残存部は住居北東のコーナーだけである。住居の遺存状態は悪いためカマドの有無も確認できなかった。規模は東西1.9+αm 南北0.9+αmである。掘り方は0.11mである。主柱穴配置は4本である。土坑などは確認できなかった。出土遺物もごくわずかである。

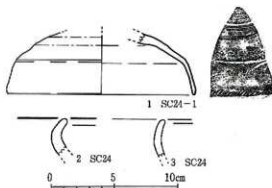


第72図 SC24実測図

出土遺物 (第73図)

須恵器 (1) は、坏蓋である。外面口縁先端には、細かい刻み目の痕跡がみられる。

土師器 (2・3) は甕の口縁部片である。



第73図 SC24の遺物実測図

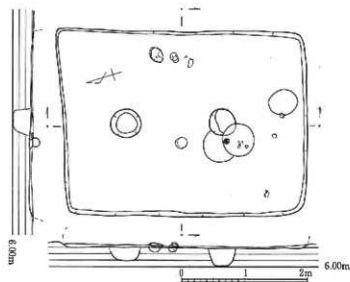
25号竪穴住居跡 (SC25) (第74図)

この住居は調査区の中央からやや南東に位置する。重複関係は6号住居、22号住居に切られる。住居プランは南北軸に長い長方形で、その規模は、東西3.7~3.9m、南北2.8~2.9mで、掘り方は0.1mである。これはこの遺跡のなかで最小の住居である。半柱穴は2本である。山七遺物は製塩土器ほかが出土した。それら土器からこの住居の所産は古墳時代前期前葉であろう。

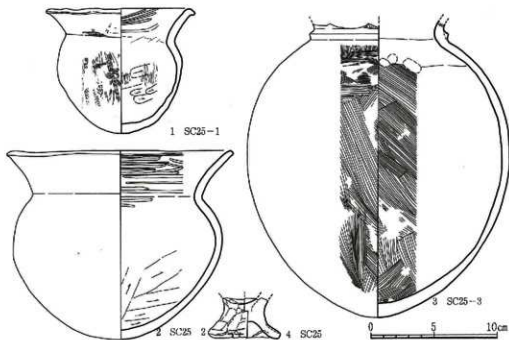
出土遺物 (第75図)

土師器 (1~3) である。1・2は鉢である。口縁部内面は丁寧なミガキ、1の外内胴部には細かい刷毛目調整、内面は横方向ケズリのあと部分的な刷毛目調整である。2の内面は横方向ケズリの縦方向ケズリ調整である。3は壺である。頸部に1条の突帯を張り付けている。胴部は内外面ともに斜めから縦方向の丁寧な刷毛目調整である。

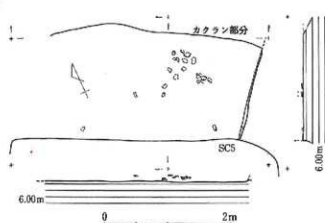
製塩土器 (4) は、1つだけ出土した。底部で上げ底である。



第74図 SC25実測図



第75図 SC25の遺物実測図



第76図 SC26実測図

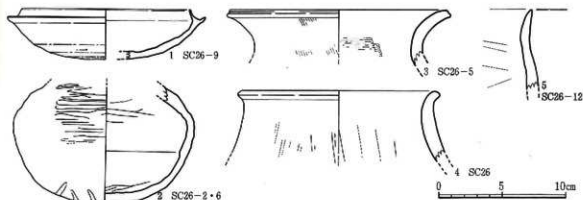
26号竪穴住居跡 (SC26) (第76図)

この住居は調査区の中央よりやや東側に位置する。住居の遺存状況は、その南側をう号住居に切れ、東側は壁が残っていないかったため良好ではない。カマドの有無は確認できなかった。竪穴の規模は東西 $1.5 + \alpha$ m、南北 $3.4 + \alpha$ mで、プランはその残存状況から方形を呈すると思われる。床面はわからなかったが、掘り方は0.02mである。遺物は少量出土した。

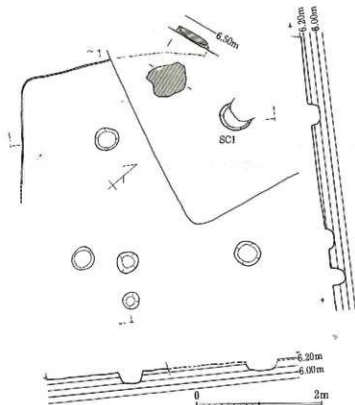
出土遺物 (第77図)

須恵器 (1) は坏身である。

土師器 (2~5) は2が甕の胴部から底部で、外面ミガキを施す。3・4・5は甕の口縁である。3は口縁部外面に縦の刷毛目、内面に横方向の刷毛目調整である。



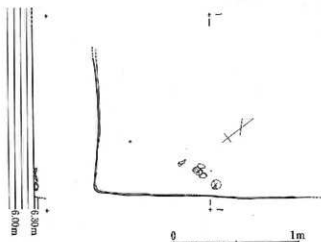
第77図 SC26の遺物実測図



第78図 SC27実測図

27号竪穴住居跡 (SC27) (第78図)

この住居は調査区中央やや東側に位置する。遺存状況は良好ではなく、調査では1号住居に切られているものと判断され掘り下げた。ただ堅く焼け締まった焼上(東西0.6m、南北0.6m)が1号住居の内部で確認された。これは1号住居のものとした時に不自然なところがありその壁のラインなどからこの住居に既存するものだと思われ、住居西側壁にあたるのでカマドと推定される。とすれば切り合い関係が逆転し掘り下げる順序を間違えたものと認識する。また東側壁は削平により確認できなかった。竪穴部の規模は東西1.4+ α m、南北1.7+ α m、掘り方0.02mである。支柱穴は4本確認できた。ただ1号住居の中で確認できたものは切り合いが逆転する。遺物は出土しなかった。



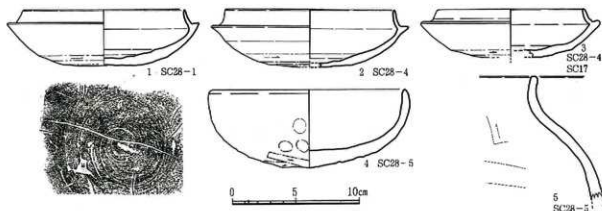
第79図 SC28実測図

28号竪穴住居跡 (SC28) (第79図)

この住居は調査区の中央からやや北東に位置する。住居の壁は削平され、北側のコーナーが若干残存するのみである。竪穴部の規模は東西3.5+ α m、南北2.1+ α mである。掘り方0.1mである。支柱穴などは確認することができなかった。遺物は少量出土した。

出土遺物 (第80図)

須恵器(1~3)は、1~3が坏身である。1の外底底部には直線状のヘラ記号がある。土師器(4・5)は、4が碗である。5は壺片である。



第80図 SC28の遺物実測図

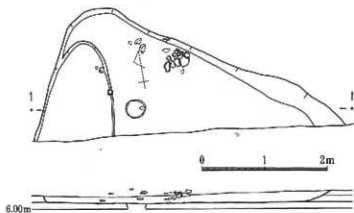
29号竪穴住居跡 (SC29) (第81図)

この住居は調査区の中央やや南東に位置する。残存状況はやや不良で半分以上を7・20号住居に切られた南側のほとんどは調査区外のため確認できなかった。竪穴部の北西のコーナーが確認できる。規模は東西2.2+α mで、南北4.7mである。また床面と推定される硬化面も確認した。深さ0.18mである。主柱穴は1つ、また西側の壁際に浅い土坑を確認した。カマドの有無は確認できない。遺物は須恵器・土師器が出土した。

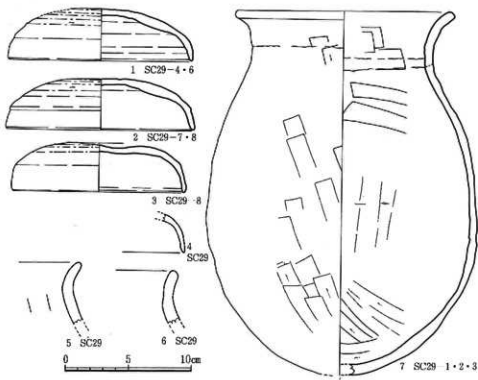
出土遺物 (第82図)

須恵器 (1~4) は、1~4ともに坏蓋である。

土師器 (5~7) は、5・6が甕の口縁部で7は甕である。外面にヘラ状工具痕、内面に胴部中央に縦方向のケズリ調整である。



第81図 SC29実測図



第82図 SC29の遺物実測図

30号竪穴住居跡 (SC30) (第83図)

この住居は調査区の中央より南側に位置している。52・55号住居を切る。カマドは北側壁で確認された。遺存状態は良好で、東西4.3～4.8m、南北4.3～4.7m、掘り方0.21mを計る。プランはやや不整形な方形を呈する。主柱穴は4本確認できた。また南側壁の一部が外に張り出している。これはカマドと対面することから出入り口の施設と推測される。遺物は多く出土し、カマドに使用されたであろう緑泥片岩も散乱した状態で検出した。

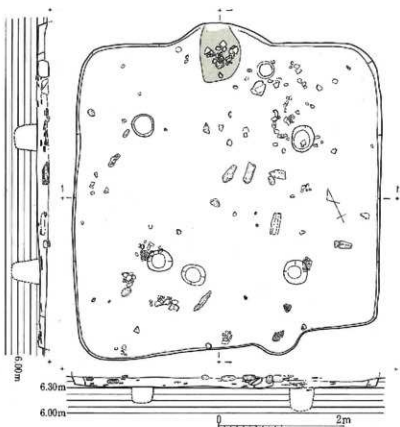
カマド (第84図)

カマドは住居の北側壁に付設されていた。カマドの規模は焚口から北壁まで約0.8m、幅約0.5mである。構造は構築時の掘り方と燃焼室である硬化した焼上面と煙道の一部を確認した。袖石の抜き取り痕も残る。燃焼室内には高坏を逆さにして支脚として転用していた。カマド築肥は廃棄時の行為が確認できた。カマド破壊時に燃焼室に堆積した土の上部に破砕した壺片を置いている。また緑泥片岩の袖石を抜き取り、それが住居内に散乱している。これは同時に住居の廃絶も意味していると思われる。

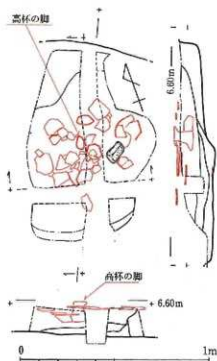
出土遺物 (第85・86・87図)

須恵器 (1～5) は、1・2は坏蓋である。3は坏身である。4は甕である。穿孔は1つで口縁部・頸部・胴部の外面に櫛描波状紋を施す。5は提瓶で、残存は4分の1程度である。

土師器 (6～18) は、6～11は甕である。6は全体的にアンバランスで内面に横方向ケズリと指押さえ、外面にも指押さえ痕が残る。7・8は口縁部から胴部であり、9は外面に単位のやや大きい刷毛目調整、内面斜め方向のケズリである。10は底部である。12は鉢である。13～15は把手付きの甕である。13は把手部が破損するが、やや内湾する口縁部から底部にかけてすばまる。14は把手片である。15は口縁部が外反し、胴部に把手が付くタイプである。外面は丁寧な刷毛目調整である。16は小型の鉢で口縁部内外面はミガキ調整される。17は脚付き鉢か。18は高坏である。脚部外面に縦方向ミガキが施され、坏部内面は放射状のミガキ調整である。

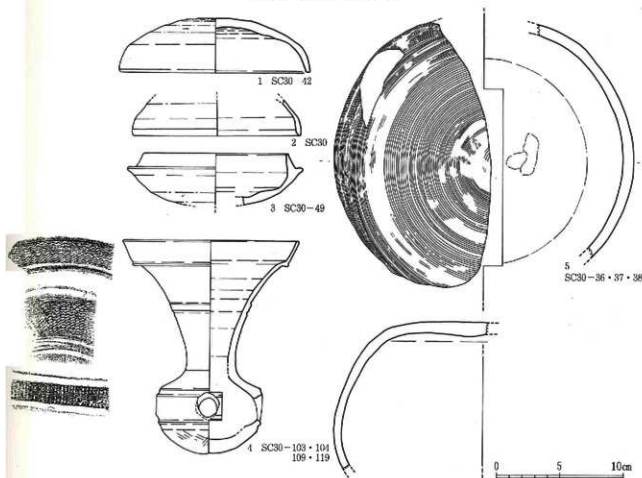


第83図 SC30実測図

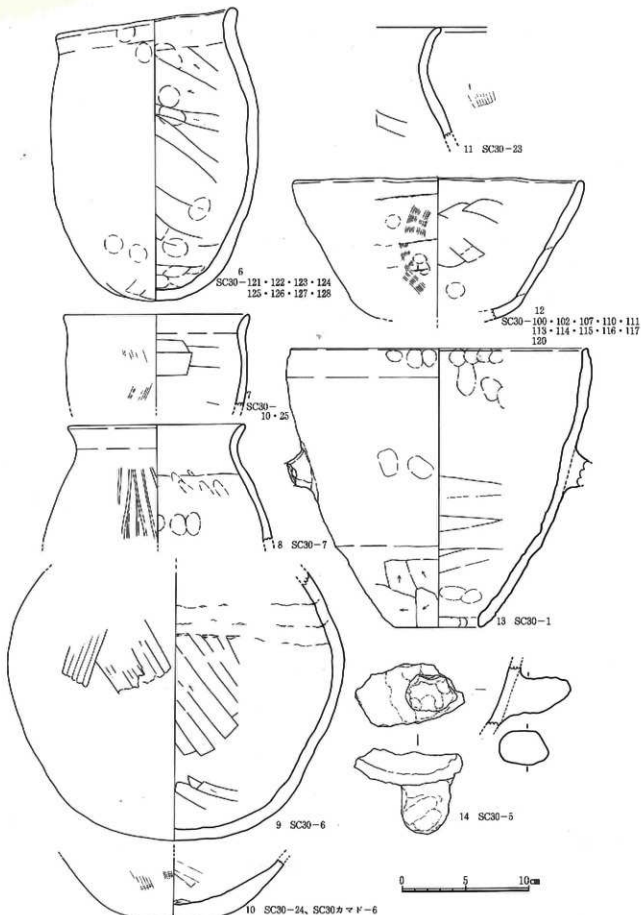


1. 暗褐色 粘質、しまり弱く、灰土を多く含む、この層はカマド築造時の腐
2. 黄褐色 粘質、粘りやや強い、しまりやや弱い、この層は袖断の痕跡
3. 赤黄色 堅く癒さしまる、燃焼室の中央部
4. 褐黄色 粘質、しまりやや強い、焼上り石干、カマド構築時の層
5. 暗褐色 粘質が強い、しまり強い、カマド構築時の腐、煙道部付近

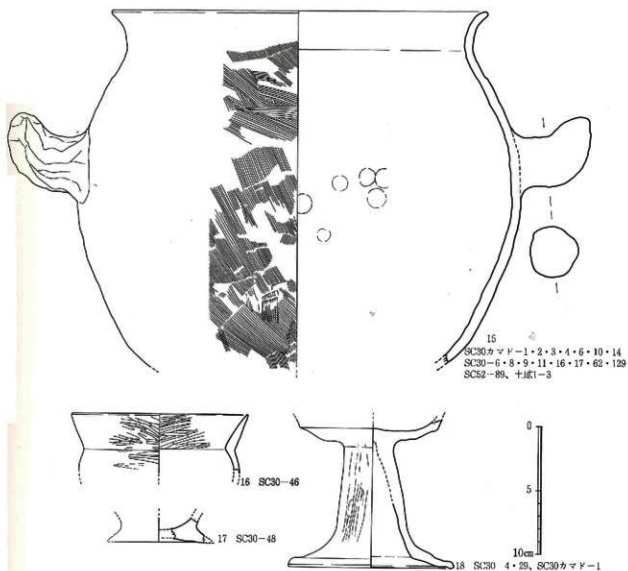
第84図 SC30カマド実測図



第85図 SC30の遺物実測図



第86図 SC30の遺物実測図



第87図 SC30の遺物実測図

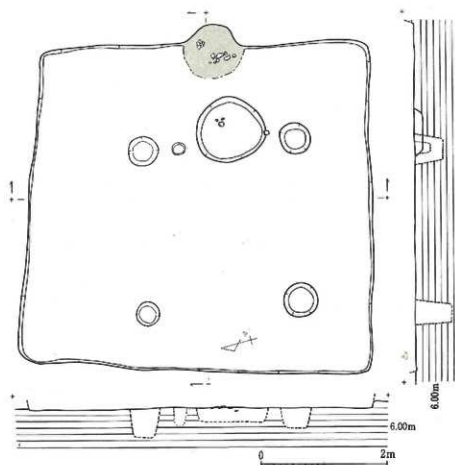
31号整穴住居跡 (SC31) (第88図)

この住居跡は調査区中央やや南側に位置し、49号住居を切っている。カマドは表土剥ぎの折、削平してしまい良好には残らなかった。そこから多量の焼土を確認し多くの土器片を取り上げた。この住居内部にはこのような焼土や土器がある遺構は見当たらないので、これがカマドと推定され、西壁に付設していた。住居の遺存状態は良好で、規模は東西5.2～5.6m、南北4.8～5.1mで、方形を呈する。張り床は確認できず、壁高は0.2mである。主柱穴は4本確認した。またカマド前に土坑を1基検出した。遺物は少量出土した。

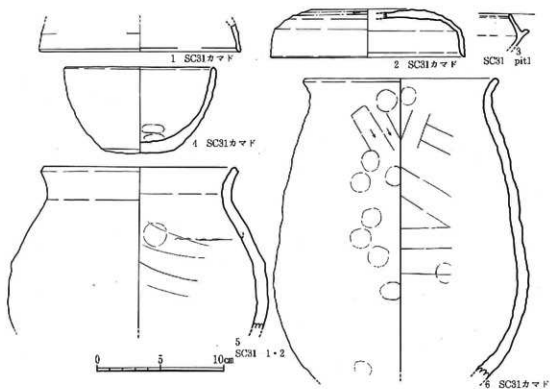
出土遺物 (第89図)

須恵器 (1～3) は、1・2が坏蓋である。3は坏身片である。1・2はカマドからの出土である。

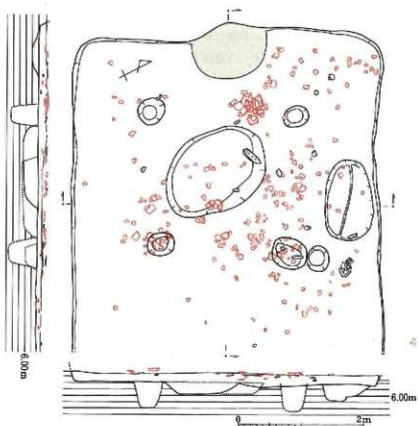
土師器 (4～6) は、4は深さのある碗である。5・6は甕で、6は口縁を少し外反し、長胴である。4・6はカマドからの出土である。



第88図 SC31実測図

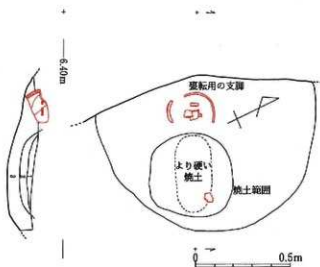


第89図 SC31の遺物実測図



第90図 SC32実測図

1. 白黄赤色 被熱によりかなり硬く焼けしまる。
2. 暗赤黄色 被熱により焼けているが1ほど焼けていないためパサパサしている。



第91図 SC32カマド実測図

32号竪穴住居跡 (SC32) (第90図)

この住居は調査区の中央に位置する。46号住居を切る。カマドは西側壁に設置している。遺存状態は、東壁が削平されており確認できなかっただけである。規模は東西4.8+αm、南北4.8+αmである。壁高は0.2mである。土柱穴は4本である。また住居中央と北壁寄りに土坑を検出した。遺物は多く出土した。

カマド (第91図)

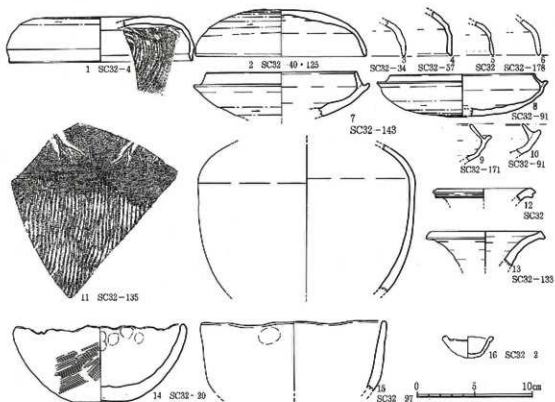
カマドは住居西壁に検出した。カマドの遺存状態はやや不良である。規模は焚口から西壁までが約0.8m、幅約0.4mである。構造は燃焼室と推定される箇所に硬化した焼上面が残る。その硬化した面のすぐ後ろに支脚として礎を転用して用いている。礎石やその抜き取り痕は不明であるが礎石に使用したであろう緑泥片岩が住居内から検出した。カマドの廃棄時にカマド築祀として礎石を抜き取り、住居内に置いたのであろうか。

出土遺物 (第92・93図)

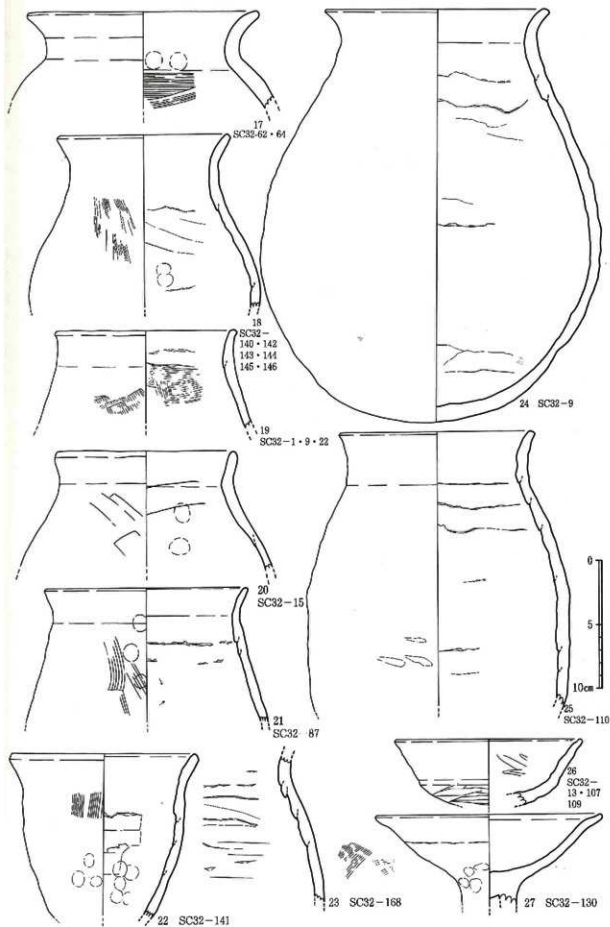
須恵器 (1~13) は、1~6は坏蓋である。1は内面上部に同心円当て具痕がある。3~6は破片である。7~10は坏身である。11は長頸壺の胴部か。側面に平行タキ痕が残る。12・13は提瓶などの口縁部である。

土師器 (14・15、17~27) は、14は碗で、口縁部が意図的? に欠いている。外面斜め刷毛目調整である。15は底の深い碗である。17~21、23~25は甕である。19は胴部から口縁にかけて少し内傾しながら口縁先端まで延びる。24は胴部の真ん中よりやや下に最大径がくる。22は鉢もしくはは飯で、底部から口縁にかけて少し閉きながら口縁部が少し外反する。26・27は高杯の坏部である。26は杯の真ん中よりやや低いところから内側に屈曲させ、口縁先端を若干外反させる。27は坏部が大きく開きながら延び、口縁部でさらに外反する。

ミニチュア土器 (16) は碗型であり、手捏ねである。



第92図 SC32の遺物実測図



第93図 SC32の遺物実測図

33号竪穴住居跡 (SC33) (第94図)

調査区のはほぼ中央に位置している。51号住居を切る。カマドは西壁に付設する。竪穴部プランはほぼ方形を呈し、規模は東西6.8～6.9m、南北6.3～6.7m、高さ0.2mである。張り床面は確認できなかった。支柱穴は4本である。遺物は多量に出土し覆土からのものが多く、移動式カマドや紡錘車などが出土した。

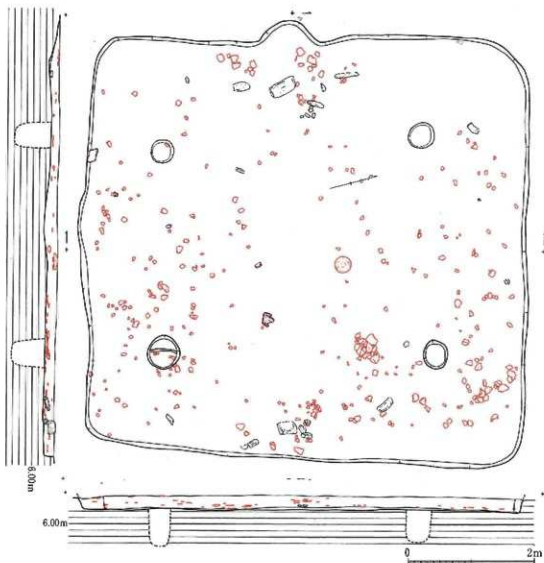
カマド (第95図)

カマドは化居西壁に付設する。規模は焚口から西壁まで1.1m、焚口幅0.5mである。構造は構築時に基盤床の掘り込み、焚口の左右両袖石(両方とも緑泥片岩製)を設置し、燃焼部には硬化した焼土面があり、支脚の抜き取り痕を確認した。煙道部の残りはよくなかった。カマド内部から炭片とカマドに使用したであろう緑泥片岩製の石材が出土した。また滑石製小玉も出土しているため、カマド廃棄時に祭祀行為が行われた可能性がある。

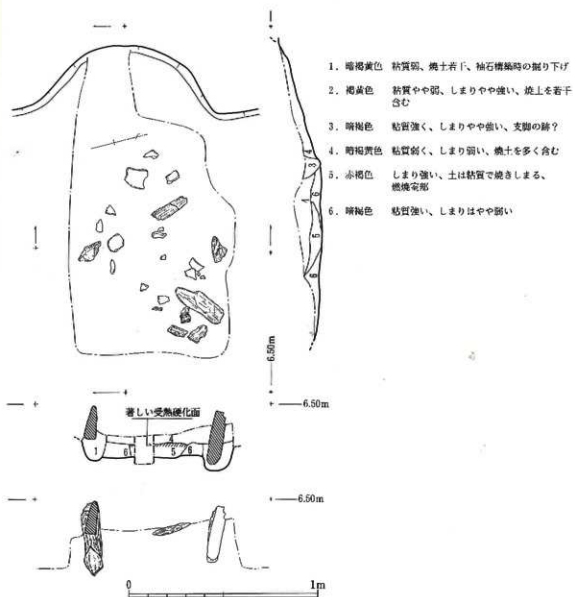
出土遺物 (第96・97図)

須恵器 (1～13) は1～6で坏蓋である。7～11は坏身である。12は甕の口縁部、13は甕の口縁部である。

土師器 (14～24) は、14～23が甕である。14は内外面とも刷毛目調整である。16は口縁から胴部にかけて直線的であるが頸部でわずかに内傾する。内面横方向のケズリ調整である。17は口縁部は内湾しながらその先端部で外反する。内面斜め下方へのケズリ調整である。20は口縁部が緩い「く」の字状を呈し、内外面に指匠痕、外



第94図 SC33実測図

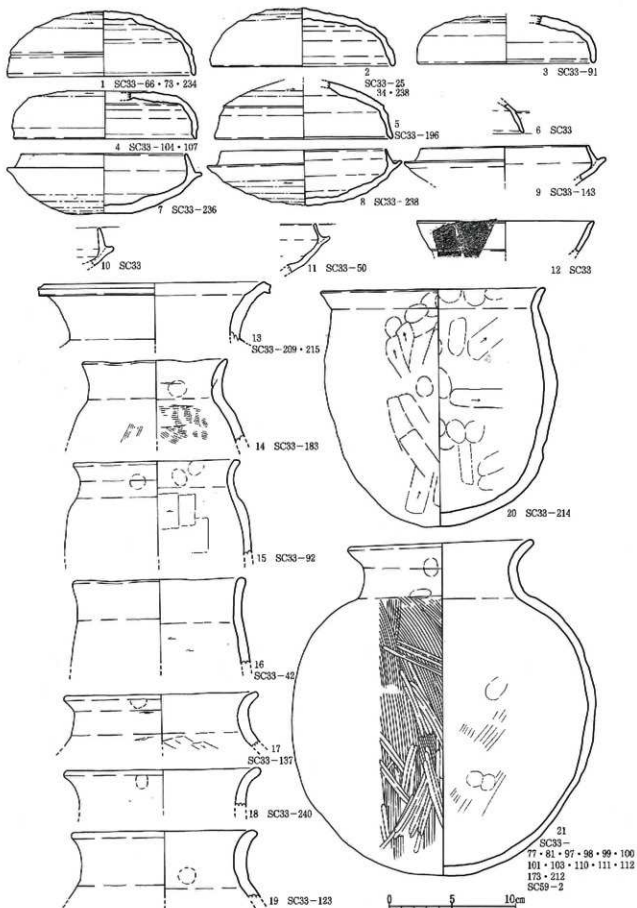


第95図 SC33カマド実測図

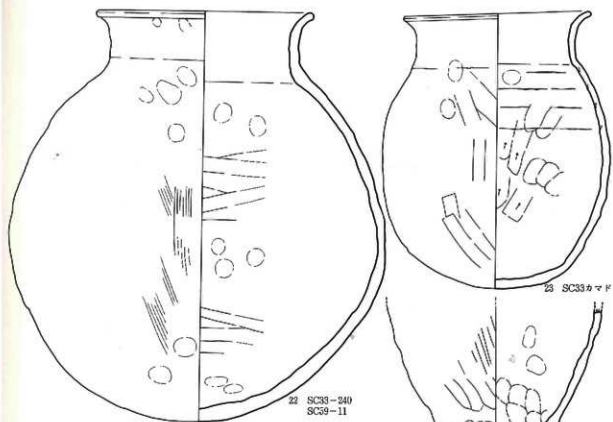
面へラ状工具痕、内面ケズリを残す。21は胴部中央が大きく張る。外面丁寧な縦方向刷毛目調整のち部分的にミガキを施す。内面は指圧痕と刷毛目が残る。23は胴部中央が大きく張り出し大型のものである。外面斜めから縦方向刷毛目調整、内面横方向のケズリである。24は甕の底部で、胴部から底部にかけてすばまる。底は筒抜けである。外面荒い工具痕が残る。

移動式カマド(25)は、ヒレなしで上部を欠いている。器面は荒く、指圧痕が残る。焚口部の幅は38cmである。

石製品(26~28)は、26・27は滑石製紡錘車で、ともに中央に穿孔が1つある。27は断面台形である。28は滑石製小玉で、カマド内からの出土である。



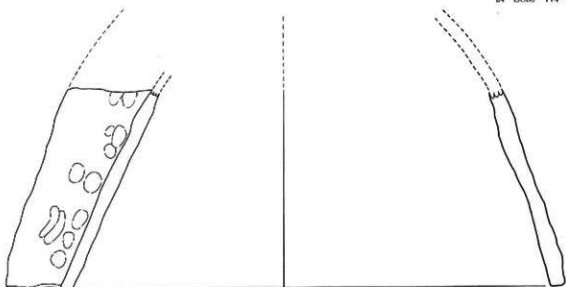
第96図 SC33の遺物実測図



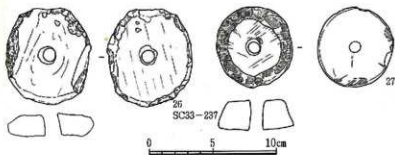
22 SC33-540
SC39-11

23 SC33のF

24 SC33-174・176



25 SC33-165・171・172・173
SC33のF



26 SC33-237

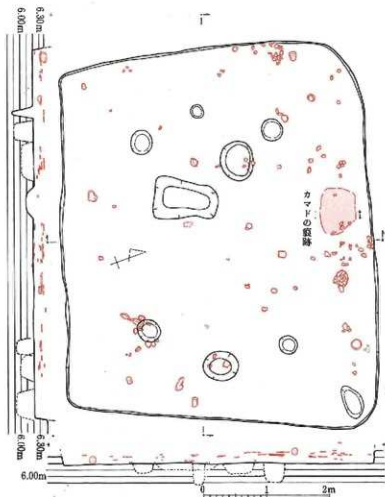
27 SC33-235

28 SC33

0 5 10cm

0 5cm

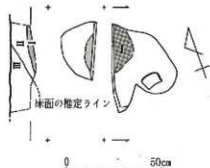
第97図 SC33の遺物実測図



第98図 SC34実測図

34号竪穴住居跡 (SC34) (第98図)

この住居は調査区の中央北側に位置する。3号溝から切られ、38・64号住居を切る。カマドは北側壁に付設している。平面プランは東西に長い長方形で、東西4.3～4.5m、南北5.2～6.0mで、壁高0.24mを計る。張り床の一部で確認した。支柱穴は4本を検出した。遺物は覆土から多く出土した。



- I 明赤黄色 (かなり堅く焼きしめる) 焼上
- II 暗褐色 (しまりやや強い、粘り強) 粘質
- III 黄褐色 (しまりやや強く、粘り弱) 粘質
- IV はカマド内部の炭層
- V はカマド構造跡のもの
- VI は住居の障り方の張り床

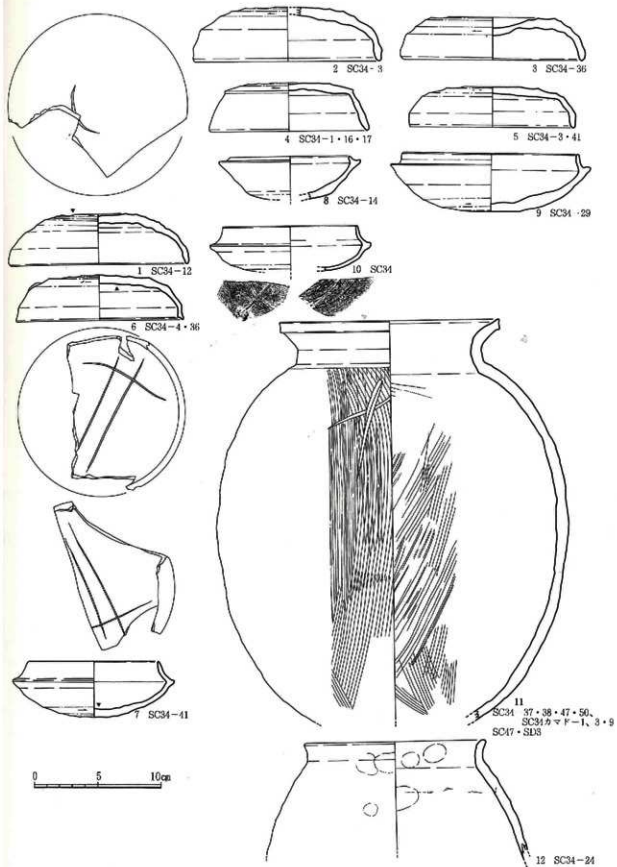
第99図 SC34カマド痕跡実測図

カマド (第99図)

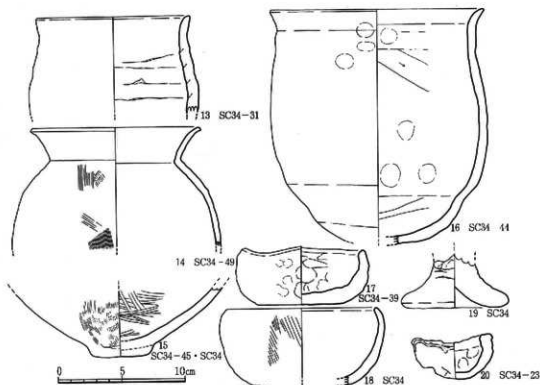
カマドは住居北側に付設してあるが、ちょうど3号溝に切られているところにあたり、遺存状態は良好ではない。残存している規模は北壁との軸が約0.5m、幅約0.5mである。構造は構築時の掘り込み、燃焼室の硬化した焼上面を確認しただけである。

出土遺物 (第100・101図)

須恵器 (1～10) は、1～6は坏蓋である。1は外面上部にヘラ記号がある。6は内面底部に3本のヘラ記号が見える。7～10は坏身で、7は内面底に6の蓋と同一のヘラ記号がある。また10の外面底部にもヘラ記号がみえ、受け部は内湾しながら高くなった。8は回転ヘラ切り未調整で受け部は内傾し短い。また6と7は同一ヘラ記



第100図 SC34の遺物実測図

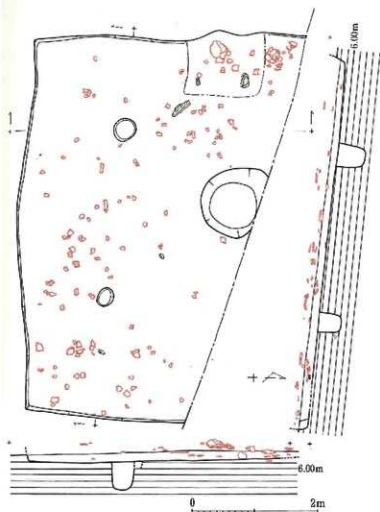


第101図 SC34の遺物実測図

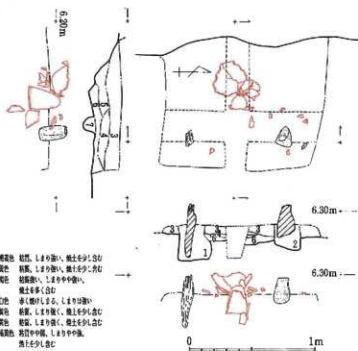
号をもち、蓋と身はセットである。

土師器（11～19）は、11は甕で、外面は丁寧な縦方向の刷毛目調整で、頸部直下に交差する工具痕が残るがヘラ記号か。内面も斜め方向刷毛目を施す。出土地点は住居内及びカマド内部からであった。13は口縁部が少し外反するが胴部からはほぼ直線的である。14は頸部から口縁部の屈曲が鋭い。15は底部で、最下部が少し突出する。外面刷毛目で、内面は丁寧なミガキである。16は胴部中央より下で底部にかけて内傾が少しくつくなる。17・18は椀である。17は断面厚く手捏ねである。18は口縁先端が少し内湾する。

ミニチュア土器（20）は手捏ねの碗型である。



第102図 SC35実測図



1. 須恵器 磁器、しより強い、焼土を少し含む
2. 須恵器 磁器、しより強い、焼土を少し含む
3. 須恵器 磁器製、しよの中や強い、焼土を多く含む
4. 灰白色 赤く焼かした、しよの中や強い
5. 須恵器 磁器、しよを強く、焼土を少し含む
6. 須恵器 磁器、しよを強く、焼土を少し含む
7. 須恵器 磁器の中級、しよの中級、焼土を少し含む

第103図 SC35カマド実測図

35号竪穴住居跡 (SC35) (第102図)

この住居は調査区の中央北側で検出した。62・65号住居を切り、住居の北側三分の一は調査区外のため確認できなかった。カマドは西壁に付設している。平面プランは遺存している範囲で若干東西が長い長方形を呈すると推定される。その規模は東西4.3+αm、南北5.8m、壁高0.2mである。張り床面は確認できなかった。主柱穴は4本（実際は南に2本のみを確認した）であろう。また屋内土坑が住居のほぼ中央に検出した。遺物は覆土より多く出土した。

カマド (第103図)

カマドは住居西壁に検出した。このカマドは遺存状態が良好であった。規模は焚口から西壁まで0.8m、焚口幅0.6mである。構造は基盤床を掘り込み、焚口部は左右両袖石を置く。袖石は右が川原石を用いており焼けていた。左は緑泥片岩を使用していた。燃焼室は硬化した焼土面が残りに、その煙道部側に長胴の甕を逆位置にして支脚として利用していた。さらにその甕の燃焼室側の器壁は火を受けているため剥がれ落ちていた。煙道部は削平され残りは悪いが、燃焼室から地山の面が緩やかにあがっている。カマド内部からは2次焼成をうけていない朱塗りの高坏が出土した。これは廃棄時のカマド祭祀を行っていたと推定される。

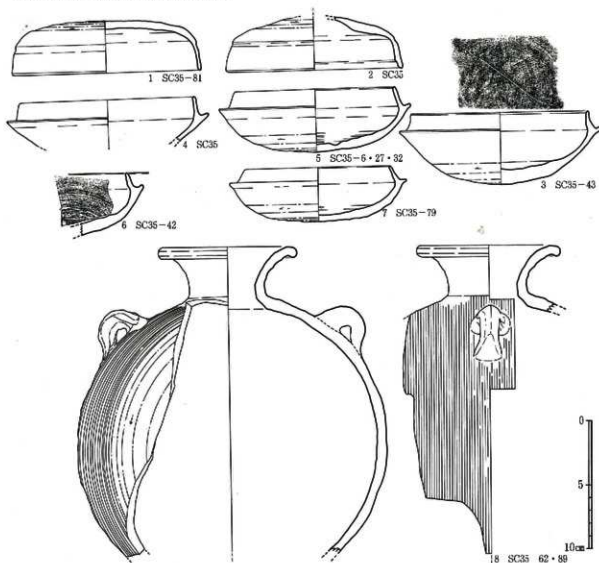
出土遺物 (第104・105図)

須恵器 (1~8) は、1・2は坏蓋である。3~7は坏身である。3は内面底部に1本の直線状のヘラ記号がある。8は提瓶である。

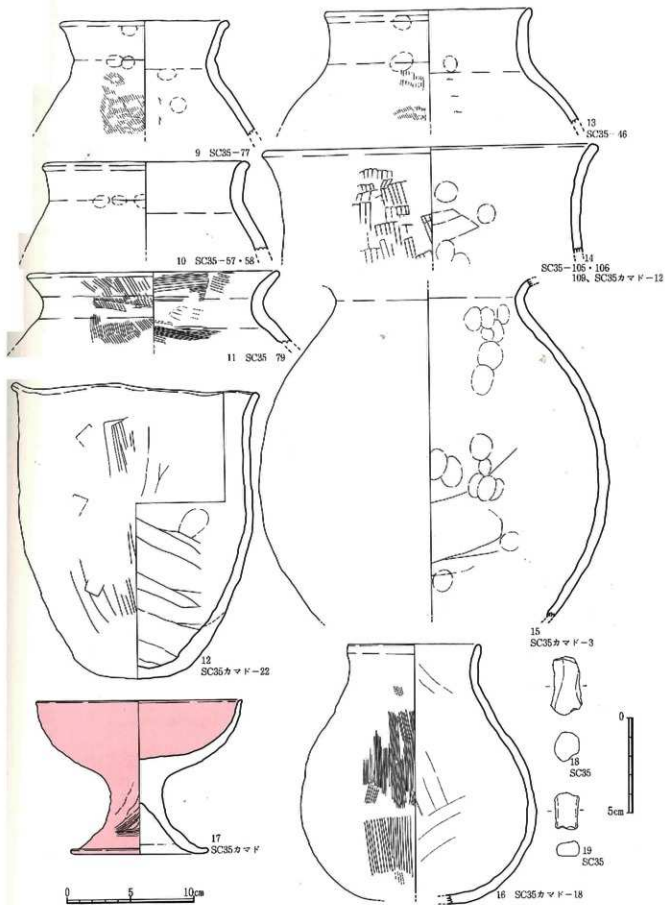
土師器 (9~17) は、9~16は壺である。9は口縁が緩やかに「く」の字状に曲がる。外面刷毛目調整、内面下から上方向のケズリである。

11は口縁を「く」の字に外反する。外面は縦ハケ、内面は横方向刷毛目である。12は2次焼成を受けている。カマドの支脚として逆位置で利用された。口縁先端は緩やかな波状を呈している。14は胴部が直線的に立ち、口縁部で少し外反する。外面は縦方向刷毛目調整である。15は大型の甕胴部で、胴部の中央で大きく張る。16は胴部から頸部にかけて内傾し、口縁は直線的に立ち上がる。胴部の中央やや下で、最大径に張る。外面は縦方向刷毛目、内面ケズリである。17は高坏である。外面朱塗りである。

土製品 (18・19) は、不明製品である。



第104図 SC35の遺物実測図



第106図 SC35の遺物実測図

36号竪穴住居跡 (SC36) (第106図)

この住居は調査区の中央より南に位置する。43号住居を切り、30・42・52号住居に切られる。カマドは北壁に付設している。平面プランはほぼ方形を呈する。規模は東西5.6+ α m、南北6.3m、壁高0.21mである。張り床は確認できなかった。主柱穴は4本である。また南壁には中央よりやや西よりに少し外側へ壁が突出している部分がある。カマドの対面にあたることから出入り口の施設か。遺物は北東のコーナー付近で出土した。カマドの手前にはその袖石と思われる緑泥片岩が抜かれていた。

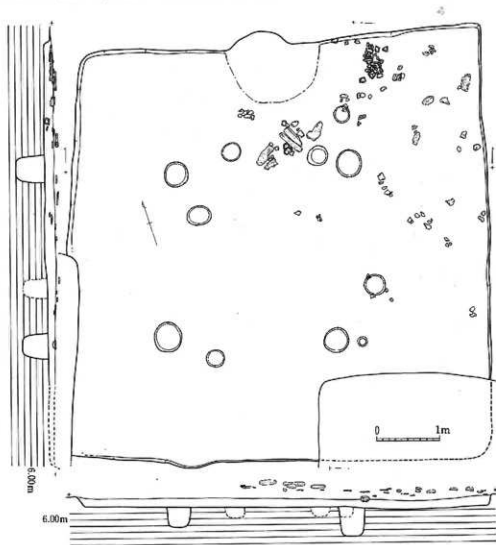
カマド (第107図)

カマドは住居北側に付設する。このカマドには燃焼室と思われる硬化した焼土面が2つ並列している。その焼土の広がりや切りあいに西側の燃焼室が新しいことから造り変えたものであろう。西側の規模は焚口から北壁まで0.85m、焚口幅0.45mである。西側の構造は構築時の削り込み、焚口部の袖石抜き取り痕、燃焼室の硬化した焼土面が確認できた。煙道部は削平されている。抜き取られた袖石はカマドの前に置かれていた。カマド廃棄行為及び住居廃棄の時のものであろう。

出土遺物 (第108図)

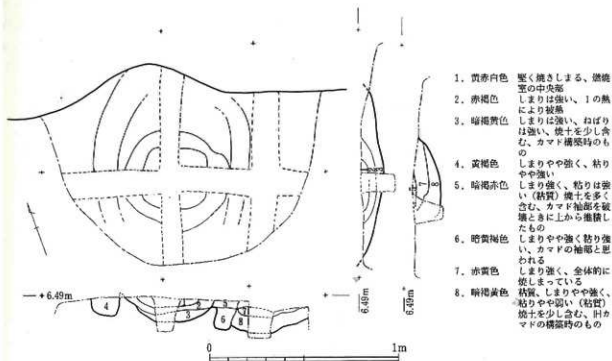
須恵器 (1~3) は、1・2は坏蓋である。3は提瓶の肩部片である。

土器 (4~7) は、4は小型の壺である。口縁がまっすぐ短く延びる。5・6は甕である。5は頸部から口縁にかけてわずかに外反する。内面には輪積みの痕跡が残る。

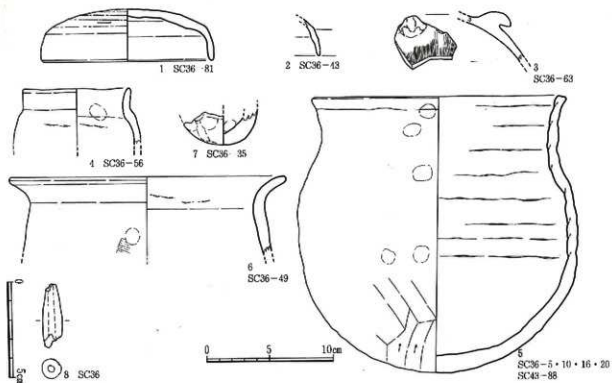


第106図 SC36実測図

ミニチュア土器(7)は碗型で手捏ねである。
土製品(8)は土師である。



第107図 SC36カマド実測図



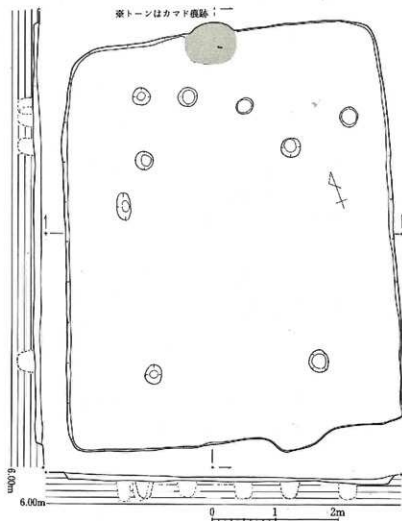
第108図 SC36の遺物実測図

37号竪穴住居跡 (SC37) (第109図)

この住居は調査区の中央、33号住居の西に隣接する。38・39号住居を切る。カマドは北壁中央に焼土が集中してあり、そこに付設されていたと思われるが、その遺存状態は非常に悪く、トレンチをいれても構造を追えなかった。削平をうけているか、もしくは廃棄時にほとんどを壊されているかであろう。残存規模は北壁との軸が約0.6m、幅約0.7mである。竪穴平面プランは南北に長い長方形を呈する。規模は東西7.0～7.9m、南北4.7～5.2mで、壁高0.2mである。張り床は確認できなかった。主柱穴は4本である。また南壁ラインの東寄りに壁が外側に突出しているが、カマドの対面にあたり、この住居の出入り口施設の痕跡か。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物 (第110図)

土師器 (1) は甕の頸部である。内面は横方向ケズリである。他に土師器破片が少量出土している。



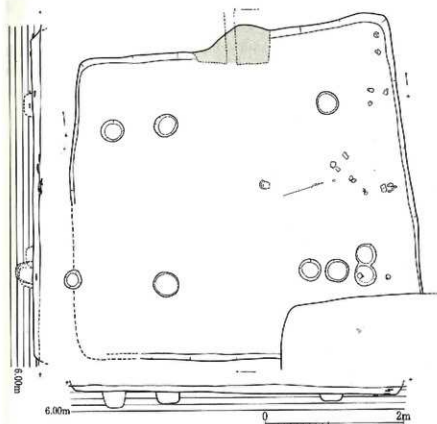
第109図 SC37実測図



第110図 SC37の遺物実測図

38号竪穴住居跡 (SC38) (第111図)

この住居は調査区の中央よりやや北側に位置し、34・37号住居に切られる。カマドは西壁にあったと推定される。ただ遺存状態は悪く、壁際に焼土が集中している部分があるがトレンチをいれても構造は明瞭に追えなかった。焼土範囲は東西0.6m、南北0.7mである。竪穴平面プランはやや不整形な方形で、規模は東西4.9m、南北4.4 + α m、壁高0.2mである。張り床は確認できなかった。主柱穴は4本である。遺物は住居北側で少量出土し



第111図 SC38実測図

た。

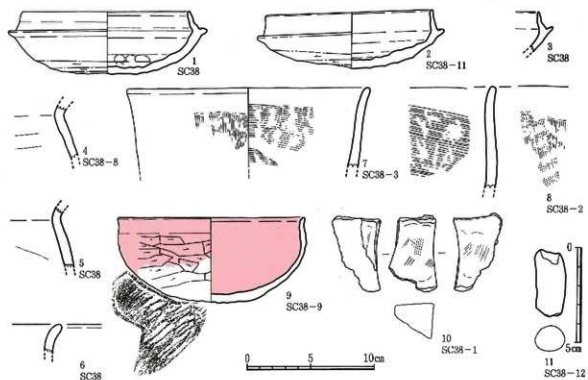
出土遺物 (第112図)

須恵器 (1~3) は、坏身である。

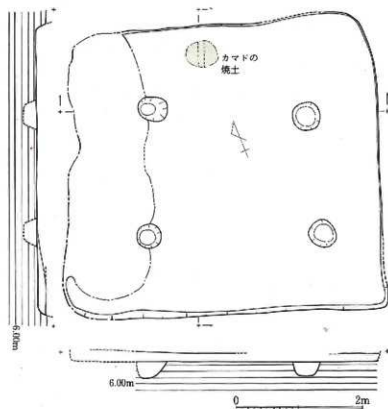
土師器 (4~9) は、4~6は甕片である。7・8は鉢か。7は外面縦方向刷毛目、内面横方向刷毛目調整である。9は椀で、外面に手持ちへラケズリで調整され、その底部には一定方向の工具痕が残る。

石製品 (10) は砥石である。

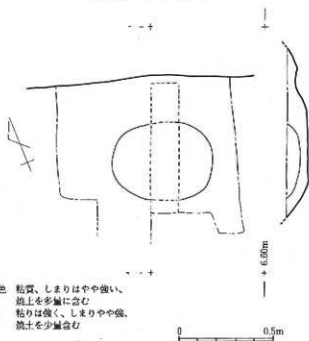
土製品 (11) は、用途不明の土製品である。



第112図 SC38の遺物実測図



第113図 SC39実測図



1. 明赤褐色 粘質、しまりはやや強い、焼土を多量に含む
2. 暗褐色 粘りは強く、しまりやや強、焼土を少量含む

第114図 SC39カマド実測図

39号竪穴住居跡 (SC39) (第113図)

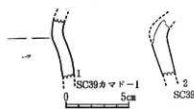
この住居は調査区の中央からやや西側に位置している。住居東側を37号住居に切られる。カマドは北壁に付設しているが、遺存状態は悪い。竪穴平面プランは方形を呈する。西壁は攪乱を受けており残存していない。規模は東西4.6m、南北4.3m、壁高0.22mである。張り床面は確認できなかった。支柱穴は4本である。遺物はほとんど出土しなかった。

カマド (第114図)

カマドは住居北壁に付設されている。遺存状態は悪い。規模は焚口から北壁まで約0.65m、幅約0.5mである。構造は構築時の掘り込み(基盤床)と硬化はしていないが焼土を多量に含む面(燃焼室か)が確認できた。この面は硬化する面の直下で被熱をうけたものか、もしくはカマド廃棄時の時のものであろう。遺物は数点出土した。

出土遺物 (第115図)

土師器(1・2)は、葉片である。なお1はカマドからの出土である。



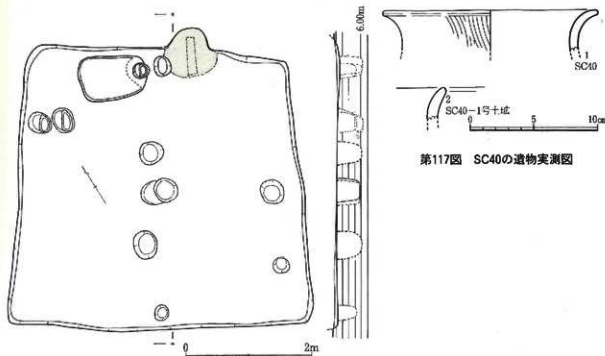
第115図 SC39の遺物実測図

40号竪穴住居跡 (SC40) (第116図)

この住居は調査区の中央からやや南西に位置する。56号住居を切る。カマドは北壁に付設していると推定され、北壁のラインを突出させているが、焼土が集中しているだけで大部分が削平される。トレンチをいれたが明瞭に構造を追えなかった。焼土範囲は焚口から北壁に約0.8m、幅約0.5mである。竪穴平面プランはやや不整形な方形を呈する。規模は東西4.1~4.3m、南北4.0~4.7m、壁高0.11mである。張り床面は確認できなかった。主柱穴は2本検出し、2本柱であったと思われる。また土坑はカマドのすぐ西側溝で検出した。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物 (第117図)

土師器 (1・2) は甕の口縁である。1は口縁先端が大きく外反する。外面縦方向刷毛目調整である。



第116図 SC40実測図

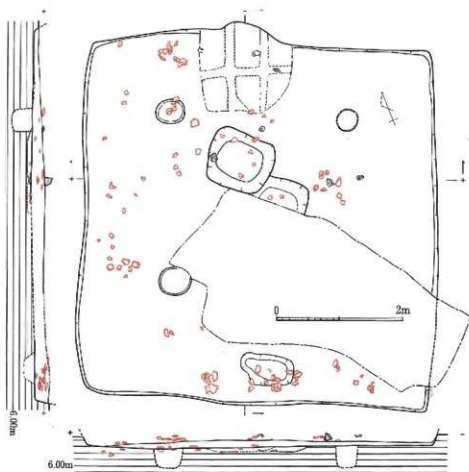
第117図 SC40の遺物実測図

41号竪穴住居跡 (SC41) (第118図)

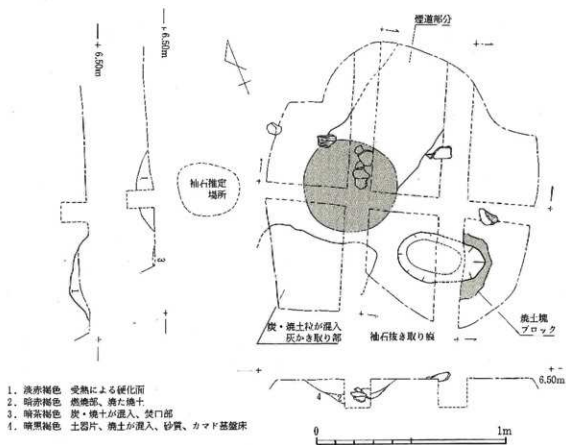
この住居は調査区中央から南西に位置する。58号住居を切る。カマドは北壁に付設している。平面プランはほぼ方形を呈し、規模は東西5.4~5.7m、南北5.3~5.4m、壁高0.2mを計る。張り床面は確認できなかった。主柱穴は、現状で3本確認したが本来4本柱であったと想定される。土坑は住居中央からカマドの間に切り合っている2基と、カマドと対面する南壁中央付近で1基検出した。2基切り合っている土坑はその理上や出土した遺物の破片から時期差はないと判断したい。遺物は少量出土した。

カマド (第119図)

カマドは住居北壁に付設している。このカマドには焼土面が2つあり、造り変えた可能性が高い。東側にある焼土面は西側にあるカマドの袖石痕に切られている。西壁に造り変えたのであろう。全体のカマド規模は北壁と平行で幅約1.2mを測り西側のカマド規模は焚口から北壁まで約1.0m、幅約0.5mである。また西側のカマドの軸は住居の主軸に対して焚口をやや西側に振っている。この遺跡内のほとんどのカマドは住居の主軸とほぼ一致しているが、これだけ例外である。構造は構築時の掘り込み(基盤床)と燃焼室の硬化した焼土面が確認できた。支脚やその痕跡は見つからず、煙道部は削平されていた。

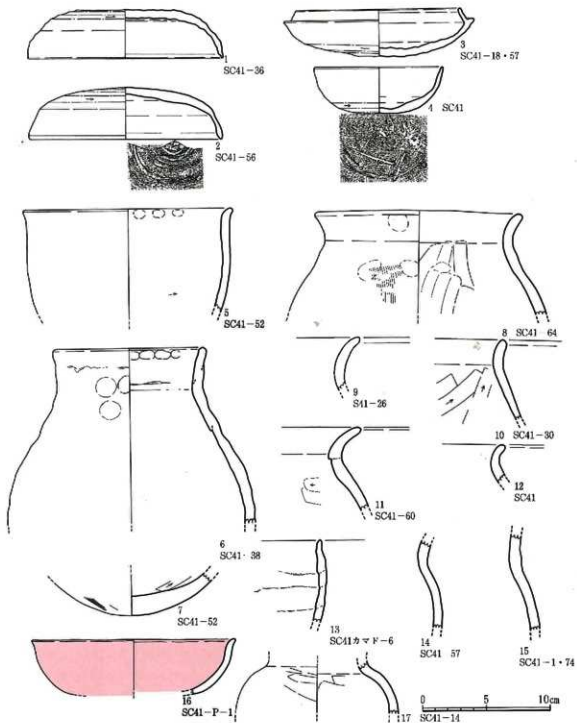


第118図 SC41実測図



1. 淡赤褐色 受熱による硬化面
2. 暗赤褐色 燃焼部、焼た焼土
3. 暗茶褐色 灰・焼土が混入、灰口部
4. 暗黒褐色 土器片、焼土が混入、砂質、カマド基礎床

第119図 SC41カマド実測図



第120図 SC41の遺物実測図

出土遺物 (第120図)

須恵器 (1~4) は、1・2は坏蓋である。2は内面上部にヘラの痕跡がある。3・4は坏身である。

土師器 (5~17) は、5は鉢である。口縁先端を少し外反させる。口縁先端の内面には指圧痕がのこる。6~12・14・15は甕である。6は口縁部が直線的にのびる。口縁先端内面に指圧痕で調整している。7は底部である。8は口縁を緩やかに「く」の字に屈曲させる。外面は縦方向刷毛目、内面は縦方向ヘラケズリが施される。13は鉢か。内面に輪積みの痕跡がのこる。16は甕で内外面朱塗りである。17は小型の甕であろう。

42号壘穴住居跡 (SC42) (第121図)

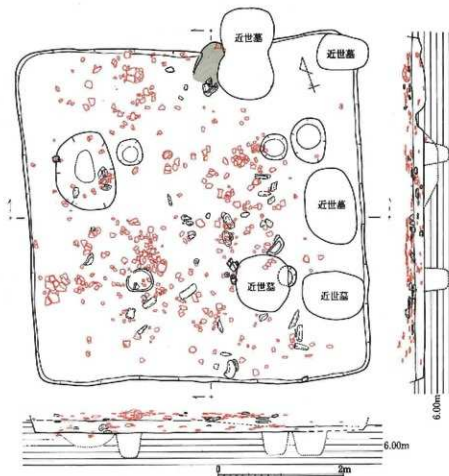
この住居は調査区の中央からみて南に位置する。近世墓群に切られ、36・43・54号住居を切る。カマドは北壁に付設する。平面プランは方形で、規模は東西5.1～5.3m、南北5.0～5.2m、壁高0.2mを計る。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本である。ただ南東の柱穴はその半分を近世墓に切られる。土坑は北西の柱穴のすぐ西に1基検出した。遺物は覆土から多く出土した。

カマド (第122図)

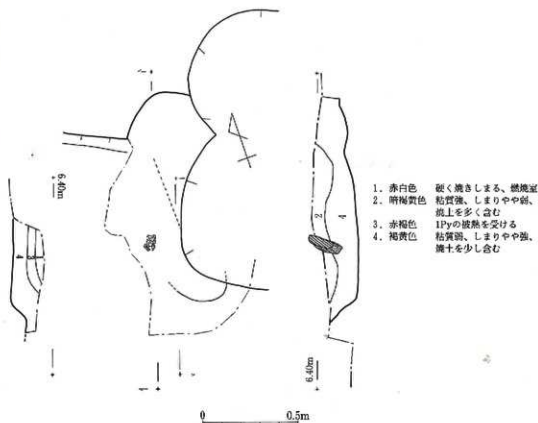
カマドは住居北壁に付設している。このカマドはその半分近くを近世墓に切られているため、遺存状態はよくない。規模は焚口から北壁に約1.3m、幅0.2m+ α である。構造はまず構築時に掘り込みをし基盤床をつくる。燃焼部には硬化した焼土面があった。また煙道部も削平により構造はわからない。支脚やその痕跡は確認できなかった。袖石はカマドの中に1つあるが、まったく被熱をうけていないので、カマド破壊時に少なからず動かされているだろう。そのほかに住居内部に散乱する状態で緑泥片岩の石が出土している。これらもその形態からカマドに使用されたものと判断できる。カマド破壊時、および住居廃棄時の折に袖石を抜いたものと思われる。カマド廃棄時の祭祀であろう。

出土遺物 (第123・124・125・126図)

須恵器 (1～29) は、1～14は坏蓋である。1の外面上部にヘラ記号がみえる。14は埴の蓋か。15～25は坏身である。26・27はセット関係にあり、26は外面上部につまみがつく蓋である。27は駒付き坏身で、脚部に透かしがある。28は甕の下部である。穿孔が1つある。29は大甕の口縁部であろう。



第121図 SC42実測図

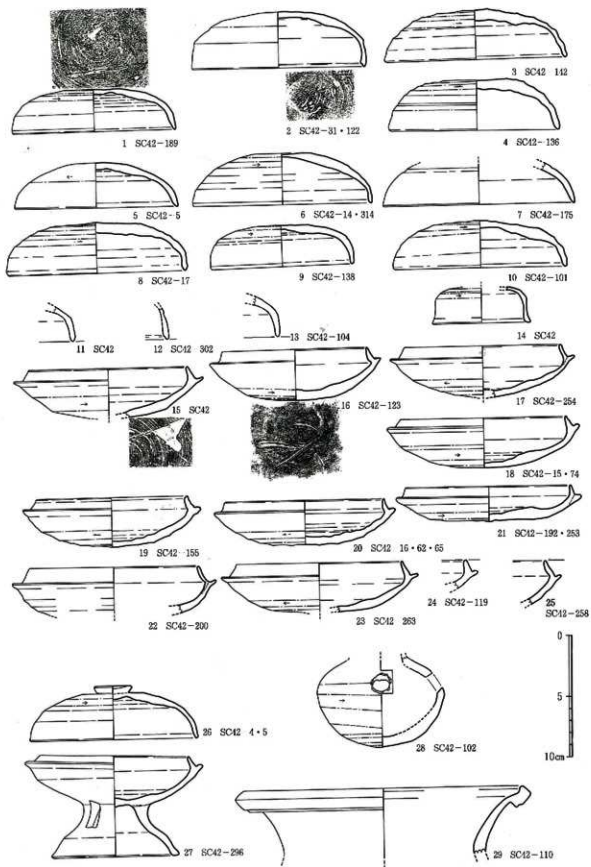


第122図 SC42カマド実測図

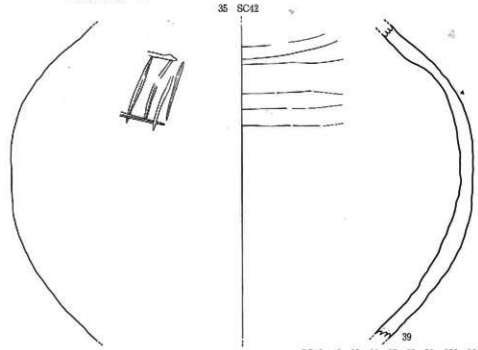
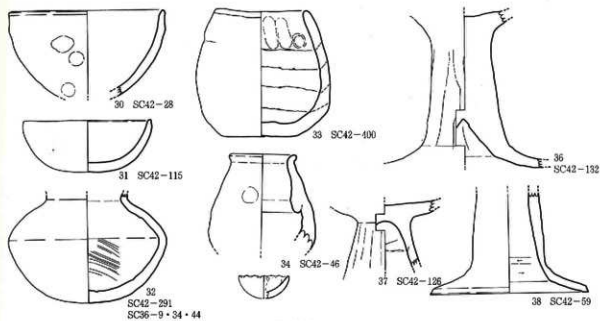
土師器 (30~34, 36~52) は、30・31は椀で、30は底が深い。32は短頸壺か。33は胴部中ほどから口縁にかけて内湾する小型の鉢である。34は小型容器で底部から口縁にかけてすぼまり、口縁先端を少し外反する。36~38は高坏である。36は高坏脚部。37は脚部から坏部にかけてである。脚部は坏部にかけてすぼまる。38は脚部から底部にかけてである。39~48は甕である。39は胴部中央が最大に張る。また外面上部にへら記号のような痕跡がある。内面は横方向ケズリである。40は外面刷毛目調整、41も内外ともに刷毛目調整である。45は口縁部が緩やかに外反し、胴部は長胴である。46は口縁を外反させ、胴部は中ほどからやや下に最大径をもってくる。48は長胴である。49~52は甕である。49は胴部の中からやや上に把手を付ける。内面はケズリである。また内面の最下部に何か欠けている痕跡がその両端に残っている。これは蒸し器である甕の筒抜けの底に支えを付けていたものと推測される。またそれと思われる破片がこの住居内から出土しており、他の住居でも出土している。50と51はその胎土や色調から同一固体と思われる。胴部上方に把手をつけている。外面は粗い刷毛目調整で、内面も口縁に近いところが粗い刷毛目調整である。底部は筒抜けである。52は比較的小さく、底部は筒抜けである。内外面の上部に輪積みの痕跡が残る。

土製品 (53・54) は、前述したように甕の内面最下部に支えにするために付けていたものであろう。

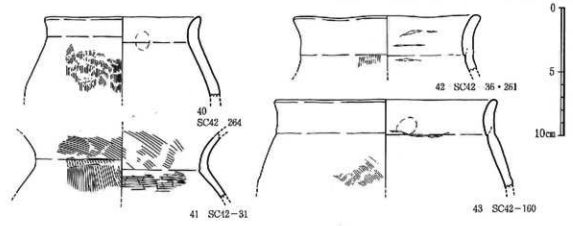
ミニチュア土器 (35) は手捍ねの碗型である。



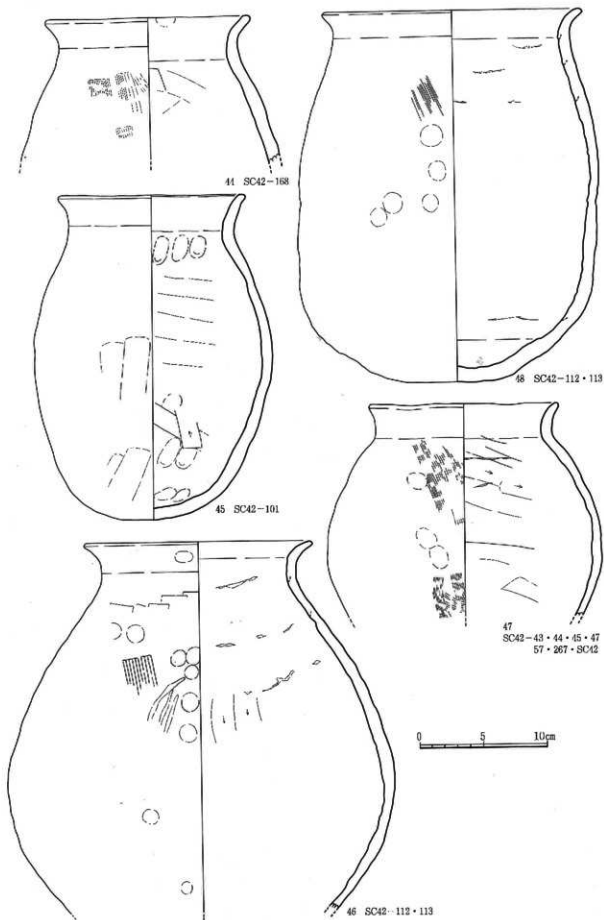
第123図 SC42の遺物実測図



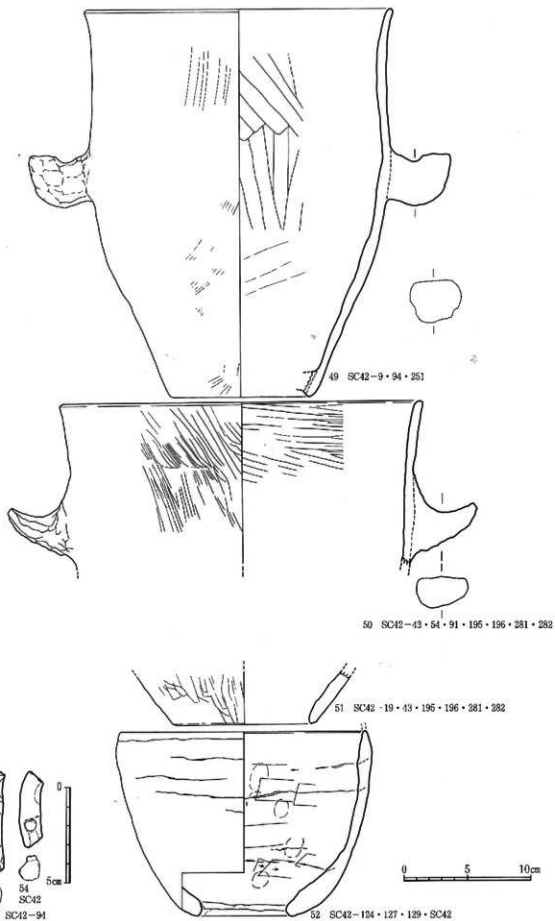
SC42-10・63・66・67・68・99・252・301・306・312



第124図 SC42の遺物実測図



第125図 SC42の遺物実測図



第126図 SC42の遺物実測図

43号整穴住居跡 (SC43) (第127図)

この住居は調査区の中央からやや南に位置する。36・42号住居に切れられ、遺存状態はあまりよくない。カマドは北壁に付設する。平面プランはほぼ方形を呈する。規模は東西4.7m、南北4.1m、壁高0.22mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本で安定している。土坑は厩内に2基検出した。1基は住居中央からややカマドより、もう1基はカマドのすぐ西側である。遺物はかなり多く出土した。特に住居南東部に集中している。それら土器群は想定される床面よりもレベル差があるため、住居廃絶時の埋設過程において焼棄されたか、その上器の中には胴部に穿孔のあいた蓋もあることから廃絶時に意図的に祭祀を行ったののだろうか。住居の土層断面観察では明確にわからなかった。

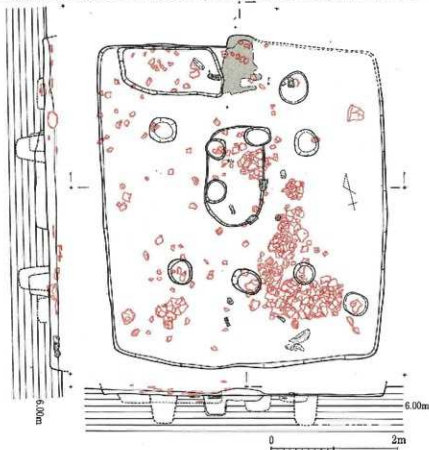
カマド (第128図)

カマドは住居北壁に付設し、北壁ラインをやや突出させている。しかし他の住居に切られているため遺存状態は悪い。残存規模は焚口から北壁まで約0.9m、幅約0.5mである。構造はまず地山に掘り込み基盤床をつくる。焚口部に袖石やその痕跡はみられなかった。燃焼部は硬化した焼土面を検出した。その直上にはカマド壁の崩落土がのっていた。その燃焼部のすぐ背後には支脚を抜いたような痕跡があったが確かではない。煙道部ははっきりと確認できなかった。

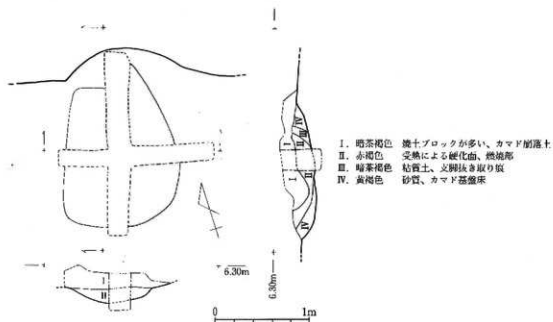
出土遺物 (第129・130・131・132・133・134図)

須恵器 (1~15) は、1~7は坏蓋である。3は全周を意図的に欠いている。8~13は坏身である。14は蓋の口縁部である。15は高坏の底部か。

土師器 (16~43) は、16~40は甕である。16はほぼ完形で検出され、胴部の下に穿孔を1つあける。頸部に緩やかであるが段がつく。17はカマドからの出土である。18は口縁部は「く」の字状に外反する。内面は横方向ケズリである。19は大型で、口縁部はやや内湾しながら直線気味に延び、口縁先端で外に曲げる。胴部はその中



第127図 SC43実測図

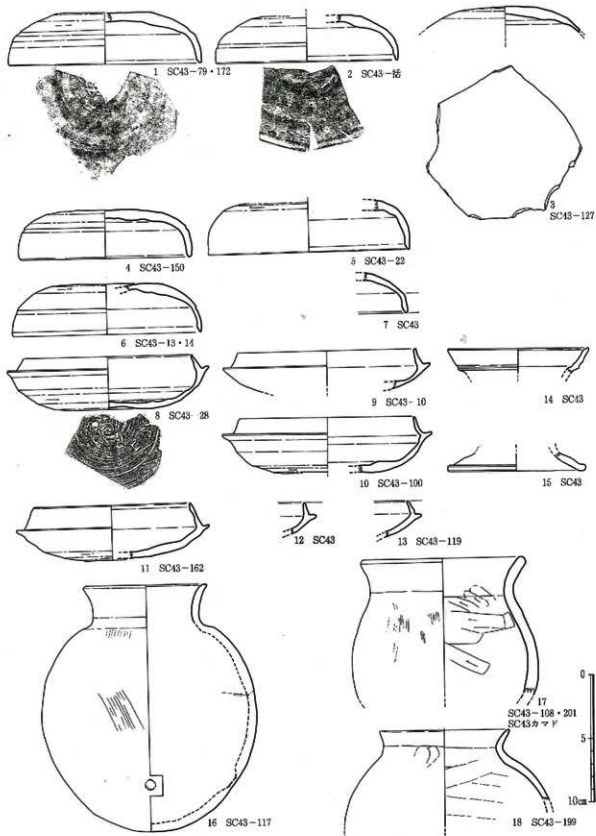


第128図 SC43カマド実測図

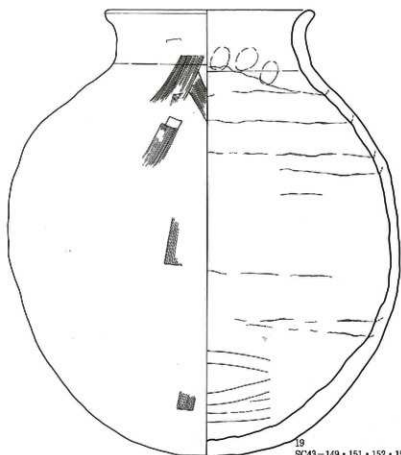
央で大きく張る。外面は刷毛目、内面には輪積みの痕跡が残る。20は胴部中央を大きく張りだし、少し角張った感がある。22は胴部から頸部にかけて内傾し、口縁部は若干外に開き気味に延びる。24は頸部付近に緩やかな段をつくり、口縁部は外に開く。内外面とも刷毛目調整である。25はやや大型である。内面刷毛目である。26は胴部から頸部にかけて若干丸みをもちながらも直線気味に延び、口縁部で外反する。28は胴部から頸部にかけて内傾し、口縁にかけて若干外に開き気味に直線状に延びる。外面は丁寧な縦方向刷毛目調整、内面も横方向刷毛目調整である。29は胴部の最大径と口縁部径がほぼ同じである。外面は縦方向にへら状工具痕で調整、内面には輪積みの痕跡が残る。30は胴部中央やや下方に最大径をもってくる。32は胴部はやや丸みを帯びながら頸部で少し内傾し、口縁部は若干外に開き気味に延びる。外面は丁寧な縦方向刷毛目調整、内面は横方向刷毛目のち下部に縦方向刷毛目調整である。また口縁部内外面に横ハケの痕跡が残る。35は胴部がやや長胴気味に丸みを帯び、頸部から口縁にかけて少し外に開き気味に立ち、その途中から口縁先端にかけて外反する。口縁部は全体的に角ばっている。36は丸みを帯びる胴部と底部の間に急に内側に締まり、底部にいたる。その底部には内面には指ナデで調整し、底部と胴部を接合している。底部外面最下部には、一定方向に工具痕を残す。37は胴部ほぼ中央に最大径をもってきて、底部は丸みをもちながらも平たい。40は胴部中央が最大径になり口縁部がやや外に開き気味に延びる。外面縦方向の刷毛目調整、内面刷毛目調整である。41は甔である。全体的に底部から口縁部にかけて外に開く。最下部は筒抜けである。42は甔である。口縁先端はやや丸みをもちながら若干内灣する。43は高環の脚である。脚の外面は縦方向の刷毛目調整で、穿孔がある痕跡が残っていた。破片のため、その個数はわからない。

土製品(47)は、器台の支脚か。上部が斜めに調整され斜面をつくっている。

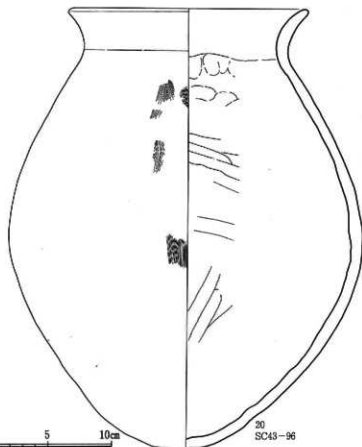
ミニチュア土器(44~46)は碗型の手捏ねである。



第129図 SC43の遺物実測図



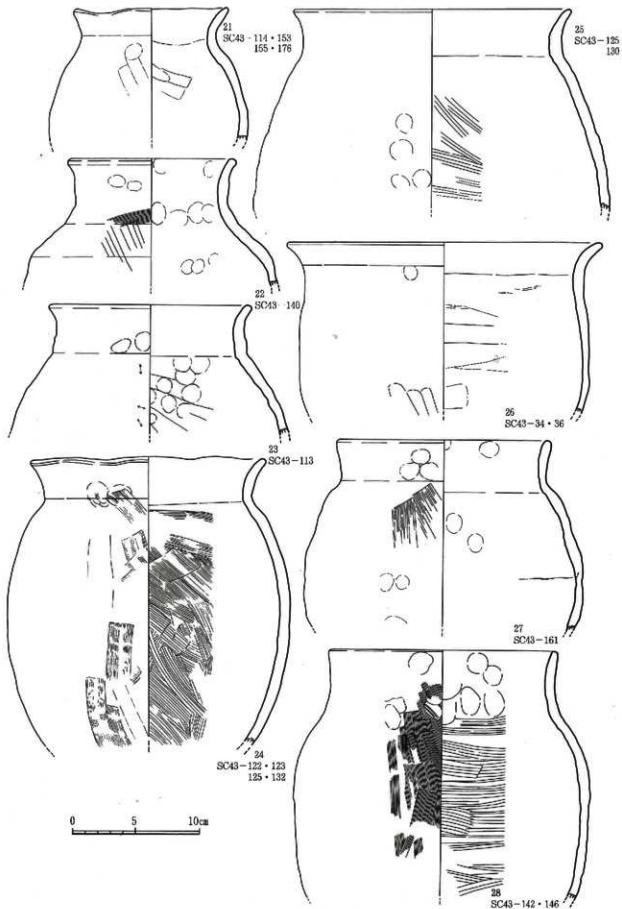
SC43-149・151・152・153・154・179



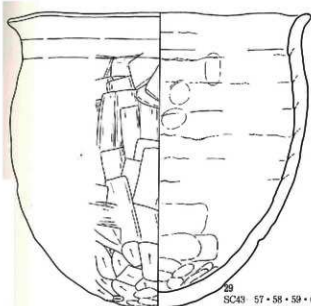
SC43-96

0 5 10cm

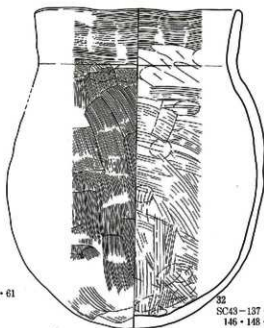
第130図 SC43の遺物実測図



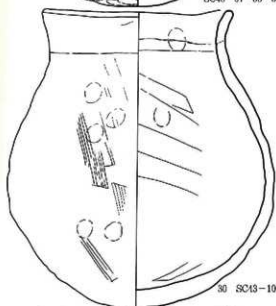
第131図 SC43の遺物実測図



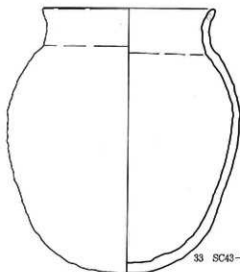
29
SC43-57・58・59・60・61



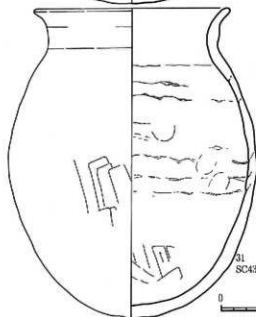
32
SC43-137・142・143
146・148・177・178



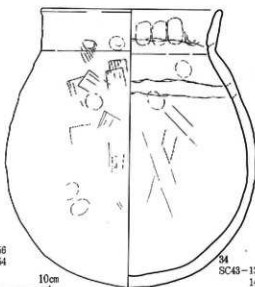
30 SC43-106



33 SC43-121



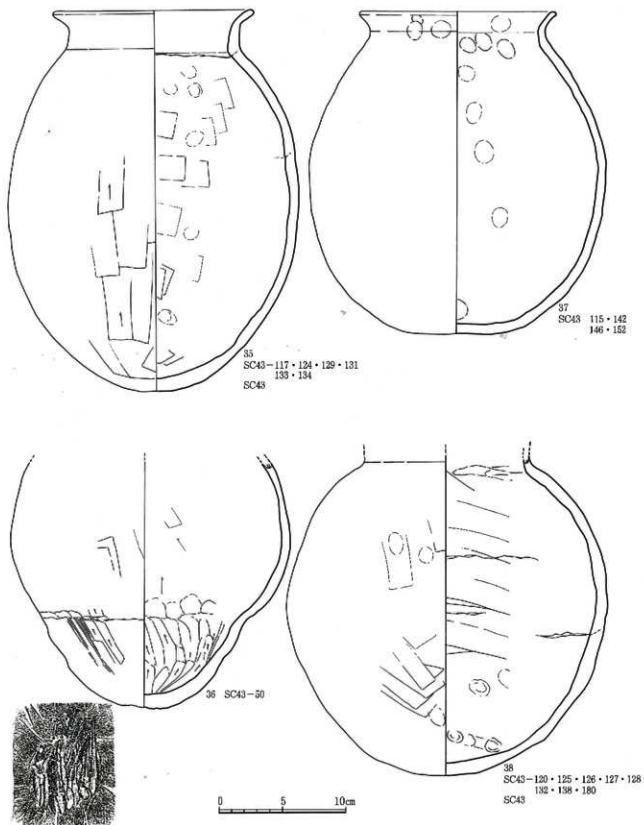
31
SC43-155・156
158・164



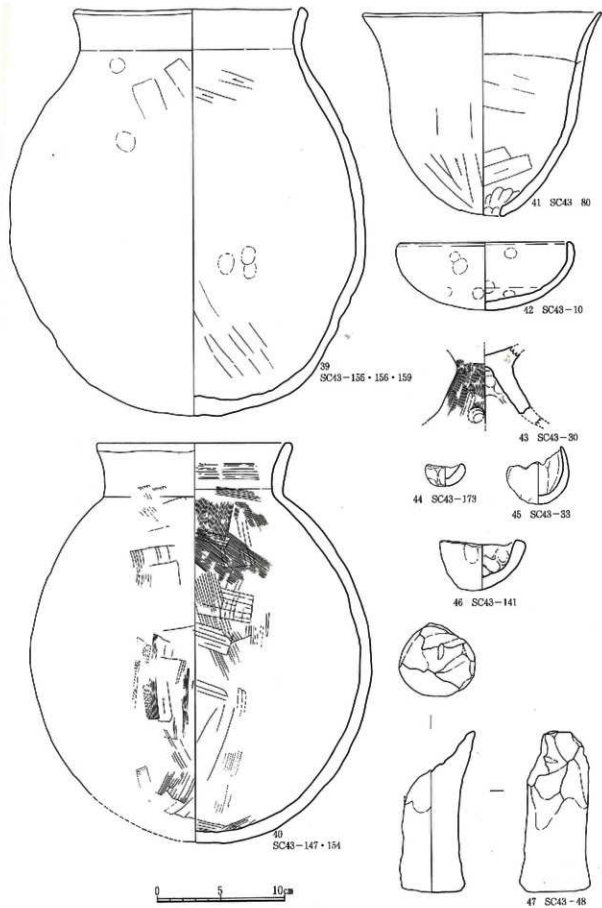
34
SC43-139・143・144
147・148・SC43

0 5 10cm

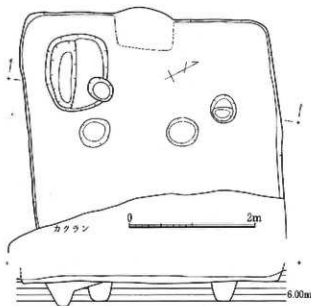
第132図 SC43の遺物実測図



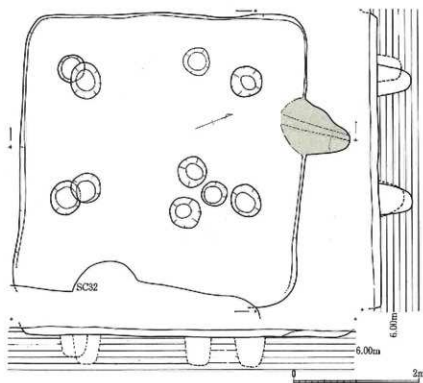
第133図 SC43の遺物実測図



第134図 SC43の遺物実測図



第135図 SC44実測図



第136図 SC45実測図

44号整穴住居跡 (SC44) (第135図)

この住居は調査区の中央からみてやや東側に位置する。遺存状態はあまりよくなく、住居東側は残存していない。カマドも遺存状態は良好ではないが、西壁中央に焼土が集中しておりカマドがあったことが推定される。焼土範囲は西壁直交方向に約0.7m、幅約0.9mである。整穴平面プランは定かでないが、方形かもしくは東西に長い長方形を呈するか。規模は東西3.7m、南北3.4+ α m、壁高0.2mである。貼り床は確認できなかった。主柱穴は2本確認した。しかしこれでは安定しないので東側にもう2本あったと思われる。主柱は4本か。また南西の主柱穴は上坑を切っており、この上坑は少なからずこの住居には帰属しないと推定される。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物 (第138図)

土師器 (1) は甕の胴部片で外面は刷毛目調整である。

土製品 (2) は土錘である。

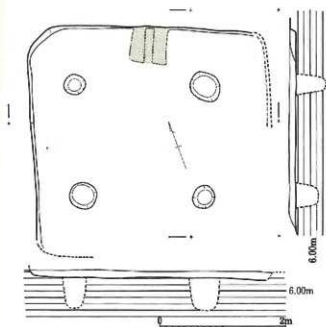
45号整穴住居跡 (SC45)

(第136図)

この住居は調査区のほぼ中央に位置する。32号住居に切られる。カマドは遺存状態が悪く、北壁の西寄りに焼土が集中している箇所がある。その箇所は北壁を大きく突出させている。カマドに伴うものと推定されるがトレンチをいれてもその構造ははっきりと確認できなかった。規模は北壁直交方向で約1.0m、幅約0.7mである。整穴平面プランは方形を呈する。規模は東西4.3m、南北4.3m、壁高0.13mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴はやや住居内西寄りに4本確認できた。遺物はほとんど出土しなかった。

出土遺物 (第138図)

土師器 (1) は甕の底部片か。



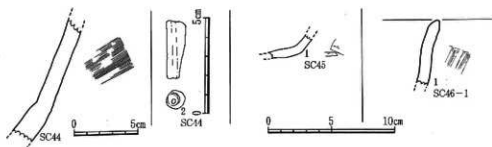
第137図 SC46実測図

46号竪穴住居跡 (SC46) (第137図)

この住居は調査区のほぼ中央に位置する。遺存状態は東壁と西壁が削平されており、また全体的にも残りは悪い。カマドは北壁中央に焼土が集中している部分があり、この場所にカマドがあったことが推定される。トレンチを入れてみたがその構造までは追えなかった。平面プランは方形を呈すると思われる。規模は東西 $3.1 + a$ m、南北 $3.5 + a$ m、壁高0.12mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本確認できほぼ安定している。遺物はほとんど出土していない。

出土遺物 (第138図)

土師器 (1) は甕か鉢の口縁部か。



第138図 SC44・45・46の遺物実測図

47号竪穴住居跡 (SC47) (第139図)

この住居は調査区の中央からみてやや北東に位置する。31号住居に切られているため、遺存状態はあまり良くない。カマドは北壁中央に付設される。平面プランはやや不整形な方形を呈する。規模は東西 $4.8 \sim 5.0$ m、南北 $4.9 \sim 5.3$ m、壁高0.16mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本検出した。遺物は覆土から多く出土した。

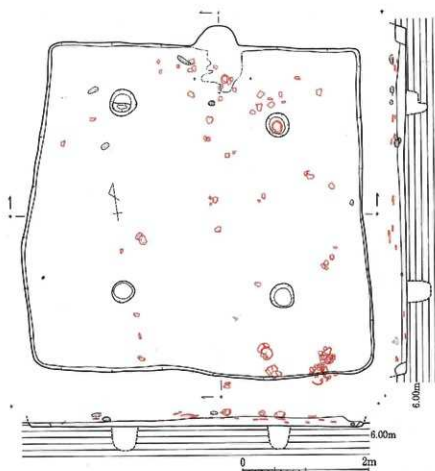
カマド (第140図)

カマドは住居の北壁中央に付けられる。規模は焚口から北壁まで0.9m、焚口幅で0.4mである。構造は、まず基礎床の掘り込み、焚口部には左右両側に袖石の抜き取り痕跡が確認できた。燃焼部には硬化した焼土面があり、その直上にカマド壁の崩落土がのっていた。また胴部下半を欠いた甕が正位置で検出され、支脚に転用されたものと推定される。その周辺には瓦片が散っていた。

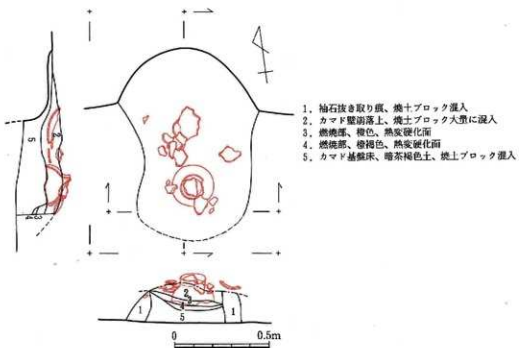
出土遺物 (第141図)

須恵器 (1・2) は坏である。

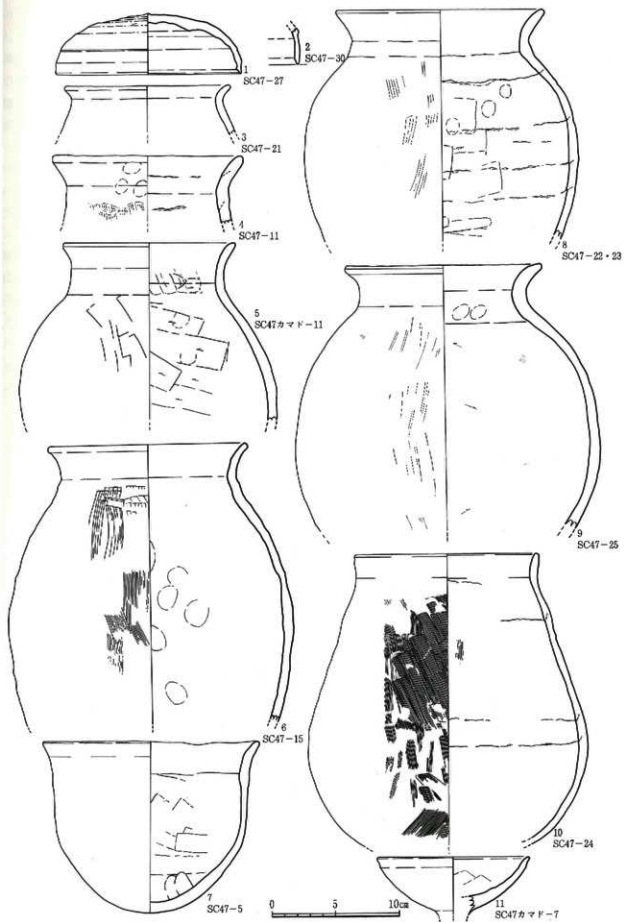
土師器 (3~11) は、3~10は甕である。6は胴部が長胴となり、口縁部は緩い「く」の字状になる。外面は細かい刷毛目調整で、内面は指肌痕とナデ仕上げである。7は口縁先端が最大径となる。8は胴部中央や上に最大に張り、口縁部は若干角ばらせて外反する。外面は刷毛目調整のちナデ、内面には輪積み痕跡が残る。9は胴部が丸みをもち中央部が張る。10は胴部中央より下方に最大径をもってきて張る。その最大径から口縁部にかけて緩やかに内傾していき、口縁先端で直線的に延びる。外面は細かい刷毛目調整である。11は高杯の坏部である。



第139図 SC47実測図



第140図 SC47カマド実測図



第141図 SC47の遺物実測図

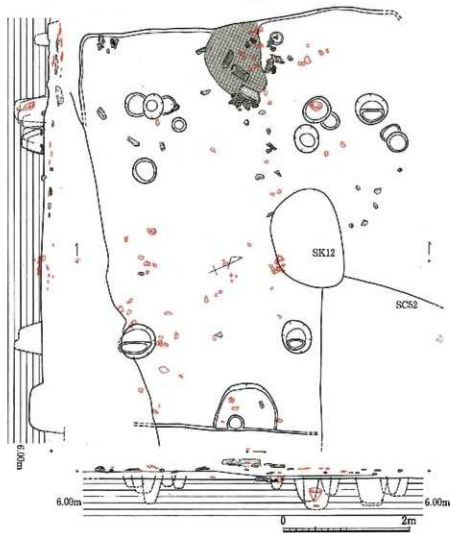
48号竪穴住居跡

(SC48) (第142図)

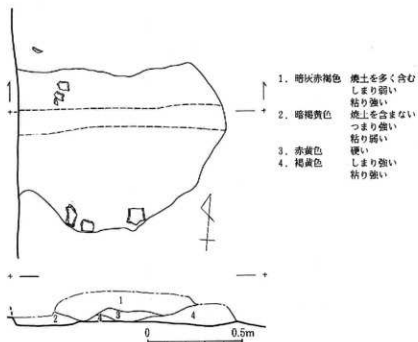
この住居は調査区の中央からみて南側に位置している。遺存状態は52号住居及び12号土坑に切られていることと、調査区の南端に位置しているため住居の南壁はほとんど確認できない状態でありよくない。カマドは西壁中央に付設する。平而プランは東西に長い長方形を呈すると推定される。規模は東西4.7 + α m、南北1.2 + α m、壁高0.35mである。貼り床面は確認できなかった。支柱穴は4本検出され安定している。なお、北西の支柱穴には甕の上半半分が出土した。柱を抜き取ったあとといれたものか。土坑はカマドと対面する東壁中央で1基検出した。カマドと対面する位置から出入り口の施設と推定される。遺物は多く出土した。

カマド (第143図)

カマドは住居の西壁に付設し、壁をやや突出させる。規模は焚口から壁まで約1.0mで幅約0.5mである。構造は基盤床(4層)を作るために掘り込み、焚口部は袖石やその痕跡は確認できなかったが、カマドの戦屑落土



第142図 SC48実測図



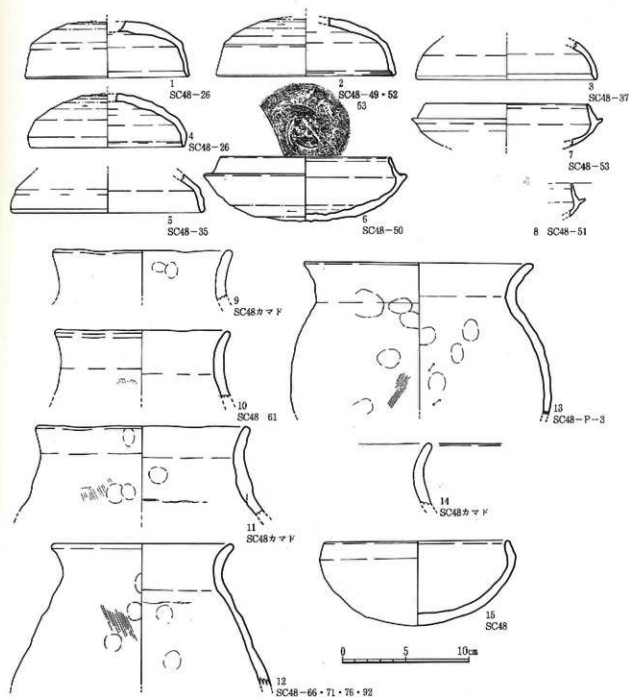
第143図 SC48カマド実測図

の中に緑泥片岩の石材が散乱しており、これがその一部だと想定できる。3層の燃焼部は硬化した焼土面を検出した。その直上10cmの幅でカマド壁の崩落土（1層）がのっている。2層は煙道の一部と思われる。

出土遺物（第144図）

須恵器（1～8）は、1～5は坏蓋である。6～8は坏身である。6の内面底部には工具痕が残る。

土師器（9～15）は、9～14は甕である。9・10・11とも口縁部は緩やかに外反しつつ延びる。15は碗である。口縁部を少し内湾する。なお13は、北西の支柱穴、9・11・14はカマドからの出土である。



第144図 SC48の遺物実測図

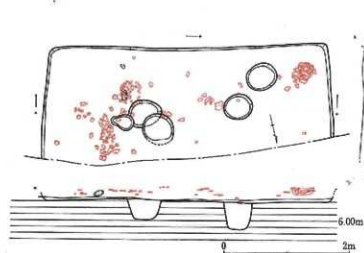
50号竪穴住居跡 (SC50) (第145図)

この住居は調査区の北側に位置する。63・64号住居を切る。遺存状態は調査区の北端に位置していることもあり、住居の半分は調査区外で確認できない。カマドの有無も確認できない。平面プランも明らかではない。規模は東西1.7+αm、南北4.4m、壁高0.1mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は2本を確認した。だがこれでは不安定なので、4本柱であったと想定される。遺物は覆土より出土した。

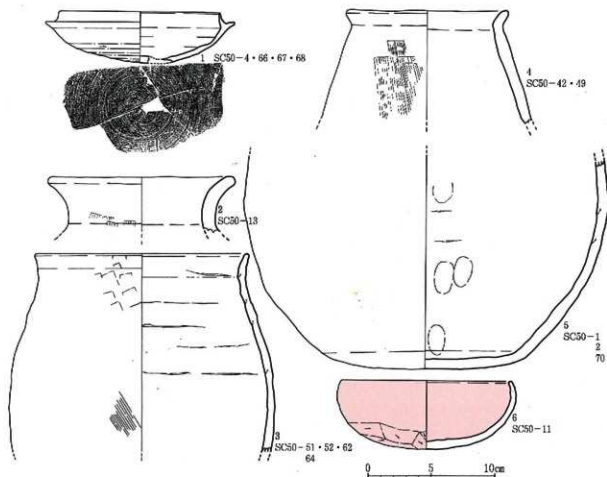
出土遺物 (第146図)

須恵器 (1) は坏身である。外面底部に交差する2本のヘラ記号がみられる。

土師器 (2~6) は、2~5は甕である。3は長胴型で、口縁部は緩やかに外反する。口縁外面にヘラ工具痕で調整し、内面は輪積みの痕跡が認められる。4は胴部から頭部にかけてすばまるように直線的に延び、口縁部を短く外反する。外面は縦方向の刷毛目調整である。5は大型のもので、胴部から底部である。胴部は丸みを帯び大きく張る。6は碗である。外面底部は手持ちヘラケズリ調整である。



第145図 SC50実測図



第146図 SC50の遺物実測図

51号竪穴住居跡 (SC51) (第147図)

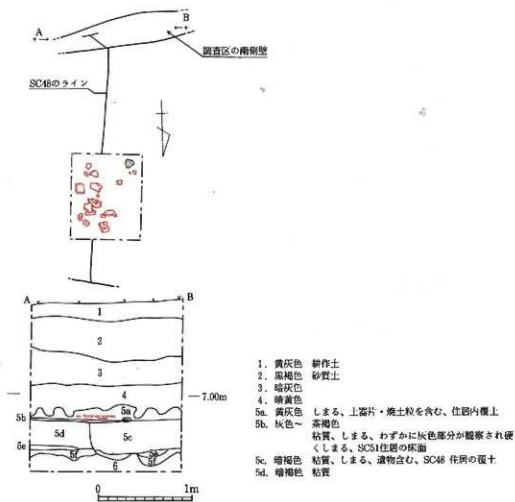
この住居は調査区の南側に位置する。この住居は全体の遺構検出面よりも50cmほど高い位置で見つかったため、住居の壁などは残存していない。だが南に調査区の壁があり、その土層断面でその一端を知ることができた。この住居の埋土は5層a, bである。5a層は住居の覆土で、5b層は硬化していることから貼り床面であると推定される。また5c層は48号住居の埋土である。その関係から48号住居を切っていることがわかる。支柱穴や土坑などは確認できなかった。

出土遺物 (第148図)

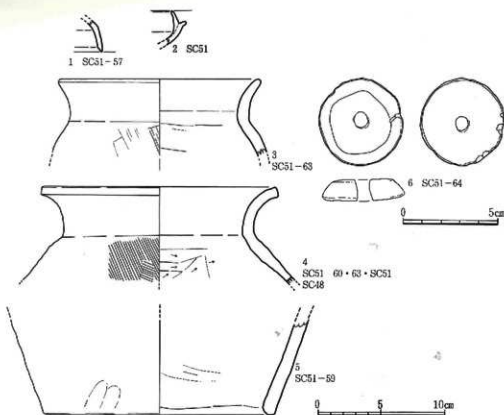
須恵器 (1・2) は1は、坏蓋片で、2は坏身片である。

土師器 (3～5) は3・4は甕である。口縁部は頸部より外に開き気味に延び、先端部で外反する。5は甕の底部である。最下部は筒抜けである。

石製品 (6) は滑石製の紡錘車である。



第147図 SC51実測図



第148図 SC51の遺物実測図

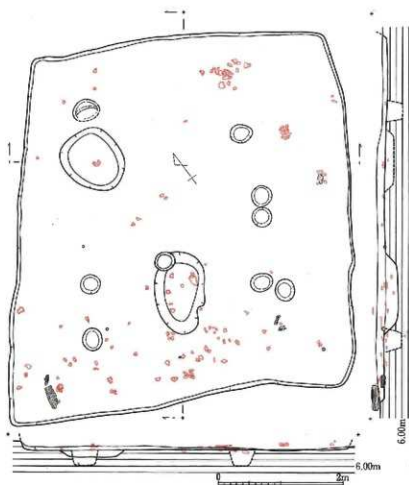
52号竪穴住居跡 (SC52) (第149図)

この住居は調査区の南側に位置する。36・48号住居を切り、30号住居にそのほとんどを切られる。カマドは、30号住居に切られている影響でそのほとんどは確認できないが、ただ北壁の付近で焼土とスミが多く見られる。これはこの住居の中ではこの箇所で見えないので、この北壁にカマドを付設していた可能性がある。さらに住居内からは緑泥片岩の石材も出土しており、カマドに使用されたことが伺える。平而プランは不整形な南北に少し長い長方形である。規模は東西5.3～5.5m、南北4.6～5.3m、壁高0.16mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本検出したが不安定である。上坑は2基検出したが、この住居に帰属するものかどうか分からない。遺物は全体的に低いレベルから出土した。

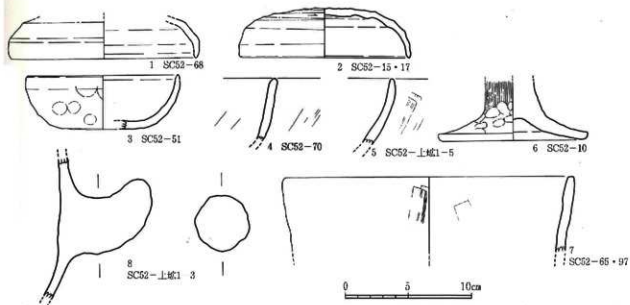
出土遺物 (第150図)

須恵器 (1・2) は、环蓋である。

土師器 (3～8) は、3は碗である。4・5も碗片である。6は高環の底部である。7は鉢もしくは甑の口縁部か。8は甑の把手である。



第149図 SC52実測図



第150図 SC52の遺物実測図

53号竪穴住居跡 (SC53) (第151図)

この住居は調査区の中央に位置する。56号住居を切り、33号住居に切られる。カマドは西壁に付設されている。平面プランは方形を呈する。規模は東西6.2~6.4m、南北5.6~6.0m、壁高0.17mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本検出し、ほぼ安定している。上坑は2基確認(第153図)し、中央部に1基(長軸2.9m、短軸1.5m、最大深0.2m)、北壁寄りに1基(長軸1.8m、短軸1.25m、最大深0.2m)確認した。これらはその埋土の状況などからこの住居に帰属する屋内土坑として捉えてよいものと推定される。遺物は住居全体から多く出土した。

カマド (第152図)

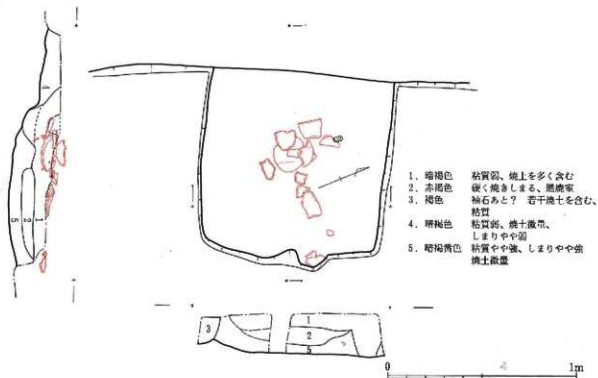
カマドは住居西壁に付設される。規模は焚口から壁まで0.7m、焚口幅0.5mである。構造はまず基盤床をつくるための掘り込み層を確認。焚口部にはカマドの袖石の抜き取り痕があり、燃焼部は硬化した焼土面を検出した。この焼土面の直上にはカマドの破壊された崩落土がのっていた。また燃焼部のすぐ背後には支脚の抜き取り痕を確認した。煙道部は削平のためはっきりと確認できなかった。遺物は破壊された崩落土に混じて出土した。その遺物の大半は壺片であるが、1点だけ高環があった。これは2次焼成を受けていないことから、カマド廃棄時に糞肥行為として使用されたと想定される。

出土遺物 (第154・155・156図)

須恵器(1~12)は、1~5は坏壺である。6~10は坏身である。11は埴である。12は人糞の胴部片である。



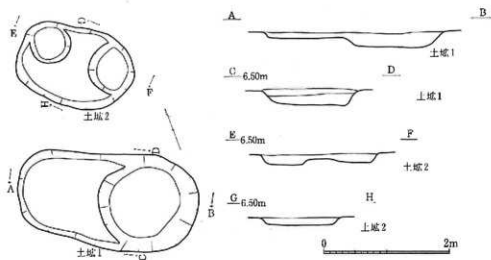
第151図 SC53実測図



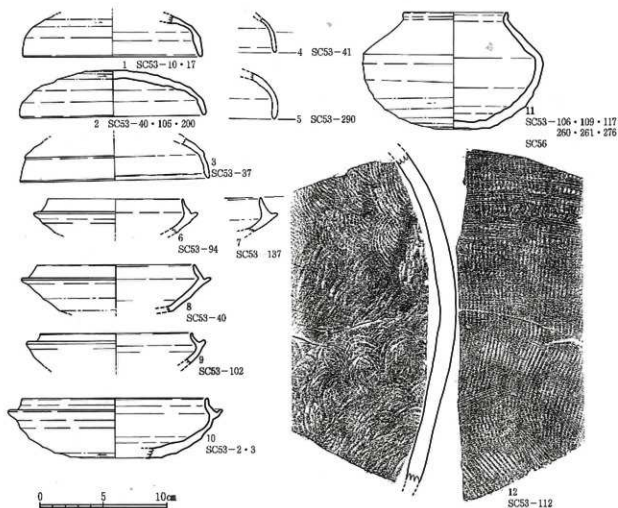
第152図 SC53カマド実測図

内面には同心円紋の当て具痕、外面には平行線タキ痕を残す。

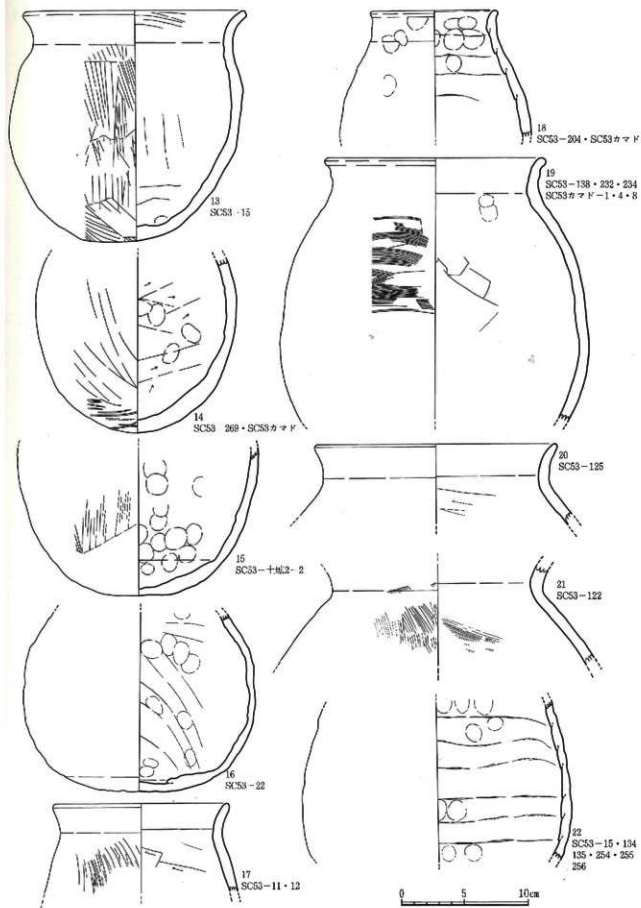
土師器 (13~35) は、13~28は壺である。13は外面は単位の大きい縦方向刷毛目調整である。14はカマドからの出土で外面は斜め方向の工具痕で器面を調整する。内面は横~斜め方向のケズリである。16は胴部の下方が張り、そのまま上方にむかってすぼまっていく。18はカマドからの出土で口縁部は直線気味に立ちあがる。内面は輪積み痕が残る。19は胴部中央が張り、口縁部は外反する。外面は丁寧な横方向刷毛目調整である。23~26、28は口縁部片である。27は底部で、底部の器壁は厚い。29・30は鉢の口縁部か。31・32・33は碗である。31の口縁先端は短く外反する。32の口縁先端は短く内湾する。33の口縁先端は直線的である。34は甌の把手である。35はカマドからの出土で、高環である。脚部は縦方向刷毛目調整で直線的に延び、底部は大きく開く。環部は脚部から大きく外に開き、その途中で立ち上げ、口縁先端を外反させる。その外面は刷毛目調整、内面は横方向ミガキ調整である。



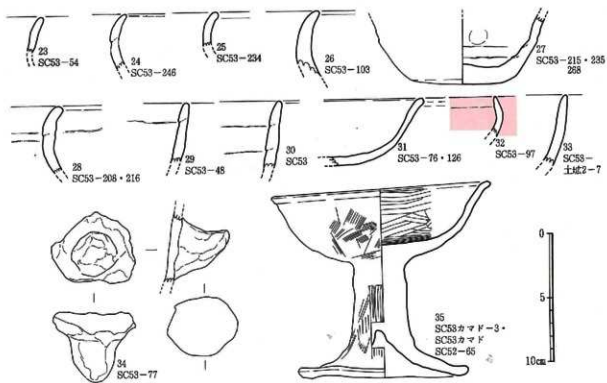
第153図 SC53内土坑実測図



第154図 SC53の遺物実測図



第156図 SC53の遺物実測図



第156図 SC53の遺物実測図

54号竪穴住居跡 (SC54) (第157図)

この住居は調査区の南端に位置する。42号住居に切られる。遺存状態は、調査区の端で検出したこともあり、その大半は不明である。カマドは北壁に付設されているが、その残存状態は良くない。平面プランは不明である。規模は確認できる範囲で、東西4.7+αm、南北1.6+αm、壁高0.1mである。貼り床面は確認できない。支柱穴や土坑などはこの範囲では検出できなかった。遺物は住居北東部で多く出土した。

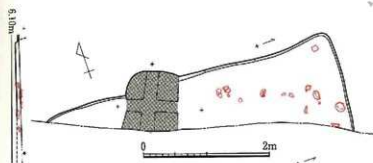
カマド (第158図)

カマドは北壁に付設される。規模は焚口から壁まで約0.8m、幅約0.4mである。遺存状態は良好ではないが、上層断面で確認できる構造は、まずカマドの基礎となる基盤床の掘り込み、焚口部の袖石(緑泥片岩製)及び抜き取り痕、燃焼部である硬化した焼土面、その直上にはカマドの一部であろう破壊された土が堆積している。燃焼部は明確に確認できなかった。遺物は燃焼部内に支脚に使用された? 甕の胴部、甔、また2次焼成をうけていない須恵器を2点確認した。このような須恵器がカマド内部から出土することは、カマド廃棄時の祭祀行為をおこなった可能性があらう。

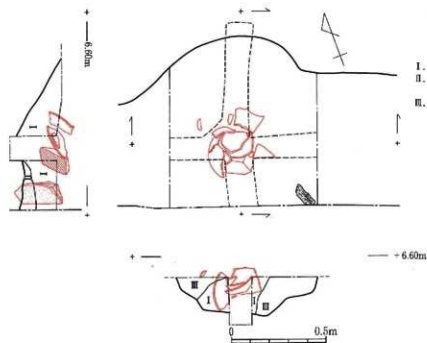
出土遺物 (第159図)

須恵器(1~8)は、1~5は坏蓋である。6・7は坏身である。8は甕のLJ縁部か。なお3・4はカマドからの出土である。

土師器(9~12)は、9は甕で住居内とカマド内の出土遺物で接合できた。胴部はやや長胴で、その半ばからやや下に最大径をもってくる。10は甕もしくは甔か。11は甕の口縁片である。12は甔で、底部は筒抜けである。

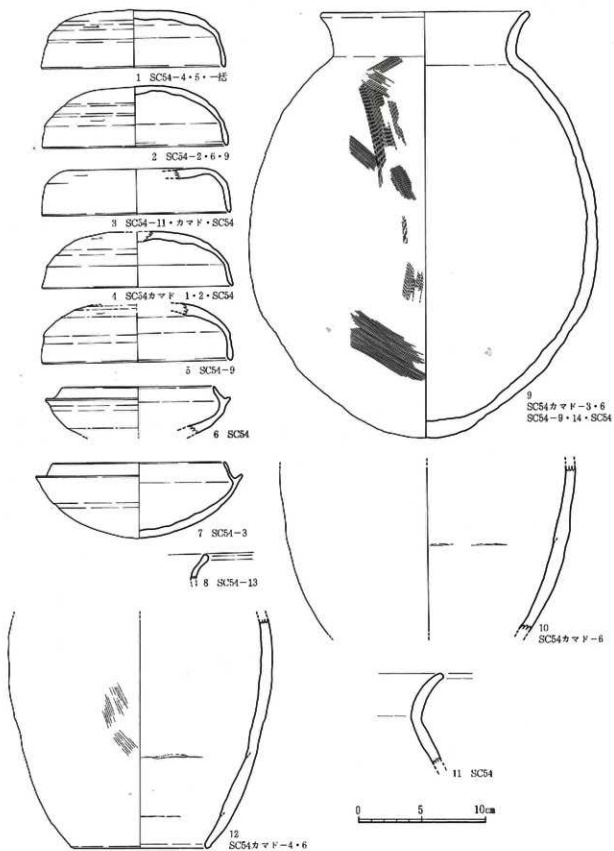


第157図 SC54実測図



- I. 茶褐色 焼土ブロック、カマド崩落土
- II. 赤褐色 受熱による硬化部、カマド燃焼部
- III. 茶褐色 焼土ブロックが大量に混ざる焼石抜取痕

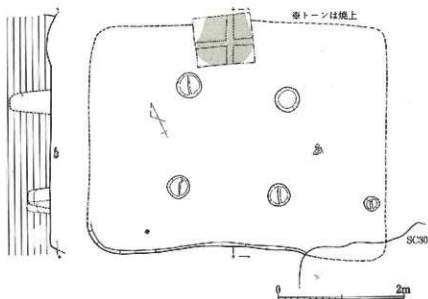
第158図 SC54カマド実測図



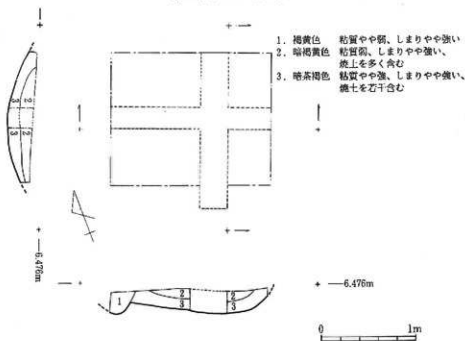
第159図 SC54の遺物実測図

55号竪穴住居跡 (SC55) (第160図)

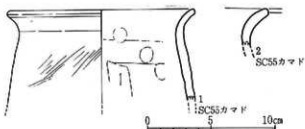
この住居は調査区のほぼ中央に位置する。30号住居に切られる。遺存状態は悪く、壁も南側の一部しか残っていない。カマドは北側に付設する。平面プランはその残存状況からはっきりしない。規模は東西が不明であるが約 $3.2 \div a$ mくらいと推定される。南北は南壁からカマドまで3.6mである。壁高は南側で0.1mである。床面ははっきりしない。主柱穴は4本検出し安定している。遺物はほとんど出土しなかった。



第160図 SC55実測図



第161図 SC55カマド実測図



第162図 SC55の遺物実測図

いない。カマドは北側に付設する。平面プランはその残存状況からはっきりしない。規模は東西が不明であるが約 $3.2 \div a$ mくらいと推定される。南北は南壁からカマドまで3.6mである。壁高は南側で0.1mである。床面ははっきりしない。主柱穴は4本検出し安定している。遺物はほとんど出土しなかった。

カマド (第161図)

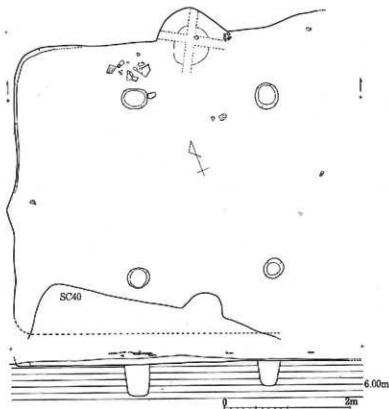
カマドは住居の北側に位置する。規模は北壁に直交方向で約0.6m、幅0.7mである。遺存状態はあまりよくない。構造はまず3層はカマド構築時の掘り込み、焚口部には袖石の抜き取り痕、燃焼部には焼土が集中する。煙道は確認できなかった。遺物は土師器片が少数出土した。

出土遺物 (第162図)

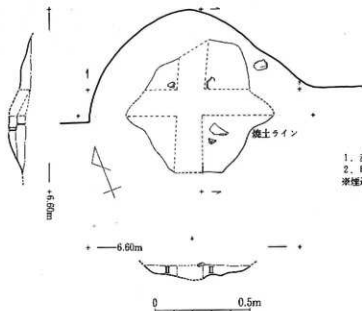
土師器 (1・2) は、甕である。どちらもカマドからの出土である。

56号壑穴住居跡 (SC56) (第163図)

この住居は調査区の中央に位置する。40・53号住居に切られる。遺存状態は悪く、北壁と西壁だけが残る。カマドは北壁に付設している。平面プランははっきりしないが、ほぼ方形かもしくは南北に長い長方形を呈すると推定される。規模は東西4.1+αm、南北4.8+αm、壁高0.03mである。貼り床面は確認できない。支柱穴は4本で安定する。土坑などは検出していない。遺物は少量出土した。



第163図 SC56実測図



第164図 SC56カマド実測図

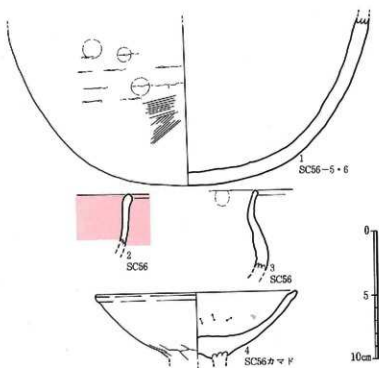
カマド (第164図)

カマドは住居北側に付設する。遺存状態は悪い。規模は北壁直交方向で約0.8m、幅0.5mである。確認できる構造は、カマド構築時の握り込み、燃焼部の硬化した焼土面である。袖石やその痕跡支脚、煙道などは確認できなかった。遺物は高坏の坏部が出土した。2次焼成を受けていないためにカマド築記が認められよう。

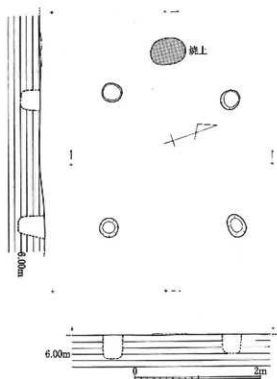
出土遺物 (第165図)

土師器 (1~4) は、1は甕の底部である。胴部は大きく張り出すと思われる。2は碗の口縁部か。3は小型の甕であろう。4は高坏の坏部で、脚部から坏部にかけて大きく外に開きながら延びる。4はカマドからの出土である。

1. 赤褐色 受熱による硬化面、燃焼部
2. 暗赤褐色 焼土ブロックを含む、カマド基礎床、煙道、袖石、支脚握り込みは確認できなかった



第165図 SC56の遺物実測図



第166図 SC57実測図

57号竪穴住居跡 (SC57) (第166図)

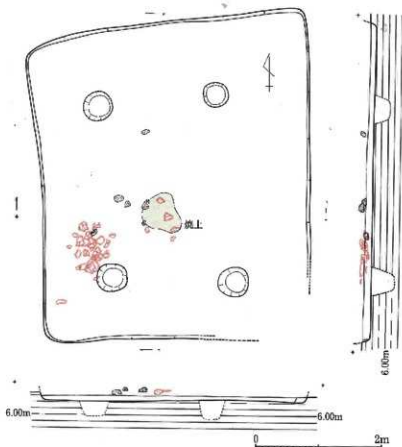
この住居は調査区のはほぼ中央に位置する。遺存状態は極めて悪く、四方の壁は残っていない。カマドは1箇所、焼土が集中している部分が東側にあり、そこはちょうど柱穴の配置などから壁際となると思われるところで東側にカマドを付設したことも考えられるが定かではない。平面プラン、規模などは不明である。支柱穴は4本検出し安定している。土坑などは確認できなかった。遺物は小破片だけである。

58号竪穴住居跡 (SC58) (第167図)

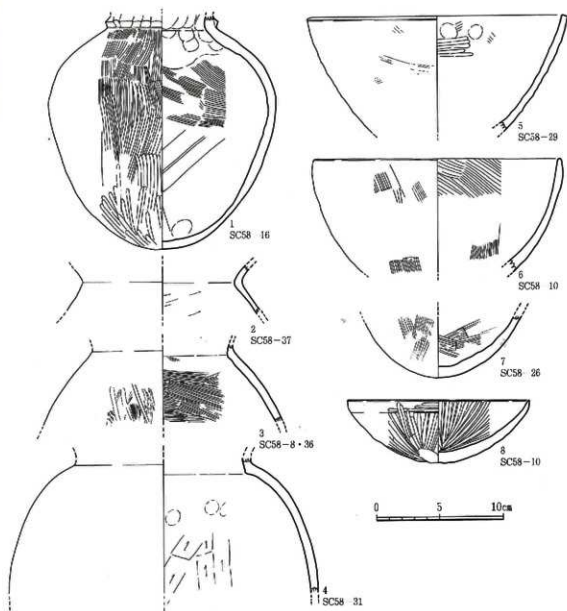
この住居は調査区のやや南西に位置する。41号住居に切られ、60号住居を切る。南東部の壁が削平されているが平面プランは南北軸に長い長方形を呈し、東側の壁ラインは西側のそれよりも少し長い。規模は東西4.5m、南北4.4+αm、壁高0.15mである。カマドはなく、中央炉が中央からやや南で検出した。炉はその基底部が残存していただけと思われ、その掘り方までは検出できなかった。主柱穴は4本検出し、ほぼ安定している。土坑などは確認できなかった。遺物は住居南西部でまとまって出土した。その土器などからこの住居は古墳時代前期前葉と推定される。

出土遺物 (第168図)

土師器 (1~8) は、1は複合口縁壺であろう。胴部の半ばよりやや上が張り出す。頸部には指でつまんだような突帯を1条まわす。外面は縦方向の丁寧な刷毛目調整、内面も胴部上部は斜め方向刷毛目、その下方は斜め方向ケズリである。2・3は甕であろう。頸部の屈曲点は明瞭に仕上げる。3は外面縦方向刷毛目のあと一部ミガキで調整している。内面は横方向の丁寧な刷毛目調整である。4は甕であろう。頸部の屈曲点は明瞭である。胴部は大きく張り出す。5・6は鉢か。5は胴部から口縁部にかけて直線的に延び、口縁先端は断面が「コ」の字状になる。6は胴部から口縁部にかけて少し内湾しながら延びる。7は壺か甕の底部か。8は高坏の坏部である。内外面ともに丁寧な縦方向のミガキで仕上げる。



第167図 SC58実測図



第168図 SC58の遺物実測図

59号竪穴住居跡 (SC59) (第169図)

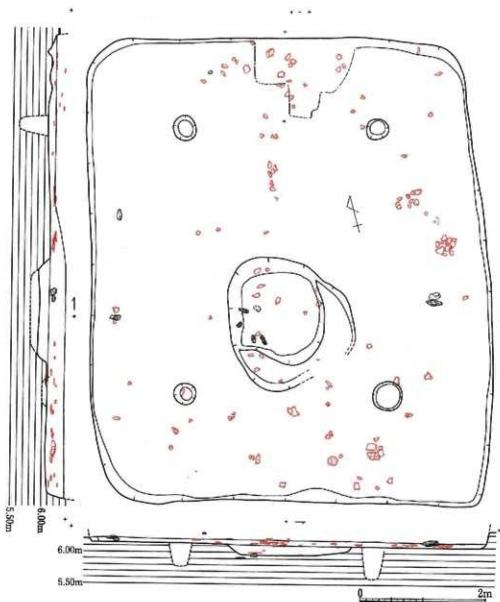
この住居は調査区のやや北東に位置する。33号住居に切られる。そのため遺存状態はあまり良くはない。カマドは北壁中央に付設される。半面プランは南北軸に長いやや不整形な長方形を呈する。規模は東西6.8~7.1m、南北5.6~5.7m、壁高0.34mである。貼り床面は確認できなかった。主柱穴は4本検出され、配置は安定している。土坑は中央からやや南側に1基確認した。遺物は住居全体から多く出土した。

カマド (第170図)

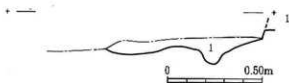
カマドは住居の北壁に付設している。31号住居に切られているため遺存状態は悪い。残存規模は北壁直交方向で約0.8m、幅約0.5mである。構造はほとんど追えないが、煙道部と推定される場所は斜めに外側に向かってレベルが上がっている。また1箇所窪んでいるところがあるが、支脚か何かの痕跡か。遺物は少量出土した。

出土遺物 (第171図)

須恵器 (1~3) は、1・2は坏蓋である。3は坏身である。

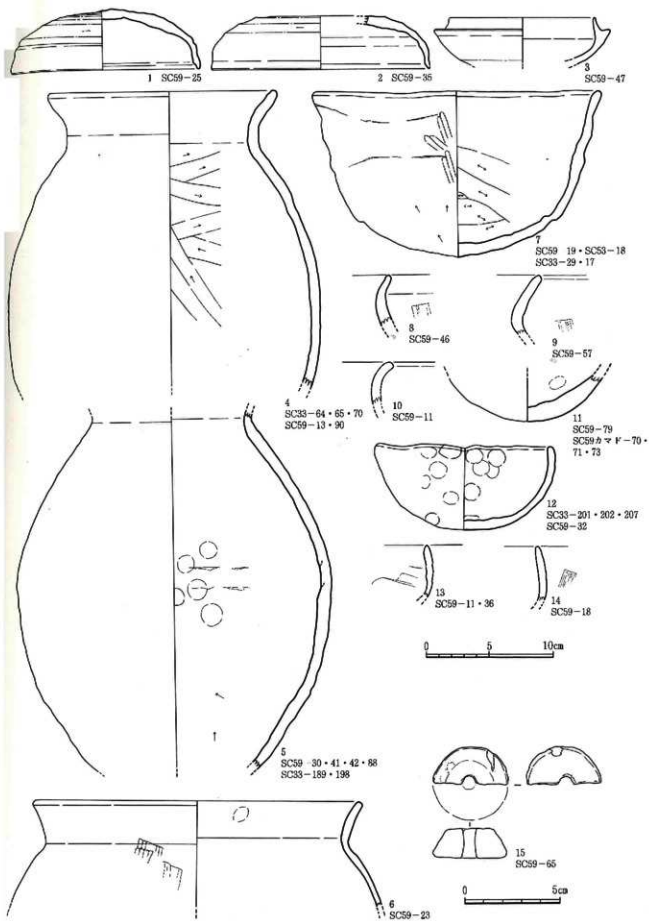


第169図 SC59実測図



1. 暗褐色 粘質やや強、しまりやや強、機土を多く含む

第170図 SC59カマド断面実測図



第171図 SC59の遺物実測図

土師器（4～14）は4～6は甕である。4は長胴の甕で、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。内面は斜め方向ケズリ調整である。5は胴部であるが、その中央が張り出し、頸部と底部に向かってすぼまる。7は鉢である。8～10は甕の口縁片である。11は甕の底部か。12は碗で、13・14は碗の口縁片である。

石製品（15）は滑石製紡錘車である。断面台形である。中央に穿孔を1つあける

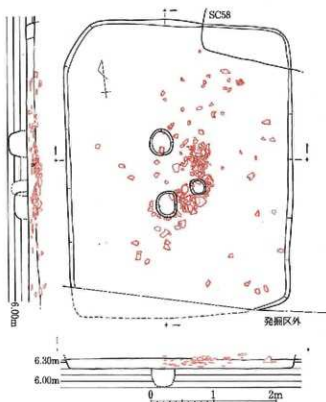
60号竪穴住居跡（SC60）（第172図）

この住居は調査区の南西に位置する。58号住居に切られる。平面プランは南端が調査区外にかかり、すべてが明らかではないが、南北に長い長方形を呈する。規模は東西 $4.2 + \alpha$ m、南北 $3.3 + \alpha$ m、壁高0.26 mで、小型である。炉跡などは検出できなかった。主柱穴は2本検出した。遺物は住居中央から多く出土した。それら遺物からこの住居は古墳時代前期前葉の所産であろう。

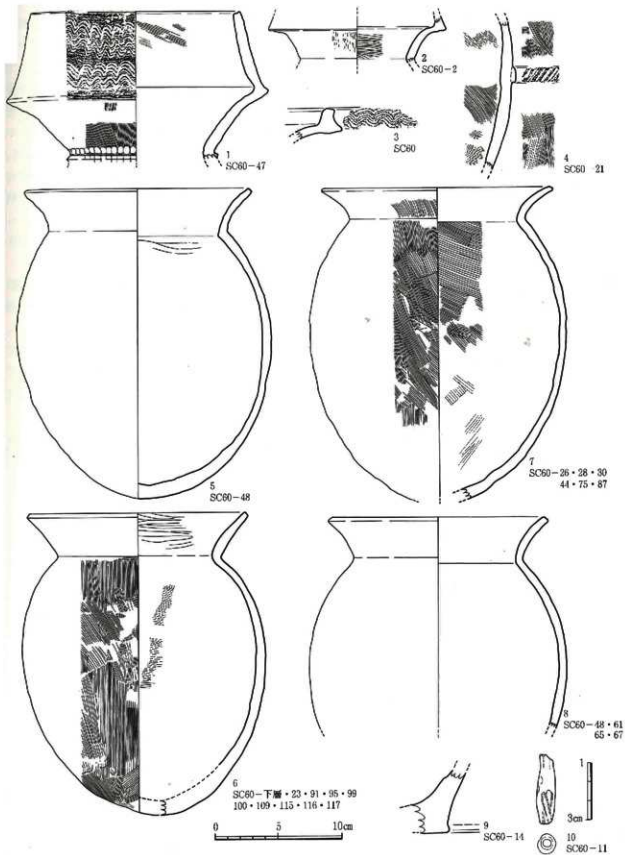
出土遺物（第173図）

土師器（1～9）は1～4は複合口縁壺である。1は頸部下端に指でつまんだような1条の突帯を弧付ける。2は複合口縁部である。3は口縁先端で、外面飾揃波状紋を施す。4は胴部である。その中央に1条の薄く平たい突帯をつける。その面には斜め刻み目を施す。5～8は甕である。6は頸部の屈曲点は明瞭で口縁部はそのまま外に延びる。外面は丁寧な縦方向の細かい刷毛目調整である。口縁部の内面には横方向のミガキを施す。7は外面丁寧な縦方向の細かい刷毛目調整で、内面は斜め方向の丁寧な刷毛目調整である。9は甕の底部と思われるが、この住居に帰属するものか？

土製品（10）は土鍾である。



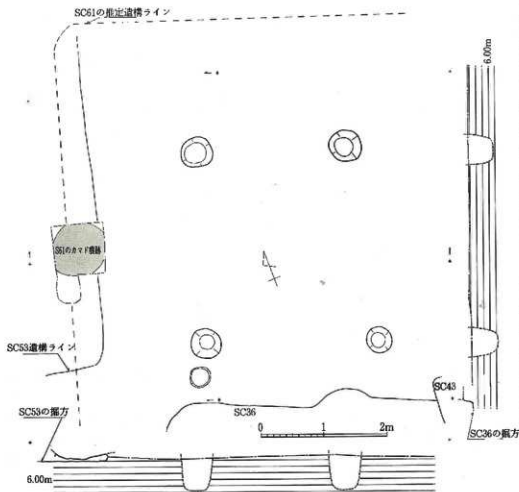
第172図 SC60実測図



第173図 SC80の遺物実測図

61号竪穴住居跡 (SC61) (第174図)

この住居は調査区の中央に位置する。カマドの位置関係から53号住居を切る。遺存状態は悪く、四方の壁は残っていない。カマド

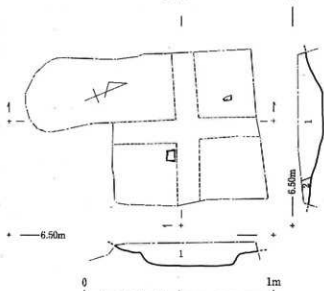


ていない。カマドは西側に付設しているが、削平を受け、残存状況は悪い。平面プランや規模は不明である。支柱穴は4本で安定している。土坑は確認できなかった。遺物は小破片だけであった。

カマド (第175図)

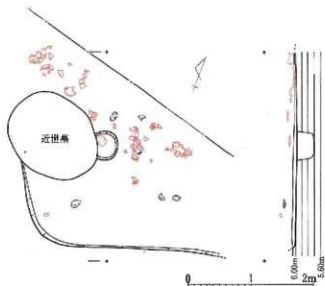
カマドは住居西に付設しているが、遺存状態は極めて悪い。その確認できる規模は西壁直交方向で約0.8m、幅約0.5mである。構造は不明である。

第174図 SC61実測図

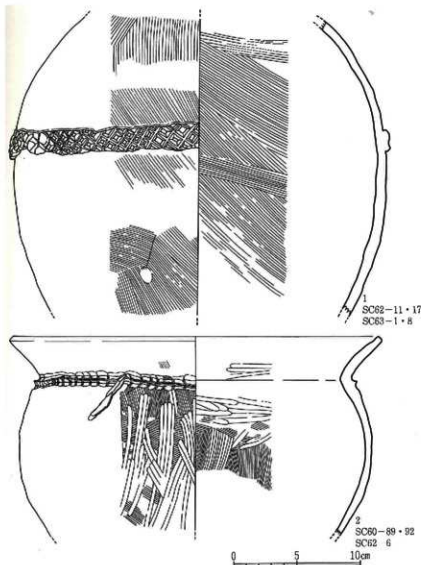


1. 暗褐色色 粘質弱、粘土を多く含む、しまり強い
2. 褐色色 粘質中、粘土を少し含む、しまりやや強い

175図 SC61カマド実測図



第176図 SC62実測図



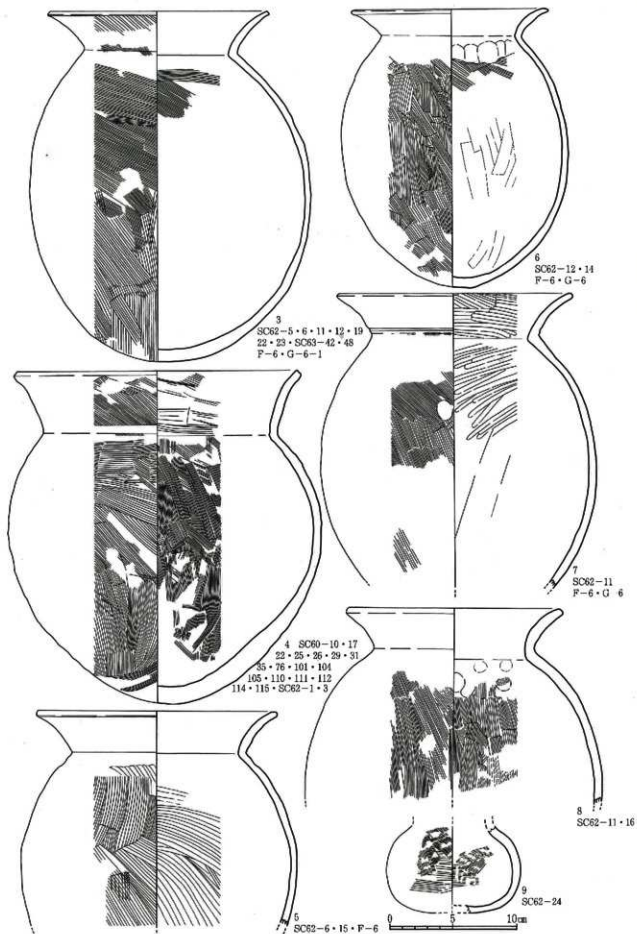
第177図 SC62の遺物実測図

62号整穴住居 (SC62) (第176図)

この住居は調査区の北端に位置する。63号住居と近世墓に切られる。遺存状態は悪く、南壁の一部と南西のコーナー部の壁が残っているだけである。また住居の半分は調査区外になるため住居の全体は確認できない。規模は東西 $2.6 + \alpha$ m、南北 $1.4 + \alpha$ m、壁高0.05mである。主柱穴は近世墓に切られる形で南西部に1本検出した。この位置関係からすると4本柱か。遺物は多く出土した。

出土遺物 (第177・178図)

土師器(1~9)は、1は複合口縁索の胴部である。胴部のやや上に格子目の刻みを施した薄く平らな突帯を1条まわす。外面は丁寧な縦から斜め方向の刷毛目調整、内面は丁寧な横から斜め方向刷毛目調整である。2は鉢である。頸部の屈曲部に指つまみの1条突帯を巡らす。その途中が一部胴部に垂れている。外面は丁寧な刷毛目調整のちミガキ調整である。内面は縦方向の丁寧な刷毛目調整で、口縁部付近は横方向のミガキである。3は甕で、頸部の屈曲点は明瞭で、そのまま口縁先端へ直線的に延びる。外面は丁寧な刷毛目で、内面は上部にのみ刷毛目調整である。4は鉢。器壁は胴部中央で薄く、底部が厚いのが明確である。内外面ともに丁寧な刷毛目調整である。5は甕である。頸部の屈曲部が明瞭である。内外面とも刷毛目調整である。6・7・8も甕である。頸部がやはり明瞭な線がつく。外面は丁寧な刷毛目調整で、内面は6は一部縦方向のケズリで、7は口縁から胴部中央まで横方向に丁寧なミガキ調整である。9は長頸甕か。内外面とも丁寧な刷毛目調整である。



第178図 SC62の遺物実測図

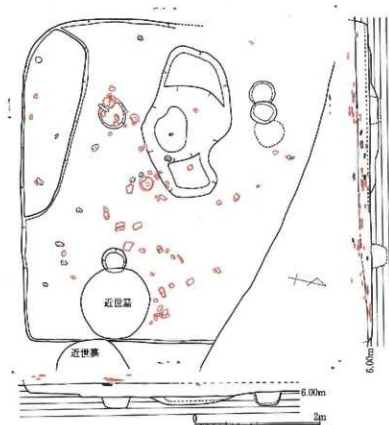
63号竪穴住居跡 (SC63) (第179図)

この住居は調査区の北端に位置している。62号住居を切り、50・64号住居から切られる。遺存状態は西壁が一部削平されているのと住居の4分の1が調査区外にかかることからあまり良好ではない。平面プランはほぼ方形を呈すると推定される。規模は東西4.8m、南北2.9+αm、壁高0.21mである。南壁際に1段高い不整形な平坦面を検出した(ベッド状遺構か)。主柱穴は3本検出し、その配置から4本柱と思われる。上炕は中央部よりやや西側で1基検出した。遺物は覆土より多く出土した。それら遺物からこの住居は古墳時代前期前葉の所産と思われる。

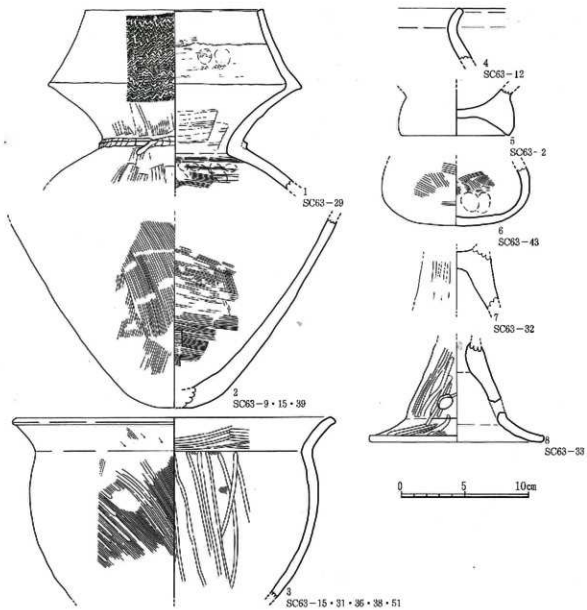
出土遺物 (第180図)

土師器(1~8)は、1は壺である。頸部屈曲部に1条の指つまみの穴を巡らす。

2は壺の底部で、尖底気味である。内外面とも丁寧な刷毛目調整である。3は鉢である。口縁部の径が胴部の径よりも大きい。外面は斜め方向の丁寧な刷毛目のち一部ミガキ調整、内面は口縁部で横方向ミガキ、胴部は縦方向ミガキを施す。4は甕である。5は鉢もしくは壺の底部か。6は壺の底部か。7・8は高坏である。8は脚部が底部に向かって開き、底部で大きく開く。脚の外表面は縦方向ミガキで、その下方に穿孔をつける。



第179図 SC63実測図



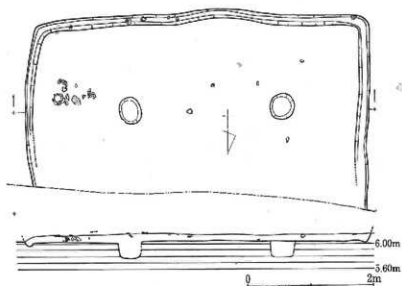
第180図 SC63の遺物実測図

64号壁穴住居跡 (SC64) (第181図)

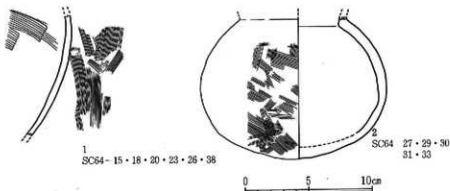
この住居は調査区の北端に位置する。63号住居を切り、34・50号住居、3号溝に切られる。遺存状態は切られる部分が多く、また住居の半分が調査区外のためあまり良好ではない。平面プランは不明である。規模は東西5.3+ α m、南北3.0+ α m、壁高0.13mである。また内側壁際には壁周溝を巡らす。壁周溝が確認できたのはこの遺跡の中ではこの住居跡だけである。主柱穴は2本確認したがその配置から4本柱の可能性が高い。遺物は少量出土した。この住居は古墳時代前期の所産と思われる。

出土遺物 (第182図)

土師器 (1・2) は、1は壺の胴部である。外面縦方向刷毛目調整、内面横方向刷毛目調整である。2は長頸壺か。外面丁寧な刷毛目調整である。



第181図 SC64実測図



第182図 SC64の遺物実測図

65号竪穴住居跡 (SC65) (第183図)

この住居は調査区の北端に位置する。35号住居に切られる。また調査区の端に位置しているため、住居の全体ははっきりしない。壁が残存しているのは南東部のコーナー付近である。カマドは西側に付設している。平面プランは不明であるが東西に長い長方形を呈していると推定される。規模は東西 $2.1+a$ m、南北 $1.0+a$ m、壁高 0.17 mである。貼り床面は一部で確認した。主柱穴は2本検出したがその配置から4本柱であったことが推定される。遺物は少量出土した。

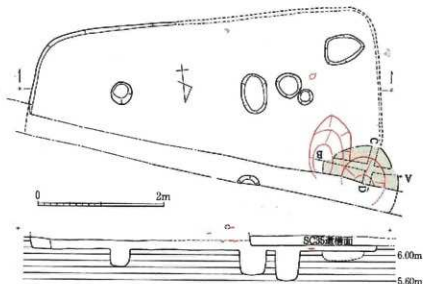
カマド (第184図)

カマドは住居西に付設される。規模は西壁直交方向で約 1.1 m、幅約 0.5 mである。重複によりあまり残りは良くないが、構造はカマド構築時の掘り込み、燃焼部の硬化した焼上面を検出した。煙道や袖石などの詳細は不明である。遺物は少量出土した。

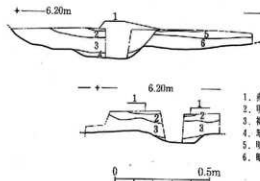
出土遺物 (第185図)

須恵器 (1) は坏身である。

土師器 (2) は竈口縁片である。

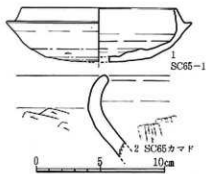


第183図 SC65実測図

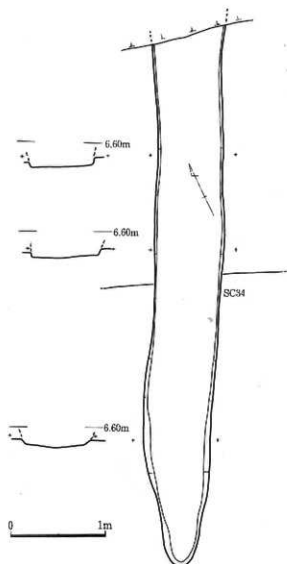


第184図 SC65カマド実測図

1. 赤褐色 固く焼けしまる
2. 明褐色 粘質や中砂、しまりやや強い
3. 暗褐色 粘質や中砂、しまりやや強い
4. 暗褐色 粘質強、しまりや強い
5. 暗黄褐色 粘質やや強、しまり強い
6. 暗褐色 粘質やや弱、しまり強い



第185図 SC65の遺物実測図

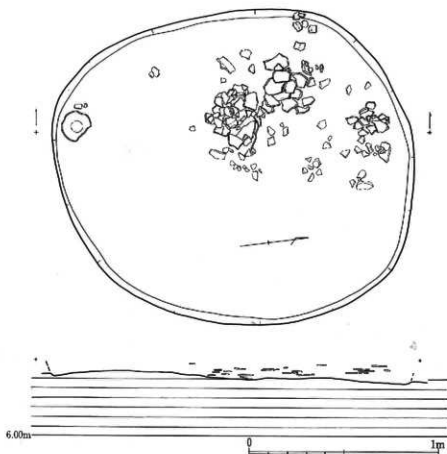


第186図 SD3実測図

(2) 溝

3号溝 (SD3) (第186図)

この溝は調査区の南に位置する。34・64号住居を切る。南北方向に延びるが残存状態はよくない。形態は溝の北端がすばまり、そこから幅が広くなり、一定の幅で延びるようである。その規模が幅約0.7mで、最大深0.09mである。長さは溝が調査区外まで延びており実際の長さは不明であるが、現状で5.5m + aである。出土遺物は須恵器の小片がわずかに出土しただけであるので、時期比定困難である。しかし埋土は中近世のそれと違い、古墳時代の住居の埋土と類似していたため、古墳時代の範疇で考えてよいと思われる。



第187図 SK25実測図

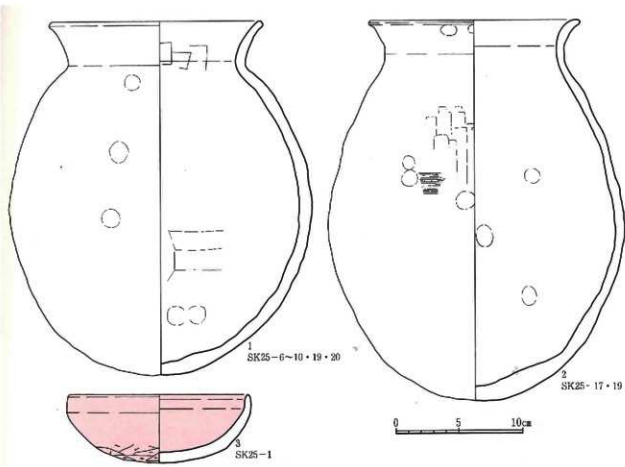
(3) 土坑

25号土坑 (SK25) (第187図)

この土坑は調査区の南東に位置する。残存状態はあまりよくない。平面プランは円形である。規模は東西軸3.2m、南北軸3.4mで、深さ0.1mである。埋土は単一で暗褐色上である。遺物は土坑の西寄りに一括して出土した。破砕した遺物はそのほとんどが復元でき、甕2点と椀1点であった。

出土遺物 (第188図)

土師器 (1~3) は、1・2は壺である。1は胴部の中央がやや張り、口縁部はくの字状に外反する。2は長胴である。3は椀である。口縁部は若干内湾気味に曲がる。外面底部は手持ちヘラケズリ調整である。



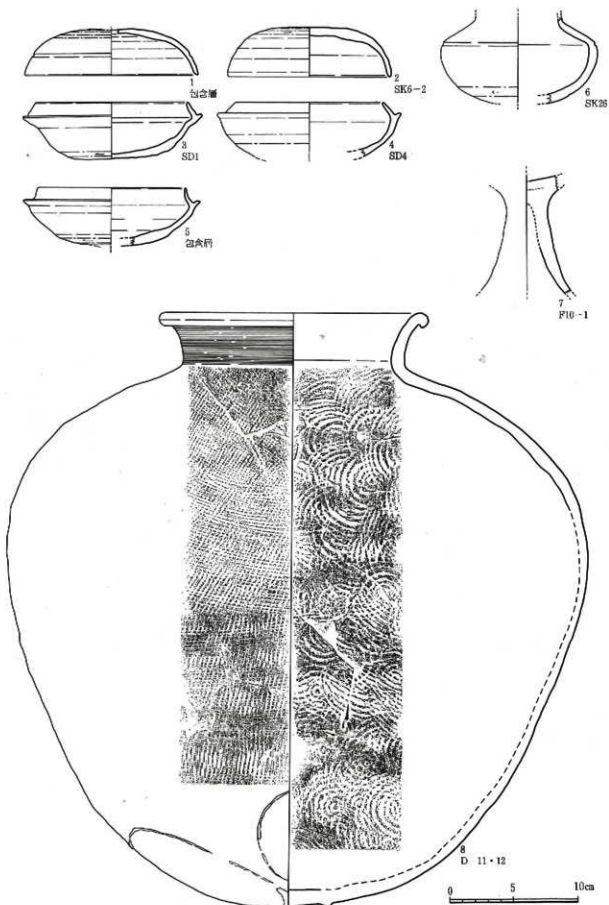
第188図 SK25の遺物実測図

(4) 包含層出土遺物 (第189・190図)

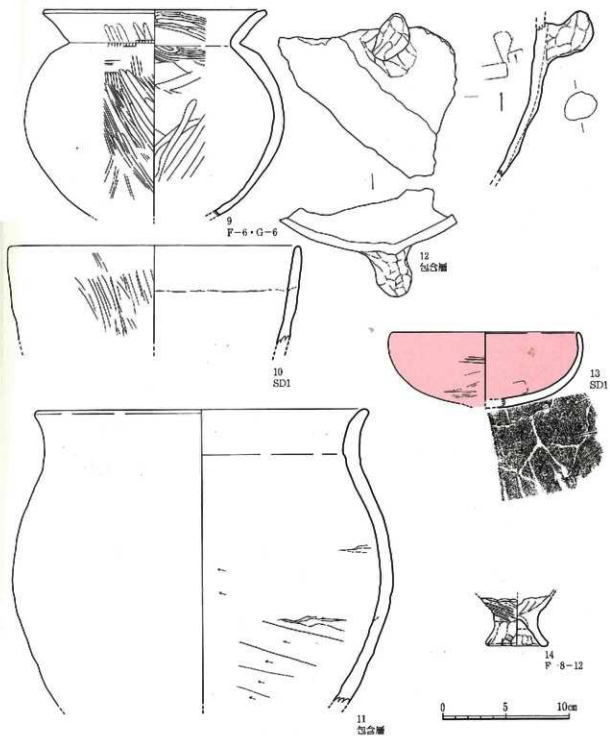
須恵器 (1~8) は、1は坏蓋である。2・3は坏身である。6は埴か。7は高坏の脚部である。8は大甕である。肩部が大きく張り、底部にむかって内傾する。外面は平行タタキ、内面は同心円紋の工具痕がのこる。また外面底部には3つの丸い痕跡が確認できた。焼成時に坏でトチンの代用としその支えとして使用した痕跡であろう。

土師器 (9~13) は、9は鉢である。胴部は球型で、頸部には明瞭な稜がつくほど口縁部にかけて鋭く外反する。外面は縦方向の刷毛目調整のち斜め方向のミガキを施す。内面も一部ケズリも見受けられるが、ミガキで整える。古墳時代前期前葉の所産である。10は瓶か。胴部から口縁先端まで少し外に開き気味に直線的に延びる。外面は粗い刷毛目調整である。11は甕である。口縁部は緩やかに外反する。内面は横方向のケズリで整える。12は甕の把手である。13は碗である。口縁部は若干内湾する。外面底部にY字状のヘラ記号が認められる。内外面朱塗りである。

製埴土器 (14) は、底帯である。外面にタタキ痕が残る。



第189図 包含層一括の遺物実測図



第190図 包含層一括の遺物実測図

第1表 遺物観察表

調査年度	種別	品名	長さ (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	形状	断面		用途	出土	色調	備考
								外	内				
80-1	9-1	環状部	環状	-	-	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質、白色粒子	黄褐色	
	9-2	環状部	環状	(13.2)	4.62上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質、白色粒子	淡黄褐色	
	9-3	環状部	環状	(12.8)	2.42上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質、白色粒子	黄褐色	
	9-4	環状部	環状	-	-	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子	淡黄褐色	
	9-5	土師器	壺	12.3	4.5	5.6	縦上げ	ナデ→ミガキ、 内オヤエ	ナデ→ミガキ、 内オヤエ	良好	石質、黒色、 赤褐色 白色粒子	淡黄褐色	内面 黄色顔料塗布 外面 黒色から褐色にスス付
	9-6	土師器	壺	(8.0)	3.0	2.6	縦上げ	ナデ→ミガキ	ナデ、内オヤエ	良好	石質、黒色、 赤褐色 白色粒子	淡黄褐色	二次焼 内外面に黒炭あり
	9-7	土師器	鉢	-	(8.9)	-	縦上げ	ナデ	ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色 白色粒子	褐色	内外面ともスス付
	9-8	土師器	壺	-	(19.2)	-	縦上げ	ナズリ→ナデ	ナデ、内オヤエ	良好	石質、黒色、 赤褐色 白色粒子	淡褐色	内面 一部黒炭、 赤炭あり
	9-9	土師器	壺	(33.0)	7.35上	-	-	ハケ→ナデ 内オヤエ、ナデ	ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色 白色粒子	淡褐色	外側 一部黒炭、赤炭あり
	9-10	土師器	壺	(16.8)	27.82上	-	-	ハケ→ナデ、 内オヤエ	ハケ→ナデ	良好	石質	淡褐色	灰層直下 内面 一部黒炭あり
80-2	9-1	環状部	環状	(14.0)	5.2	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 少量黄色粒子	淡褐色	
	9-2	環状部	環状	16.7	4.9	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄褐色	
	9-3	環状部	環状	-	-	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子	淡黄褐色	断面等に1-2の黒点とレッドが 外周に自着
	9-4	環状部	環状	-	-	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄褐色	
	9-5	環状部	環状	15.1	4.8	4.6	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黒色	二次焼成後に黒点を 認められる。外周に内出
	9-6	環状部	環状	(13.3)	5.0	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質、 黒色粒子	淡黄褐色	断面等に1-2の黒点とレッドが 外周に自着
	9-7	環状部	環状	(13.2)	4.84上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄褐色	
	9-8	環状部	環状	-	-	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子	淡黄褐色	
	9-9	土師器	壺	14.4	16.52上	-	縦上げ	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色	淡褐色	外側 赤炭
	9-10	土師器	壺	(18.0)	3.54上	-	縦上げ	ヨコナデ	ハケ→ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色	淡黄褐色	
9-11	土師器	壺	(16.3)	8.62上	-	縦上げ	ナデ	ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色	褐色		
9-12	土師器	壺	(13.1)	3.62上	-	縦上げ	黒オヤエ→ナデ	ナデ	良好	石質、白色 赤褐色	淡褐色	内面 一部赤炭	
9-13	土師器	壺	(12.3)	3.32上	-	縦上げ	ナデ	ナデ	良好	石質	淡黄褐色		
9-14	土師器	壺	(14.0)	8.92上	-	縦上げ	ナデ、内オヤエ	ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色	淡褐色		
9-15	土師器	壺	-	-	-	縦上げ	ナデ	ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色 白色粒子	淡褐色	内面 少量 外側 淡褐色	
9-16	土師器	壺	(16.2)	28.50上	-	縦上げ	ナデ	ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色	淡褐色	外側 黒炭、赤炭あり	
9-17	土師器	壺	25.4	39.5	3.4	縦上げ	下草不安定方向ナ	ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色	褐色	外側 黒炭、赤炭あり	
9-18	土師器	小壺	(8.1)	15.9	-	縦上げ	縦線へろ 内オヤエ	ナデ→内オヤエ	良好	石質、黒色、 赤褐色 白色粒子	淡褐色	二次焼成	
9-19	土師器	短壺	-	(1.2)	-	縦上げ	ナデ、内オヤエ	ナデ、内オヤエ	良好	石質、黒色、 赤褐色 白色粒子	淡褐色		
9-20	土師器	壺	(11.0)	3.32上	-	縦上げ	ナデ	ナデ	良好	石質、黒色、 赤褐色	黄褐色		
9-21	土師器	壺	-	-	-	縦上げ	ナデ	ナデ→内オヤエ	良好	石質、黒色、 赤褐色	淡褐色		
80-3	14-1	環状部	環状	(14.0)	4.12上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 白色粒子	淡黄褐色	
	14-2	環状部	環状	(16.0)	4.82上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄褐色	
	14-3	環状部	環状	(14.0)	3.20	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 白色粒子	淡黄褐色 (内面) ~ 黄褐色 (外周)	
	14-4	環状部	環状	(15.0)	4.12上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ 指ナデ	良好	石質 少量黄色粒子	淡黄褐色	
	14-5	環状部	環状	(14.0)	4.2	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ 指ナデ	良好	石質 白色粒子	淡黄褐色	
	14-6	環状部	環状	(13.2)	3.5	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ 指ナデ	良好	石質	淡黄褐色	
	14-7	環状部	環状	4.3	2.62上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄褐色	
	14-8	環状部	環状	-	2.42上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄褐色	
	14-9	環状部	環状	-	2.52上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄褐色	
	14-10	環状部	環状	-	3.82上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子	淡黄褐色	
	14-11	環状部	環状	-	3.12上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質、白色粒子	淡黄褐色	
	14-12	環状部	環状	-	2.72上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄褐色	
	14-13	環状部	環状	-	3.22上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄褐色	
	14-14	環状部	環状	-	3.12上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄褐色	
	14-15	環状部	環状	-	2.82上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子	淡黄褐色	
14-16	環状部	環状	-	2.82上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子	淡黄褐色		
14-17	環状部	環状	-	2.72上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 白色粒子	淡黄褐色		
14-18	環状部	環状	-	2.42上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	少量黄色粒子	淡黄褐色		
14-19	環状部	環状	-	4.02上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質、黒色 赤褐色	淡黄褐色		
14-20	環状部	環状	-	2.62上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	少量黄色粒子	淡黄褐色		
14-21	環状部	環状	-	2.62上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	少量 白色粒子	黄褐色		
14-22	環状部	環状	-	2.42上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄褐色		
14-23	環状部	環状	-	2.62上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄褐色		
14-24	環状部	環状	-	3.12上	-	0.90	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粒子	黄褐色		
14-25	環状部	環状	(14.2)	3.32上	-	0.90	縦線へろナズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄褐色		

第2表 遺物観察表

調査番号	種別	品名	長さ(mm)	直径(mm)	重量(g)	成形	断面			備考			
							外面	内面	断面				
SC-3	15-10	環状物	環身	(18.0)	3.7以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色結子	淡黄灰色	
	15-17	環状物	環身	(12.0)	2.6以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 白色結子	淡黄灰色	
	15-20	環状物	環身	(12.0)	3.7以上	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 淡黄色結子	淡黄灰色	
	15-22	環状物	環身	-	4.2以上	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石	淡黄灰色	
	15-23	環状物	環身	-	2.7以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・白色結子	淡黄灰色	
	15-24	環状物	環身	-	3.6以上	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 黄緑性黒色結子	淡黄灰色	
	15-25	環状物	環身	-	3.6以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	不良	石質 白色結子	白灰色	
	15-26	環状物	環身	-	2.6以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 砂粒少ない	黄緑灰色	
	15-34	環状物	環身	-	3.3以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・白色結子	淡黄灰色	
	15-35	環状物	環身	-	3.1以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 白色結子	淡黄灰色	
	15-36	環状物	環身	-	2.8以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	不良	石質	白灰色	
	15-37	環状物	環身	-	2.6以上	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄灰色	
	15-38	環状物	環身	-	2.7以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	黄緑性黒色結子	淡黄灰色	
	15-39	環状物	環身	-	2.2以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄灰色	
	15-40	環状物	環身	-	2.6以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄灰色	
	15-41	環状物	環身	-	2.6以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄緑灰色	
	15-42	環状物	環身	-	3.1以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄灰色	
	15-43	環状物	環身	-	2.6以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	砂粒少ない	淡黄灰色	
	15-44	環状物	環身	-	2.7以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質 黄緑性黒色結子	淡黄灰色	
	15-45	環状物	環身	-	1.8以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	黄緑灰色	
	15-46	環状物	輪付蓋	-	-	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・白色結子 黄緑性黒色結子	淡黄灰色	内面に白粉
	15-47	土師器	甕	(20.0)	6.6以上	-	横上げ	ハケ状工具による ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	良好	石質・白色結子 黄緑性黒色結子	淡黄灰色	
	15-48	土師器	小皿蓋	(10.5)	1.4	-	横上げ	ナデ	ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	黄緑灰色	
	15-49	土師器	蓋	-	-	-	横上げ	ハケ状工具による ナデ	ハケ状工具による ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	二次加熱あり
	15-50	土師器	蓋	(10.0)	13.0以上	-	横上げ	ハケ状工具による ナデ	ハケ状工具による ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	黄緑灰色	二次加熱あり
15-51	土師器	蓋	(14.0)	4.6以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色		
15-52	土師器	蓋	(13.0)	7.1以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色		
15-53	土師器	蓋	(20.0)	10.6以上	-	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色		
15-54	土師器	蓋	(4.6)	16.3以上	-	横上げ	ナデ 少ナハケ	ナデ 少ナハケ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	赤黄・黒黄あり	
15-56	土師器	蓋	-	19.8以上	-	横上げ	ナデ・指爪蓋	ナデ・指爪蓋	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	黒黄あり	
15-58	土師器	蓋	(25.0)	14.2以上	-	横上げ	ハケ	ハケ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	内外面に赤黄・黒黄あり	
15-57	土師器	蓋の把手	-	-	-	手摺ね	ナデ	ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色		
15-58	土師器	蓋の脚	-	-	-	横上げ	ナデ	ナデ	良好	石質	淡黄灰色		
15-59	土師器	文様	-	-	-	手摺ね	ナデ	ナデ	良好	黒石・角閃石	黄緑灰色		
15-60	土師器	輪動式蓋	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	黒石	褐色・土に白・赤褐色・灰黄色		
SC-4	16-1	環状物	環身	14.0	3.6	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石 白色結子	黄緑灰色	黒黄輪
	16-2	環状物	環身	(14.2)	4.6	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石 白色結子	淡黄灰色	同心円状に黒黄あり
	16-3	環状物	環身	-	-	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石	淡黄灰色	
	16-4	環状物	環身	(13.0)	4.1以上	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石	淡黄灰色	
	16-5	環状物	環身	(12.0)	3.8	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石	黄緑灰色	
	16-6	環状物	環身	(12.0)	3.1以上	-	0.00	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石 黄緑性黒色結子	淡黄灰色	
	16-7	環状物	環身	(18.0)	4.3以上	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質・黒石 黄緑性黒色結子	淡黄灰色	
	16-8	環状物	輪蓋	-	-	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄灰色	
	16-9	土師器	蓋	(12.0)	9.4以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	黄緑灰色	二次加熱あり
	16-10	土師器	蓋	(14.0)	7.5以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	
	16-11	土師器	蓋	(17.0)	6.3以上	-	横上げ	ナデ・指爪蓋	ナデ・指爪蓋	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	
	16-12	土師器	蓋	(14.0)	7.7以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	
	16-13	土師器	蓋	(16.0)	10.2以上	-	横上げ	ナデ・指爪蓋 ハケ	ナデ・指爪蓋 ハケ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	内面 黒黄 黄緑
	16-14	土師器	蓋	(18.0)	18.6以上	-	横上げ	ナデ・指爪蓋 ハケ	ナデ・指爪蓋 ハケ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	
	16-15	土師器	蓋	-	-	-	横上げ	ハケ	ハケ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	
16-16	土師器	蓋	(14.0)	8.6以上	-	横上げ	ナデ・指爪蓋 ハケ	ナデ・指爪蓋 ハケ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色		
16-17	土師器	長筒蓋	7.96	0.8	3.85	-	ナデ・指爪蓋 ハケ	ナデ・指爪蓋 ハケ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	一部黒黄あり	
16-18	土師器	蓋	-	-	(12.0)	横上げ	ハケ状工具による ナデ	ハケ状工具による ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色	内面 黒黄 黄緑	
16-19	土師器	蓋	(14.0)	(4.0)	(5.0)	横上げ	ナデ	ナデ	良好	石質・黒石・黄緑性 白色結子	淡黄灰色		
16-20	土師器	土コブチ	-	2.1以上	-	手摺ね	指爪蓋	指爪蓋	良好	石質・黒石 黄緑性黒色結子	淡黄灰色		
EC-5	23-1	環状物	環身	-	-	-	0.00	縦線へラウズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石質	淡黄灰色	

第3表 遺物観察表

遺物番号	種別	種名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	場所	位置		用途	土質	色調	備考
								外	内				
SC-5	23-2	陶器	191.6	3.8以上	-	0.0	ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	黄褐色		
	23-3	陶器	132.0	2.0以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	黄褐色		
	23-4	陶器	132.0	1.4以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	黄褐色	外周 自然蝕	
	23-5	土師器	136.4	-	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ナデ・羅オサエ	良好	石質、赤褐色	黄褐色	内周 黒炭、赤炭あり	
	23-6	土師器	-	-	-	0.0	ヨコナテ	ナデ	良好	白色粘土	黄褐色		
SC-6	26-2	土師器	132.0	4.1	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ 木灰方向ナデ	良好	石質	淡黄色		
	26-3	土師器	132.0	4.2以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	外周部~内周に自然蝕	
	26-4	土師器	13.8	5.7	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、肉内石	白色		
	26-5	土師器	132.0	4.2	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質	淡黄色		
	26-6	土師器	-	-	-	0.0	ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質	淡黄色	外周に自然蝕	
	26-7	土師器	-	-	-	0.0	ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質	淡黄色		
	27-8	土師器	135.0	5.9	-	0.0	細粒ヘラズリ ナデ	ナデ・ヘラズリ ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	内周に赤色顔料塗布	
	27-9	土師器	138.0	5.9以上	-	-	ナデ	ナデ・羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	反転面	
	27-10	土師器	144.0	14.8以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ナデ	ナデ・羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	二次焼成 厚炭あり	
	27-11	土師器	138.0	8.0以上	-	0.0	ナデ	ナデ・羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	27-12	土師器	137.0	29.6以上	-	0.0	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	27-13	土師器	138.0	17.5以上	-	0.0	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	内周 暗褐色 外周 暗褐色	
	27-14	土師器	136.0	20.4以上	-	0.0	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
27-15	土師器	138.0	3.8以上	4.6-4.8	0.0	細粒ヘラズリ ナデ	ナデ・羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	二次焼成あり赤炭		
27-16	土師器	-	-	-	0.0	手捏ね	羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色			
SC-7	29-1	土師器	14.2	4.5	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ 一定方向のナデ	良好	石質、赤褐色	黄褐色		
	29-2	土師器	132.0	6.2	7.0	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ 一定方向のナデ	良好	石質	黄褐色		
	29-3	土師器	12.8	4.8	8.0	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ 一定方向のナデ	良好	石質	黄褐色	内周にヘラ記号	
	29-4	土師器	132.0	4.0以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	29-5	土師器	-	-	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	内周に自然蝕	
	29-6	土師器	135.0	5.1	(4.0)	0.0	細粒ヘラズリ ナデ	ナデ	良好	石質、肉内石	淡褐色	内周外周並行	
	29-7	土師器	-	-	-	0.0	細粒ヘラズリ ナデ	ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	29-8	土師器	135.0	4.7以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	29-9	土師器	136.0	4.6以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質	黄褐色	外周自然蝕	
SC-8	32-3	土師器	14.0	3.3以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	白色粘土	黄褐色		
	32-4	土師器	12.2	4.1	8.0	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ 一定方向のナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	外周自然蝕	
	32-5	土師器	134.0	3.6以上	-	0.0	ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	黄褐色		
	32-6	土師器	134.0	4.2以上	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ 一定方向のナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	内周 黄褐色 外周黄褐色	
	32-7	土師器	-	-	-	0.0	ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	32-8	土師器	-	-	-	0.0	ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質	黄褐色		
	32-9	土師器	ニシヤ	2.5以上	-	-	手捏ね	羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	外周 淡黄色 内周 黄褐色	
	32-10	土師器	ニシヤ	4.9-4.8	2.6	-	手捏ね	羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	外周に赤炭あり	
	32-11	土師器	ニシヤ	6.2	4.2以上	-	手捏ね	羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	32-12	土師器	ニシヤ	5.5以上	(3.4)	-	手捏ね	ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	内周 黄褐色 外周 暗褐色	
	32-13	土師器	136.0	2.9以上	-	-	ナデ	ナデ	良好	石質、肉内石	淡褐色	内周並行並行 淡黄色	
	32-14	土師器	133.0	3.8以上	-	0.0	ナデ	ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	32-15	土師器	135.0	6.7以上	-	0.0	ヘラズリナデ・羅オサエ	ナデ・羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	内周 暗褐色 外周 淡黄色	
	32-16	土師器	141.0	8.9以上	-	0.0	ヘラズリナデ ナデ・羅オサエ	ナデ・羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	32-17	土師器	136.0	5.8以上	-	0.0	ナデ	ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	32-18	土師器	147.0	7.9以上	-	0.0	細粒ナデ ヘラズリナデ	細粒ナデ ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	一組反転面	
	32-19	土師器	136.0	27.8以上	-	0.0	細粒ナデ ナデ・羅オサエ	細粒ナデ ナデ・羅オサエ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
32-20	土師器	136.0	17.3以上	-	-	ヨコナテ・ナデ	ヨコナテ・ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色			
32-21	土師器	144.0	9.8以上	-	0.0	細粒ナデ	細粒ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色			
32-22	土師器	136.0	26.6以上	-	0.0	ヨコナテ・ナデ	ヨコナテ・ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色			
32-23	土師器	137.0	18.8以上	-	0.0	細粒ナデ ナデ・ヘラズリ	細粒ナデ ナデ・ヘラズリ	良好	石質、赤褐色	淡黄色			
32-24	土師器	142.0	12.8	0.0	0.0	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色			
32-25	土師器	142.0	12.8	0.0	0.0	ナデ・羅オサエ	ナデ・ヘラズリ	良好	石質、赤褐色	淡黄色			
32-26	土師器	142.0	4.4	-	-	ナデ	ナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色			
SC-10	36-1	土師器	14.8	4.4	7.0	0.0	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色		
	36-2	土師器	-	-	-	0.0	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石質、赤褐色	淡黄色	内周に赤色顔料塗布	
	36-3	土師器	113.0	4.7	-	0.0	細粒ヘラズリ ヨコナテ	ヨコナテ	良好	石質、赤褐色	黄褐色		

第4表 遺物観察表

編年層号	種別	材料	重量 (g)	寸法 (mm)	形状	遺物		出所	土	色澤	備考	
						片	片裏					
SC-11	30-2	土師器	壺 (10.8)	5.5以上	楕円	ヨコナデ	ナデ	良好	黄赤、黄褐色	灰褐色、に少し青緑色の に少し褐色、に少し褐色	外表面に 灰褐色	
	30-3	土師器	壺 (17.2)	13.4以上	-	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	良好	石黄、赤石、黄褐色	灰褐色		
	30-4	土師器	壺 (30.8)	41.3 (17.6)	楕円	ナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	良好	石黄、赤石、黄褐色	灰褐色、に少し黄褐色 灰褐色、に少し黄褐色	灰褐色 一部に 黄褐色	
	30-5	土師器	移動土器	-	-	-	ナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ	良好	石黄、赤石、黄褐色	灰褐色、に少し黄褐色	
SC-12	42-1	渡部器	杯蓋 (75.0)	4.0以上	円形	楕円ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	黄褐色		
	42-2	渡部器	杯蓋 (76.4)	3.1以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄、角閃石	黄褐色		
	42-3	渡部器	杯蓋 -	3.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	黄褐色		
	42-4	渡部器	杯蓋 -	3.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粘土	黄褐色		
	42-5	渡部器	杯蓋 (13.8)	4.7以上	-	楕円ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	黄褐色	外周へり状	
	42-6	渡部器	杯蓋 (12.2)	4.45	-	楕円ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	黄赤、50%、石黄 角閃石、黄褐色	黄褐色		
	42-7	渡部器	杯蓋 (13.4)	4.85	-	楕円ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄、角閃石	黄褐色		
	42-8	渡部器	杯蓋 (18.2)	2.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	黄褐色		
	42-9	土師器	壺 (14.8)	12.3以上	-	楕円	ハケ、ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石	灰褐色	
	42-10	土師器	壺 (14.4)	5.5以上	-	楕円	ハケ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	灰褐色	
	42-11	土師器	壺 -	7.3以上	-	楕円	ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	灰褐色	
	42-12	土師器	壺 (16.8)	14.7以上	-	ヘラケズリ、楕円 ハケ、ナデ	ナデ、ヘラケズリ ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	灰褐色、に少し黄褐色、 に少し黄褐色、に少し黄褐色	灰褐色	
	42-13	土師器	壺 -	18.4以上	-	ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	灰褐色、に少し黄褐色	一部に黄褐色	
	42-14	土師器	壺 -	17.2以上	-	楕円	ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	灰褐色	一部に黄褐色
	42-15	土師器	壺 (17.0)	13.1以上	-	楕円	ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	灰褐色	
	42-16	土師器	壺 (7.0)	7.5以上	-	楕円	ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	灰褐色	
	42-17	土師器	壺 (20.0)	10.3以上	-	楕円	ヘラケズリ	ヘラケズリ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	灰褐色	
42-18	土師器	壺 (14.0)	17.6以上	-	楕円	ヘラケズリ	不磨	良好	石黄、赤石、角閃石	灰褐色		
42-19	土師器	壺 (12.0)	18.8以上	-	楕円	楕円	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石	灰褐色		
SC-13	46-1	渡部器	杯蓋 -	3.7以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄、白色粘土	黄褐色		
	46-2	渡部器	杯蓋 -	3.3以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄、白色粘土	黄褐色		
	46-3	渡部器	杯蓋 -	3.4以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄、白色粘土	黄褐色		
	46-4	渡部器	杯蓋 -	3.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	黄褐色		
	46-5	渡部器	杯蓋 -	3.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄 白色粘土	黄褐色		
	46-6	渡部器	杯蓋 -	2.8以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄、白色粘土	黄褐色		
	46-7	渡部器	杯蓋 -	2.1以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	砂粒少ない	淡黄褐色		
	46-8	渡部器	杯蓋 -	1.3以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	淡黄褐色～黄褐色	フタミ村古	
	46-9	山形器	杯蓋 (82.1)	3.1以上	-	楕円ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	良好	石黄 黄褐色、白色粘土	黄褐色		
	46-10	山形器	杯蓋 -	2.3以上	0.2	楕円ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	黄褐色		
	46-11	山形器	杯蓋 -	2.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	砂粒少ない	灰褐色		
	46-12	山形器	壺 -	-	楕円	ヨコナデ 平行タタキ	ヨコナデ 同心円状	良好	石黄、山石、角閃石	淡褐色		
46-13	土師器	壺 (14.8)	5.6以上	-	楕円	ナデ、ハケ、1.5寸	ナデ、ミガキ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	黄褐色	内外面全体に赤色顔料	
46-14	土師器	壺 (7.0)	3.4以上	-	楕円	ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	黄褐色	内外面全体に赤色顔料	
46-15	土師器	壺 (13.0)	7.3以上	-	楕円	工業ナデ	ナデ、ハケ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	黄褐色		
46-16	土師器	ミニチュア	-	4.4以上	1.7	楕円	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	黄褐色		
46-17	土師器	ミニチュア	-	4.2以上	4.4	手摺	楕円ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	黄褐色	内外面全体に赤い	
46-18	土師器	ミニチュア	4.3	2.35	-	手摺	楕円ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石	淡褐色	内外面全体に赤い	
SC-14	48-1	渡部器	杯蓋 (13.2)	3.25	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄 黄褐色、白色粘土	黄褐色	縁部番号48-1とセットか?	
	48-2	渡部器	杯蓋 (11.0)	3.4以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	砂粒少ない	黄褐色		
	48-3	渡部器	杯蓋 -	2.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	淡黄褐色		
	48-4	渡部器	杯蓋 -	2.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	砂粒少ない	黄褐色	口縁部外面に1集の沈着する	
	48-5	渡部器	杯蓋 (11.8)	4.6以上	-	楕円ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	黄褐色	縁部番号48-1とセットか?	
	48-6	渡部器	杯蓋 (13.2)	2.6以上	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石黄	淡黄褐色		
	48-7	土師器	壺 0.6	4.9	-	手摺	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、短オサエ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	淡褐色	
	48-8	土師器	壺 (12.8)	5.45	-	楕円	楕円	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石	黄褐色～淡褐色	
	48-9	土師器	壺 (11.8)	6.1	-	楕円	ハケ、1.5寸、ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石	黄褐色～淡黄褐色	
	48-10	土師器	壺 (13.4)	5.6以上	-	楕円	ナデ、ハケ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石	淡褐色	
	48-11	土師器	壺 -	5.7以上	-	楕円	工業ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石	黄褐色～淡褐色	内外面全体に赤い
	48-12	土師器	壺 (13.0)	6.7	-	楕円	ナデ、ミガキ ナデ	ナデ、ミガキ ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石	淡褐色～黄褐色	
	48-13	土師器	壺 (15.0)	4.7以上	-	楕円	工業ナデ	工業ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	黄褐色	
	48-14	土師器	壺 (12.0)	4.6以上	-	楕円	ナデ	ナデ	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	黄褐色	
48-15	土師器	壺 11.2	5.9	-	楕円	工業ナデ、1.5寸	工業ナデ、1.5寸	良好	石黄、赤石、角閃石 角閃石、黄褐色	黄褐色		

第5表 遺物観察表

遺物番号	品名	種別	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状	表面			土質	色調	備考
								外面	内面	端部			
SC-14	44-16	土師鈿	柄	13.5	6.7	-	楕上げ	裏(口縁上)に紅線	丁取ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色～淡青色	
	44-17	土師鈿	柄	(13.2)	5.9	-	楕上げ	ハケ	ハラケナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	44-18	土師鈿	柄	(13.0)	5.6	-	楕上げ	手摺ハケナデズリヨコナデ	ハラケナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	外周部にヘラ記号
	44-19	土師鈿	柄	(14.0)	7.5以上	-	楕上げ	ハケ・ナデ	ハラケズリ・ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	44-20	土師鈿	柄	(10.8)	7.2以上	-	楕上げ	ナデ	ハラケズリ・ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	44-21	土師鈿	柄	(15.4)	16.0以上	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	44-22	土師鈿	柄	(15.2)	17.0以上	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	44-23	土師鈿	柄	(15.6)	6.4以上	-	楕上げ	ナデ・ハケ	ハラケズリ・ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	44-24	土師鈿	柄	-	7.7以上 (19.8)	-	楕上げ	工ナデ	工ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	SC-15	51-1	土師鈿	厚底	(14.3)	2.6以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色
51-2		土師鈿	厚底	-	3.5以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粘土	淡青灰色	
51-3		土師鈿	厚底	-	2.6以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粘土	淡青灰色	
51-4		土師鈿	厚底	(12.8)	4.4以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰	淡青灰色	外周ヘラ記号
51-5		土師鈿	厚底	(12.0)	4.8	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	内周ヘラ記号
51-6		土師鈿	厚底	(11.8)	3.5以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰	淡褐色	外周に自然蝕
51-7		土師鈿	厚底	(12.8)	5.2以上	-	楕上げ	手摺ハケナデズリナデ	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	内周に一部赤色顔料残存
51-8		土師鈿	厚底土師	(8.8)	8.6以上	-	楕上げ	厚底	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	赤灰
51-9		土師鈿	厚底	(12.8)	3.5以上	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	外周部赤塗り残存
SC-16		57-1	土師鈿	厚底	(14.2)	3.4以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色
	57-2	土師鈿	厚底	-	5.5以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	57-3	土師鈿	厚底	-	2.4以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粘土	淡青灰色	
	58-4	土師鈿	小笠笠	10.5	12.8以上	-	楕上げ	厚底	ハラケズリ・ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	内外面に赤色顔料残存
	58-5	土師鈿	柄	12.7	8.7	7.4	楕上げ	ナデ	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	内周に赤色顔料残存
	58-6	土師鈿	柄	(18.0)	11.1以上	-	楕上げ	工ナデ	ハラケズリ・ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	高さあり
	58-7	土師鈿	柄	24.7	27.3	-	楕上げ	ハケヨコナデ	ハラケズリ・ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色～緑褐色	高さ、赤灰あり
	58-8	土師鈿	柄	16.5	30.2	-	楕上げ	工ナデ	ハラケズリ・ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	58-9	土師鈿	柄	(14.8)	8.6以上	-	楕上げ	ナデ	ハラケズリ・ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	58-10	土師鈿	柄	(14.8)	4.7以上	-	楕上げ	ナデ	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
SC-17	58-11	土師鈿	柄	(11.6)	6.4以上	-	楕上げ	ナデ	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	58-12	土師鈿	厚底	19.0	23.5	7.8	楕上げ	厚底	ハケ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色～淡青色	二枚加減あり
	60-1	土師鈿	厚底	-	3.1以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粘土	淡青灰色	
	60-2	土師鈿	厚底	(16.4)	4.6以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰	青灰色	
	60-3	土師鈿	ミヅヤブ	(8.0)	3.1以上	-	字ね	指ナデ	指ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	60-4	土師鈿	柄	-	3.4以上	-	楕上げ	ナデ	ナデ	良好	石灰、角閃石	淡褐色	
	60-5	土師鈿	柄	-	3.4以上	-	楕上げ	ナデ・ミヅヤブ	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	外周に赤色顔料残存
	60-6	土師鈿	柄	-	2.1以上	-	楕上げ	ナデ	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	60-7	土師鈿	厚底	-	2.8以上	-	楕上げ	ナデ	ナデ	良好	石灰、角閃石	淡褐色	
	60-8	土師鈿	厚底	-	3.7以上	-	楕上げ	ナデ	ハケ	不良	石灰、角閃石	淡褐色	
SC-18	60-9	土師鈿	厚底	-	4.2以上	-	楕上げ	ナデ	ナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	61-1	土師鈿	厚底	(13.0)	4.0以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	外周に自然蝕
	61-2	土師鈿	厚底	(15.0)	3.9以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	外周に自然蝕
	61-3	土師鈿	厚底	(15.6)	3.6以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	不良	石灰、白色粘土	白灰色	
	61-4	土師鈿	厚底	(13.8)	3.8以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	赤褐色顔料粘土	淡青灰色	
	61-5	土師鈿	厚底	(14.8)	3.4以上	-	ヨコナ	ハラケナデ	ヨコナデ	良好	石灰、白色粘土	淡青灰色	
	61-6	土師鈿	厚底	(14.8)	2.8以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰	淡青灰色	
	61-7	土師鈿	厚底	16.2	4.7	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	61-8	土師鈿	厚底	(14.8)	3.0以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、白色粘土	淡青灰色	
	61-9	土師鈿	厚底	-	2.8以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	白色粘土	淡青灰色	
SC-19	61-10	土師鈿	厚底	-	3.4以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、白色粘土	淡褐色	
	61-11	土師鈿	厚底	-	3.7以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、白色粘土	淡青灰色	
	61-12	土師鈿	厚底	-	3.4以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	不良	石灰	白灰色	
	61-13	土師鈿	厚底	-	3.8以上	-	ヨコナ	ヨコナデ	ヨコナデ	不良	石灰、白色粘土	白灰色	外周にヘラ記号
	61-14	土師鈿	厚底	(13.0)	3.5以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、白色粘土	淡青灰色～淡褐色	
	61-15	土師鈿	厚底	11.4	4.8	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰、赤石、角閃石多量	淡褐色	
	61-16	土師鈿	厚底	(11.6)	4.5	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰	淡青灰色～淡褐色	
	61-17	土師鈿	厚底	(12.4)	4.8以上	-	ヨコナ	楕ハケナデズリヨコナデ	ヨコナデ	良好	石灰	淡青灰色	

第6表 遺物観察表

調査年度	種別	種名	数量	重量(g)	寸法	形状	材質			色	備考		
							外	内	土				
SC-20	63-10	銅製	環身	(12.0)	4.3x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-19	銅製	環身	(12.0)	4.3x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-20	銅製	環身	(12.0)	4.3x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-21	銅製	環身	(13.2)	4.5x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-22	銅製	環身	(12.0)	4.0	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-23	銅製	環身	(12.0)	2.8x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-24	銅製	環身	(12.0)	4.4x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	外側に自然酸化	
	63-25	銅製	環身	(12.7)	3.1x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-26	銅製	環身	—	3.7x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-27	銅製	環身	—	3.1x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-28	銅製	環身	—	3.1x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-29	銅製	環身	—	3.6x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-30	銅製	環身	—	7.4x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	内面に自然酸化	
	63-31	銅製	高坪	—	2.1x2.2 (11.0)	—	楕円ナド	ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-32	銅製	高坪	—	2.2x2.2 (12.0)	—	楕円ナド	ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	63-33	土師製	瓶	13.8	5.5	—	楕円ナド	ミガキ、ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	内外面全面に赤色顔料塗布
	63-34	土師製	瓶	(17.2)	4.6x2.2	—	楕円ナド	丁寧ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	内外面全面に赤色顔料塗布
	63-35	土師製	瓶	(18.8)	5.0x2.2	—	楕円ナド	ハケ、ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	63-36	土師製	瓶	—	7.3x2.2	—	楕円ナド	工ナド、ナド	工ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	63-37	土師製	瓶	—	10.3x2.2	—	楕円ナド	ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	64-43	土師製	瓶	—	—	—	楕円ナド	ハケ、ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	64-44	土師製	瓶	(13.6)	22.8x2.2	—	楕円ナド	ヘラウズリ、工用ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	64-45	土師製	瓶	—	11.5x2.2	—	楕円ナド	ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	一部合成
	64-46	土師製	瓶	(14.8)	30.4	—	楕円ナド	ハケ、ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	裏面、裏面あり
	64-47	土師製	瓶?	(18.1)	16.6x2.2	—	楕円ナド	ヘラウズリ、ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	64-48	土師製	瓶の把手	—	—	—	手楕円	指ナド、楕円	ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	64-49	土師製	瓶の把手	—	—	—	手楕円	指ナド、楕円	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	64-50	土師製	瓶の把手	—	—	—	手楕円	指ナド、楕円	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	SC-21	65-1	銅製	環身	(14.0)	5.4	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
		65-2	銅製	環身	(13.0)	5.0	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
65-3		銅製	環身	(13.0)	4.7	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
65-4		銅製	環身	—	3.5x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	外側に自然酸化	
65-5		銅製	環身	(13.2)	4.7x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
65-6		銅製	環身	—	3.4x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
65-7		土師製	瓶	(12.0)	4.8	3.0	楕円ナド	ナド、ミガキ	ナド、ミガキ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
65-8		土師製	瓶	(13.2)	5.5	2.0	楕円ナド	ナド、ミガキ	ナド、ミガキ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	外側に自然酸化
65-9		土師製	瓶	(14.0)	6.5	7.0	楕円ナド	指ナド、ハケ、ナド	ハケ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	内外面全面に赤色顔料塗布
65-10		土師製	瓶	(13.3)	15.3x2.2	—	楕円ナド	ハケ、ナド	ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
65-11		土師製	瓶	15.1	11.3x2.2	—	—	指ナド、ナド	指ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
65-12		土師製	瓶	—	3.1x2.2 (12.0)	—	楕円ナド	ハケ、ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
65-13		土師製	小瓶蓋	(7.2)	5.1x2.2	—	楕円ナド	ハケ、ナド	ナド、ハケ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	裏面に自然酸化
65-14		土師製	小瓶蓋	(7.2)	5.1x2.2	—	手楕円	指ナド	指ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
SC-22		69-1	銅製	環身	14.4	4.0	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	69-2	銅製	環身	12.6	4.4	6.0	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	内面にヘラウズリ	
	69-3	土師製	瓶	(18.6)	12.3x2.2	—	楕円ナド	ハケ、ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	内外面に自然酸化
	69-4	土師製	瓶	—	11.4x2.2	—	楕円ナド	ハケ、ナド	ハケ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	外側に自然酸化
	69-5	土師製	瓶	—	—	—	楕円ナド	ナド	ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	69-6	土師製	瓶	—	4.7x2.2	4.2	楕円ナド	ハケ、指ナド	ハケ、指ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	外側に自然酸化
SC-23	71-1	銅製	環身	(12.2)	2.8x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	71-2	銅製	環身	—	3.2x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	外側に自然酸化	
	71-3	銅製	環身	—	2.6x2.2	—	口ナド	ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	外側に自然酸化	
	71-4	土師製	瓶	—	—	—	楕円ナド	ナド	ヘラウズリ、ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
	71-5	土師製	小瓶蓋	7.2	4.6x2.2	—	手楕円	指ナド	指ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色	
SC-24	73-1	銅製	環身	(14.8)	4.8x2.2	—	口ナド	磨削ヘラウズリ ヨコナデ	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	73-2	土師製	瓶	—	—	—	楕円ナド	ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		
	73-3	土師製	瓶	—	—	—	楕円ナド	ナド	真鍮	自然酸化 厚み不均	淡青灰色		

第7表 遺物観察表

遺物番号	発掘 層位	種別	規格	寸法 (mm)			形状	材質		組成	出土	色調	備考
				長さ	幅	厚さ		表	裏				
SC-28	75-1	土師器	鉢	11.8	8.7	1.2	輪上付	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	暗褐色	
	75-2	土師器	鉢	18.0	14.7	3.5	輪上付	ナデ	ハケ・ナデ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	茶褐色	内耳面に磨面あり
	75-3	土師器	壺	23.1	-	-	輪上付	ハケ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡灰色、淡褐色	
	75-4	土師器	短土師	7.6±2.1	5.4-6.8	-	高肉厚	厚ナデ	厚ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	内耳面に磨面あり
SC-29	77-1	土師器	埴輪	13.0	3.9±2.1	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	77-2	土師器	壺	9.2±2.1	-	-	輪上付	ミガキ・ナデ	工具裏・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色、にじみ黄褐色、黄褐色	外側に磨面あり
	77-3	土師器	壺	17.2	3.4±2.1	-	輪上付	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
	77-4	土師器	壺	12.0	-	-	輪上付	ハケ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
SC-30	80-1	土師器	埴輪	12.8	4.4	6.0	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	80-2	土師器	埴輪	13.0	4.5±2.1	(12.0)	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
	80-3	土師器	埴輪	11.0	-	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
	80-4	土師器	壺	15.1	6.2	-	輪上付	ナデ、厚ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色、褐色	
SC-31	82-1	土師器	壺	-	-	-	輪上付	ハケ・ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	二次加熱あり、外側に磨面あり
	82-2	土師器	埴輪	14.8	4.0	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
	82-3	土師器	埴輪	14.0	3.9	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
	82-4	土師器	埴輪	13.8	4.8	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
	82-4	土師器	埴輪	-	-	-	口口	ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	82-5	土師器	壺	-	-	-	輪上付	ヘラナデ・ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
	82-6	土師器	壺	-	-	-	輪上付	ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
SC-32	83-7	土師器	壺	16.0	7.0±2.1	-	輪上付	ヘラナデ・ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	外側に磨面あり
	85-1	土師器	埴輪	15.2	4.2	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	
	85-2	土師器	埴輪	13.2	2.8	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	85-3	土師器	埴輪	11.4	-	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	85-4	土師器	埴輪	14.0	16.6	-	口口	ココナデ、輪縁部	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	85-5	土師器	埴輪	-	12.1±2.1	-	-	カマド・クダキ・ナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	85-6	土師器	壺	14.4	22.8	-	輪上付	工具裏・厚ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	二次加熱あり
	85-7	土師器	壺	14.0	7.2±2.1	-	輪上付	ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	淡褐色	内耳面に磨面あり
	85-8	土師器	壺	14.2	-	-	輪上付	ナデ	ナデ・厚ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	85-9	土師器	壺	-	20.9±2.1	4.0	輪上付	ハケ・ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	85-10	土師器	壺	-	4.6±2.1	(16.0)	輪上付	ハケ・ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	85-11	土師器	壺	-	-	-	輪上付	ハケ・ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	85-12	土師器	鉢	22.2	10.6±2.1	(11.0)	輪上付	ハケ・ナデ、厚ナデ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	黒灰、赤灰あり
85-13	土師器	鉢	22.2	21.8	(8.0)	輪上付	ココナデ、厚ナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石	黄褐色、黄褐色		
85-14	土師器	壺の把手	-	-	-	輪上付	厚ナデ・厚ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色		
87-15	土師器	壺	20.0	27.9±2.1	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	磨面あり	
87-16	土師器	小短土師	14.0	4.6±2.1	-	-	ハケ・ナデ	厚ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色		
87-17	土師器	餅付各種	-	-	-	輪上付	ハケ・ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色		
SC-33	88-16	土師器	埴輪	-	17.2±2.1	13.2	輪上付	ミガキ・ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	89-1	土師器	埴輪	16.0	2.2±2.1	-	口口	ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	外側に自然釉
	89-2	土師器	埴輪	15.2	3.7	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石	黄褐色、黄褐色	
	89-3	土師器	埴輪	-	-	-	口口	ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	89-4	土師器	埴輪	11.0	6.8	5.8	輪上付	ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	89-5	土師器	壺	15.2	11.6±2.1	-	輪上付	ナデ	ヘラナズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	89-6	土師器	壺	15.0	23.5±2.1	-	輪上付	厚ナデ	厚ナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	89-7	土師器	埴輪	17.8	8.8	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、黒石、焼成物	黄褐色	
	89-8	土師器	埴輪	15.8	4.0	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	89-9	土師器	埴輪	-	3.0	-	口口	ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
SC-34	89-10	土師器	埴輪	-	3.8±2.1	-	口口	ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	外側に自然釉
	89-11	土師器	埴輪	-	2.9±2.1	-	口口	ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	89-12	土師器	埴輪	-	3.1±2.1	-	口口	ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	89-13	土師器	埴輪	13.0	3.9±2.1	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭、白色粒子	黄褐色	
	89-14	土師器	埴輪	12.0	(3.8)	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	89-15	土師器	埴輪	-	3.2±2.1	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	89-16	土師器	埴輪	-	2.6±2.1	-	口口	面輪ハケズリ ココナデ	ココナデ	良好	石炭	黄褐色	
	89-17	土師器	埴輪	-	12.7±2.1	-	口口	クダキ・ナデ	ナデ	良好	石炭	黄褐色	

第8表 遺物観察表

遺物番号	種別	種名	場所	長さ(mm)	口径(mm)	高さ(mm)	形状	材質		用途	出土	状態	備考	
								外	内					
SC-92	92-1	土師器	灰層埋納の壺	(8.2)	3.12上	-	瓶上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭	淡青灰色		
92-12	土師器	灰層埋納の壺	(8.2)	3.12上	-	瓶上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭	淡青灰色-淡褐色			
92-14	土師器	壺	(14.4)	8.66	(5.6)	-	ハケ・ナデ	瓶脚丸・ナデ	黒鉄	石炭、黒石、陶質 内面、赤褐色子	淡青、暗褐色、にぶい黄褐色、赤褐色、淡褐色、黒褐色			
92-15	土師器	壺	(16.4)	8.12上	-	瓶上げ	ナデ	ナデ、瓶底蓋	黒鉄	石炭、黒石、陶質 赤褐色子、赤褐色子	暗褐色			
92-16	土師器	ニチュア	4.05	1.95	-	手摺	瓶脚丸・ナデ	瓶脚丸・ナデ	黒鉄	石炭、黒石、陶質 赤褐色子	赤褐色、淡褐色、淡褐色			
92-17	土師器	壺	(18.4)	8.62上	-	瓶上げ	ナデ	ハケ・ナデ、瓶底蓋	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子、赤褐色子	淡褐色			
92-18	土師器	壺	(13.2)	13.52上	-	瓶上げ	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ、瓶底蓋	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	にぶい黄褐色、黒灰色、黄褐色			
92-19	土師器	壺	(14.4)	7.24上	-	瓶上げ	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	黒鉄	石炭、黒石	淡褐色			
92-20	土師器	壺	(14.4)	8.32上	-	瓶上げ	工業用・ナデ	ヘラクスリ・ナデ、瓶底蓋	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子、赤褐色子	淡褐色	内外面に赤炭あり		
92-21	土師器	壺	(18.7)	10.62上	-	瓶上げ	ハケ・ナデ 瓶底蓋	ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	淡褐色			
92-22	土師器	壺	(14.3)	12.92上	-	瓶上げ	ハケ・ナデ 瓶底蓋	ケズリ・ナデ、瓶底蓋	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	黄褐色、にぶい黄褐色、淡褐色	内外面に黒炭あり		
92-23	土師器	壺	-	-	-	瓶上げ	ハケ・ナデ	ヘラクスリ・ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子 赤褐色子、赤褐色子	暗褐色-淡褐色	内面に黒炭あり		
92-24	土師器	壺	17.3	32.7	-	瓶上げ	ナデ	ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	にぶい黄褐色、暗褐色、黒褐色			
92-25	土師器	壺	(14.0)	21.72上	-	瓶上げ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子 赤褐色子、赤褐色子	淡褐色、にぶい黄褐色、淡褐色			
92-26	土師器	四角 塚輪	(14.6)	5.52上	-	瓶上げ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子 赤褐色子、赤褐色子	淡褐色、暗褐色、赤褐色			
92-27	土師器	四角 塚輪	(17.5)	7.12上	-	瓶上げ	ナデ・瓶底蓋	ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	赤褐色、暗褐色、にぶい黄褐色	内外面に黒炭あり		
SC-93	93-1	土師器	塚輪	(14.5)	5.1	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ナデ	黒鉄	石炭、赤石	淡褐色、灰色		
93-2	土師器	塚輪	14.0	5.8	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ナデ、不定方向ナデ	黒鉄	石炭、黒石	灰色			
93-3	土師器	塚輪	(13.7)	3.72上	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ナデ	黒鉄	石炭、黒石	灰色			
93-4	土師器	塚輪	(14.2)	3.6	(8.6)	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ナデ	黒鉄	石炭、黒石	灰白色			
93-5	土師器	塚輪	(13.8)	4.62上	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ナデ	黒鉄	石炭、黒石	暗褐色、灰色	内面自然焼		
93-6	土師器	塚輪	-	2.62上	-	ウロコ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	砂粒少ない	暗褐色			
93-7	土師器	塚輪	(13.0)	4.76	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子 赤褐色子	淡青灰色			
93-8	土師器	塚輪	12.9	4.8	-	ウロコ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭、黒石	灰色、オリーブ灰色			
93-9	土師器	塚輪	(13.2)	2.62上	-	ウロコ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	砂粒少ない	淡褐色			
93-10	土師器	塚輪	-	3.62上	-	ウロコ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	砂粒少ない	灰白色			
93-11	土師器	塚輪	-	3.62上	-	ウロコ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭	灰白色			
93-12	土師器	塚輪	(14.0)	2.62上	-	瓶上げ	ナデ	ナデ、工刀痕	黒鉄	砂粒少ない	淡青灰色			
93-13	土師器	壺	(17.2)	4.72上	-	-	ナデ	ナデ	黒鉄	石炭、黒石	灰色			
93-14	土師器	壺	(11.6)	8.12上	-	瓶上げ	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ、瓶底蓋	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	淡褐色			
93-15	土師器	壺	(13.2)	7.52上	-	瓶上げ	ナデ、瓶底蓋	ヘラクスリ・ナデ 瓶底蓋	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	淡褐色			
93-16	土師器	壺	(13.7)	6.72上	-	瓶上げ	ナデ	ヘラクスリ・ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	淡褐色-暗褐色	赤炭あり		
93-17	土師器	壺	(16.4)	8.62上	-	瓶上げ	ナデ、瓶底蓋	ヘラクスリ・ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	暗褐色	赤炭、黒炭あり		
93-18	土師器	壺	(18.5)	3.12上	-	瓶上げ	ナデ、瓶底蓋	ナデ	黒鉄	石炭、黒石	淡褐色	黒炭あり		
93-19	土師器	壺	(14.0)	5.72上	-	瓶上げ	ナデ	ナデ、瓶底蓋	黒鉄	石炭、黒石	暗褐色			
93-20	土師器	壺	(17.2)	10.8	-	瓶上げ	ヘラクスリ・ナデ 瓶底蓋	ヘラクスリ・ナデ 瓶底蓋	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子 赤褐色子	にぶい黄褐色、暗褐色、赤褐色	二次加飾あり		
93-21	土師器	壺	14.2	20.0	-	瓶上げ	ヨコナデ・瓶脚丸 ハケ・ナデ	ヨコナデ・瓶脚丸 ハケ・ナデ	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子	にぶい黄褐色、にぶい黄褐色	内外面に黒炭あり		
93-22	土師器	壺	16.0	32.2	-	瓶上げ	ヨコナデ・瓶脚丸 ハケ・ナデ	ヨコナデ・瓶脚丸 ハケ・ナデ	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子	にぶい黄褐色、赤褐色			
93-23	土師器	壺	14.4	23.9	-	瓶上げ	ヨコナデ・瓶脚丸 ナデ・ケズリ	ヨコナデ・瓶脚丸 ナデ・ケズリ	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子	にぶい黄褐色、淡褐色			
93-24	土師器	壺	-	10.42上	7.9	瓶上げ	瓶脚ヘラクスリ ハケ・ヘラクスリ	瓶脚丸・ナデ	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子 赤褐色子	淡褐色、暗褐色、にぶい黄褐色			
93-25	土師器	壺	-	10.52上	(44.6)	瓶上げ	ナデ・瓶脚丸 ヨコナデ	ケズリ・ナデ	黒鉄	石炭、黒石	にぶい黄褐色、暗褐色	塚輪焼		
SC-94	100-1	土師器	塚輪	14.0	4.0	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭	にぶい黄色-灰色	内面にヘラクスリあり
100-2	土師器	塚輪	(14.6)	4.25	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ナデ	黒鉄	石炭、黒石	灰白色			
100-3	土師器	塚輪	(13.0)	3.3	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ナデ	黒鉄	石炭、黒石	灰色、灰オリーブ色、淡灰色	塚輪焼		
100-4	土師器	塚輪	(12.3)	3.8	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	不定ナデ ヨコナデ	黒鉄	石炭	灰白色、灰黄色	内面自然焼		
100-5	土師器	塚輪	(15.9)	3.2	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	不定ナデ・ヨコナデ	黒鉄	石炭、黒石	にぶい黄色、灰色			
100-6	土師器	塚輪	(13.0)	3.62上	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	黒鉄	石炭、黒石	にぶい黄色、灰色				
100-7	土師器	塚輪	(10.2)	4.4	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	不定ナデ	黒鉄	石炭	にぶい黄色、暗褐色			
100-8	土師器	塚輪	(8.4)	3.62上	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭	淡褐色			
100-9	土師器	塚輪	(14.0)	4.5	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ヨコナデ 瓶底蓋(一定方向)	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子	灰白色			
100-10	土師器	塚輪	(10.7)	3.62上	-	ウロコ	瓶脚ヘラクスリ・ナデ	ヨコナデ	黒鉄	砂粒暗褐色子	淡青灰色	内面にヘラクスリあり、自然焼		
100-11	土師器	壺	(17.2)	21.72上	-	瓶上げ	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ 瓶底蓋	黒鉄	石炭、黒石、赤褐色子 赤褐色子	にぶい黄褐色、灰白色	内面にヘラクスリあり		
100-12	土師器	壺	(17.2)	9.56上	-	瓶上げ	ヨコナデ・瓶脚丸 ナデ	ヨコナデ・瓶脚丸 ナデ	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子	にぶい黄褐色			
100-13	土師器	壺	(12.0)	5.62上	-	瓶上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子	にぶい黄褐色	塚輪焼		
100-14	土師器	壺	(13.0)	4.62上	-	瓶上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子	にぶい黄褐色、暗褐色	塚輪焼		
100-15	土師器	壺	-	5.12上	(4.6)	瓶上げ	ハケ・ナデ	ヨコナデ	黒鉄	石炭、赤褐色子 赤褐色子	淡褐色	赤炭、黒炭あり		

第9表 遺物観察表

発掘番号	層位	種別	器種	長さ (cm)	口径 (cm)	高さ (cm)	口径/高さ	形状	断面		産地	出土	色澤	備考	
									外面	内面					
SC-34	101-1	土師器	碗	10.6	18.0	-	-	楕円形	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	に白い黄褐色の斑紋あり		
	101-12	土師器	碗	9.3	4.6	0.80	-	楕円丸・ナデ	楕円丸・ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	褐色・灰褐色			
	101-15	土師器	碗	(11.0)	6.12	-	-	ハケ・ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	褐色	内面一部自然釉あり		
	101-19	土師器	野付香炉	-	3.52	(8.4)	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	101-22	土師器	ミニチュア	5.7	3.48	-	-	手捏丸	ナデ	ナデ	良好	黒石・赤石・焼酎	暗赤褐色		
SC-35	104-1	土師器	埴盆	(10.0)	4.1	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰	淡褐色			
	104-2	土師器	埴盆	(14.0)	4.12	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・白色粘土	淡褐色～黄褐色			
	104-3	土師器	埴盆	(14.0)	5.6	(2.0)	0.70	ココナデ	ココナデ	良好	ココナデ	淡褐色	内面底部にヘウ記号あり		
	104-4	土師器	埴盆	(13.0)	3.42	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	ココナデ	淡褐色	外側に自然釉		
	104-5	土師器	埴盆	(12.0)	4.9	(6.0)	0.70	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・白色粘土	淡褐色			
	104-6	土師器	埴盆	-	-	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・白色粘土	淡褐色～黄褐色	内面同心円状で具厚		
	104-7	土師器	埴盆	(11.4)	4.2	(6.2)	0.70	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・白色粘土	黄褐色			
	104-8	土師器	埴盆	9.3	24.02	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・緑石	に白い斑紋・黄色	口縁内外自然釉・胴部自然釉		
	105-4	土師器	埴盆	(13.4)	6.52	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	105-10	土師器	埴盆	(16.3)	6.02	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	105-11	土師器	埴盆	(20.0)	5.52	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	105-12	土師器	埴盆	19.4	23.3	9.0	0.70	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色	口ヤドの玉環として使用されている		
	105-13	土師器	埴盆	(16.4)	6.52	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	105-14	土師器	埴盆	(25.7)	9.02	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	褐色			
	105-16	土師器	埴盆	-	28.42	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	赤褐色・赤色・黄褐色			
	105-16	土師器	埴盆	10.4	16.72	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	赤褐色・に白い斑紋			
	105-17	土師器	高杯	(16.0)	12.8	(10.8)	0.70	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・緑石・焼酎	赤褐色・淡赤褐色	内面基部まで有り		
SC-36	108-1	土師器	埴盆	12.4	4.1	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	黄褐色			
	108-2	土師器	埴盆	-	-	-	-	ココナデ	ココナデ	不良	白色粘土	白灰色			
	108-3	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・白色粘土	黄褐色～淡褐色	把手部に自然釉		
	108-4	土師器	小知瓶	(8.5)	4.72	-	-	ナデ	ナデ	良好	黒石・焼酎	赤褐色			
	108-5	土師器	埴盆	19.2	(11.6)	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	褐色・に白い斑紋			
	108-6	土師器	埴盆	(21.0)	5.52	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	暗褐色～淡褐色			
	108-7	土師器	ミニチュア	-	2.62	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色	外側に自然釉・淡褐色		
SC-37	119-1	土師器	碗	-	-	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	ココナデ	淡褐色			
	119-2	土師器	埴盆	13.15	4.9	6.6	0.70	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石	淡褐色	外周一部自然釉		
	112-1	土師器	埴盆	(12.0)	4.70	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石	に白い斑紋・淡褐色			
	112-2	土師器	埴盆	-	3.12	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	砂粒少ない	淡褐色			
	112-3	土師器	埴盆	-	-	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	112-4	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	112-5	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	112-6	土師器	埴盆	-	2.52	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	112-7	土師器	埴盆	(19.2)	6.12	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色	底面あり		
	112-8	土師器	埴盆	-	7.52	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	褐色～淡褐色			
	112-9	土師器	埴盆	(14.0)	6.70	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	赤褐色・淡褐色・淡赤褐色	底面・底面あり		
SC-39	115-1	土師器	碗	-	-	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	ココナデ	暗褐色			
	115-2	土師器	碗	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石	淡褐色	外周に赤色顔料		
	117-1	土師器	碗	(16.0)	3.12	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色～暗褐色	底面あり		
SC-40	117-2	土師器	碗	-	2.62	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
SC-41	120-1	土師器	埴盆	(15.4)	3.8	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・白色粘土	灰色			
	120-2	土師器	埴盆	(15.2)	4.06	-	-	ココナデ	ココナデ	不良	石灰・黒石	白色	内面に同心円状で1度		
	120-3	土師器	埴盆	12.8	19.0	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石	灰色			
	120-4	土師器	埴盆	(19.2)	3.6	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰	淡褐色～黄褐色	外周にヘウ記号		
	120-5	土師器	埴盆	(16.2)	4.12	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
	120-6	土師器	埴盆	(11.6)	13.02	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色	外周一部自然釉あり		
	120-7	土師器	埴盆の底面	-	-	5.0	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	暗褐色			
	120-8	土師器	埴盆	(18.4)	6.52	-	-	ココナデ	ココナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色～褐色			
	120-9	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色～褐色			
	120-10	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	暗褐色			
	120-11	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色			
120-12	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色				
120-13	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色				
120-14	土師器	埴盆	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石灰・黒石・焼酎	淡褐色				

第10表 遺物観察表

遺物種別	遺物番号	種別	時期	重量 (g)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状	表面		産地	土質	色調	備考
									口	底				
320-14	土師群	壺	-	-	-	-	-	瓶上げ	ナデ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-15	土師群	壺	-	-	-	-	-	瓶上げ	ナデ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-17	土師群	瓶	(16.1)	4.34±1.2	-	-	-	瓶上げ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-19	土師群	小瓶	-	4.16±1.2	-	-	-	瓶上げ	工員組・ナデ	ハラケズリ・ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-42	土師群	埴輪	(15.0)	3.5	-	-	-	口	ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	外周上部へ部2号
320-2	土師群	埴輪	14.5	3.5	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-3	土師群	埴輪	14.8	4.2	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-4	土師群	埴輪	(13.0)	4.5	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-6	土師群	埴輪	(13.0)	3.65	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-7	土師群	埴輪	(14.8)	4.2	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-9	土師群	埴輪	(16.0)	3.88±1.2	-	-	-	口	ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-10	土師群	埴輪	(14.0)	4.25	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-9	土師群	埴輪	(12.0)	3.4	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	外面自然釉
320-11	土師群	埴輪	14.0	3.9	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-11	土師群	埴輪	-	-	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-12	土師群	埴輪	-	-	-	-	-	口	ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-13	土師群	埴輪	-	-	-	-	-	口	ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-14	土師群	埴輪	(8.1)	2.84±1.2	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	共同自然釉
320-16	土師群	埴輪	(13.0)	4.12±1.2	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-18	土師群	埴輪	12.6	4.2	4.0	0.0	0.0	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	外面自然釉
320-19	土師群	埴輪	(11.0)	4.32±1.2	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-20	土師群	埴輪	(13.0)	4.1	(4.0)	0.0	0.0	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-21	土師群	埴輪	12.36	4.1	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-22	土師群	埴輪	(11.1)	3.7	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-23	土師群	埴輪	(13.0)	3.8	(4.0)	0.0	0.0	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	ゆがみ強い
320-24	土師群	埴輪	(14.0)	3.84±1.2	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-25	土師群	埴輪	(13.0)	4.12±1.2	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-26	土師群	埴輪	-	-	-	-	-	口	ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-27	土師群	埴輪	-	-	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-28	土師群	埴輪	(14.0)	4.4	-	-	-	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-29	土師群	埴輪	12.3	3.8	10.0	0.0	0.0	口	ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-30	土師群	埴輪	-	7.25±1.2	1.0	0.0	0.0	口	瓶輪ヘラクスリ ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-31	土師群	大甕	(23.2)	5.45±1.2	-	-	-	口	ココナデ	ココナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-32	土師群	瓶	(21.0)	6.65±1.2	-	-	-	口	ココナデ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-33	土師群	瓶	(16.1)	6.61	(5.0)	0.0	0.0	瓶上げ	丁寧なナデ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-34	土師群	瓶	-	8.62±1.2	-	-	-	ナデ	ナデ・ハケ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-35	土師群	小瓶	7.6	3.0	3.0	0.0	0.0	瓶上げ	ナデ	瓶底	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-36	土師群	ヒコユチヤ	4.4	7.42±1.2	-	-	-	-	瓶脚	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-37	土師群	ヒコユチヤ	(4.0)	1.7	-	-	-	手摺	ナデ・瓶オサエ	瓶オサエ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-38	土師群	高坏	-	12.42±1.2	-	-	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-39	土師群	高坏	6.51±1.2	-	-	-	-	-	ナデ・工員組	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-40	土師群	高坏	-	7.82±1.2	(12.4)	-	-	-	ナデ・ココナデ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-41	土師群	壺	-	34.62±1.2	-	-	-	瓶上げ	ナデ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-42	土師群	壺	(12.3)	6.51±1.2	-	-	-	瓶上げ	ハラケ・ナデ	ナデ・瓶オサエ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-43	土師群	壺	(11.0)	-	-	-	-	瓶上げ	ハラケ・ナデ	ハラケ・ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-44	土師群	壺	(14.0)	4.21±1.2	-	-	-	瓶上げ	ナデ	ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-45	土師群	壺	(17.0)	6.52±1.2	-	-	-	瓶上げ	工員組・ナデ	ナデ・瓶オサエ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-46	土師群	壺	(16.2)	11.62±1.2	-	-	-	瓶上げ	ハラケ・ナデ	ハラケ・ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-47	土師群	壺	14.8	35.2	2.7	0.0	0.0	瓶上げ	ハラケ・ナデ	ハラケ・ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-48	土師群	壺	(17.0)	28.82±1.2	-	-	-	瓶上げ	ココナデ・瓶オサエ ナデ・工員組・ナデ	ココナデ・瓶オサエ ナデ・工員組・ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-49	土師群	壺	(14.0)	16.52±1.2	-	-	-	瓶上げ	ハラケ・ナデ	ハラケ・ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-50	土師群	壺	(16.0)	39.2	-	-	-	瓶上げ	ココナデ・瓶脚 ナデ・ハケ	ココナデ ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	内外面漆塗り有り
320-51	土師群	壺	(24.2)	30.2	10.3	0.0	0.0	瓶上げ	ココナデ・瓶脚 ナデ・ハケ	ハラケズリ・ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-52	土師群	壺	(28.2)	12.62±1.2	-	-	-	瓶上げ	ココナデ・ハケ	瓶底	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-53	土師群	壺	(28.2)	12.62±1.2	-	-	-	瓶上げ	ココナデ・ハケ	瓶底	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	
320-54	土師群	壺	(16.0)	14.4	7.3	0.0	0.0	瓶上げ	ナデ	ハラケズリ・ナデ	良好	黄石・黄内石 黄褐色	淡褐色	

第11表 遺物観察表

遺物番号	出土層	種別	容積	高さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	底形	取手	肩	胴	口	胎土	色・調	備考
SC-43	129-1	土師器	杯	18.2	4.92上	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	青灰色	内底、胎心面まで黒色
	129-2	土師器	杯	14.0	3.71上	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	青灰色	内底、胎心面まで黒色	
	129-3	土師器	杯	-	-	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	青灰色	口縁部は裏面に打ち穴が施されている	
	129-4	土師器	杯	13.4	3.8	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	青灰色	外底自然釉	
	129-5	土師器	杯	15.8	3.92上	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡灰色		
	129-6	土師器	杯	16.0	3.92上	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭	淡青灰色		
	129-7	土師器	杯	-	3.22上	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭	灰色		
	129-8	土師器	杯	12.3	4.1	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭	淡青灰色	外壁へらぎ	
	129-9	土師器	杯	14.0	3.12上	-	口口	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	淡青灰色	外壁に自然釉	
	129-10	土師器	杯	14.0	3.32上	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭、白色磁子	淡青灰色		
	129-11	土師器	杯	12.6	4.1	5.3	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡灰色		
	129-12	土師器	杯	-	2.56上	-	口口	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	淡青灰色		
	129-13	土師器	杯	-	2.92上	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭、白色磁子	淡青灰色		
	129-14	土師器	杯	11.2	-	-	口口	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	淡青灰色	内面に自然釉	
	129-15	土師器	蓋形小鉢	-	-	(11.8)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	無色一淡青灰色		
	129-16	土師器	壺	9.8	19.3	3.0	縁上げ	ハケナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡青色	取手なし。外底に褐色斜線状の跡あり	
	129-17	土師器	壺	12.8	19.82上	-	縁上げ	ハケナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	暗褐色	取手なし。外底、赤黄あり	
	129-18	土師器	壺	10.8	7.32上	-	縁上げ	ナデ	ヘラズリナデ	良好	黒石・角閃片	淡灰色	外壁に文様あり	
	129-19	土師器	壺	16.0	34.8	2.4	縁上げ	工芸ナデナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	暗褐色	外壁に赤黄・灰黄あり	
129-20	土師器	壺	12.8	19.82上	-	縁上げ	ハケナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡青灰色			
129-21	土師器	壺	12.8	19.82上	-	縁上げ	工芸ナデナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色			
129-22	土師器	壺	12.0	9.8	-	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヨコナデ・指押エナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	無色、黄色、に少し褐色			
129-23	土師器	壺	18.0	19.82上	-	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヨコナデ・指押エナデ	良好	黒石・角閃片	に少し褐色			
129-24	土師器	壺	18.0	22.52上	-	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヨコナデ・指押エナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	無色一暗褐色	内外面に黒黄あり		
129-25	土師器	壺	21.4	15.72上	-	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヨコナデ・指押エナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	無色、黄色、に少し褐色			
129-26	土師器	壺	25.0	13.22上	-	縁上げ	工芸ナデナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色			
129-27	土師器	壺	16.1	14.82上	-	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヨコナデ・指押エナデ	良好	黒石、角閃片	無色、淡黄色、褐色	外壁自然釉あり		
129-28	土師器	壺	17.4	18.52上	-	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヨコナデ・指押エナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	に少し褐色			
129-29	土師器	壺	24.0	23.0	-	縁上げ	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色	外壁に黒黄あり		
129-30	土師器	壺	14.4	24.0	-	縁上げ	ハケナデ・指押エナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色	赤黄・黒黄あり		
129-31	土師器	壺	15.2	24.4	-	縁上げ	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	無色	赤黄・黒黄あり			
129-32	土師器	壺	18.4	24.9	-	縁上げ	ハケナデ・指押エナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色	赤黄・黒黄あり		
129-33	土師器	壺	8.8	20.8	-	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヨコナデ・指押エナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	暗褐色、暗赤灰色			
129-34	土師器	壺	14.2	22.0	-	縁上げ	ハケナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色	黒黄あり		
129-35	土師器	壺	18.8	29.0	-	縁上げ	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色	赤黄・黒黄あり		
129-36	土師器	壺	-	19.22上	-	縁上げ	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色	取手なし。外底に黒黄あり		
129-37	土師器	壺	14.8	28.1	-	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヨコナデ・指押エナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	無色、赤褐色			
129-38	土師器	壺	-	25.82上	-	縁上げ	工芸ナデナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	暗褐色			
129-39	土師器	壺	18.0	31.7	-	縁上げ	ハケナデ・指押エナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色	赤黄あり		
129-40	土師器	壺	19.4	31.4	-	縁上げ	工芸ナデナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色			
129-41	土師器	壺	18.0	15.8	3.4	縁上げ	ヨコナデ・指押エナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	暗褐色			
129-42	土師器	壺	13.2	2.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	に少し褐色	内外面 (赤黄あり、黒黄あり)		
129-43	土師器	蓋形小鉢	-	6.72上	-	-	指押エナデ	指押エナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	無色、に少し褐色	穿孔1つ以上有り		
129-44	土師器	ミニチュア	2.6	1.7	-	平ね	ハケナデ	ハケナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡褐色			
129-45	土師器	ミニチュア	4.4	4.5	-	平ね	ハケナデ	ハケナデ	良好	石炭・角閃片	淡褐色	内外面に赤褐色斜線あり		
129-46	土師器	ミニチュア	5.0	3.5	-	平ね	ハケナデ	ハケナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	褐色	外壁黒黄		
129-47	土師器	文房	-	12.7	4.8	-	ヘラナデナデ	-	良好	石炭・黒石・角閃片	褐色			
SC-44	128-1	土師器	壺	-	-	-	縁上げ	ハケナデ	ナデ	良好	黒石・角閃片	淡青灰色		
SC-45	128-1	土師器	壺	-	-	-	平ね	ヘラズリナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡青灰色		
SC-46	128-1	土師器	蓋形小鉢	5.12上	-	-	縁上げ	ハケナデ	ナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡青灰色		
SC-47	149-1	土師器	壺	14.7	4.7	-	口口	凹線ヘラズリ口ナデ	ヨコナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡青灰色		
141-1	土師器	壺	2.82上	-	-	口口	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	淡青灰色一淡黄色	外壁に自然釉		
141-2	土師器	壺	18.1	3.72上	-	縁上げ	ナデ	ナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡青灰色	取手なし		
141-3	土師器	壺	18.0	1.92上	-	縁上げ	ハケナデ・指押エナデ	ナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	淡青灰色			
141-4	土師器	壺	13.2	14.82上	-	縁上げ	ハケナデ	ヘラズリナデ	良好	石炭・黒石・角閃片	暗褐色	内外面に赤黄・黒黄		
141-5	土師器	壺	15.2	22.82上	-	縁上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	暗褐色、黄色			

第12表 遺物観察表

観測番号	経緯	種別	群集	直径(mm)	重量(g)	目録	形状	断面		土質	色調	備考
								外	内			
141-7	土師群	壺	(17.2)	13.4	2.0	縦上打	ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色・赤褐色		
141-8	土師群	壺	(16.0)	16.25g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色	外側一部黒炭・赤炭あり	
141-9	土師群	壺	18.2	20.9g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	暗褐色	外側赤色原料残存	
141-10	土師群	壺	(14.0)	22.6g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色	内外黒一様炭	
141-11	土師群	高耳取部	(13.7)	4.72g上	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラズリ	黒石、黒石、角閃	赤褐色	内外黒炭入り有り	
144-1	深溝群	研蓋	(13.0)	4.82g上	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
144-2	深溝群	研蓋	(14.2)	4.85g上	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
144-3	深溝群	研蓋	(14.2)	3.02g上	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色	外側全体に自然炭	
144-4	深溝群	研蓋	(12.2)	4.26g上	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
144-5	深溝群	研蓋	(13.0)	3.05g上	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色	外側全体に自然炭	
144-6	深溝群	研蓋	(13.3)	5.0	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色	外側一部自然炭	
144-7	深溝群	研蓋	(12.8)	3.36g上	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色	外側一部自然炭	
144-8	深溝群	研蓋	-	-	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
144-9	土師群	壺	(14.2)	3.85g上	-	縦上打	ナデ	ナデ・無障瓦	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
144-10	土師群	壺	(13.0)	5.16g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ナデ	黒石	淡褐色		
144-11	土師群	壺	(17.0)	8.76g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ナデ・無障瓦	黒石	淡褐色		
144-12	土師群	壺	14.0	11.6g上	-	縦上打	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
144-13	土師群	壺	13.7	11.8	-	縦上打	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
144-14	土師群	壺	-	-	-	縦上打	ナデ	ナデ	黒石	淡褐色		
144-15	土師群	壺	14.3	6.8	-	縦上打	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、黒石、角閃	赤褐色	内外黒炭入り有り	
146-1	土師群	研蓋	12.7	3.8	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色	外側にヘラズリあり	
146-2	土師群	壺	(14.8)	4.32g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
146-3	土師群	壺	(18.0)	17.8g上	-	縦上打	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
146-4	土師群	壺	(11.0)	8.76g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
146-5	土師群	壺	-	16.56g上	15.2	縦上打	ナデ	ナデ・無障瓦	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
146-6	土師群	壺	(13.0)	5.42g上	-	-	ナデ	ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色	内外黒炭入り有り	
148-1	深溝群	研蓋	-	-	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
148-2	深溝群	研蓋	-	-	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
148-3	土師群	壺	(16.0)	5.76g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
148-4	土師群	壺	19.4	7.24g上	-	縦上打	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
148-5	土師群	壺	-	7.42g上	(18.0)	縦上打	工真ナデ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
150-1	深溝群	研蓋	(14.0)	3.12g上	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
150-2	深溝群	研蓋	13.05	3.8	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色	外側一部自然炭	
150-3	土師群	壺	(11.7)	4.26	(6.5)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、黒石	淡褐色		
150-4	土師群	壺	-	-	-	縦上打	ハテ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色	外側赤炭あり	
150-5	土師群	壺	-	-	-	縦上打	ハテ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
150-6	土師群	高耳取部	-	4.82g上	(11.0)	-	無障瓦・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、角閃石	淡褐色・褐色		
150-7	土師群	壺	(22.0)	5.82g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色	内外黒一様炭	
150-8	土師群	腹取部	-	31.95g上	-	-	ナデ・ハテ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
154-1	深溝群	研蓋	(16.0)	3.26g上	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
154-2	深溝群	研蓋	(14.2)	3.8	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ナデ	ヨコナデ	黒石、黒石	淡褐色		
154-3	深溝群	研蓋	(14.0)	3.32g上	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、黒石	淡褐色		
154-4	深溝群	研蓋	-	-	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
154-5	深溝群	研蓋	-	-	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
154-6	深溝群	研蓋	(10.0)	2.72g上	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
154-7	深溝群	研蓋	-	-	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
154-8	深溝群	研蓋	(12.7)	3.72g上	-	ロウロ	縦短ヘラズリ・ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
154-9	深溝群	研蓋	(12.1)	2.62g上	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色	外側に自然炭	
154-10	深溝群	研蓋	-	-	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石	淡褐色		
154-11	深溝群	壺	8.06	9.2	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒石、黒石	淡褐色		
154-12	深溝群	壺	-	-	-	ロウロ	平打ナデ・ナデ	内側肉取部にて1層	黒石	淡褐色		
154-13	土師群	壺	17.3	18.2	-	縦上打	ハテ・ヨコナデ	ハテ・ヨコナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
154-14	土師群	壺	-	12.82g上	-	縦上打	ヘラナデ・工真瓦	ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
154-15	土師群	壺	-	11.72g上	-	縦上打	ハテ・ナデ	ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		
154-16	土師群	壺	-	14.02g上	-	縦上打	ナデ	ヘラズリ・無障瓦	黒石、角閃石	淡褐色		
154-17	土師群	壺	(13.0)	8.92g上	-	縦上打	縦いハテ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒石、黒石、角閃	淡褐色		

第13表 遺物観察表

遺物番号	種類	品名	長さ(cm)	直径(cm)	重量(g)	形状	断面		表	裏	土	色	備考
							外周	内周					
SC-33	156-14	土師器 鉢	(18.0)	16.0以上	-	横上げ	ヨコナデ ナデ・握持足	ヨコナデ ナデ・握持足	黒野	石炭・角閃石	淡褐色、淡黄褐色 褐色、に少し黄褐色		
	156-15	土師器 鉢	(16.0)	20.0以上	-	横上げ	ヨコナデ ハケ・ナデ	ヨコナデ 握持足・ヘラナデ	黒野	石炭・角閃石	褐色、に少し黄褐色 に少し黄褐色、淡黄褐色		
	156-16	土師器 鉢	(18.0)	8.0以上	-	横上げ	ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒野	石炭・角閃石	褐色、角閃石 白色点		
	156-17	土師器 鉢	-	6.0以上	-	横上げ	ハケ・ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡褐色		
	156-18	土師器 鉢	-	12.0以上	-	横上げ	ナデ・ハケ・クズ リ	ナデ・握持足	黒野	石炭・角閃石	に少し黄褐色 淡黄褐色、褐色		
	156-19	土師器 鉢	-	2.0以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	156-20	土師器 鉢	-	4.0以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	156-21	土師器 鉢	-	2.7以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	156-22	土師器 鉢	-	5.1以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	156-23	土師器 鉢	-	5.0以上	-	横上げ	ナデ	ナデ・握持足	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色、に少し黄褐色		
	156-24	土師器 鉢	-	5.3以上	-	横上げ	ナデ	ハケ・ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	156-25	土師器 鉢	-	4.7以上	-	横上げ	ハケ・ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	156-26	土師器 鉢	-	5.2以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	褐色点		
	156-27	土師器 鉢	-	5.2	-	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	黒野	角閃石	褐色、に少し黄褐色	内外表面滑り有り	
	156-28	土師器 鉢	-	3.1以上	-	横上げ	横溝	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布	
156-29	土師器 鉢	-	-	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	角閃石・角閃石	褐色褐色			
156-30	土師器 鉢	-	-	-	手捏	握持足・ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色			
156-31	土師器 高杯	16.7	10.3	11.4	-	ヨコナデ ヘラナデ	ナデ・ヨコナデ ヘラナデ	黒野	石炭・角閃石	赤褐色、褐色、淡黄褐色 に少し黄褐色、黄褐色、白褐色			
SC-34	159-1	土師器 杯	(14.0)	4.5	-	ロウロ	握持ヘラナデ ヨコナデ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石	赤褐色		
	159-2	土師器 杯	14.8	4.7	-	ロウロ	握持ヘラナデ ヨコナデ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	159-3	土師器 杯	(14.0)	5.0以上	-	ロウロ	握持ヘラナデ ヨコナデ	ヨコナデ	黒野	石炭	淡黄褐色		
	159-4	土師器 杯	(15.2)	4.3以上	-	ロウロ	握持ヘラナデ ヨコナデ	ヨコナデ 握持ナデ(一方向)	黒野	石炭・白色点	淡黄褐色		
	159-5	土師器 杯	(14.0)	4.5以上	-	ロウロ	握持ヘラズリ ヨコナデ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	159-6	土師器 杯	(12.0)	3.7以上	-	ロウロ	握持ヘラズリ ヨコナデ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	159-7	土師器 杯	(13.0)	5.0	-	ロウロ	握持ヘラナデ ヨコナデ	ヨコナデ 握持ナデ(一方向)	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	159-8	土師器 杯	-	-	-	ロウロ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石 白色点	淡黄褐色		
	159-9	土師器 杯	(14.4)	3.0	-	横上げ	ヨコナデ 握持ナデ・エダ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石 褐色点	に少し黄褐色、褐色		
	159-10	土師器 高脚杯	-	12.0以上	-	横上げ	握持足 握持ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石 褐色点	褐色		
159-11	土師器 鉢	-	-	-	横上げ	ヘラナデ・ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色～褐色			
159-12	土師器 鉢	-	17.0以上	(16.3)	横上げ	ナデ・ハケ	ナデ	黒野	石炭・角閃石 褐色点	褐色、黄色	表面有り		
SC-35	160-1	土師器 鉢	15.0	7.5以上	-	横上げ	握持ヘラナデ	ヘラズリ・ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	160-2	土師器 鉢	-	-	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
SC-36	165-1	土師器 横溝	-	13.0以上	-	横上げ	握持足・ナデ・ハ ケ	ヘラズリ 握持ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色、褐色 に少し黄褐色、灰色	表面有り	
	165-2	土師器 鉢	-	-	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	165-3	土師器 小皿	-	-	-	横上げ	ナデ・握持足	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	165-4	土師器 高脚杯	(15.0)	6.2以上	-	-	ヨコナデ・ナデ	ナデ・エダ	黒野	石炭・角閃石	褐色、に少し黄褐色		
SC-38	168-1	土師器 握持口鉢	-	16.0以上	-	横上げ	ヘラ ナデ・エダ	ヘラ ナデ・握持足	黒野	石炭・角閃石	褐色、に少し黄褐色		
	168-2	土師器 鉢	-	2.2以上	-	横上げ	ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	168-3	土師器 鉢	-	6.0以上	-	横上げ	ハケ・エダ	ハケ・ナデ	黒野	石炭・角閃石 褐色点	褐色黄褐色		
	168-4	土師器 鉢	-	10.0以上	-	横上げ	丁取ナデ	ヘラズリ・ナデ	黒野	石炭・角閃石 褐色点	褐色		
	168-5	土師器 鉢	(20.0)	9.1以上	-	-	ヨコナデ 握持ナデ	ヨコナデ 握持ナデ・エダ	黒野	石炭・角閃石	褐色		
	168-6	土師器 鉢	(18.0)	9.5以上	-	-	ハケ・ナデ	ナデ ハケ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色、褐色、灰色 褐色、に少し黄褐色		
	168-7	土師器 鉢	-	4.0以上	-	横上げ	ハケ・ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	褐色黄褐色～褐色		
SC-39	171-1	土師器 高脚杯	(14.2)	4.9	-	-	ヨコナデ・エダ ヨコナデ	握持足 握持ナデ・エダ	黒野	石炭・角閃石	褐色、褐色 に少し黄褐色		
	171-2	土師器 杯	(14.0)	4.2	-	ロウロ	握持ヘラズリ ヨコナデ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色、褐色、灰色 に少し黄褐色、灰色		
	171-3	土師器 杯	(11.5)	3.0以上	-	ロウロ	握持ヘラズリ ヨコナデ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色	外面に白粉	
	171-4	土師器 鉢	(19.0)	23.0以上	-	横上げ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラズ リ	黒野	石炭・角閃石 褐色点	褐色、に少し黄褐色 淡黄褐色		
	171-5	土師器 鉢	-	18.0以上	-	横上げ	ナデ	ヘラズリ・ナデ 握持ナデ	黒野	石炭・角閃石	に少し黄褐色～淡黄褐色		
	171-6	土師器 鉢	(25.0)	8.1以上	-	横上げ	ハケ・ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	褐色黄褐色～褐色		
	171-7	土師器 鉢	(22.4)	12.6	-	横上げ	ヨコナデ・ナデ ヘラナデ・握持足	ナデ・握持足	黒野	石炭・角閃石	褐色、に少し黄褐色		
	171-8	土師器 鉢	-	4.0以上	-	横上げ	ハケ・ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	171-9	土師器 鉢	-	4.0以上	-	横上げ	ハケ・ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	171-10	土師器 鉢	-	3.0以上	-	横上げ	ナデ	ナデ	黒野	石炭・角閃石	淡黄褐色		
	171-11	土師器 鉢	-	3.0以上	-	横上げ	ナデ	ヘラズリ・ナデ 握持ナデ	黒野	石炭・角閃石	褐色		
171-12	土師器 鉢	13.3	6.6	-	-	握持足・ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	黒野	石炭・角閃石	に少し黄褐色、に少し 褐色、褐色、黄色	外面半分黄褐色有り		

第14表 遺物観察表

遺物番号	種類	品名	重量 (g)	寸法 (mm)	状態	成形	材質		産地	土色	色調	備考
							表面	内面				
SC-50	171-1	土師器 輪	-	-	-	轆上付	ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡褐色	
	171-1	土師器 輪	-	-	-	-	ハケ・ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡褐色	
SC-60	173-1	土師器 横口胴輪	16.5	11.7x2.1	-	轆上付	ナデ	ヨコナデ・ハケ	良好	石炭、黒石、角閃石 赤褐色、黄褐色	褐色、にじみ褐色	
	173-2	土師器 横口胴輪	-	-	-	轆上付	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	良好	赤石、角閃石	淡褐色	
	173-3	土師器 横口胴輪	-	2.7x2.1	-	轆上付	変状土・ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡褐色	
	173-4	土師器 横口胴輪	-	-	-	轆上付	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡褐色	朝野年中に類小の貨幣を結ぶ
	173-5	土師器 輪	(17.0)	24.1	-	轆上付	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色色、にじみ褐色	
	173-6	土師器 輪	(17.0)	23.6	-	轆上付	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色色、にじみ褐色	
	173-7	土師器 輪	(17.0)	24.6x2.2	-	轆上付	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色色、にじみ褐色	
	173-8	土師器 輪	(16.0)	16.5x2.2	-	轆上付	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色色、にじみ褐色	腹面有り
	173-9	土師器 輪?	-	-	-	-	ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡褐色	
SC-62	177-1	土師器 横口胴輪	-	23.6x2.1	-	轆上付	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	にじみ褐色 赤褐色	
	177-2	土師器 輪	(20.0)	16.5x2.2	-	轆上付	ヨコナデ・ハケ	ナデ・ハケ	良好	赤褐色	褐色	
	178-1	土師器 輪	17.1	27.05	-	轆上付	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色、淡黄褐色	
	178-2	土師器 輪	(22.1)	26.8	-	轆上付	ナデ・ハケ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色、にじみ褐色 淡褐色、黄褐色	
	178-3	土師器 輪	16.7	17.6x2.1	-	轆上付	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ハケ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色色、褐色	
	178-4	土師器 輪	15.1	21.7	-	轆上付	ヨコナデ ハケ・ナデ	ナデ ヨコナデ・ハケ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色色、黄褐色	
	178-5	土師器 輪	17.8	22.6x2.2	-	轆上付	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	にじみ褐色	腹面有り
	178-6	土師器 輪	(16.0)	16.3x2.1	-	轆上付	ヨコナデ ハケ・ナデ	ヨコナデ ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色、淡黄褐色 淡褐色	
SC-63	180-1	土師器 横口胴輪	14.0	11.6x2.1	-	轆上付	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡褐色	腹面に貼り付け穴あり
	180-2	土師器 輪	(24.7)	14.2x2.2	-	-	ヨコナデ・ナデ ハケ・ナデ	ヨコナデ・ナデ ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色色、黄褐色、淡褐色	
	180-3	土師器 輪	-	-	-	轆上付	ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡黄褐色	
	180-4	土師器 輪	-	2.4x2.1	8.4	-	ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡黄褐色	
	180-5	土師器 短頸部?	-	4.6x2.1	(13.0)	-	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡黄褐色	
	180-7	土師器 短頸部	-	4.4x2.1	-	轆上付	ハケ・ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡黄褐色	
	180-8	土師器 短頸部	-	7.6x2.1	(13.3)	-	ミガキ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色→黄褐色	外周面より 厚さ1.7mm(実厚4.7mm)
SC-64	182-1	土師器 輪	-	-	-	轆上付	ハケ	ハケ	良好	石炭、黒石、角閃石	暗黄褐色	
	182-2	土師器 底腹面?	-	11.2x2.1	-	-	ヨコナデ ハケ・ナデ	ナデ・工痕	良好	石炭、黒石、角閃石	にじみ褐色、淡褐色 赤褐色、黄褐色、黄褐色	腹面有り
SC-65	183-1	土師器 輪	12.0	4.2x2.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭、白色結子	淡黄褐色	
	183-2	土師器 輪	-	-	-	轆上付	工痕土・ナデ	ヘラタズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡黄褐色	
SC-68	188-1	土師器 輪	(16.05)	27.6	-	轆上付	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色、黄褐色	
	188-2	土師器 輪	(16.2)	29.0	-	轆上付	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色、にじみ褐色、黄褐色、黄褐色	
	188-3	土師器 輪	14.05	5.6	-	-	ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ ヨコナデ	良好	赤褐色、白色結子 石炭、黒石、角閃石	褐色、褐色、黄褐色	内外面腹面有り
SC-69	189-1	土師器 厚底	(13.0)	3.6x2.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭、白色結子	淡黄褐色→淡黄褐色	
	189-2	土師器 厚底	(13.0)	3.05	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	淡黄褐色	
	189-3	土師器 厚底	11.05	4.5	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	にじみ褐色、黄褐色 にじみ褐色	1号溝からの出土
	189-4	土師器 厚底	(14.0)	4.3x2.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	淡黄褐色	
	189-5	土師器 厚底	(11.0)	4.8x2.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭、白色結子	淡黄褐色→淡黄褐色	
	189-6	土師器 厚底?	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭	黄褐色	
	189-7	土師器 厚底	-	8.9x2.1	-	-	ヨコナデ	工口ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	黄褐色	
	189-8	土師器 厚底	(20.15)	4.65	-	-	ナデ	工口ナデ	良好	石炭、黒石	褐色→黄褐色	小片裏面に磁粒 磁粒に7mm(厚さ1.7mm)あり
	189-9	土師器 厚底	(17.4)	16.1x2.1	-	-	ヨコナデ	工口ナデ	良好	石炭、黒石	黄褐色	腹面有り
	189-10	土師器 厚底	(22.2)	7.2x2.1	-	轆上付	轆上付	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	黄褐色	
	189-11	土師器 厚底	(25.0)	23.6x2.1	-	轆上付	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	褐色、黄褐色、黄褐色、にじみ褐色	
	189-12	土師器 厚底	-	-	-	手捏ね	ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	淡褐色	
	189-13	土師器 厚底	14.8	5.9x2.1	-	轆上付	ハケ・ナデ	ヘラタズリ・ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	黄褐色	部分的に赤色顔料結存
	189-14	土師器 厚底	-	1.1x2.1	4.8	手捏ね	ナデ	ナデ	良好	石炭、黒石、角閃石	黄褐色	

第15表 土製品計測表

遺物番号	品目番号	種類	寸法 (mm)		重量 (g)	備考
			最大径	径又は孔径		
SC-1	8-11	不明	2.6	1.2	-	3.7
SC-2	11-22	土製勾玉	3.6	1.3	0.1	7.1
	11-24	土製肉玉	1.6	1.6	-	3.5
SC-3	16-02	不明	4.2	1.6	-	3.5
	16-03	不明	4.4	1.3	-	11.6
SC-4	16-04	不明	3.4	1.3	-	4.4
	20-21	不明	3.1	0.8	-	2.8
SC-6	27-17	管状土器	4.6	1.6	0.6	10.9
SC-12	66-8	管状土器	4.3	1.1	0.3	4.3
	66-9	管状土器	2.4	0.9	0.3	1.3
SC-20	83-30	管状土器	5.4	1.0	0.0	4.8
	83-31	管状土器	5.8	1.0	0.3	5.6
	83-40	管状土器	5.5	1.0	0.4	5.6
	83-41	管状土器	4.3	0.8	0.3	4.6
	83-42	管状土器	3.0	1.1	0.4	3.7
SC-35	108-16	不明	3.1	1.7	-	7.3
	108-18	不明	2.0	1.2	-	2.6
SC-38	108-6	管状土器	3.4	1.1	0.3	2.8
SC-38	112-16	不明	3.4	1.5	-	7.5
SC-42	28-53	不明	5.3	1.4-1.8	-	14.7
SC-45	28-54	不明	4.0	1.1	-	5.6
	136-2	管状土器	3.1	1.0	0.2	3.1
SC-69	73-15	管状土器	3.6	1.0	0.4	2.9
1号溝	196-6	管状土器	6.2	1.2	0.4	7.2
	196-7	管状土器	4.6	0.9	0.4	3.7
	196-8	管状土器	4.4	1.0	0.1	3.8
	196-9	管状土器	4.7	1.2	0.4	6.0

第16表 石製品計測表

遺物番号	品目番号	種類	石材	寸法 (mm)			備考
				最大径	最大径	最大径	
SC-3	16-81	礫石	珩質砂	16.75	7.5	4.26	-
	16-82	小玉	滑石類	0.6	0.6	0.4	0.2
SC-23	67-26	磨盤底	滑石類	6.1	4.9	1.2	0.7
	67-27	磨盤底	滑石類	4.2	4	1.5	0.6
	67-28	小玉	滑石類	0.6	0.6	0.4	0.1
SC-28	112-16	礫石	珩質砂	5.96	3.8	3.8	-
SC-81	148-9	磨盤底	滑石類	4.6	4.4	1.1	0.3
SC-89	171-15	磨盤底	滑石類	3.9	2	1.8	5.7以上
一括遺物	208-	磨盤石片	珩質砂	12.55	9.65	3.65	-

第17表 鉄製品計測表

遺物番号	品目番号	種類	寸法 (mm)		備考
			最大径	最大径	
SC-2	11-22	U字形鉄片	13.2	溝幅 (15.2) 溝深 (5.3) 溝底幅 (11.5)	196C鉄片に3枚貼

第4章 中世・近世・その他の時期

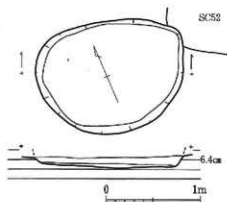
1. 中世

中世の遺構は、大溝と土坑2基（内1基、墓）を検出した。据立柱建物などの居住施設は確認できなかった。

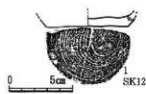
(1) 土坑

12号土坑 (SK12) (第191図)

この土坑は調査区の南に位置する。48号住居を切る。平面プランは円形で、規模は長軸1.4m、短軸1.1mである。深さは0.1mである。遺物は土師器が1点出土した。



第191図 SK12実測図 (D8付近)



第192図 SK12の遺物実測図

出土遺物 (第192図)

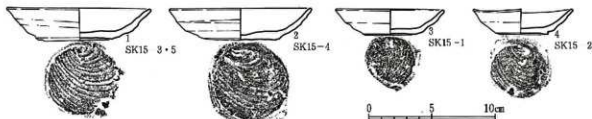
土師質土器 (1) は、皿もしくは椀で、底部外面は糸切り難しである。

15号土坑 (SK15) (第194図)

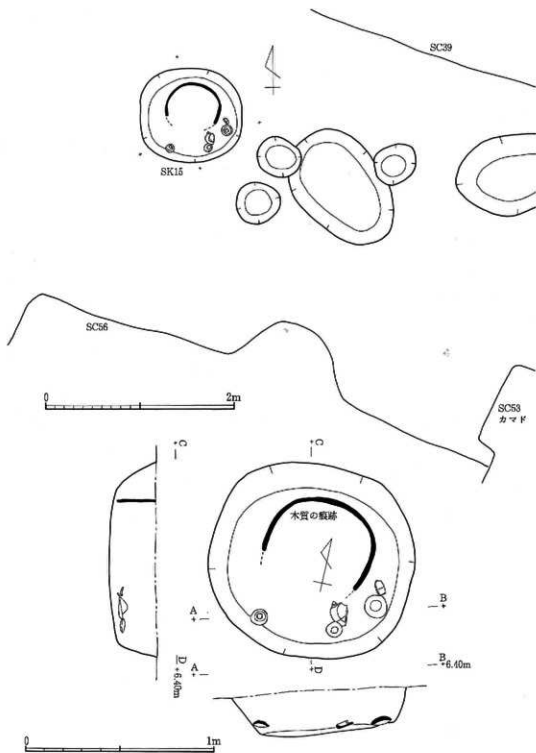
この土坑は調査区のほぼ中央に位置する。56号住居を切る。平面プランはほぼ円形である。規模は東西1.7m、南北1.1mで、深さ0.25mである。土坑内の底部に半円の丸い痕跡を確認した。そこには少しだけ木質が付着していたため、この土坑が丸い桶形の墓であった可能性が高い。また遺物も土坑内から土師器椀が4点出土した。

出土遺物 (第193図)

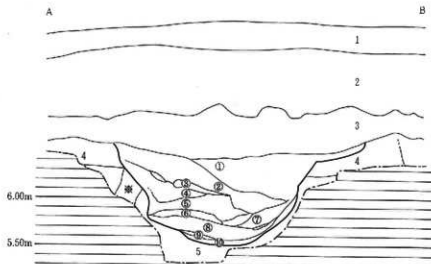
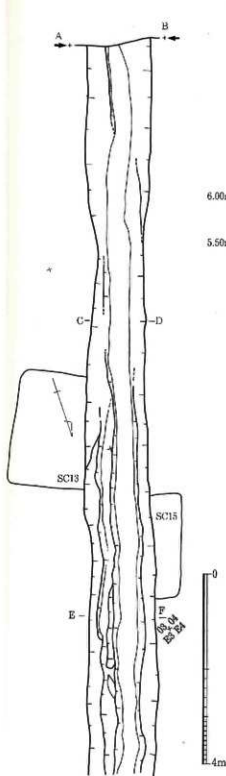
土師質土器 (1~4) は、すべて椀で、底部糸切り難しである。どれも底部から口縁先端にかけて大きく開きながら延びる。また法量は1・2および3・4が同一である。時期は16世紀代と推定される。



第193図 SK15の遺物実測図

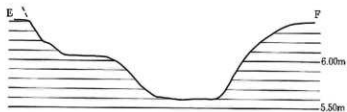


第194図 SK15の位置とSK15の実測図



1. 表土 耕作土
2. 砂質 オリーブ褐色 (2.5Y)
3. 砂質 褐色 (10YR4/4)
4. 砂質 にぶり黄褐色 (10YR4/3) やや粘質土
5. 砂質 褐色 (10YR4/6) ザラザラ

南側壁面産状図



- ① 砂質 褐色 (10YR4/4)
- ② 砂質 褐色 (10YR4/4) しまる皮混入
- ③ 砂質 暗褐色 (10YR3/3) やわらかい
- ④ 粘質 にぶり黄褐色 (10YR3/3)
- ⑤ 砂質 にぶり黄褐色 (10YR2/3) 黄褐色粒 (10YR5/6) がブロック状に混ざる。
- ⑥ 砂質 黄褐色 (10YR5/6)
- ⑦ 粘上質 暗褐色 (10YR5/4) 灰粒混ざる
- ⑧ 粘上質 暗褐色 (10YR3/3)
- ⑨ やや粘上質 暗褐色 (10YR3/3) 褐色 (10YR1/4) がブロック状に混ざる
- ⑩ 砂質 暗褐色 (10YR3/4)

第105図 SD1実測図

(2) 溝

1号溝 (SD1) (第195図)

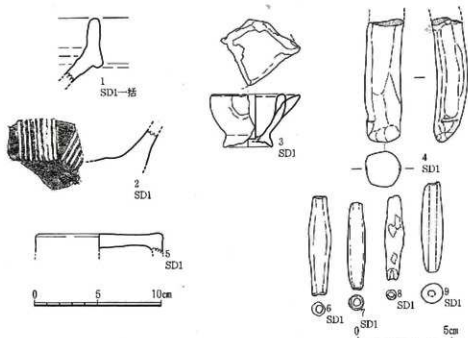
この溝は調査区の東に位置する。ほぼ直線的に南北方向に延び、11・13・15号住居を切る。残存状態はよいが、南側の部分は攪乱されており確認できない。溝は調査区外に南北とも延びていくものと推定される。規模は最大幅が約3.0mで、最大深は0.1mである。長さは調査区内で32m1αである。溝断面は逆台形の箱掘りを呈し、溝の中央くらいから南側は東に1つ段を設ける。溝の埋土はほとんどが砂質であり、水分を多く含んでいた。そのことからすると水流があったことが想定でき、灌漑? のための水路であろうか。

出土遺物 (第196図)

土師質土器 (3~5) は、小型の碗型である。ただ口縁部先端に1ヶ所、注口を小さく設けている。4は、脚付土鍋の脚部であろう。5は焼き塩釜の蓋か。口縁部を少し欠く。

備前焼 (1・2) は、1は口縁部、2は底部である。16世紀の所産か。

土製品 (6~9) は、すべて土錘である。しかし溝からは古墳時代の土器も多く出土しており、これら土錘は古墳時代に属される可能性もある。



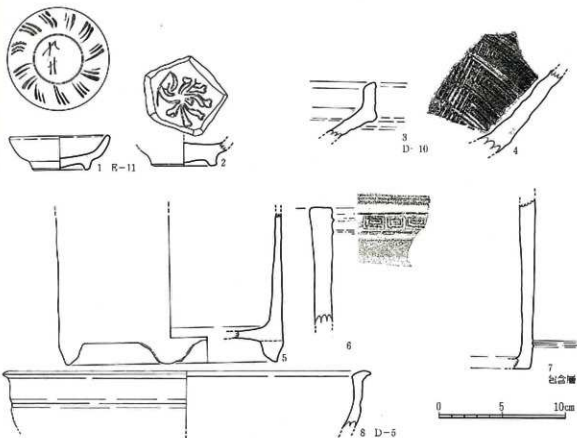
第196図 SD1の遺物実測図

(3) 包含層出土遺物

陶磁器(1・2)は、1は完形品で龍泉系青磁小皿である。見込みには文字が描かれており、「九州」?とも読める。もしそうであればたしてその時代に日本の九州を指したのか、中国他にそういう地域があるのだろうか。2は龍泉窯系統の底部である。内面見込みに唐単文を描く。

備前焼(3・4)は、3は口縁部である。4は胴部である。

瓦質土器(5~8)は、火鉢で、6は口縁部で、口縁上部に2条の小さな突線を付ける。7は胴部~底部にかけてで、胴部の下端に1条の突帯をつける。6・7が同一一体になるかどうかは不明である。8は火鉢?の口縁部である。口縁先端を90度近く屈曲する。その少し外面下部に1条の小さな窪みを設け、一周させる。8はこの中世で取り上げたが、近世まで下がる可能性もある。

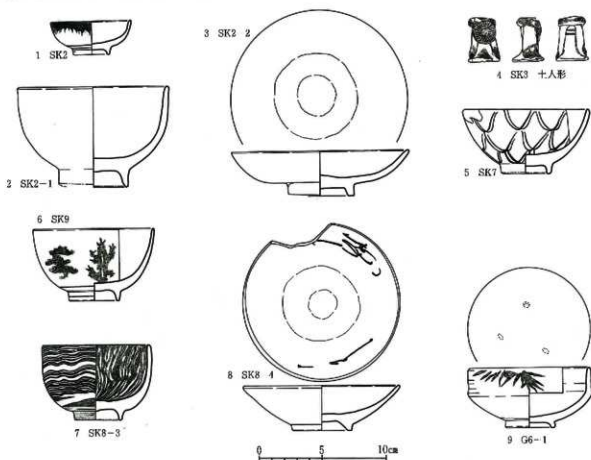


第197図 中世包含層の遺物実測図

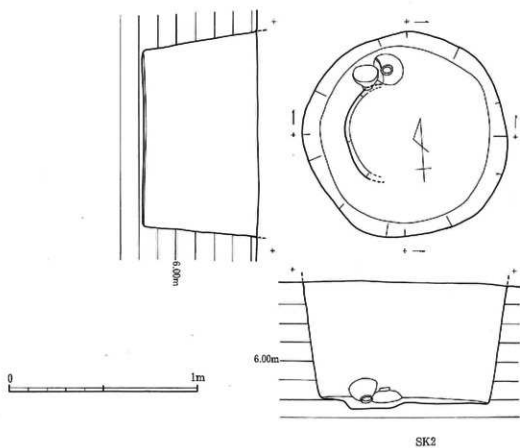
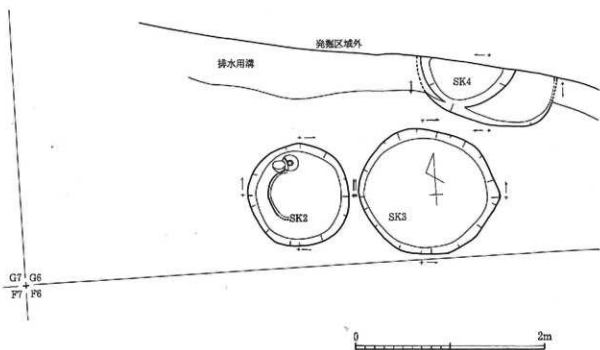
2. 近世墓

近世墓は古墳時代・飛鳥時代の住居跡を検出作業を行っている際に見つかった。これらの近世墓が存在したことはこの辺りの旧土地所有者であった平林 氏からのご教示によってすでに把握していたことである。墓地在道路予定地となり、移転したようである。こうした事情から我々が平成12年12月に試掘を行った際にはそれが存在したことを裏付けるものは何ひとつなかった。墓地は東西に長い発掘区の中央域にあたり、南壁に近いB7区と、北壁に近いG6区中心とする二地点に分かれていた(第2図)。遺構検出面までの深さは、B7区を中心とする地区は地表下約1.80m深さで(第3図)、G6区を中心とする地区も地表下約2.00m深さであった。後述するように墓の最下底面は更に深い部分にあるわけである。

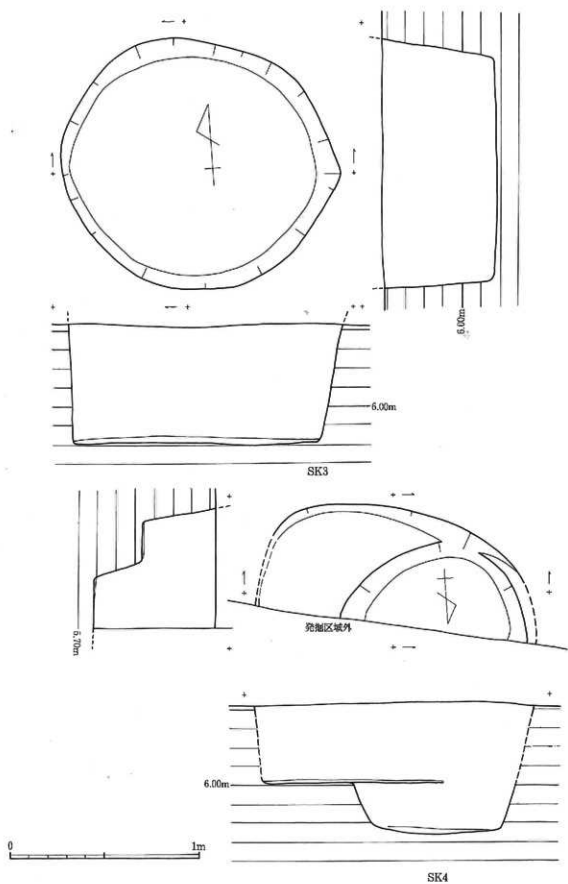
G6区を中心とする地区には3基の墓がある(第198図上段)。それらは2~30cmの間隔をあけて隣接する。しかし墓坑の壁が斜めであるため、地表付近で若干の切り合い関係はあったと見るのが自然だ。また若干の切り合い関係があったとしても、それは大幅なものではないので地表にその存在を認知できる墓石があったのであろう。3基の墓は、いずれも円形の墓坑である。SK2は遺構検出面からの深さが0.60mで、墓坑下底に磁器の小杯・碗・皿があった(第198図下段)。SK2の小杯は1690~1740年頃(第198図1)、碗は17C後半年頃(第198図2)、皿は17C後半~18C前半年頃(第198図3)のものである。SK3は遺構検出面からの深さが0.60mで、北側遺構ライン付近で土人形があった(第198図4)。これは頭部を欠くが、背中に網傘を背負い、着物の雰囲気からお地藏さんであろうか。SK4は遺構検出面からの深さが0.65mで、北側半分は発掘区域外である。なお、SK4の東に接する落ち込みがあるが、はっきりしない。



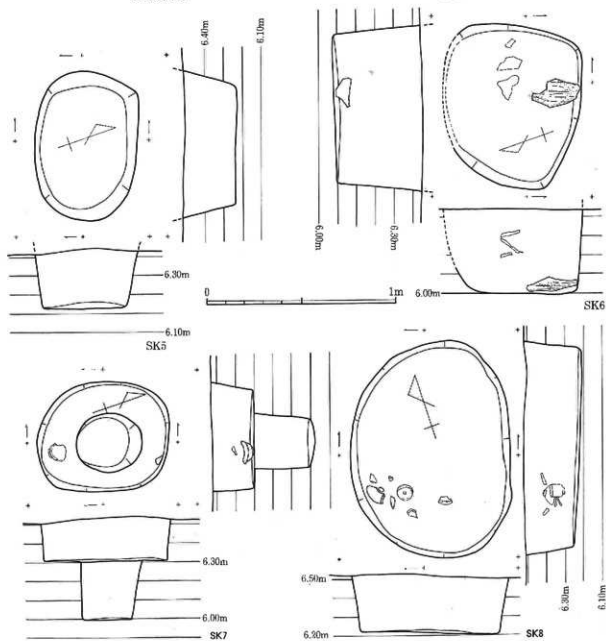
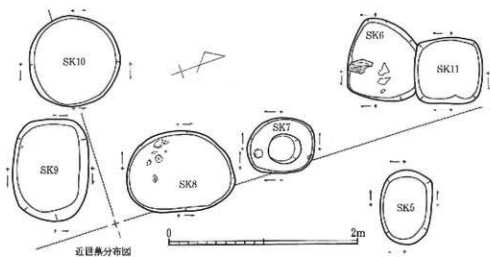
第198図 近世墓及び周辺の遺物実測図



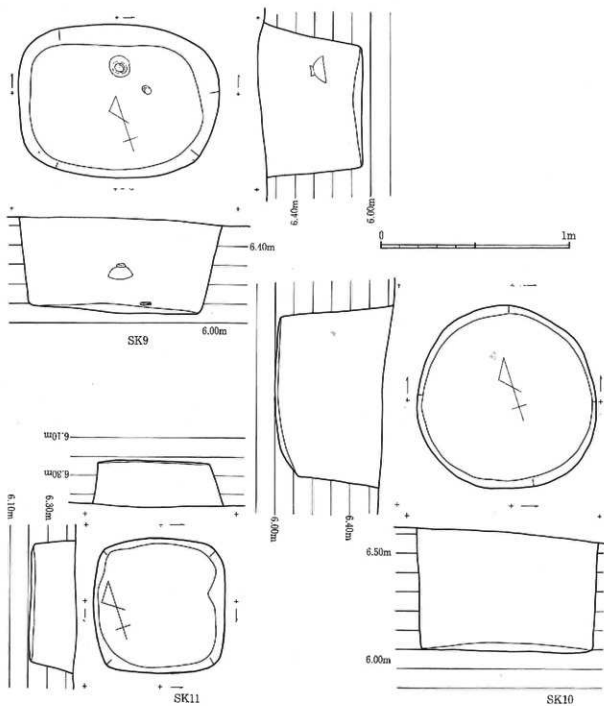
第190図 近世墓の分布と近世墓実測図



第200图 近世墓实测图



第201图 近世墓（平林家旧墓）分布图及近世墓实测图



第202図 近世墓（平林家旧墓）

B7区を中心とする地区には7基の墓があった（第201図上段）。概ね南北方向に並んでいる。SK5は墓坑の平面形が長円形～長方形を示し、主軸が東西方向である（第201図中段）。SK5は遺構検出面からの深さが0.30mである。SK6は主軸を西北西に向ける長円形～長方形の形が崩れた平面形である（第201図中段）。SK6の遺構検出面からの深さは約0.50mである。SK6の墓坑底から上に0.20m～0.30mの間には残りの悪い骨があった他、最も深い部分には古墳時代～飛鳥時代の住居跡から遊離した竈の袖石が混入していた。SK7は墓坑の平面形が長円形～長方形を示し、主軸を概ね北北東方向にむける（第201図下段）。SK7は遺構検出面からの深さ0.20mに段があり、更に0.50mに底がある。段の部分から掘り込まれた上炕は0.70mの円形である。SK7の遺物は南側の段

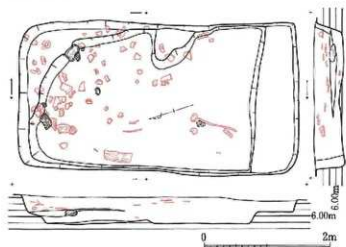
に網目紋磁器碗があった。この碗の製作年代は18C後半頃である(第198図5)。SK8は主軸を北北東に向ける長円形の平面形である(第201図下段)。SK8の遺構検出面から墓坑底までの深さは約0.30mで、墓坑底から若干浮いた状況で皿と碗が二個あった。この碗の製作年代が18C前半頃で、皿の制作年代が18C前半頃である(第198図7・8)。SK9は平面形が楕円形の墓坑である(第202図上段)。SK9は遺構検出面からの深さが約0.50mである。遺物は墓坑底から約0.20mの高さに磁器碗が伏せた状況で見つかった。この碗の製作年代が1690~1740年頃である(第198図6)。SK10は平面形が円形の墓坑である(第202図中段)。SK10は遺構検出面から墓坑底までの深さが約0.65mである。SK11の平面形は正方形を基調とする。SK11の遺構検出面から墓坑底までの深さは約0.25mである。

以上見てきた墓のまとまりと遺物の年代から18世紀から19世紀にかけて形成された家族墓であろう。外表遺構である墓石はなかったが、周辺の墓地の状況から墓神刻字面を南にむけたものであったことが予想できる。

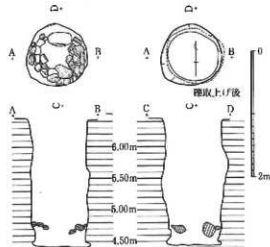
3. 地下倉(SK17)・井戸(SE1)

このSK17の遺構はB9区とE10区にまたがる位置関係にある(第2図)。この辺りは平成 年まで平林家の宅地があったところで、水害対策の為に古くより最低三回以上のかき上げがあったところである。このため表土から遺構検出面までの深さが5m近くに達している。調査期間の関係で古墳時代の遺構調査を中心としたので標高6.40mまで下げたが、このレベルに至るまでにSK17は少なくとも標高7m付近から表れは始めている。遺構の規模は、長軸が4.4m、短軸が2.35m、深さが(現状で)0.45mである(第203図)。長軸の方位はN-16°-Wである。それぞれの辺の長さが等しい長方形ということもあって、計画的に掘削されたものといえよう。南側の短軸辺に平行して段が形成されているが、遺構の掘り込みレベルが更に上位に想定できるため、階段としての段が南に続いていたことも考えられる。遺物は陶磁器片の他、木片・板片・漆器碗片が、北東小門隅部方向から投棄されたかのような傾斜と分布のまとまりをしめす。

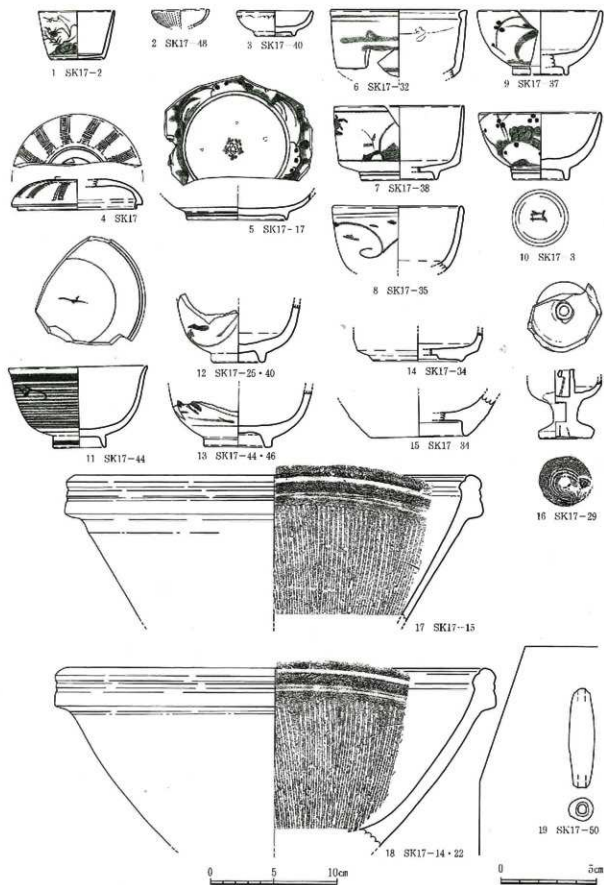
遺物のうち陶磁器片のすべては破片であるほかに、その多くは肥前系である。細かい遺物の観察は、一覽表に譲るが、その内訳を見ると飯茶碗・湯のみ茶碗・猪口・紅皿・仏前や神前に鯛燗を灯す灯火具・すり鉢などの生活雑貨で、決してグレードの高いものでないことが注意される(第205図)。以下、簡単に遺物の説明をしたい。



第203図 SK17実測図



第204図 SE1実測図



第205図 SK17の遺物実測図

4. その他の遺物

縄文土器・弥生土器

1は胴が張り、口縁部がわずかに内湾し、胴部が屈曲する。外面に細い沈線を有する。内面は条痕調整、SK-19出土。外面は黄褐色、内面は暗褐色。角閃石、斜長石、赤粒子を含む。2・3は、弥生時代早期刻目突帯文の口縁部。2の刻目は貝殻、3は爪で施されている。2は条痕調整後、ナデ。内外面は黄褐色。角閃石、斜長石、石英を含む。内面は一部剥落している。SC-39出土。3はSC-35出土、条痕調整のあとが明確に残る。暗褐色を呈し、角閃石、斜長石を含む。4は条痕調整後、ナデを行った胴部、外面は黄褐色、内面暗褐色SC-37出土、角閃石、斜長石を含む。1～4とも焼成は良好である。

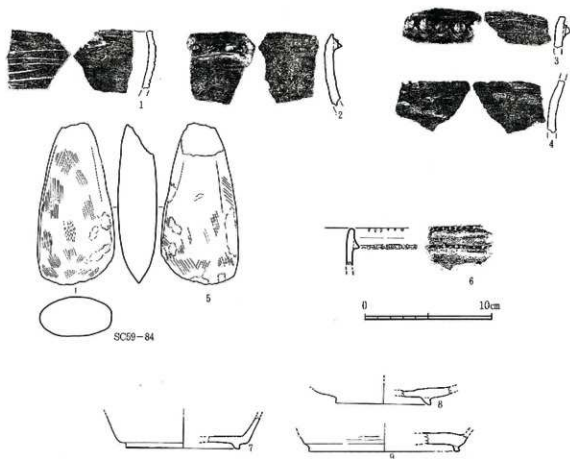
明確なものとしては一片あるのみである(第206図)。口縁端部外面側と1条の突帯上に連続的に凹で刻目をいれる。僅かに縦方向の刷毛目が観察される。弥生時代前期末から中期初めの下城式土器の甕であろう。

石器

某部を若干欠いた磨製石斧が1点ある(第206図)。方量は長さ12.55cm、幅6.05cm、厚さ3.05cm、重さ350.6gである。石材は蛇紋岩を用いる。全体的に人畜な研磨がおこなわれている。SC59の住居跡に混入していた。

須恵器

包含層中から3点見つかっている。いずれも坏底部で、高台の形態・位置から考えて8世紀後半に位置づけられる。(第206図7～9)。



第206図 縄文時代と弥生時代の遺物

第18表 遺物観察表

編年番号 層号	種別	品名	寸法		重量	材質	成形		装飾		出土	色澤	備考
			口径	高さ			外周	内径	彫	文様			
1号墳													
196-1	土師器	小瓶	5.8-7.0	4.1	3.6	手捏白	ナデ	ナデ	黒野	石目・灰目・黒野	淡褐色		内外面に赤色顔料
196-2	土師器	滑石土師小瓶	-	8.5以上	-	手捏白	ナデ	ナデ	黒野	石目・黒野・黒野	淡褐色		
196-3	土師器	滑石土師小瓶	5.0	4.0以上	-	-	ナデ	襦袢工具によるナデ	黒野	石目・黒野・黒野	淡褐色		
19号土坑	192-1	土師器	小瓶	-	8.5以上	6.4	ロクロ	ナデ	黒野	石目・黒野・黒野	淡褐色		底面凹縁あり難し
16号土坑	193-1	土師器	壺	11.2	2.8	5.4	ロクロ	ロコナデ・ナデ	黒野	石目・黒野・黒野	褐色		
16号土坑	193-2	土師器	壺	11.0	2.6	6.2	ロクロ	ロコナデ・ナデ	黒野	石目・黒野・黒野	褐色		
16号土坑	193-3	土師器	壺	8.4	2.1	4.3	ロクロ	ロコナデ・ナデ	黒野	石目・黒野・黒野	褐色		
16号土坑	193-4	土師器	壺	7.7	2.1	4.2	ロクロ	ロコナデ・ナデ	黒野	石目・黒野・黒野	褐色		
中世一													
197-1	2号土坑	火鉢	-	11.4以上	16.6	-	ナデ	ナデ	黒野	-	灰色		
197-2	3号土坑	火鉢	-	8.4以上	-	-	ナデ	ナデ	黒野	-	灰色		外面に書文を施す
197-3	4号土坑	火鉢	-	13.2以上	-	-	ナデ	ナデ	黒野	-	灰色		
197-4	5号土坑	火鉢	15.0	4.4以上	-	-	ナデ	ナデ	黒野	-	灰色		断面番号1-2の蓋とセットかつ外面に自然痕

第19表 近世墓及びSK17の遺物観察表

No.	種類	器種	法 形			成形	装 飾		製作地	製作年代	備 考
			Li	径	器 高		底 径	彫・縁			
SK17											
1	磁器	楕 口	5.8cm	4.9cm	1.1cm	ロクロ	彫・縁	岩 花	肥 前	18C後半	反転復元
2	磁器	紅 皿	4.7			ロクロ	彫	打 白 磁	肥 前	18C後半	
3	磁器	紅 皿	(5.8)	2.0		ロクロ	彫・縁	笹 文	肥 前	18C後半	反転復元
4	磁器	壺		(9.3)		ロクロ	彫・縁	文字文	肥 前	18C後半	反転復元
5	磁器	壺		7.8		ロクロ	彫・縁	五弁花 梅 樹	肥 前	18C前半	
6	陶器	番 巾	(10.6)			ロクロ	彫・縁	山水?	肥 前	18C前半	反転復元
7	磁器	ふたもの	(10.0)	3.8	(5.9)	ロクロ	彫・縁	ぼたん?	肥 前	18C	反転復元
8	陶器	傘 巾	(9.7)			ロクロ	彫・縁	供草文	肥 前	18C前半	反転復元
9	陶器	碗	(9.5)	5.05	(4.3)	ロクロ	彫・縁	雷 輪	肥 前	18C後半	反転復元
10	磁器	碗	9.4	5.35	4.35	ロクロ	彫・縁	雷 輪	肥 前	18C後半	既面に大明午割筋絡
11	磁器	碗	(10.65)	(6.3)	(4.0)	ロクロ	縁	記号状文	肥 前	18C~18C	燻反転・反転復元・幕末
12	陶器	傘 巾				ロクロ	彫・縁	供草文	肥 前	18C前半	反転復元
13	陶器	碗		4.8		ロクロ	彫・縁	樹草文	肥 前	18C前半	一部反転復元
14	磁器	番 巾		(6.6)		ロクロ	青 磁		肥 前	18C後半	反転復元
15	陶器	瓶		(8.5)		ロクロ	彫・縁	ハケ目	肥 前	18C前半	反転復元
16	陶器	灯火具		5.4	3.8	ロクロ	鉄 輪		関西系	18C	燻反転・燻反転・燻反転・目録あり(59頁)
17	陶器	楕 鉢	(32.6)			ロクロ		カキ目	堺 系	18C	反転復元・焼しめ
18	陶器	楕 鉢	(34.8)			ロクロ		カキ目	堺 系	18C	反転復元・焼しめ
近世幕											
1	磁器	小 杯	6.2	2.6	2.8	ロクロ	彫・縁	雨垂れふり櫛文	肥 前	18C~17C	
2	陶器	碗	12.0	7.8	5.5	ロクロ	透明釉		肥 前	17C後半	内外面に貫入 京焼風
3	磁器	皿	14.0	3.5	5.1	ロクロ	青 磁		肥 前	17C後半	既面に蛇ノ目輪割筋
4	陶器	人 形			2.5	手捏	透明釉		関西系	近 世	地蔵
5	磁器	碗	(10.0)	5.0	4.0	ロクロ	彫・縁	二重割目	肥 前	18C後半	反転復元
6	磁器	碗	9.6	5.6	4.0	ロクロ	彫・縁	桜・雲	肥 前	18C~17C	コンニャク印刷
7	陶器	碗	8.2	5.9	3.8	ロクロ	彫・縁	内一打彫毛目 外一打彫毛目	肥 前	18C前半	高台に小砂付
8	磁器	皿	12.4	3.5	4.6	ロクロ	彫・縁	華 文	肥 前	18C前半	既面に蛇ノ目輪割筋
9	陶器	碗	9.7	4.7	3.8	ロクロ	彫・縁	笹 文	関西系	18C	重丸成焼

幸 吉田 寛 作成

第5章 考 察

I. 毛井遺跡における遺構の変遷（第207図）

毛井遺跡B地区の立地は大野川下流域の自然堤防状の微高地に位置しているが、こういった古墳時代の竪穴住居跡が低地に立地する状況は大分平野の植田市遺跡や北ノ後遺跡、玉沢地区条理遺跡群などで見られる。このような状況は、例えば雄城台遺跡のような台地から北ノ後遺跡や賀米中学校遺跡のような低湿地へ集落が展開することは弥生時代後期以降から見られる。毛井遺跡B地区の集落としてのはじめは、古墳時代前期からである。古墳時代中期になると住居の姿はいったん消え、古墳時代後期になると爆発的に住居の数が増える。また毛井遺跡B地区の6世紀代の住居跡では須恵器をほとんどの住居で出土しており、その時期は小田編年というⅡ～Ⅳ期にあたる。しかし7世紀に入ると古墳時代後期の住居数からは考えられないように突如その姿を消すこととなる。このことは坪根伸也氏¹⁾が「大分平野のドメスティックな象徴」としているように古墳時代から古代にかけて連続しての集落景観は大分平野内では見られないとしている。これは毛井遺跡B地区にも言える。そして中世後期（16世紀）段階になるのを待って、ふたたび大溝や土坑、土坑墓などの生活の痕跡が確認でき、近世に続いていく。

その他の遺物としては、弥生土器や古代の須恵器がわずかに出土しているのだが、その遺物に該当する時代の遺構は確認できていない。

(1) 古墳時代前期

この古墳時代前期の遺構は竪穴住居6基を確認した。25・58・60・62・63・64号住居がそうである。4本柱を基本としているが、25・60号住居は2本柱である。住居の土器の組成は、甕、鉢が多い。またこの時期の製塩土器も25号住居跡で確認している。この時期の住居の数からしてまた毛井遺跡A地区の様相から、まだこの時期は一時期に2～3あまりの住居単位で散発的であったといえよう。

(2) 古墳時代後期・飛鳥時代

古墳時代後期の遺構は竪穴住居跡を約59基確認した。住居の主柱穴は4本柱を基本とする。そのほとんどの住居跡が小田編年のⅢB期にあたるが、14・21号住居は小田編年Ⅱ期にまたⅢA期が2・13号住居、Ⅳ期が34・41号住居で、その他をⅢB期として考えてよいだろう。Ⅱ期の段階の住居跡には、まだカマドの姿はみられない。土器の組成も甕などよりも碗の占める割合が高い。これは、植田市遺跡や佐知遺跡などでも同じことが言えそうである。しかし小田編年ⅢB期に入ると須恵器の搬入が膨大になり、土器の組成で須恵器のもつ割合と甕などの煮炊き土器の占める割合が高くなる。またほとんどの住居にはカマドが備え付けられる。竪穴住居内にカマドを備え付けられる方位は北壁と西壁の中央が多く、東壁と南壁は少ない。カマドには産栗する時の祭祀跡が多くみつかった。これについては後述するが、毛井遺跡B地区での備え付けのカマドが確実に出現するのはⅢ期にはいつてからだが、前述した14・21号住居のⅡ期の竪穴住居には確実にカマドの痕跡はなかった。しかし出土遺物をみると両方の住居跡から甕の底部片が出土している。このことは毛井遺跡B地区のⅡ期は須恵器を導入した時期でもあり、おそらくその頃同時にこの遺跡にカマドの知識も伝わったのだろう。毛井遺跡14・21号住居併行期の人々はカマドの知識ももっていたが集落の中で備え付けのカマドを採用していくための過渡期であったために、しっかりと備え付けのカマドを持つことができなかったと思われる。

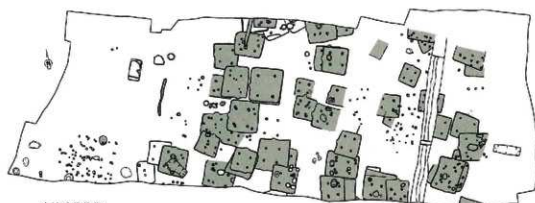
さらに住居の検出状況はそのほとんどの竪穴住居が重複しているのも毛井遺跡B地区の特徴であろう。これはそれぞれから出土する須恵器をみると小田編年ⅢB期で、その時期差はほとんど考えられないことから、この毛井遺跡の立地から考えると洪水などで集落が水没することが多く、その都度立てなおしたということのあらわれであろうか。

(3) 中世

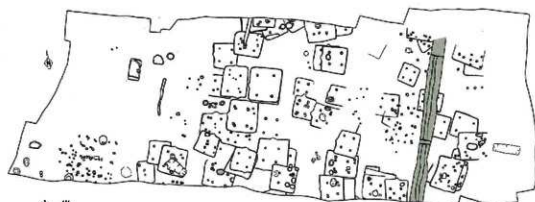
中世の遺構は、大溝1条と土坑2基を確認した。大溝からは備前焼葉片や土鍋の脚部などが出土した。それら出土遺物から3つの遺構とも16世紀代と推定される。ところでこの毛井遺跡は中世では毛井村に属している。こ



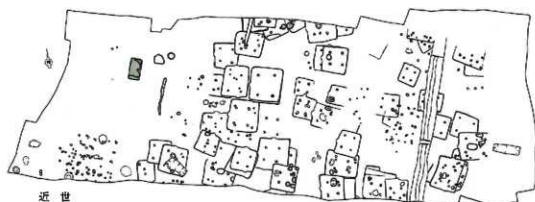
古墳時代前期



古墳時代後期



中世



近世

第207圖 時期別遺構配置図

の領主には13世紀に信濃國の御家人だった平林氏が、大友氏の豊後入国とほぼ同時期に国領である毛井社地頭職に任ぜられている。この毛井社は現在の毛井八幡の前進と思われるが、この毛井社の所在地については大野川の左右岸のどちらに存在したのかという問題点²¹⁾は残されている。ただ大野川の下流域であるこの一帯は、古代、中世ともに日向道の交通の要衝であったことには違いない。その交通の要衝に平林氏が入り、日向道の交通や大野川を行き交う船の管理などを担っていたものであろう。大溝が確認された戦国期も平林氏は毛井村に在村しており、毛井遺跡のすぐ南側には「ホリ」などの通称もある。現在の土地利用からは居館の跡を尋ねることはできないが、この微高地が広がる一帯に平林氏の居館の存在を仮定したときに、この大溝はそういった関連（性格）のものだろうか。さらに毛井遺跡のすぐ西側の丘陵は久保田遺跡の調査があり、16世紀代の樹立柱建物数棟を検出している。これらも平林氏との関連の可能性があり、この毛井遺跡の大溝などを合せて中世の毛井村の景観を考える時に重要であろう。

(4) 近世

近世は、土塼墓が5基、井戸跡1基、土坑1基を確認した。陶磁器類が17号土坑で良好な一括資料として出土した。土坑墓の時期は18世紀代を中心としており、土坑や井戸跡も人差ない時期と想定される。さらに調査区の南西部に柱穴群が出土している。掘立柱建物は調査区内では確認できなかったが、周辺の墓・土坑・井戸などの遺構があることからその周辺に掘立柱建物が存在した可能性は高いであろう。

註1) 坪根伸也1997「豊後大分平野における古墳時代から古代にかけての遺跡様相」

「古墳時代から古代における地域社会 発表要旨資料」埋蔵文化財研究会

註2) 渡邊澄夫1990「豊後国海部郡毛井社地頭職について」『大分県地方史』142号

II. 古墳時代遺物ヘラ記号

毛井遺跡では実測点数約320点の須恵器のうち、ヘラ記号が認められた須恵器は16点ありその割合は5%である。器種別にみると坏蓋4点、坏身12点である。

ヘラ記号 出土遺構	十	一	廿	C	ㄥ	不明
7号住	坏身1					
12号住						坏身1
15号住					坏身1	坏身1
20号住						坏蓋1
22号住	坏身1					
28号住		坏身1				
34号住			坏身1、坏蓋1	坏蓋1		坏身1
35号住		坏身1				
41号住		坏身1				
42号住		坏蓋1				
43号住						坏身1
50号住		坏身1				

第208図 ヘラ記号出土図

器種別でみると坏蓋、坏身ともにヘラ記号をもつものは半々である。またそのほとんどの須恵器の時期はⅢB期である。その他の器種にはヘラ記号は確認できなかった。また34号住居では「廿」のヘラ記号が坏蓋、坏身ともに内面に描かれ、それらは同一のセット関係になるものである。

ところでヘラ記号が坏蓋、坏身の外面に認められるものは10点あり、内面の6点より多いことがわかる。特に内面にヘラ記号をもつものは、その分布状況などから豊前地方からの供給の可能性が高い。

一方、土師器に描かれたヘラ記号は3点のみ確認できた。14号住居出土の碗の底部外面に「十」、34号住居出

上の裏の外面上部に「フ」、42号住居出土土甕の胴部外面に「フ」である。

Ⅲ. カマド祭祀を考える

(1) はじめに

まずカマドは炉の役割であった炊飯施設や暖房施設といった機能を継承したものであるが、炉の機能に付け加えて蒸すという食文化の変化やコシキなどの土器、竪穴住居内の空間利用、さらにはカマド神の信仰という人々の精神的なもので多大なる影響を与えていたのは確かである。そのカマド神の信仰の痕跡を示すカマド祭祀については、これまでに福岡県などで多くの調査例（古井町塚堂遺跡をはじめ、那珂川町松木遺跡や福岡市西新町遺跡、春日市赤井手遺跡など）があり、好資料が提示されている。そういうことから多くの論文もなされている。大分県内でカマドをもつ住居跡の調査例は増加していることから、簡潔に今までの成果について触れ、この毛井遺跡のカマド祭祀について考えてみる。

(2) 大分県内におけるカマドの導入と展開

大分県内における古墳時代のカマドの調査例は三光村佐知遺跡（5世紀末～6世紀中）、中津市大坪遺跡（古墳時代後期）、宇佐市葛原遺跡（6世紀後半）、玖珠町下坂垣遺跡（6世紀代）、大分市樋田遺跡（5世紀末～6世紀初頭）、大分市庄の原遺跡（5世紀中?～6世紀）、臼杵市清太郎遺跡、日田市長辺遺跡など30をこえる遺跡が上げられる。県内でもっとも古いカマドは、大分平野に所在する庄の原遺跡の5世紀半は?であるが、おそくとも5世紀末には佐知遺跡や大分平野でも樋田市遺跡などでカマドが確認されている。この5世紀代のカマドの総数はわずかだが、6世紀代になるとカマドの使用は調査例の少ない県南地域を除いて増加傾向にあり、特に須志器の小田編年ⅢB期になると爆発的に増える傾向にある。

ところで、九州のカマドの導入と展開は北部九州の福岡県、佐賀県で早く4世紀に導入され、5～6世紀に増加する。熊本県、大分県は6世紀に入って、一気に増加する傾向にある。宮崎県では6世紀代のカマドは、わずかであり、古代になってから増加するようで、鹿児島県、長崎県に限っては古墳時代のカマドは見られない。以上からするとカマドの導入と展開は、北部九州ではじまり、6世紀になって中九州、東九州に展開するが、古墳時代の中で、南九州へのカマド伝播は、ほとんどなかったようである。

(3) 毛井遺跡B地区のカマドと祭祀

毛井遺跡では、備え付けカマドが確認できたものは、35基ありその中でカマド祭祀が確認できたものは15基あった。毛井遺跡で確認できたカマド祭祀は、すべてカマド廃棄時のもので、カマド構築時、使用時の祭祀跡は確認できなかった。また、毛井遺跡のカマドは、特に袖石の石材に特徴があり、その袖石のほとんどが大野川下流域で採取できる緑泥片岩であった。県内の他の遺跡のカマドを見ても、たいていは袖石には河原石を用いているのがほとんどである。

以上毛井遺跡のカマドを簡潔に述べたが、次に毛井遺跡B地区で確認できたカマド祭祀とその行為の種類を列挙し分類してみることにする。

- A—1類 カマド内及びカマド破壊後に土師器蓋等の破砕したものや須志器の破砕したものを置く行為（2次焼成ありも含む）。この類は出土状態によって祭祀として認められないものもある。
- 2類 カマド内及びカマド破壊後に2次焼成を受けていない（丹塗りの）高坏や碗、須志器などを置く（ふせる）行為
- B類 カマド周辺に須志器や土師器を整然と置く（ふせる）行為
- C類 カマド内及びその周辺に土製装飾品（勾玉など）や模造品、石製装飾品（小玉など）を置く行為
- D類 カマド袖石や支脚を抜き取り、住居内及びカマド破壊後に置く行為
- E類 カマドを破壊したのちに粘土をかぶせる行為

毛井遺跡B地区におけるカマド祭祀（破壊時）の分類を試み、住居ごとにその分類を当てはめ、表にまとめた。特にA-1・2類とD類の祭祀行為が多く、C類、B類はわずかであった。E類はまったく見られなかった。2号住では廃棄時に最高4つの祭祀行為が認められた。毛井遺跡では、A-1・2類とD類の祭祀行為が占める割合は高く、この毛井遺跡内での決まりごととして行ったのであろう。

次に毛井遺跡以外での大分県内におけるカマド祭祀行為についてみていき、明瞭にわかる範囲で祭祀行為の分類を試みたい。

第20表 毛井遺跡B地区におけるカマド祭祀分類表

	A-1類	A-2類	B類	C類	D類	E類
毛井2号住	○	○		○	○	
3号住	○				○	
6号住	○		○		○	
9号住	○					
17号住		○			○	
30号住	○				○	
32号住					○	
33号住	○			○	○	
35号住		○				
36号住					○	
42号住					○	
47号住	○					
53号住	○	○				
54号住		○				
56号住		○				

第21表 大分県内におけるカマド祭祀分類表

	A-1類	A-2類	B類	C類	D類	E類
二光村佐知遺跡2号住		○				○
20号住		○				○
21号住	○					○
27号住	○					○
中津市樋多田遺跡1号住		○				
中津市大丸川流域遺跡群4地点12号住		○				
宇佐市峯添遺跡1号住	○					
宇佐市柳沢遺跡6号住	○					
宇佐市松ヶ平遺跡2号住	○					
玖珠町原田遺跡3号住	○					
4号住		○				
7号住	○					
9号住	○					
臼杵市清太郎遺跡1号住	○					
11号住	○					
大分市北の後遺跡1号住	○					
3号住	○					
28号住		○				
38号住		○				
48号住		○				
53号住		○		○		
58号住		○				

大分県内のカマド祭祀が認められる遺跡と住居を表にまとめた。その結果、A-1類とA-2類の祭祀行為が圧倒的に多く認められた。また唯一E類は三光村佐知遺跡で確認されたのみである。B類はいくつかの遺跡ではカマド周辺から須臾器が出土していた例もあったが、祭祀行為としての確証が得られないので保留した。D類に関しては桶石の抜き取りはあってもそれを住居内に置くという行為は認められなかった。

このように毛井遺跡B地区と大分県内遺跡のカマド祭祀行為を見比べてみると、明らかにカマド祭祀行為の様相は毛井遺跡B地区の方が他の遺跡よりも富んでいることがわかった。A-1・2類に関しては、毛井遺跡と大分県内の他の遺跡のカマドで共通して見られる祭祀行為であり、D類に関しては毛井遺跡だけで見られる祭祀行為であることが認められよう。

その一方で他県、特に福岡県に目を移してみると様々なカマド祭祀行為が行われている。

5世紀代では古井町塚堂遺跡D地区5号住ではカマド廃棄時の祭祀で土製手捏練、高坏が出土している。同6A号住ではカマド構築時の祭祀で土器が出土している。また同20A号住では、高坏を袖内に埋納したカマド構築時の祭祀と煙口を河原石で塞ぐ、カマド廃棄時の祭祀を行っている。春日市赤井手遺跡43号住では袖内及び床面から土製土器が出土し、カマド構築時の祭祀を行う。那珂川町松木遺跡150街区6号住では、支脚上に甕の破片を置き、カマド内に土製構造鏡2面、土製勾玉1個、土製丸玉1個、手捏土器4個を配置し焼土を充填させ、カマド廃棄時の祭祀を行っている。

6世紀代では、那珂川町松木遺跡150街区18号住で、小型の丹塗り壺を支脚としたり、同25号住では、支脚に高坏を利用し、カマド廃棄時の祭祀と思われる土師器の椀や甕がカマド内に据えられる。また瀬高町大道端遺跡B地区23号住では、カマド内より丹塗りの把手付き鉢が出土し、カマド廃棄時の祭祀を行っている。

このように福岡県内では、カマド神をその火入れから火落としまでの祭祀を一連で行っている事実を見ることが出来る。またこれを大分県内のカマド祭祀と比べてみると時期差はあるが、カマド祭祀用具に若干の差はあるものの、その祭祀のやり方に大差はない。ただカマド構築時の祭祀の例が未だに大分県内では事例がないことから、カマド構築時から廃棄時までの一連の祭祀行為を確認することができていない。しかし、カマド廃棄時の祭祀行為に関しては、大分県でもまた福岡県と比べても、カマド神に対する意識の差はあまりなかったものと思われる。

(4) 課題

大分県内と毛井遺跡のカマド祭祀行為について簡潔に6つに分類を試みた。しかしこれらはすべてカマド廃棄時の祭祀行為である。カマド構築時と使用時の祭祀は確認できていない。また今回挙げたカマドの住居はほぼ6世紀代に限られるものなので、5世紀代(大分県内ではカマドをもつ住居自体は数少ないが)とまた7世紀以降のものについて祭祀行為に変化があるのかどうなのか。またカマド構築から廃棄までの一連の祭祀行為がどういふふうに行われていたかということを確認することが今後の調査の課題となり、期待するところである。

IV. おわりに

毛井遺跡B地区では、古墳時代の堅穴住居跡65基を確認し、大分平野内、さらに大分県内をみても古墳時代後期段階において大規模な集落遺跡となった。またその住居跡の多くはカマドを備え付けており、そのカマドの残存状況からカマド構築を明確に追うのは困難であったが、カマド祭祀行為を認めることができたことは、有意義な成果であった。一方でこの遺跡の課題は、まず古墳時代の掘立柱建物が1棟も確認することができなかったことである。同時期・同地域の北ノ後遺跡や頼田市遺跡などでは住居跡とともに掘立柱建物も同時に確認できている。毛井遺跡B地区の調査対象地は自然堤防の低丘陵の一部であったため、その低丘陵の別の場所に掘立柱建物を設けていたのであろうか、もしくはまったく存在しなかったのだろうか。またそのほか、土器に関しては、住居埋土、カマド内、屋内上坑などから多量の土師器、須臾器が出土した。しかしその土器分類と編年を行うことが本報告においてできなかったため、深く集落論を追求することができなかった。さらなる大分平野での古墳時代集落の資料増加に期待しながら、毛井集落の性格及び意義を考えていきたい。

<参考文献>

- 福岡市教育委員会1981「西新町遺跡」
福岡市教育委員会1989「西新町遺跡」
春日市教育委員会1980「赤井手遺跡」
那珂川町教育委員会1984「松木遺跡」
北九州市埋蔵文化財調査会1977「天観寺山窯跡群」
福岡県教育委員会1970「野添・大浦窯跡群」
福岡県教育委員会1983～88「塚堂遺跡Ⅰ～Ⅴ」
大分市教育委員会1990「下郡遺跡群」(「大分市下郡地区土地区画整備事業に伴う発掘調査概報(Ⅰ)」)
中津市教育委員会1997「大丸川流域遺跡群」
宇佐市教育委員会1978「葛原遺跡」(「宇佐地区岡場整備関係調査報告概報」)
宇佐市教育委員会1991「正布ヶ迫・柳沢・松ヶ平・下林遺跡」(「宇佐道路建設に伴う発掘調査概報Ⅱ」)
日田市教育委員会2001「長迫遺跡C・D地点」(「日田市埋蔵文化財調査報告書第28集」)
大分県教育委員会1988「大坪遺跡」(「一般国道10号線バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」)
大分県教育委員会1989「佐知遺跡」
大分県教育委員会1991「峯添遺跡」(「一般国道10号宇佐バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ」)
大分県教育委員会1992「樋多田遺跡」(「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」)
大分県教育委員会1995「原田遺跡」(「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」(4))
大分県教育委員会1996「庄ノ原遺跡」(「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」(5))
大分県教育委員会1997「下綾垣遺跡」(「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」(6))
大分県教育委員会1999「北ノ後遺跡」(「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書」(3))
大分県教育委員会2001「清太郎遺跡」
大分県教育委員会2001「毛井遺跡A地区」
大分県教育委員会2002「久保田遺跡」
埋蔵文化財研究会1992「古墳時代の竈を考える」(「第32回 埋蔵文化財研究集会」)
小山富雄1964「九州の須恵器編年序説」(『九州考古学22号』)

第6章 まとめ

1. 弥生時代

毛井遺跡B地区においても弥生時代遺物が若干認められた。その出方は何れも後世の遺物を含む遺構や包含層からであった。一つは弥生時代早期に流行した刻日突帯紋土器と呼ばれる壺のI線部破片である。それに素目緑の壺破片である。これらの土器は北部九州の夜臼式土器に対応するものとして提唱された東九州の下黒野式土器に相当するものである。大分平野では同時期の遺跡に前述の下黒野遺跡、稲田市遺跡、一方平IV遺跡、ガラン寺遺跡、浜・長無田遺跡がある。下黒野遺跡を除いて、いずれも沖積地・段丘奥部の低地と言う共通点がある。弥生時代早期に先立つ縄文時代、また弥生時代中期～古墳時代後期初頭の遺跡立地は周辺の段丘・丘陵地帯である。このように弥生時代早期における高台から低地への進出は、稲作農耕への志向が契機となったことも考えられる。

毛井遺跡B地区においては弥生時代中期の遺物も出ている。下城式土器の壺と呼ばれるものの口縁部破片である。事例はこの一点であり、胴部破片を含めて全く当該期の遺構・遺物が存在した形跡はない。一見、突帯紋土器のようでもあるが、器面調整は刷毛で、口縁端部が面を有している。毛井遺跡B地区の事例はややローリングを受けており流れ込みと考えられる。弥生時代中期の遺跡の多くは、この辺りでは毛井遺跡B地区の西側に連続する猪野・岡原などの周辺段丘に立地する。こうした後背部の高地に集落を形成し、低い低地に水田耕作が行われたことが想定されるのは大分市西部の台地に位置する雄城ノ台遺跡と周辺の低地遺跡の関係と同じである。雄城ノ台遺跡では集落が形成され、周辺の低地遺跡では若干の遺構と遺物が見られる。このような状況は少なくとも古墳時代前期初頭まで続いたようである。

2. 古墳時代

毛井遺跡B地区に明確な形で遺構が形成されたのは古墳時代前期初頭になってからである。とは言えその遺構としてSC25・SC58・SC60・SC62・SC63・SC64 が挙げられるのみであった。上述したように当該期の遺跡立地は、周辺の高地に立地する場合が多い状況にある。古墳時代前期初頭以後、低地に遺跡が増加するが、言うなれば毛井遺跡B地区に古墳時代前期初頭の集落が見られるのは低地へ集落が移転して行く潮流のなかでの漸移形態といえようか。それはおそらく弥生時代早期の遺跡が低地に増加することは意味が異なっていた可能性が高い。あるいは毛井遺跡B地区における当該期の住居跡がやや小規模であるのは、高地の拠点集落に対する低地での作業小屋的な意味を内包していたのだろうか。遺物としては布留式を思わせる壺・弥生時代後期の系譜を引く二重口縁壺・高つき・製塩土器がある。とりわけ製塩土器は当該期に特徴的なものの一つで、毛井遺跡B地区でも3個体が見つかっている。製塩土器には大野川下流域の右岸地域（毛井遺跡の北東）に顕著に分布する結晶片岩の粒が混入しており、土器の性格を考慮にいれると志村・大在・神崎などの沿岸地域が製作地であろう。

6世紀前半頃、SC21・SC14の住居跡が形成される。その後6世紀中頃から後半にかけて、残り58棟が住居地として適地だったのか僅か2590㎡ばかりの面積に建替えを繰り返している。これらの住居跡のほとんどからは竈の痕跡が見つかった。かなりの切合い関係を有しており、一つの集落景観として何棟が同時に建っていたのかは難しい問題である。多くの場合、上位遺構検出面、つまり遺構の上位部分が動いている為か明確でない。突然、須恵器・土師器などの完形品に近いものが包含層と置いていたところからである状況の中で精査すると、薄く酸化鉄が沈着・硬化した床面ができるなど僅かに住居跡の痕跡が残存する場合も多い。更に遺物の年代観はさほど変化しないに、遺構の切合いがあったり、床面のレベル差が30cm近いものもあつたりしている。この状況はこの遺跡の立地と深い関係があると思わざるをえない。この毛井遺跡B地区は立地・地層堆積物の章で詳述したように、大野川本流の自然堤防上に立地し、遺跡の覆土・基盤の土質が砂質であることなどから、洪水の影響が極めて多かったと考えざるをえない。事実、近世にも多くの洪水とそれに伴う被害があつたようで、毛井の集落内に4個所の石燈が造立されている。更に近現代になっても頻繁な洪水の被害にあつたことはよく知られている。とりわけ1943年（昭和18年）9月19日・20日に大分地方を襲った台風26号に伴う総雨量は577mmにも達し、近隣の被害

は死者59名、全・半壊家屋1156戸にも上っている。ようするに毛井遺跡B地区ではほとんど時期差のない住居が造り続けられた大きな背景として、しばしば起こったであろう洪水と深い関係を考えることができる。

6世紀末に畿内大和に飛鳥寺が建立され、7世紀に入って飛鳥時代となる。6世紀初頭から集落として続く毛井遺跡B地区のムラは、7世紀に入っても続くが、住居跡は見かけ上激減する。こうした現象は大部分内の古墳時代遺跡においても同様な傾向のようである。古墳時代から飛鳥時代に入ってから政治的変革に伴う集落の再編成に関連することが想定できる。この点から毛井遺跡B地区（調査区内の2590㎡）における7世紀初頭・前半の住居跡2棟（SC34・SC41） τa は、集落の再編成に伴う移転の直前の集落景観とみることができる。実際は南北方向に集落形成の適地である自然堤防が調査区内を含めて南北に450mも続いており、集落形成適地の幅が東西方向70mで計算すると31500㎡となる。これを調査区内の面積あたりの住居跡棟数から考慮すると、7世紀初頭～前半の毛井遺跡B地区の総住居跡数は24棟前後であったと推定できる他、6世紀を含めた一時期の集落景観も同様なものとしてできよう。

3. 奈良時代

毛井遺跡B地区において7世紀初頭・前半の住居跡が廃絶した後、100年前後の間は遺跡が形成された痕跡はない。再びこの遺跡に人が来訪したのは8世紀になってからである。この8世紀に遺跡が増えるのは大部分内の動向のようでもある。しかし毛井遺跡B地区においては高台を有する須恵器片が数片見つかっただけで明確な遺構は出ていないが、毛井に南接する上松岡の丹生に古代官道の「丹生駅」が置かれてもいる。丹生駅から延る古代官道が毛井を通過して、毛井の東北に大津留付近で大野川を渡河していた可能性を示す大分市史の復元案もある。

4. 中世

毛井遺跡B地区のある毛井は、中世において高田庄に入れられており、水田開発が盛んに行なわれたようである。鎌倉時代の西暦1196年（建久7年）に大友氏が豊後国に際し功績のあった平通俊に与えられ、同氏は毛井氏を称した他、1236年には（嘉禎2年）、平林頼宗が承久の乱で軍功があったので毛井社の有力な武上が地頭に補任されている。以後平林氏は中世を通じてこの地に勢力を伸ばしたところがこの毛井である。平林氏の拠点であったことを窺えるように発掘区内には南北方向に延びる溝があり、内部から16世紀頃の備前焼の櫛鉢が出ており、年代の一点が知られる。この溝は厩館の周溝とも考えられるが、はっきりしない。近年まで堀があったとの伝承は発掘区を北に100m外れた場所にある。この他、16世紀と考えられる早稲利用の墓が見つかった。ともかく中世の遺構・遺物は発掘区内においては多くなく、その実体ははっきりしない。

5. 近世

毛井遺跡B地区における近世の遺構は、発掘区内の北よりと南よりに分布する墓地と、地下倉庫（SK17）、を重点的に調査した。これらは、発掘直前までここに住んでいた平林家に関わるものであることは歴史的に明らかである。近世墓は既に失われていたが、17世紀後半から18世紀後半までの陶磁器類が出ている。地下倉庫からは18世紀を中心とした陶磁器類が出ているが、僅かに19世紀にかかる遺物も微量であるが見つまっている。この付近は5m近い嵩上げが繰り返されたところである。その嵩上げの開始年代に近いものと思われる。

以上、開発史的視点から毛井遺跡B地区を巡る変遷を述べてみた。毛井遺跡B地区の場合、いずれの時代・時期にあっても、農業経営の基本となったのは毛井遺跡B地区の西に広がる水田地帯であったことは疑いない。大野川での漁労・交通などが毛井遺跡B地区を考える上で重要な点であろう。

写 真 图 版

写真図版 1

1. SC1の全景 (西から)



2. SC1の遺物出土状況



3. SC1カマド? 出土状況 (西から)



4. SC2全景（北から）



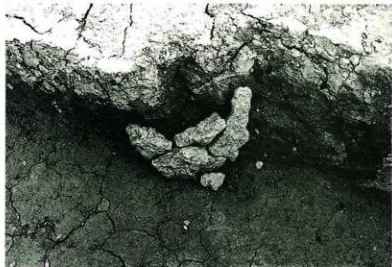
5. SC2遺物出土状況



6. SC2カマド付近と遺物出土状況



写真図版 3



7. SC2スキサキ出土状況（東方向へ）
写真図版53参照



8. SC3全景（東方向へ）



9. SC3カマド出土状況（北方向へ）

10. SC3遺物出土状況



11. SC4検出状況



12. SC4カマド検出状況



写真図版 5



13. SC4カマド付近の発出状況（北方向へ）



14. SC4カマド断面



15. SC5全景（西方向へ）



16. SC5カマド検出状況



17. SC6全景 (西方向へ)



18. SC6遺物出土状況 (西方向へ)



19. SC7全景（東方向へ）



20. SC7遺物出土状況



21. SC9全景（西方向へ）



22. SC9カマド検出状況



23. SC9カマド検出状況



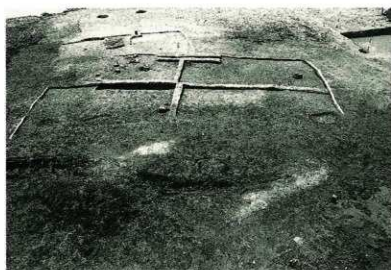
24. SC10検出状況



25. SC11全景（北方向へ）



26. SC11全景検出状況（南方向へ）



27. SC12全景検出状況（南方向へ）

28. SC12遺物出土状況



29. SC13全景 (北方へ)



30. SC13遺物出土状況 (北方へ)

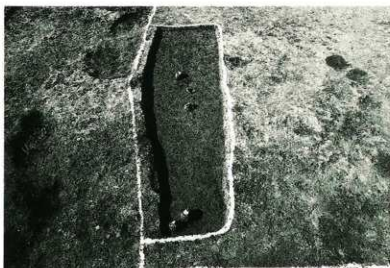




31. SC14全景 (西方向へ)



32. SC14遺物出土状況

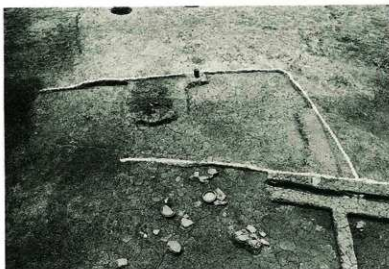


33. SC15全景 (北方向へ)

34. SC15遺物出土状況



35. SC16全景検出状況



36. SC16カマド全景（南方向から）





37. SC17残存状況



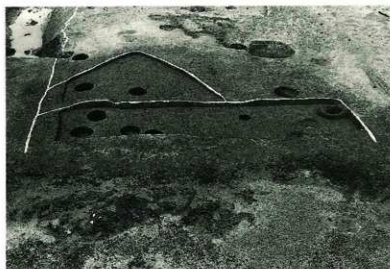
38. SC17遺物出土状況



39. SC17遺物出土状況 (西方向へ)



40. SC17カマド検出状況



41. SC18・19全景（南方向へ）



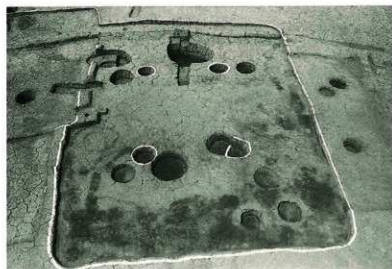
42. SC20全景（東方向へ）



43. SC20b全景（南方向へ）



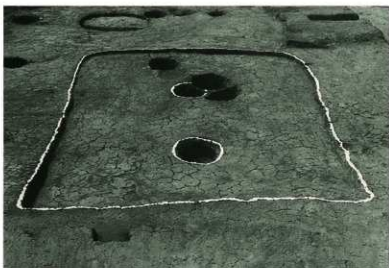
44. SC20b遺物出土状況



45. SC21全景（東方向へ）



46. SC22遺物出土状況（西方向へ）



47. SC25全景（南方向へ）



48. SC25土師甕出土状況



49. SC25遺物出土状況



50. SC25遺物出土状況
製塩土器



51. SC27全景 (西方向へ)



52. SC29全景 (南から)



53. SC30全景 (北方へ)



54. SC30カマド (北方向)



54'. SC30遺物出土状況



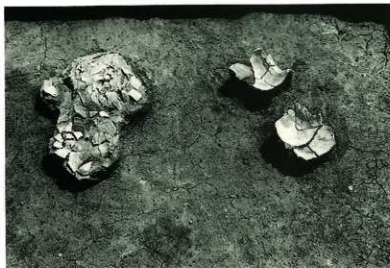
55. SC31全景 (西方向へ)



56. SC31遺物出土状況 (西方向)



57. SC31遺物出土状況 (北方向)



58. SC31遺物出土状況



59. SC32全景出土状況



60. SC32全景 (北方向へ)



61. SC32カマド付近遺物出土状況



62. SC33全景遺物出土状況 (西方向へ)



63. SC33全景 (西方向へ)



64. SC33カマド



65. SC33遺物出土状況



66. SC33全景完撮

67. SC33カマド付近 (西方向へ)



68. SC33遺物出土状況 (西方向)



69. SC33遺物出土状況





70. SC34遺物出土状況（北方向へ）



71. SC34全景完掘



72. SC34カマド付近



73. SC34遺物出土状況



74. SC34遺物出土状況



75. SC35全景（西方向へ）

76. SC35カマド



77. SC35カマド断面



78. SC36全景





79. SC36カマド (北方向へ)



80. SC37全景 (西北方向へ)



81. SC38全景 (西方向へ)



82. SC38カマド



83. SC39全景（北方向）



84. SC39カマド

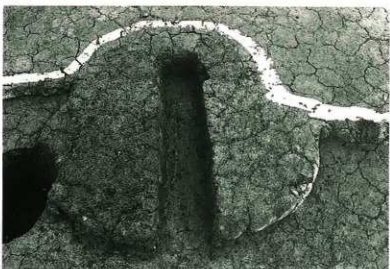
85. SC39カマド断面



86. SC40全景 (北方へ)



87. SC40カマド (北方へ)





88. SC41全景



89. SC41カマド



90. SC42全景遺物出土状況 (北方向)



91. SC42全景（北方向へ）



92. SC42カマド



93. SC42遺物出土状況



94. SC42遺物出土状況



95. SC42遺物出土状況



96. SC42遺物出土状況



97. SC42遺物出土状況



98. SC43全景（北方向へ）



99. SC43全景遺物出土状況（北方向へ）



100. SC43遺物出土状況



101. SC43遺物出土状況



102. SC43遺物出土状況

103. SC44全景（西方向へ）

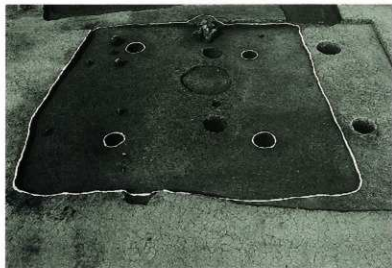


104. SC45全景（北方向へ）



105. SC46全景（北方向へ）





106. SC47全景（西方向へ）



107. SC47遺物出土状況



108. SC47カマド断面
中央左下のラインは遺構の立上りと、カマド煙道下部における地山を掘ったライン。
土器は写真図版75



109. SC47カマド



110. SC47カマド断面
遺物は写真図版75



111. SC48全景



112. SC48遺物出土状況（西方向へ）
手前の高まりはSC51の残存部で
カマドではない。SC51の床面は
左側の発掘区南限の壁にも観察さ
れる。中央部円形の土壇は中世の
SK12で、土鍬が多く出た。



113. SC48カマド付近袖石出土状況
カマドが破壊され、礎石・袖石が
抜きとられ放置された状況



114. SC50全景（西方向へ）



115. SC52全景 (西北方向へ)



116. SC53全景



117. SC53全景遺物写真 (西方向へ)



118. SC53カマド検出状況（西方向へ）



119. SC53カマド遺物出土状況（西方向へ）
高坏、写真図版77参照



120. SC53遺物出土状況
須恵器大型甕出土状況



121. SC54全景（南方向へ）



122. SC54カマド（南方向へ）
写真図版77、中段上参照



123. SC55全景（北方向へ）
十字形に立割った部分がSC55の
カマドと推定した。



124. SC56全景（北方向へ）



125. SC58全景（西方向へ）



126. SC58全景遺物出土状況（西方向へ）



127. SC58遺物出土状況
写真図版77参照



128. SC59全景 (北方へ)



129. SC60全景 (西方へ)

130. SC60遺物出土状況（西方向）



131. SC60遺物出土状況



132. SC61全景





133. SC62全景（西方向へ）
上部の円形土城は近世墓のSK3



134. SC62遺物出土状況（西方向へ）



135. SC63全景（西方向へ）
手前の柱穴にかかる土城は近世墓のSK2



136. SC63遺物出土状況



137. SC63遺物出土状況



138. SC63遺物出土状況

139. SC63遺物出土状況



140. SC64全景



141. SC64遺物出土状況



142. SC85全景



143. SD1断面

中世の大溝 地頭、平林氏に関わる居館の堀であるのか、そうでないのかは明確でない。



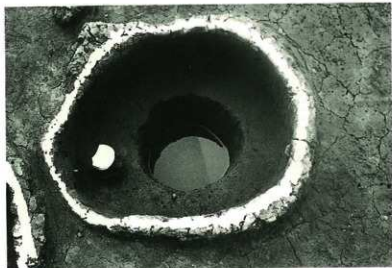
144. SK15全景
中世墓、右半部の下段は掘りすぎ
部分



145. SK15遺物出土状態



146. SK15遺物の出土状態
滞水レベルの為に水がにじんでい
る。



147. SK7全景
近世墓



148. SK8全景
近世墓



149. SK9全景
近世墓



160. SK17全景（北方向へ）
平林氏の居宅の敷m下にあった近
世の土城



151. SK17遺物の出土状況



152. SK18井戸



SC1-4 包合器



SC1-1 拵



SC1-5



SC1-1 拵

SC1



SC2-7



SC2-15



SC2-18・19



SC2-29



SC2-21



SC2-22



SC2-カマド



SC2-5

SC2



SC2-
写真图版3-7参照



SC2-29



SC2-1

SC2



SC3-1



SC3-23



SC3-38



SC3-37



SC3-35



SC3-7



SC3-一括



SC3-45



SC3-18・25



SC3-3・4

SC3



SC3





SC4-下層



SC4-10



SC4-11



SC4



SC5-3・5



SC4

SC5

SC4



SC6-カマ F2



SC6-8・12



SC6-10



SC6-5



SC6-24・27



SC6-9



SC6-カマ F

SC6



SC6-16



SC6



SC6

SC6



SC7-1



SC7-10



SC7-3



SC7-3・9

SC7



SC9-21



SC9カマド-2・土城1



SC9-カマド



SC9-カマド2

SC9



SC9-1



SC9-カマド



SC9-6



SC9-24



SC9-土城1



SC9-13



SC9
(移動式カマド)

SC9



SC10-2



SC10

SC10

SC11



SC11-4



SC11-6



SC11-2・3



SC11-5



SC12-8・15



SC12-3



SC12-土庫24



SC12カマF



SC12-10・14



SC12-土庫11



SC12-2



SC12-24

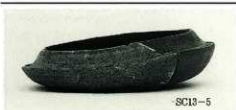


SC12-11・16

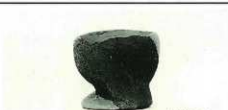


SC12-6

SC12



SC13-5



SC13-23



SC13-2



SC13

SC13



SC14



SC14



SC14



SC14-11b



SC14-8



SC14-4



SC14



SC14-10



SC14-6



SC14



SC14-11a



SC14-3

SC14



SC15



SC15-2

SC15



SC16-1

SC16



SC17-25



SC17-カマフ



SC17-カマフ



SC17-11



SC17-24・25



SC17-カマフ

SC17



SC16



SC18

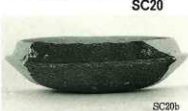
SC18
SC20



SC20-3



SC20b-36



SC20b



SC20b-19



SC20b-15



SC20-33



SC20b-2・SC20-13



SC20b-21



SC20-14



SC20b-14



SC20-27・31

SC20



SC21-9・15



SC21-16

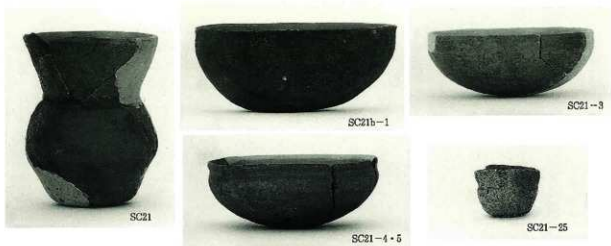


SC21-21

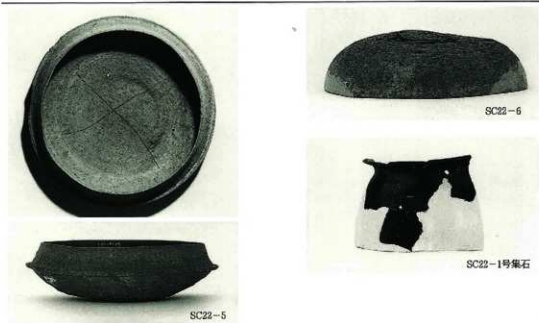


SC21-12

SC21



SC21



SC22

SC25





SC26-2・6

SC26



SC28-1



SC28-4



SC28-5

SC28



SC29-4・6



SC29-7・8



SC29-8



SC29-1・2

SC29

SC30



SC30-42



SC30-103・104・109・119



SC30-6



SC30-126・127



SC30-7



SC30-10



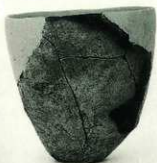
SC30-9・30



SC30-117



SC30-1



SC30-4・129

SC30



SC31カマノ



SC31カマノ



SC31-1・2



SC31カマノ

SC32



SC32-110



SC32-142



SC32-141



SC32・87

SC31



SC32-1・2・9



SC32-109



SC32-20



SC32-130



SC32-2

SC32

SC33



SC33-66



SC33-196



SC33-25・34・238



SC33-236



SC33-104・107



SC33-238



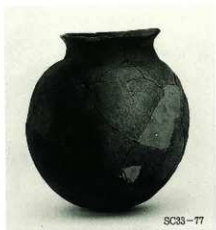
SC33-91



SC33-215



SC38-240



SC33-77



SC33カマド-3



SC33-214



SC33-174



SC33-173



SC33-237
(未成品)



SC33-235



SC33

SC33

SC34



SC34-12



SC34-3



SC34-36



SC34-4-36



SC31-3-4



SC34-16-17



SC34-29



SC34-41



SC34-44



SC34-31



SC34-24



SC34-50



SC34-49



SC34-30



SC34-23



SC34-39

SC34



SC35-62・69



SC35カマ F22



SC35カマ F18



SC35-43



SC35-105・106



SC35カマ F



SC35



SC35



SC35

SC35

SC36



SC36-81



SC36-5・20



SC36-35



SC36



SC38-11



SC38



SC38-9



SC38

SC38



SC41-28



SC41-36・56



SC41-18・57



SC41

SC41



SC42-101・121



SC43-136



SC42-5



SC42-189



SC42-142・167



SC42-17



SC42-122 SC43-31



SC42-123

SC42

SC42





SC42-66・62



SC42-62・66 左写真の拡大(部分)



SC42-291・SC36



SC42-400



SC42-28



SC42-124・127



SC42-132



SC42-19・196



SC42-9・94・251



SC42-126



SC42-94



SC42

SC42



SC43-150



SC43-162



SC43-79・172



SC43-28



SC43-14



SC43-100



SC43



SC43-96



SC43-155・156



SC43-129・131



SC43-59



SC43-152

SC43



SC43-137・143



SC43-139・148



SC43-155・156



SC43-121



SC43-108



SC43-120



SC43-50



SC43-125



SC43-125・130



SC43-142・146



SC43-34・36



SC43-161



SC43-113

SC43



SC43-147・154



SC43-149・151



SC43-117



SC43-153・155



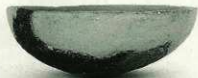
SC43-199



SC43-201



SC43-140



SC43-10



SC43-48



SC43-30



SC43-80



SC43-141



SC43-33



SC43-173

SC43

SC44



SC44

SC47



SC47-27



SC47-5



SC47-25



SC47-23



SC47-24



SC47-15



SC47カマフ-11



SC47カマフ-7

SC47



SC48-50



SC48-P3



SC48



SC48-76

SC48



SC50-4・66・67・68

SC50



SC50-70



SC50-52



SC50-11



SC51-60



SC51-64



SC51



SC52-15・17



SC52-51



SC52-10

SC52

SC53



SC53-117



SC53-10・17



SC53-40



SC53-2・3



SC53-15



SC53-135



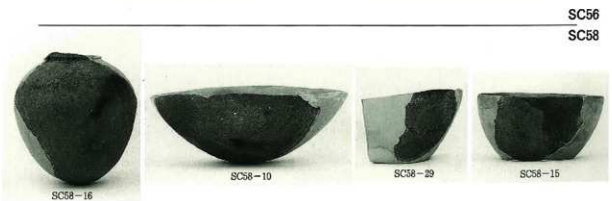
SC53 235



SC53土坑2-2



SC53カマフ





SC59-25



SC59-32



SC59-35



SC59-19



SC59-13



SC59-30 • 41 • 42
SC38-189 • 196



SC59-65

SC59

SC60



SC60-44 • 87



SC60-48



SC60-95



SC60-48

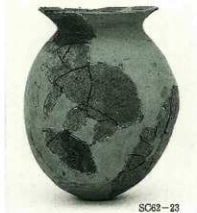


SC60-47



SC60-11

SC62



SC62-23



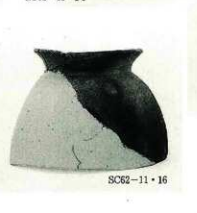
SC62--15・F6



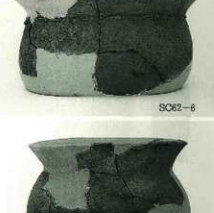
SC62-12



SC62-11



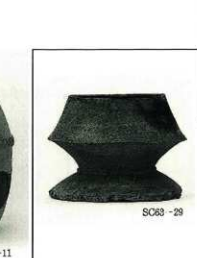
SC62-11・16



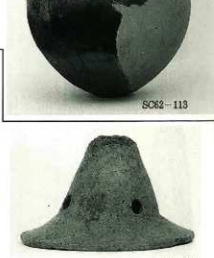
SC62-6



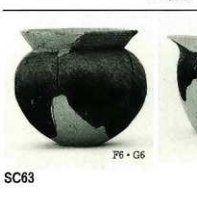
SC62-11



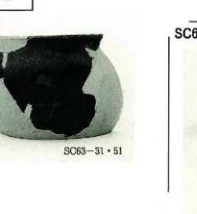
SC63-29



SC62-113



F6・G6



SC63-31・51

SC63

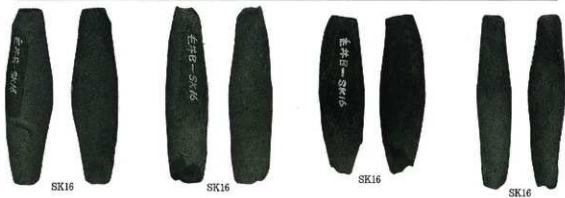
SC64



SC64-30



SK12



SK16



現地説明会 平成12年10月



毛井遺跡B地区発掘作業関係者

報告書抄録

フリガナ	ケイセイキ
書名	毛井遺跡B地区
副書名	国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第135輯
編著者	綿貫俊一、五十川雄也
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県人分市府内町3-10-1
発行年月日	2002年3月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
毛井遺跡 B地区	大分県大分市 大学毛井字仲原	22		33° 11' 7"	131° 40' 44"	平成12年4月5日 ? 平成12年10月31日	3500㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
毛井遺跡B地区	集落跡 包舎屋 近世築	古墳時代 室町時代 安土・桃山時代 江戸時代	住居跡 65棟 溝 1条 近世墓 10基	須恵器 鉄製鋤先 土師器 中世土師器	古墳時代の住居跡 65棟

国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書

毛井遺跡 B 地区

大分県文化財調査報告書 第135輯

2002年3月29日

発行 大分県教育委員会
〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
印刷 東洋印刷有限公司
〒874-0942 大分県別府市千代町10-27
TEL 0977-23-2356
